KAIZO

改造

十一月號

1925



改造十一月號目次

秋・讀書・四庫全書……卷頭言……一

國家的統一と社會的統一の對蹠的關係……長谷川如是閑……二

我が資本家的經濟の行詰りと無産政黨の産業振興策……高橋龜吉……六

四度び勞働費用と平均利潤との問題を論ず……小泉信三……五三

新聞記者の見たる「解散の鍵」

解散の鍵は首相が持つ……東京朝日政治部長　緒方竹虎……九七

政黨心理と黨人心理……時事新報政治部長　澁谷作助……一〇〇

自然淘汰促成結構……國民新聞政治部長　細野繁勝……一〇三

次の議會は解散か否か……報知新聞政治部長　井上勝好……一〇九

十字街頭の遺失物……讀賣新聞政治部長　中尾龍夫……一一四



在歐通信……河合榮治郎……一二八

英國に於けるマルクス價値論論爭……小泉信三……一三八

時評
黑船來る□勞働組合とその代價□爭議の助太刀と治警十七條□數字の偽瞞□無產政黨準備委員會……山川均……一四五

讀書散歩

[illegible]

八十吉……齋藤茂吉……七四

まいとん……池谷信三郎……七九

椿……網野菊……八五

芭蕉の葉……稻垣足穗……九〇

非論理的性格の悲哀……萩原朔太郎……九三

直角……片岡鐵兵……九八

菊池寛著

啓吉物語

（四六判 上製）

定價貳圓 郵送料廿二錢

改版

文壇の雄菊池君の自傳とも見るべき出世作「盗み」「啓吉の誘惑」「まどつく先生」以下十六篇を集む。氏の若き時代の作が、いかに奔放の才氣に富み、力强き闘志の藝術であるかは本書を讀むものの悦びに首肯くところであらう。本書は氏が若き日の最强の風格の映發に成る、本書に現るゝ氏は純眞そのものであり、素朴そのものであり、從つて生一本の精進に青春時代の限りなき希望と惱みがいとも明るく表現されておる。或人は本書は夏目さんの「坊ちやん」を讀むやうな持味があるといつてゐる。とにかく菊池氏の著作中では本書を讀むことが一番趣味があり、そして氏に最もしたしみをおぼえしめる作品のみが集められてある。

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二番 改造社

森丘次郎著

ルール

現代歐洲爭鬪の禍源と眞相を說ける新著出づ。

四六版上製・三百七十頁

定價貳圓　送料廿錢

大戰後の歐羅巴が早くも激烈なる經濟爭鬪の渦中に投ぜられたるは、今や世人の知る所であるが、然らば此の爭鬪の焦點が奈邊に存するや？云ふ迄も無くルールとラインの富源である。本書は五年間歐洲に在て經濟地理を究めたる少壯篤學森丘次郎氏の苦心に成る著作にして、地理・產業・政治の各方面よりルール及びラインを解剖し、獨逸の生命の總てをも代表する此のルールが歐羅巴の工業の上に如何に偉大なる役割を有するかを說き、大戰後ルールを中心として動きつゝある國際經濟戰爭の成行、獨逸工業の集中政策、財界の覇王フーゴー・スチンネスの活動、獨逸大工業資本家團體の政治的勢力と其の策動、獨逸產業組合及び勞働組合の發達と其の政策等を詳說し、現代歐洲の經濟爭鬪の禍源を說いて餘すなき新著にして、苟も大戰後の歐羅巴を論ぜんとする者の必讀すべき著作なり。

(內　容)

ルールの富。ルールの鑛域と歐洲に於ける主要なる石炭鑛脈。獨逸の經濟上に有するルールの重大なる價値。ルール炭坑發達の歷史。獨逸炭鑛業組合の組織及び發達。ルールの製鐵工業と製鐵經濟聯盟。獨逸工業の集中政策。コンツェルン。ルールの大工業資本家。資本的ブルクグラーフ。獨逸の政治上に於ける大工業資本家の勢力。フーゴー・スチンネス。獨逸各政黨勢力の現狀。獨逸の勞働問題。勞働組合と工場會議。ヴェルサイユ條約と佛國のルール占領。佛國に於ける石炭の缺乏とルールの價値。佛國がルール占領を餘儀なくせられたる理由。佛國のルール占領は如何にして行はれたか。佛國軍のルール經營と獨逸工業家の抵抗政策。ルール占領と佛國の輿論。ルール占領と獨逸の輿論。ルール占領と世界の輿論。結論。

發行所　東京神田中猿樂町二　振替(東京)六五五六　巖松堂書店

飢を超し

佐藤耶蘇基著

發賣禁止危く免る？

定價貳圓八十錢
送料十二錢

發賣禁止此一言は恐怖で有り又本然の勝利的歡喜と期待だ。見よ世評は本書を焦點に沸くが如し。敢て江湖の賢評を俟つ。

著者は人も知る有名な穴仙人だ。日本のダイオジニースで有り、大正の西行だ。人生、社會の大問題を提げ合理的、科學的、自然的、本然的、宗教的の上に眞理追求を爲し智識の本源及軌範を理性の上に置き、猶經驗に依つて之を説かむと爲し、或は滿支の異鄕を漂ひ、穴居、斷食に飢と抗し禪門を叩きて眞理を求め、**而も其間常に親鸞、日蓮に見る如き猛烈な女難に遭ひ之を緯に或種の面白味溢れ**（ナナ以上の）當局の〇〇に成りし程なり。

故**有島武郎氏** 著者を評して曰くトルストイー以上の深刻な觀察力を有し理性と經驗を貴び其半面はローマンスに富んだ小説自體の樣だ、西行、親鸞、日蓮にも髣髴たる所がある。

東京神田今川小路二ノ十六
振替東京七〇三七五番

第百出版社

ポール・ブランシヤード著
上田貞次郎校閲　美濃口時次郎譯（最新刊）

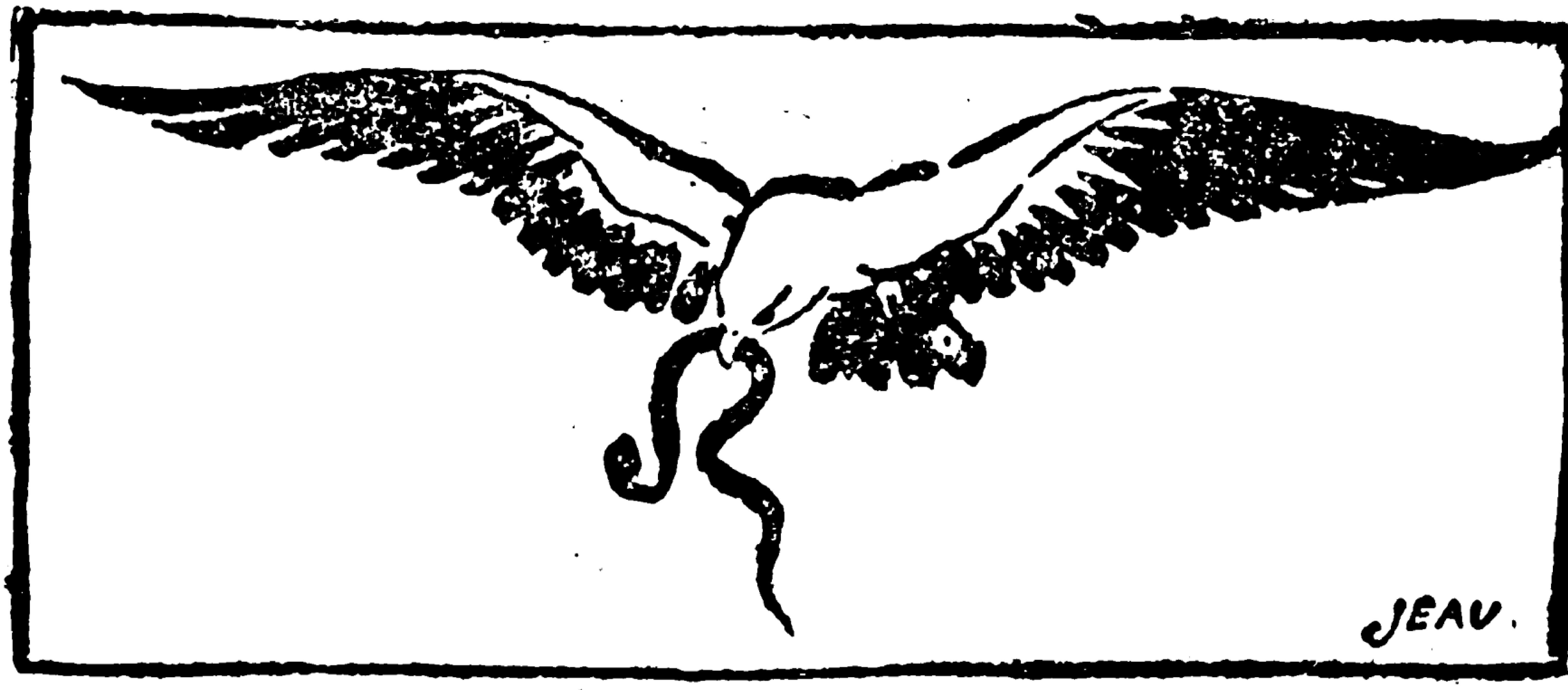
英國勞働運動概觀

四六判三〇〇頁
總布表裝函入
定價貳圓
送料書留拾八錢

勞働運動の實狀に就いて明確な知識を有することが不可缺の重要事であることは言を俟たない。本書は米國の一實際運動家が渡英の上諸方面に就いて見聞調査した所を基として、英米兩國の勞働運動を比較し、務めて高踏的議論を排しつゝ英國勞働運動の各方面（勞働黨、勞働組合、勞働教育、協同組合等）に亘つて其組織、精神、活動、今後の問題、其主張等を説明し、讀者をして一讀英國勞働運動の核心に觸れたるが如き感を抱かしめるものである。特に本譯書に於ては英國勞働運動各方面の代表的人物及び最近の選擧戰に於けるビラ等の寫眞十數葉を挿んである。

目次大綱　第一章米國及英國の勞働階級。傳統ある運動。（以下二節）。第二章勞働黨。勞働黨の擡頭。（以下五節）。第三章勞働黨政府の理想。勞働黨政府成立の見込。（以下十五節）。第四章勞働組合の組織。組合の勢力。（以下十節）。第五章組合政策。直接行動。（以下十一節）。第六章勞働階級と法律。暴行（以下五節）。第七章婦人と勞働。産業への侵入。（以下六節）第八章ホイットレー委員會と最低賃銀局。ホイットレー合同委員會。（以下三節）。第九章勞働に對する保證。政府と失業保險。（以下五節）。第十章協同組合と建築ギルド。英國第一の大產業。（以下九節）。第十一章指導者。指導者の擡頭。（以下二節）第十二章勞働教育。教育の必要。（以下七節）。第十三章勞働階級と農業。農業者の三階級。（以下六節）。第十四章社會の理想。國家社會主義。（以下二節）。英國勞働運動史中重要事件。

發兌　東京神田南神保町　岩波書店　振替東京二六二四〇　電話四谷五八七〇



(十一月號)

秋・讀書・四庫全書

讀書が讀書人の手から解放されて國民的となり、民衆的となつてから我國は未だいくらも年が經たない。しかもこの十年間に於ける讀書力の增進は驚くべきもので、その分量に於て、數に於て何物に較量しても到底同日に談ずべくもない。ただその增加が數のみ、量のみに止まりすべての文化的根據をなすものが歐米に比較して聊か見劣りはしないだろうか。そしてその大體が模倣類型に屬するものが多くはないであろうか。孔子を出し、釋迦を出し、深奥なる印度哲學を形成せる東洋人に學的創造能力の乏しいとは斷ぜない。四庫全書を有する東洋人は著作能力に於て世界の驚異である。然るに近代の東洋人は奈何。ニユートンに於て、アインスタインに於て、エヂソンに於て、カントに於てわれは彼の後へに瞠若たるものがある。殊に最近「四庫全書」の覆刻難を訴ふるが如きは學的に於て最大なる恥辱であらねばならぬ。康熙、乾隆の花々しい業蹟がたかだか三百萬か四百萬の金が出來ないために覆刻が出來ぬとは一種の悲哀でもある。

秋は天高く氣澄んで我々の驥足をのばす好時節である。この快味を漫然に多讀、亂讀して小快を貪ることは人生に對する反逆であり、秋天に對する冒瀆である。人生がしかく無意義なものであるならば秋の夜長を講談ものあたりで消閑するのもよかろうが、人生が重要なる使命を有するものである以上、讀書にもいろいろの意圖を以つて臨むべきであろう。

秋！秋！讀書子にとつて一番よい秋！我々は秋の自然に對して心ゆくばかり享樂したい、そしてしみじみと自れか欲する珍籍、藝術書にひたりたい。しかし我々はなさなくてはならぬ大業がある。享樂の前に苦難の思索あることゝを忘れてはならぬ。この思索を突破するには秋のもなかに大な圖を描いて讀書するのに如くものはない。

國家的統一と社會的統一との對蹠的關係

長谷川如是閑

國家は所謂部分社會であるに拘らず、それが社會全體に對して一定の統一狀態を要求する組織であるために、國家即ち社會といふ錯誤を惹起し、のみならず、國家を最高の統一原理の具體化であるとして、國家發生の過程と理念發生の過程とを結びつける信仰を生み出すに至るのである。かく國家が理念とか統一原理とかいふものそれ自體であるが如く考へられるに至つたのは、畢竟國家の發生とその組織とが、全社會を一定の統一關係のもとに置くことに出立してゐるものであるため、國家生活者の側にさういふ意識の發達を促した結果である。觀念國家は、軍國的行動の意慾が英雄神の信仰を產んだのと同じ過程を以て產れた信仰的表現である。信仰は畢竟行動の心的態度である。先づ生活の行動があり、而る後に生活の組織が成立ち、その組織に基づいて、生活の理念が發生する。先きに理念があり、行動とその組織とがそれに基づいて產れたのではない。先づあるものは行動である。國家は、第一次的には行動の組織であつて、理念はさうして完成された組織的行動の反映した心的態度である。こゝでは如何なる行動の組織が國家の統一原理なるものを生んだか、而もそれが社會的統一との本質上の差異如何といふことを問題とするのである。

一　統一の原始的形式

行動は第一次的には無意識的である。所謂衝動的行動がそれである。集團的生活の行動もその例外ではない。從つて生活の組織は、先づ衝動的行動の上に成立する。組織が目的的に發展した部分だけを見れば、生活の組織はすべて所謂る意圖的であるやうに思はれる。けれどもその意圖を生み出す第一次的の動因は、先づ衝動的行動を生起せしめるのである。意識目的は、衝動的行動の組織的發展に伴つて、その行動の心的態度として生れるのであるが、しかも意識は必ずしも衝動的行動の實質の目的を自覺するとは限らない。意識する目的は、多くの場合錯誤的であつて、眞の目的は却つて潜在的に識域下に隱れる。故に生活の組織を根本的に決定するものは、多くの場合、意識下に潜在する目的、即ち衝動的行動を生起せしめる動因自體である。凡て意識的の企圖が行動の實質の目的を自覺してゐると思ふと間違である。行動の眞の動因は、識域下に潜んでゐる場合が多い。生活の組織も、それに伴つて發生する意識がそれを決定するものではなく、却つて無意識的の衝動的行動によつて決定される。衝動的行動は、それに先行する意識を持つてゐないと同時に、それに繼起する意識も錯誤的である場合が多い。例へば戀愛行動の行きも、先づ性的行動の無意識的發動に始まるのであるが、その意識內容は錯誤に充ちたものである。國家の組織も、此の原則からはづれてはゐない。統一原理が先にあつて國家組織がそれに依存したのではないと同時に、國家的行動に繼起する意識は、國家行動の眞相を反映してゐるものではない。國家的統一原理の觀念も、從つて、國家行動の衝動的性質を全く見落し、識域下に潜在する行動の眞の目的とは懸け離れた意識の構成に外ならない。

右のやうな見地は、あらゆる文化的現象に生活經驗と全く異つた純粹個性的乃至絕對宇宙的原理の上に發展するとい

ふ哲學的見地とは相容れないものである。生活現象と文化現象とを全く沒交渉な別個の世界とする意識そのものが、元來二元社會の階級意識として發生した心理である。文化が非生活階級の間にのみ發生する組織の社會に於てさういふ觀念が生れるのである。生活行動を否定した生存體系を生活する階級に於ては、すべていい物はこれを生活行動に基けることは出來ない。いい物を生活行動に基けねばならぬとなると、非生活階級のいい物は否定されねばならなくなる。故に非生活階級は、最もいい物はすべて非生活的淵源から出るとするのである。アプリオリズムは、非生活階級の生活を肯定する原理を生活上の根據の上に見出すことの出來ない故に、それを超生活的のアプリオリに求めるのである。

文化の淵源に關する超越主義は、生活行動を超越した階級生活の文化を肯定する心的態度に外ならない。それは生殖能力ないものが戀愛を觀念するのと同じく、生活行動を離れた心意の昂奮狀態である。心的昂奮は心の作用が生活行動を離れた時に頂點に達する。非生活階級の組織はその意味で、最も心的昂奮狀態に適した組織である。しかし此の昂奮を自覺せしめることは、生活の變態を整理する先驅的條件である。國家の統一原理と社會的統一との相違點を指摘するのは、國家意識を此の心的昂奮の世界から引戻して、是れを經驗の世界に持ち來すのであるが、それも生活の變態を整理する爲めの一つの手段である。

生活の社會的構成には必ず何等かの統一がある。最も原始的な集團に於いても何等かの統一意識がある。而してその場合には統一は必ず宗教的意識として現れる。隨つて此の統一が何等かの手段で強制される場合にも、その強制行爲は、宗教的強制の形で行はれ、またさうすることによつて始めてその強制が可能である。即ちその場合の統一の強制は、社會的に成立してゐる信仰狀態に依存して始めて可能となる。統一はそこでは一般的な宗教的行事となつて現れる。

宗教は元來社會的集團を統一づける意識である。宗教心は集團の統一的心理が科學的に現はれずに迷信的に現はれたものである。而して、集團が統一づけられるのは、――統一心が成立つのは――即ち先づ行動の統一が存在してゐるからである。先きに社會が出來、そこに統一的行動が起るのでなく、先づ統一的行動があり、そこに社會が産れるのである。而してそれが統一行動の集團であるが故に統一的心理が働くのである。宗教的統一は此の集團の本來の性質に依る統一意識の迷信的の――非科學的の――現れである。この統一は、勿論後の寺院發生後の寺院制度による統一關係と同じものではない。寺院の統一は此の社會的機能に發程してしかも自から別の目的――寺院生活者の階級的發達の目的――に發展したものである。反之、原始的の宗教的統一は、社會的集團がその行動の協同一致を意識づける心的態度であつて、その統一が特殊の階級的利害關係の組織を基礎づけるものでないのみならず、さう云ふ特權を否定する心理の上に立つてゐるのである。人間的權力の否定、所有の人間的獨占の否定（所有の共通）、個人的優越の否定、（優越關係をすべて超個人的――社會的根據――根抵に置く心理）、等が宗教的統一の特徴である。寺院制度は、此等の宗教心の要求を唯、空疎な觀念の形式に於て支持するのみで、現實の組織としてはそれと正反對の目的をもつてゐるものである。

原始的のかやうな統一心は協同の集團的行動に依存する意識であつて、その協同の行動のない所には決して成立たない。一つの部落に於いて嚴重な統一心理が成立つてゐるに反し、他の部落との間には何等の統一性を認めない。部內の統一が强固であればある程他の集團との統一關係が反撥される。さう云ふ統一觀念の最も普通な形式は、共同祖先の觀念である。が、此觀念は全く行動の協同と關聯するものであつて、もし或る同一集團が生活環境に依つて分れて、別の集團を成すに至つた時には、最早その二つになつた集團の間に共同祖先の信仰が成り立たない。同一祖先を持つと云ふ

信仰の下に統一されてゐた集團も、一旦別な集團を形ち造つた後には、別な祖先を持つと云ふ信仰を持つに至る。それは、分れた集團とその母體たる集團との間には、も早生活の協同がないからである。それと同じ道理で、別々の祖先をもつた二つの集團の間に生活の混同が起ると、やはり共同祖先の信仰が生ずる。人類が民族的に割據してゐる場合には民族的宗教が存在し、その宗教は民族心意即ちその民族だけの統一神を持つのであるが、人類交通の範圍が擴大されて民族間の生活の協同が起れば、より廣い世界的宗教が發生し、その宗教の統一神は全人類の父たる地位を占める。尤もその世界的統一神たる父も、その時氏の交通範圍に限定されてゐるので、その範圍外の人類は、その父の子たることから除外される。中世までのキリスト教は、東洋人やアフリカ人を神の子と認めることを躊躇したのである。それはその時代のヨーロッパ人の協同生活のうちに東洋人やアフリカ人を包含してゐなかつたゝめである。宗教的統一は凡て、生活の協同の有機關係を前提とする。そのことは、宗教神が進化して、人格神が觀念神となり、觀念神が唯だの觀念となつても、矢張りこの統一作用の機能を持つことに變りはない。共同祖先や共同神の代りを共同觀念で勤めるのであつて、宗教意識の原始的作用は此の觀念的統一にも附着してゐるのである。

二　國家的統一の反社會的過程

宗教的統一は、社會的の生活の協同に依存する統一であるとすれば、國家的統一は、それとは對蹠的の統一狀態であると認めなければならぬ　從つてそれは反社會的統一であることが推定される。(こゝに反社會的といふのはやゝ語弊があるが他に適當の言ひ現し方が見當らないので暫らく假りにさういふ)、それは社會現象でないと云ふ意味でないこと斷るまでもあるまいが、それは社會的生存の本來の性質を含でゐないと云ふ意味である。社會的統一は社會的生存に必然

の協力行動の組織であるか、國家的統一は、協同行動の組織に於けるそれではなく、生活に協同しない階級が社會構成に於て中心的地位を占める統一狀態である。(これは國家的統一の事實の上からいふのであつて、國家的統一の意識――統一心――とは關係ない。統一の心的態度即ち統一觀念といふやうなものは元來統一の眞相とは必ずしも一致しない。その觀念は如何に錯誤的であつてもまた全くそんな觀念なしにも、統一は成り立ち得る。そして社會が存在し得る。これに反して、行動の協同の統一なしには社會が有り得ない。人間的協同には必ず共同心が伴ふが、然しその心意の組み立ては全く一時的で、さま〴〵の內容を持ち得る。或る時代には迷信から成立ち、他の時代には形而上學的であり、又哲學的であり、又他の時代には科學的であり得る。が正反對の內容を持つと雖も、行動に於いて協同が從つて統一が成立てば社會が成立つ。故に社會は一定の協同的行動の體系である。社會は、心と心との關係であると同時に、それ以上に關係的即ち協同的行動の體系である。社會過程が理念の過程から心理過程に引き戾れた以上は、更に心理過程から行動の過程に引戾されねばならぬ。心を行動の條件とする態度は、社會學に於て一層必要である。)

國家發生の過程が行動の反社會的過程であるといふのは、倫理的な價値判斷を云つてゐるのではない。反社會的といふのは必ずしも、いつでもそれが社會にとつて『惡い』過程であると云ふ意味にはならない。それはたゞ社會構成の本來の性質が、國家構成の本來の性質と一致しないといふことである。國家的統一が社會的統一と同じ性質の統一ではないのは、恰度『毆り合ひ』が『相談』の本來の性質に一致した行動でないのと同じである。毆り合ひも協同を生ずる一つの過程であることはある。然し乍ら、行動の性質は異る。國家的統一も亦社會的統一の豫備的條件である場合がある。然し乍ら統一の性質は異る。

國家的統一なしに社會的統一はあり得る。之に反して　社會的統一なしに國家的統一はあり得ない。武力を以つて總

められた國家に於ても、その強制的統一の結果矢張り生活の協同が成立つ。全くそれが成立たない所には國家も成り立たない。さういふ風に統一は強制的に成立し、しかもそこに或る程度の協同が成立つことは、敢て國家の場合のみとは限らない。社會の有ゆる部分にそれがある。知識の發生が不充分であつた社會狀態に於いては、殊にさうであつた。奴隷と主人との間にも、意識の發達の不充分の社會ほど圓滿な協同が成り立つた。統一を生ずる過程はさま〲であるが、それらが皆統一の性質の一時的の制度に依存してゐるものである。國家は即ちその一つに過ぎない。此點に於て寺院と國家とは全く同じ性質のものである。

　國家は元來特定の行動の系統であるが、その系統を組立てゝ居る體制は、それ自體で一つの有機的全體をなしてゐるものである。それは特定の行動が特定の集團によつて組織的に進行する體制である。それは一つの家族又は種族のやうに生物學的繁殖の系統的連續の體制ではなく、全くたゞ行動の組織の體制である。從つてその行動者の集團的行動の體制が崩壞すると同時に、一つの有機的全體としての國家が消滅するのであつて、次に出來上る國家體系はまた別な有機的全體である。これは親が死んで子が殘ると云ふのとは全く違ふ。親が死んで子が殘る場合は種の系統が母體の中に永續的に一系を保つて連續してゐるのである。即ち、種が一系の不斷の體制的存在を持續するのである。故に一個の有機的全體としての親が亡びても、その有機體の最も中心的な部分が殘存して又一つの有機的全體となるのであつて そこに次の子供が生れる以上は種は全く中絕しない。此の現象を國家の場合に當てはめて、國家に中絕がないと云ふ理論を法理學が組み立てたのであるが、これは實際上の必要が生み出した擬制であつて、事實上の國家の眞實ではない。國家同士が生活の協同關係を成立せしめた時代に於いては、國家の中絕と云ふことは、國際的協同の圓滿を妨げる大いなる故障である。從つて此の國家の永續性が擬制として成り立つてゐるのであるが——法理學者はそれを擬制とは認めない

で事實を認めてゐる——然し　次の國家が前の國家の最も中心的の部分を存續せしめてゐると云ふやうな生物學的胎生と同じやうなことが國家の場合には有り得ない。國家はギルドや會社や勞働組合やと同じく、一つの組織が崩れて次ぎの組織が起るのであつて、中斷を免れないのである。

國家は中斷し又は消滅するが、それと關係なしに、有機體は於ける種の存續のやうに聯絡的に存續するものは、繁殖の體制として集團する社會構成である。即ち營養と生殖との組織的體制としての社會である。國家は消滅してもこの社會は、——昔の部落征服の場合のやうに殺し盡されるか又は四散してしまへば別であるが、さうでない限り——不斷に存續する。猶太人の集團が四散したやうな例は稀である。

三　國家的統一と軍事行動

國家的統一の起原は誰も云ふ通り軍事的行動の組織である。そしてそれが、分岐して、統一を支持する組織的行動が軍事的のそれと異なる性質に進んだものが即ち政治である。國家はそれ故に軍事的行動と政治的行動との組織である。

軍事は云ふまでもなく腕力的であり機械的である。政治は之に反して叡智的であり有機的である。軍事的腕力と政治的叡智とが國家的統一を組み立てる骨格であるが、しかし、國家は、軍事や政治それ自體のために產れたものではない。軍事行動が何に基づいてゐたかを見出さなければ國家發生の動機を知ることは出來ない。前に云つた如く、行動は衝動的から、次第に意識的になるのであるが、此の場合にも軍事は行動として衝動的であり、政治は行動として意識的である。然も衝動は、元來人間の生存上の機能を持つてゐるのであつて、衝動自身が自存自立するものではない。生存過程に一致しない衝動は壓迫される。（軍事行動が文明の進むに隨つて壓迫されるのもそれである。）凡て衝動はその生存上

の機能を持つて發展するがその機能を失つても亦機械的に反覆されるものである。然らば國家發生を基礎づけた軍事的行動の機能は何處にあるかといふに、それは闘爭本能の機能と一致するのである。闘爭を闘爭本能それ自體の發動と解するものもあるが、しかし闘爭は必らず生殖と營養とに關して起るのであつて、そこにその本能の機能が存する。國家行動の大前提である所の軍事行動も亦それと同じく、生存資料の蒐集に動機するのである。

軍事行動の動機は生存資料の蒐集にあるが、この事情は發達した國家の軍事行動に於ても、その根抵に潛在して、永久に軍事行動の動因を構成してゐるのである。此の動因なしには決して國家間の戰ひが起り得ないと云つてい丶。

元來生存資料の獲得に就いては蒐集と生産との二つの途がある。（その詳細は嘗つて本誌に載つた拙稿『倫理及法理の基底としての生活』を參照されたい。）此の二つの方法の中、生産は國家行動の體系には關係しない。生産行動をどんな風に働かせ、どんな風に組織しても、そこからは決して國家が生れて來ない。生産生活が如何樣に組織立てられ統一され管理されても、それは國家的行動の體系を組み立てる性質のものではないから、或る社會がどこまで此の生産組織に於いて發展して行つても、決して國家を發生せしめない。然し人類發達の歴史は常に接觸の歴史であつて、接觸なしには、社會史も文化史もない。而も此の接觸が戰闘の過程を經ずに生活の協同を成立せしめることが出來るやうになつたのは極めて近代のことであつて、前世紀の半までは、戰闘が集團接觸の禮儀となつてゐた。國家の發生は此の接觸が最も戰闘的であつた原始的接觸の結果である。

何故に接觸が戰爭となるかといへば、それは集團と集團とが接觸した場合に、兩者の間に充分な生活の協同が成立つてゐなかつた爲めである。全體的接觸の前に多少の協同行爲が成立つてゐた場合には、戰爭は避けられる。日本の神話に高天原の種族と、出雲の種族とが戰爭に依らずに合同したと云ふ珍しい話がある。これは既に二つの種族の間に、生活

の協同が行はれてゐた爲めであつて、その結果兩者の祖先が共同であると云ふ信仰さへもた易く成立した譯である。日本人と朝鮮人とは、その遠い昔は或は同種族であつたかも知れず又協同の行はれたことは間違ひないのであるが、然し接觸は何時も戰爭を招いたのであつた。そして結局國家的統一を作らずに——古代の關係では——了つたが、國家統一の中に成り立つ協同は、戰爭を前提とするのが普通であつて、從つてそこに出來上つた協同も戰鬪行爲の自然の結果に從屬することゝなる。

集團の間の戰鬪行爲は一般的には集團同士の協同に導かれるものであるが、然し之も原始的社會の場合と進歩した社會の場合とはそこに自から相違がある。原始的の場合は、戰鬪者は全部落的である。從つて征服者の部落は全體的に軍事的優越者の地位を占める。隨つて征服者は全體的に征服行動の特定の組織を取る。それが國家組織の起原である。之に反して進歩した社會の場合に於いては、戰鬪は分業的となり、戰鬪者は部分的であつて、全部落的ではない。隨つて征服者の社會も全體的に軍事的征服者の階級を組み立てることは出來ない。特に國家行動の體系を行動するものだけが、軍事的征服者の階級的利益の上に立つ。而して多數の國民は、勝者と敗者の間に不公平な條件が存在するには相違ないが、現に全社會的協同の行動に統一されるのである。

原始的の征服に於いては、征服者の全部落が軍事的優越者の行動體系を組成してゐるものであるから、それが、全體的に被征服者に對する支配的の體制を組成する。而してその階級が、戰鬪行爲の本來の目的に一致する行動者となる。即ち生存資料の蒐集者の地位を占める。征服階級が、さま〳〵な特權的の組織を組み立てるのは、「權力へのあこがれ」といふやうな空漠な詩人的意慾に動機してゐるのではなく、もつと具體的の意慾に基いてゐるのである。それは即ち生存資料蒐集の爲めである。

四　蒐集生活の過程としての國家的統一

國家行動の體制はそれ故に蒐集過程の體制である。從つて國家的統一はつまる處、蒐集の組織の構成條件であらねばならぬ。それが國家的統一と社會的統一と根本的に異る點である。社會的統一は、生産過程の組織の構成條件である。人々が行動の協同を要する場合には、そこに一定の同じ目的が協同者全體の間に成立つてゐるのである。此の同じ目的を持つて協同する組織から出來上つた統一が社會的統一となる。蒐集の過程に於いても、蒐集者だけの集團には、此の社會的統一が成立つてゐる。猛獸を狩る場合にも、狩獵者連の間には、社會的統一と同じ機構をもつ統一が成立してゐる。然し狩獵者と狩り立てられる動物との間には、社會的統一は成立つてゐない。然るに國家的統一は狩り立てるものと、狩り立てられるものとを包含する所の統一關係である。即ち征服者の集團だけの統一ではなく征服者と被征服者とを包含する統一關係である。斯樣な統一は社會的統一の本來の性質と一致するものではない。それは征服者が被征服者との協同を拒否しながら、その生産の結果を享受する組織を支持するための統一である。社會的統一は、反之、生活の協同の組織の上に、生産の結果を共同に享受するところの統一である。國家的統一は、かくの如く、社會的に成立ち得ない統一の關係を基礎としてゐる。故にそれを反社會的の統一關係と云ふのである。

此の國家的統一の本質は、國家の變遷や進化に依つても決して失はれない。何時まで行つても國家的統一は此の反社會性を支持する。從つて國家組織に於ける一般生活の體樣が此の統一形式によつて決定される。詳しく言へば、生産過程と全く異る過程をもつところの、蒐集の生活が一般的に成立つのである。生存資料を生産の過程に於て收得する組織とは全く別の組織が、國家的統一の下に於ける收得の組織となる。それは生産社會でなく獲得社會である。その結果、

遂ひに生産過程そのものが變態的發達を遂げるに至るのである。今日の經濟的生活に於ける變態的生活もそこから發達したのである。

生産社會とは生産過程に於いて生存資料が處理される社會である。それは、物資の生産分配消費に於いて一系の切り離すことの出來ない連絡が生活行動の組織として存在する社會である。反之、獲得社會は、生産過程に於てゞなく蒐集過程に於て生存資料が處理される社會である。生産と消費とが一系の行動をなさずに、生産者から消費が引離され、消費者から生産が引離される組織である。

元來人間が生産行動を營む場合に、全く消費の關係を離れて、生産行動それ自體を享樂すると云ふ風に發展することのあるのは事實であるが、然しそれは、生産行動が個人的に又社會的に、その効果を消費する當然の歸着に立ち到るためであつて、若しさういふ組織が損はれて、いつも此の効果が伴はないといふことになつたならば、生産行動それ自體を享樂すと云ふ心理もやがて衰滅するであらう。即ち生産は、それが消費に於いて完成するといふ一系の行動體系として始めて活潑に營まれるのである。

一定の社會は、必らず集團的に生産行動を協同動作に依つて營んでゐる。それは此の集團的の生産行動が、集團的の消費行動と切り離すことの出來ない關係に於いて成立つてゐるからである。どちらを切り離しても物資の收得は不可能となる。消費の切り離された生産行動が社會的に成立つ譯はない。生産のない消費行動も社會的協同の生活に於ては結局は成立たない。二つが一系の連續した行動となつて始めて社會的協同が支持される。そして分配は社會的生産と社會的消費とが一系の行動である場合の中間過程である。社會的に生産されたものが、社會的に消費される爲めの分配である。

社會的統一は、その生産と消費との行動の體制である。統一意識は殊に、さういふ組織の下に於ける分配過程と密接

に關係してゐたのである。生産が人間の能力に應じて本能的に營まれる場合に、これが社會的消費に終るについては分配が、或る程度まで意識的に行はれねばならぬ。原始的宗教が神の名に於て分配を表現したのもその事情に基いてゐるのである。全群が平等の生産をすると云ふことは不可能であり、又平等の消費をするといふことも必ずしも絶對ではないので、生産された物資の社會的分配が問題とならねばならぬ。小さい家族群に於けるやうに本能的に公正な分配が行はれることは、社會的にはいろ／＼の故障がある。例へば個人的獨占の本能もあるので排他的行動が分配に於て起り得る。その場合にはいろ／＼の本能の生存競爭の起る譯であつて、獨占の本能を共同の本能が抑へる組織的過程が必要となる。宗教の機能もその一つである。社會的統一の意識は、集團の生存條件に依存して本能の生存競爭を調節する組織である。言ひ換へれば生産、分配、消費の過程を社會的生存條件に依存せしむる爲めの統一が社會的統一であつて、それは原始社會に於ては、前に言つた通り宗教的統一の形で現れるのであるが、發達した社會に於ては、より科學的な管理となつて現はれるのである。

然るに國家的統一は全く右の事情とは別な統一であつて、それは決して生産と消費とを切離すことの出來ない一系の行動とする組織を支持する統一ではなく、その反對に、生産と消費との行動の聯絡を切り離して、消費に至らない生産の行動、生産によらない消費の行動を成立せしむる分配狀態を強制する統一組織である。

無論、稍々發達した社會に於いては、生産行動者が、自分の生産行動の效果を直接に消費するといふ關係には置かれてゐない。して見れば生産と消費の行動の關係は既に失はれてゐるかの如くであるが、然し如何に單純な社會に於いても生産と消費とが一個人に於いて直接に聯絡してゐるといふことは有り得ない。生産より消費に至る一系の行動といふ意味は、つまり群的に一系となつて居るといふことである。群的生産と群的消費との間に離る可らざる聯絡があるとい

ふ意味である。一定の集團が群的に生産するのは、群的に消費するといふ効果を離れては意味を爲さないといふことである。分配はこの社會的生存の効果を保障する統一的意識に依つて組織立てられる場合に始めて社會的分配たり得るのである。反之、國家的統一はこの群的行動の系統を中斷せしめるのである。國家發生の基礎たる軍事的行動は、一群が他の群の生産行動の効果を收得するため、言ひ換へれば、生産群から消費行動を引離して、蒐集群にそれを持ち來さうとするのである。それは丁度犬が他の犬の持つてゐる肉を取るのと同じで、彼の消費を禁壓して、それを我れの行動に移すのである。犬が肉を拾つて來たのは、それを消費するといふ一系の聯絡的行動である。他の犬がそれを奪ふのは、奪はれる犬の側に消費のない生産を成り立たせるものであると同時に、奪ふ犬の側には、生産のない消費行動を成立たしめるのである。一方に消費のない生産行動を成立せしめ、他方に生産のない消費行動を成立せしめる。それが即ち國家的統一の組織である。

　されば國家的統一の組織の下に於ける生産行動は、いつまで行つても右の片輪の性質を持續する。それは永久に消費と生活との聯絡を失つた行動である。既に云つた如く、人間は生産行動それ自體を享樂するやうに習慣づけられてゐるのであるか、然しそれでも潛在的にその效果の享樂即ち消費か期待されてゐるのであつて、その關係か失はれたならば、生産行動それ自體の興味も失はれる。奴隷勞働か、遂ひに勞働效果を消失したのもその故である。今日の勞働狀態か大部分さう云ふ傾向となつたのもやはり、切り離すことの出來ない一系の行動が切り離された爲めであつて、それは遂ひに全生産組織の衰退となる。勞働運働はこの失はれた連絡を恢復するのであつて、切り離された生産と消費とを再び密接な關係に結びつけやうとするのである。然も國家的統一は歴史上それと正反對の組織であるか故に明にこの聯絡運動を壓迫せねばならぬのである。

五　國家的統一と經濟生活

國家的統一は、之を要するに消費を伴はない生活、生産を伴はない消費、而して集團的生産消費の關係に基づかない分配過程を成立せしめたものである。經濟學に從つて假りに生産より消費に至る過程を經濟過程と呼ぶならば、社會狀態の下に於ける經濟過程と國家狀態の下に於けるそれとは、根本的に違つた性質をもつのである。社會狀態に於いては、經濟關係は生存の物質的有機的關係である。群的行動が群の生存を支持する物質的條件を充たさうとするのが社會狀態に於ける經濟行動である。それは營養と生殖との生活に於て生物學的の優秀條件に近い狀態を支持しやうとする行動である。集團そのもの丶發生する事情は、第一次的には、集團行動に依つて生物學的生存條件を有利にする爲めであるか、この條件に依存してゐるのは、社會狀態の下に於ける經濟行動である。反之、國家的統一は、或る群の犧牲に於いて他の群の優越を持ち來たす狀態であつて、全群の社會關係を顧慮するものではない。のみならず優越を構成する群がいつも少數であると云ふことを特徴とする。之亦寺院と國家とに共通する特徴である。

國家的統一は、それ故に、社會生活の有機關係からは發生しない。有機的全體の組織としての統一は必ず一定の社會生活に伴つて發生するものであつて、そこに家族と云ふ群があれば、それに伴ふ統一狀態が存在する。三人の人間が共同して行動しやうとすればその間に必ず統一關係が發生する。日曜日は三人の友人が落合つて一定の行動を取らうとすれば必ずそこに三人の行動を統一する關係が發生する。その間に暴力もなければ强制もない。その統一狀態の發生する過程を細かに研究すれば、必ずその三人が一つの有機的全體としての行動を引き起す關係に在ることが發見される。そしてその統一行動が三人の各々の生存條件に依存して成立する。それを假りに有機的關係と云ひ得るならば、その有機的關

係は協同した三人の生存過程を作り出す統一作用であると認められる。これが社會的統一である。反之、その三人の集りに突然警官が飛び込んで來て、有無を言はせず三人を推し去つたとすれば、その三人と警官とを引くるめた集團の行動は、前の有機的關係の行動とは、全く異つたものである。然しそれも一つの統一である。その四人の共同生活は矢張りその統一に依つて決定される。が、此の決定的の力が三人の上に働いた場合の組織は相談に依つて出來上つた組織とは全く異つた行動の體系を生み出すものであることは云ふまでもない。三人の相談に統一された生存の組織と、一人の强制が四人の集團の生活を統一した組織とは、それ〴〵違つた生存狀態を發展せしめるに相違ない。その狀態が即ち國家的統一の組織と共通のものである。それが持ち來たした組織的行動が、一般に國家以前のそれと異るものであると云ふ關係も、右の例と同じである。社會的統一の組織に於ける經濟行爲と國家的統一の組織に於けるそれとの相違は即ちそこから出立する。

國家的統一は根本的に經濟的生活の性質を改造したのである。國家的生活に於ける經濟的生活の特徴は凡て國家行動の本質から發生してゐる。即ち生產より消費に至る有機的聯絡が破られて、そこに分配過程の上に、全く違つて勢力が働き出すのである。即ち生產と消費との有機關係に代るに、力の關係が這入り込むのである。その力は即ち國家的權力と稱せられるものであるか、この力は、主權の哲學が瞑想するやうな力自體の自己發展ではなく、消費を伴はない生產、生產を伴はない消費、之れを要するに蒐集の過程を成立たしめやうとする衝動的意慾の現れに過ぎない。始にはそれが軍事行動となつて現れ、後には所謂叡知的の支配組織即ち政治となつて現はれるのである。即ち政治と軍事との壓迫が社會的の分配關係に代つて、生產と消費の中間に這入り込んで來た組織的努力である。國家的統一とは畢竟此の努力を以つて生產と消費の過程を全社會的に左右しやうとする行動の體系に外ならない。

さういふ知識の下に於いては、生産行動は社會の有機的關係に依存する組織の中心的の地位を占める譯けには行かない。全社會を支配する組織はも早や生産の組織ではなく、それとは全く別な軍事的丼に叡智的强制の組織である。生産の組織は依然としてその國家組織の下に於いても一定の生産行動を支持する有機關係を保つてゐるが、も早やその組織が、社會的生活關係の中心的組織とはなつてゐない。國家組織以前の社會組織は、生産行動の組織が中心的地位を占め支配は生産體系の有機關係に依存して始めて成立したのである。之に反して、國家的統一に於いては生産行動は、國家的蒐集行動の手段であること、恰度今の工場が株式會社の中心勢力でなく利潤獲得の機械的手段に過ぎないのと同じである。それなしには國家も株式會社も成立たないのであるが、然もその何れに於いても生産組織が、支配組織を決定せずに、そのあべこべに、支配組織が生産組織を決定する。さういふ關係が社會一般の生活行動に於いて成立つてゐるのは國家狀態の特徴である。

それは一言で言へば、蒐集組織の統一狀態である。その統一を可能ならしめるものは、社會的生産の有機關係ではなく、それに對しては全く外部的の國家的權力と稱せられる力である。而して此の權力が一般の生活に分布されてゐるのが國家狀態に於ける經濟生活である。

經濟生活とは、前に言つた如く、社會狀態に於いては、生活の物質的過程であつて、生産より消費に至る一系の行動であるが、國家狀態の下に於ける經濟生活は、特殊の權力關係の生活である。生産物をその權力關係に於いて收得する行動が所謂る經濟生活である。從つて國家的統一の下に於ける經濟生活は政治生活の一つの態様である、それは經濟現象でなくして政治現象である。

國家狀態の下に於いて『經濟的』といふことは、社會狀態に於けるやうな生存資料の生活上の價値を創造する過程ではなく、却つて生存資料の社會的分配關係を否める一つの力である。一定の社會に於ける生存資料の必要は、一定の生產行動を惹き起す自然の關係が存在するのであるが、而して生產された資料は同じ有機的作用に依つて分配され消費されるのであるが、國家狀態に於ける經濟行動は、その中間に存つて、さういふ有機的作用の進行を阻止する力そのものである。それはあらゆる物資について行はれるのであるが、國家的行動の順序としては、先づそれが土地の獨占から始められたのである。社會的集團が一定の土地を利用して、その果實を收得する組織を支持してゐる場合に、國家の軍事的行動は、その土地に對する利用を、その土地の獨占によつて防止し、その果實を收得する條件の下にその防止を撤回するのが、國家狀態に於ける經濟行動である。言ひ換へれば、その土地に對して絕對所有の關係を成立せしめ、その關係の下にその果實を收得する蒐集的行動が、國家狀態の下に於ける經濟的行動である。而してその力がその土地を利用する生產行動者の收獲の上にどれ程の蒐集力を有するかと云ふことに依つて、その經濟行動の價値が計算される。今日の經濟學に於ける經濟的價値とは即ちさういふ力の價値を言ふのである。土地に如何なる生產力があるとも、その上に絕對所有の關係——その土地に對する力が、生產行動によらずにその果實も收得する關係——が成立してゐない場合には、今の經濟學は、その土地に經濟的價値があると認めない。即ち國家狀態の下に於ける經濟行動とは、社會的有機關係とに全く別の關係に於いて、生產分配を支配する力の發動に外ならない。それは即ちそのまゝ政治行動に外ならないのである。

　土地が地代を生じたのと同樣の事情は、國家狀態の下に於てはあらゆる生存資料の上に行はれてゐるのである。順序として先づ土地に向つて發動を起したのであるが、——從つて國家は土地と密接な關係を保ち、國土即ち國家と云ふ風

に觀念されてゐるが——然し土地その物がその行動の目的なのではなく、その土地の上に行はれる生産行動の果實の蒐集が目的なのである。隨つて土地その者に對する經濟行動即ち地代を發生せしむる關係は、同時に土地の上のあらゆる産物に對して行はれる譯である。初めには土地の上の人間そのものを蒐集したのであるが、——さうして或は食ひ或ひは奴隷にしたのである、——後にはその人間の生産行動の果實に對する蒐集となつた。（之が組織的に發展して古代國家の莫大な國富を作り上げたのである。その場合に物資の蒐集は無論、それを蒐集者即ち國家行動者の直接の消費に當てる積りではない。前に言つた如く蒐集者は少數であり、生産者は多數である。從つて蒐集した物資を蒐集者のみが直接消費することは不可能である。無論豐富な蒐集は驚く可き濫費となつて現れたのであるが、如何に濫費しても統一的大集積を直接消費する方法はない。そこで蒐集は自から國家間の經濟的融通を引き起し、盛んな國際貿易がその結果として古代國家の經濟生活を特徴づける。そこで國家狀態の下に於ける蒐集過程が、所謂國家的秩序として成立し、所有の獨占が先づ人間の所有即ち奴隷制度に始まり、奴隷の生産に依る所有物資の大剩餘となり、富の蓄積を生じ、軍事的特權階級が、斯して所有に依る特權階級となつた。武力に發程した蒐集過程が、斯くして武力を離れた經濟的組織に依る蒐集過程に移る。言ひ換へれば武力は富の原因を作るが、やがて富それ自體の機構に於いて國家的勢力が發展する。腕力が有力であつた國家狀態から富が有力となる國家狀態に移る。

富それ自體の機構は即ち、國家狀態の下に於ける經濟生活である。それは生存資料を生産する過程でもなければ、消費する過程でもなく、亦有機的分配の過程でもなく、全く社會の有機的關係の行動の組織外に在つて、その分配過程を歪める力の關係の生活である。それは社會が要求する生存資料を獨占する力の關係を生活する生活である。國家狀態の下に於ける富とは豐富な生産資料それ自體を言ふのではなく、それを社會的缺乏に對して獨占する重力的關係を言ふの

である。從つて法律關係又は需要供給の關係から、その重力の中心が變化すれば富は減退する。(需要供給と云ふ關係も亦國家狀態の下においては、決して純粹に生活の有機關係に於ける需要供給ではなく、所有を構成する特別の機構の下に於ける『賣買』と云ふ關係の需要供給である。根本的にはそれは社會的需要供給に依存するといはれるが、國家狀態の下に於ては、その根本的の關係は、力の關係によつて常に甚しく歪められる。根本的の社會的需要供給は、國家行動や個人の政策によつて日々變化するものではないが、所謂經濟市場の需要供給は、國家行動や個人的政策によつて、どうにでも變化せしめられる。國家の法律や命令が、動かすことの出來るのは、それが、類集生活の權力關係に基く作用だからである。その部分だけが、日々の需要供給の關係の變化となつて現はれるのである。それは、國家狀態の下に於ける經濟現象はつまり政治現象と同じ獨占的勢力の關係に外ならないからである。)

六　國家的統一と貨幣の發生

國家狀態の下に於ける經濟生活が、政治現象であることの有力な證明は、貨幣の發生である。貨幣は、交換の標準として發生したと考へられてゐるが、然し、貨幣による交換は一定の國家狀態又はそれと同じ要素的性質を持つて統一狀態の下にでなければ決して發生しない。言ひ換れば社會狀態の下に於いては貨幣は發達しない。何となれば貨幣は、それ自體交換物の價値を代表する實質をもつたものではなく、たゞ或る約束に依つてさう云ふ性質を賦與されたもので、その約束事なしにはその價値は全く零であり、また約束の下に於ても、その價値は全くたゞ觀念的である。從つて貨幣は社會的經濟生活に於ては全くその存在を失ふ性質のものである。石塊や貝類や金銀のやうなものはそれ自體生存の資料としての價値を持つたものではない、と云つて、秤や尺度のやうに、或る物質の數量を計算する標準でもあり得ない。

貨幣を持つて數量も目方も量ることは出來ぬ。貨幣の價値はたゞ全く制度的、約束的のものである。——裝飾品としての價値はあるが、これも大部分制度的である——物々交換が行はれてゐる間に、最も多くの人に欲求せられる物質が貨幣の初歩的の働をなしたのは事實である。家畜や農具の類が農業社會に於いて貨幣のやうに交換の標準となつた。然しその物品が多數に欲求されると云ふことは實質的に生存資料としての、又生存手段としての重要さを持つてゐたからである。この交換の間に常に最も頻繁に交換の標準となるものが、遂ひに貨幣となつたと云はれてゐるが、然しさう云ふ物品がそのまゝ貨幣であればとも角、所謂貨幣に自然に轉化すると云ふことは考へられない。生存資料としての實質的價値を持つたものは、そのまゝ交換の標準たり得るが、石ころのやうな貝のやうな金銀のやうな實質的價値のないものが、實質的價値をもつものに代るに就いては、そこに特別の約束がなければならぬ。

實質的價値が象徴的價値に轉ずる一般の場合は、迷信的約束がそれを可能ならしめてゐるのである。實質的價値のない或る無內容の物質が、實質的價値に代つてそれを代表するといふことは、宗教上に於いて既に護符守札其他の神秘的物質の發生に於いて、甚だ普通の事柄となつてゐる。貨幣が實質的價値に代つて象徴的價値を持つに至つたのは、此の宗教上の迷信と共通の心理狀態に依つてゐるのである。それ故に尤も原始的の貨幣は、同時に神秘的護符の類だつたのである。貝類、鯨の齒等は往々貨幣であると同時に護符であつた。後にも或る種の貨幣例へば、小判のやうなものは殆ど護符のやうに取扱はれたこともある。

凡て象徴的價値は信仰的の心理狀態を基調としなければ決して成立しない。それはあながち宗教的象徴には限らない。刀劍が大和魂の象徴であると云ふことも、それを基礎づける一定の觀念的態度が成立たねばならなかつたのである。貨幣は物の實質的價値を象徴すると云ふ意味に於いても、一定の信仰的態度が成立たねばならないのであるが、然

し貨幣はその實決して、生存資料それ自體の實質的價値を象徴してゐるものではない。貨幣が代表してゐるものは或る物資の人間の生存、に對する價値ではなく、その物資を蒐集する權力作用である。貨幣は力の價値の徴であつて、物資の生存上の價値の象徴ではない。それは魔術師の杖と同じく、或る特定の物資を代表するものではなく、それを持ち來す神秘的力を象徴するものである。即ち貨幣は一種の護符である。護符を發生せしめた心理狀態がない所には決して貨幣は發生しない。

貨幣は、それ故に、或る物資を生産行動に依らずに蒐集する組織のない所には決して發生しない。寺院がなければ護符がない如く、國家がなければ貨幣がない。物々交換の經濟が、それ自から貨幣經濟に發展すると思ふのは間違ひである。それは耕作に依つて米を作ることが自から説教に依つて米を集める方法に進化すると考へるのと同じ間違ひである。物々交換は迷信も權力もなくして行はれる過程であるが、貨幣經濟はそれを基礎づける權力關係と貨幣そのものに於ける象徴主義がなければ發生しない。而して貨幣を基礎づける權力關係は國家的統一の組織であり、貨幣の象徴主義はこの權力關係を偶像化した心理狀態である。

然らば權力關係とは如何なる關係であるかといふに、權力關係とは、物資を蒐集する力の組立てであつて、その力の量は、具體的に蒐集される物資の量に依つて決定される。空漠たる、何の具體的効果もない權力といふやうなものが、世の中にあり得る筈がない。あつてもそれは權力ではない。服從とか、恐怖とかいふ心理を他人の間に起させるだけの力の欲求が所謂權勢欲の本能の發動といふやうなことで盛に起るものゝやうに思はれてゐるが、力はたゞ空漠と欲求されるものではなく、それが具體的の効果をもつところから憧憬されるのである。國家的權力も、權力それ自體に終局するものではなく、それが具體的に物資の蒐集を可能ならしめる力として成立するのであり、その蒐集された物資の

量が權力のキログラムを決定するのである。故に國家的權力の信仰を具體的心像に反映せしめた場合には大いなる富の集積として描き出されるのである。英雄主義が具體的には力の表現として一般の心像に反映したやうに、國家的權力は大いなる富の表現として反映する。從つて國家行動者もその富の表現を具體化することに依つて、國家觀念の具體的表現が完成すると考へ、廣大もない營造物や、脅威的の富の示威運動によつて、偉大なる國家觀念が發揚されたと心得るに至るのである。埃及王でもバビロン王でもローマの皇帝でも支那の天子でも皆さう心得たのである。貨幣は、此の國家行動の終極の目的──富──を象徵する護符である。從つてそれはたゞに國家があるのみで、國家的權力に對する信仰態度が成立しない所には決して成立たない。國家がその信仰の對象としての地位を確立するに及んで貨幣が有力に成立する。そしてその國家を代表する權力者の偶像が、その貨幣彫刻されること護に神像が描かれると同じ筆法である。貨幣は畢竟國家的權力の偶像化である。從つて、國家的權力の現實に影響されない生活階級に於いては、貨幣が受け入れられない。日本の貨幣は應神天皇乃至顯宗天皇の時代にその鑄造が始められたと云ふ推定であるが、而も國家的生活と沒交渉な民間に貨幣經濟の行き渡つたのは遙か後のことである。

貨幣が物資蒐集の權力の象徵として確立するに及んで、國家的統一は始めて確立するのである。その狀態の下に於いては、權力關係の經濟が一般に成立し、恰度國家權力と同じ關係が社會的に普く分布される。即ち民間の經濟生活に於て所有を中心とする權力關係が一般的に成立する。社會秩序が國家秩序と同じく、所有の權力關係を中心として成立する。物資の貨幣經濟に依る集積が社會一般に成立する。富を中心として力の關係が生產行動の有機的關係に代つて社會を支配する。從つて貨幣の私鑄が盛んに行はれるのであるが、それは資本經濟に於いて手形の濫發が行はれるのと同じである。

國家的統一は、個人的勢力を、國家的勢力と同じ物資を集積する權力に基づけしめる。即ち國家行動の政治的權力と同質の社會的權力が、社會的秩序の下に成立するのである。それは經濟生活と呼ばれてゐるそれであるが、然しながらそれは、實は政治生活である。中世紀に於ける地方の豪族の生活はその代表的なものであるが、現代に於ける資本家生活も亦經濟生活の名に隱れた政治生活である。資本家生活も、中世紀の豪族のそれと同じく、その努力がそのまゝ政治的權力として作用するのである。

七　結論

政治は、物資を蒐集する組織的行動——軍事行動——に發程したものであるが、然し政治の『意識』は、さう云ふ物質的の、所謂經濟的の意識に終始してはゐない。政治行動の發生と同時に、政治意識は、その物質的意慾と頗るかけ離れた意識狀態を呈した。そこでは政治行動の本來の物質的の目的は潛在的になり、それと全く逆つた觀念的目的が生れるのである。政治を基礎づけたものは軍事的行動であり、その軍事行動の動機は物資の蒐集であつたに拘らず、政治意識は政治行動の生活上の動因と全く異る一種の文化意識として發展する。さういふ事情は、國家的統一の組織も亦社會狀態に於ける統一の組織を意識的に襲はなければならぬことゝなつた當然の結果である。國家的統一はその社會的統一の有機的組織と異る組織であるに拘はらず、國家的統一者の側に於いて——又或る程度まで、被統一者の側に於いても——原始的社會意識が復活するのである。それは恰度共同祖先の信仰が征服後の社會——明かに共同祖先でないことが認められねばならぬ筈の社會——に於いて成立するのと同じ事情である。前にいつた如く、生活の協同が成り立てば共同祖先の信仰が成り立つのであるが、國家的統一が一定の度合まで統一的關係を完成せしむると、國家的統一

が全然社會的統一と別ものでないと云ふ觀念的態度が成立つのである。

然し如何に國家觀念が組立てられやうとも、現實の國家は上述の性質を失ふものではない。それと同時に、社會の物質的生活の組織が、國家狀態の下に於いても、社會狀態の下に於ける組織を全然受け繼いでゐるものであるといふ觀念的錯誤が起る。言ひ換へれば今日の經濟狀態が社會的經濟狀態として本質的のものであると斷定する錯誤に陷る。

然し乍ら、今日の經濟生活は、國家的行動の初步的條件を根抵とした權力關係の經濟であつて、今日の經濟行動の衝動はその權力行動の衝動と全く一致してゐるのである。力が物資を蒐集した機構に依つて物資の集積が、それ自身力を具象するといふ關係にあるのが今の經濟關係である。

社會的經濟生活は、社會的生存の有機的關係の生活であるが故に、その有機的全體を構成する有機過程が組織の中心となる。それは即ち生產過程の組織である。國家的權力關係の行動は、全然生產行動を度外視する。國家行動の組織に於いては、生產行動はその組織の外部に於ける手段であり機械である。それは家庭の生活に對する家畜の行動と同じになる。社會的統一と國家的統一との根本的の差は即ち、生產行動の關係を統一的組織に於ける從屬的關係に置くか、或はその中心とするかの相違である。言ひ換れば生產行動に依らない消費生活の體系を統一の中心とするか、生產から消費に至る一系の行動體系を統一の中心とするかといふことが國家的統一と社會的統一との分岐點である。國家的統一は、生產の體系と消費の體系との孤立した對立的の關係を統一する組織であるが、社會的統一は生產より消費に至る連續した一系の行動が社會的有機生活の生存條件であるといふ社會生活の本來の性質に基いた統一組織である。

國家的統一は、上述のやうな特性を持つて發生し發展したのであるが、その進行には自から頂點があつて、その最高の發達を遂げた後にそれが自からその特性を喪失する傾向に向つてゐるのである。而して中央亞細亞、印度支那等の古代

國家に於いて既にその頂點に達してゐることが認められる。國家的統一がその特性を失つて社會的統一に向ふ過程は、既にその時から始まつてゐるのである。さういふ國家の進化の研究については政治の近代的進化と關聯して興味ある問題であることを指摘して先づ本論を終る。

我が資本家的經濟の行詰と無產政黨の產業振興策

高橋龜吉

一、無產政黨と產業振興策の必要
二、無產政黨當面の產業振興策の性質
三、大衆生活の向上を約束する成算資本家に在りや
四、產業に對する資本家的過重負擔の輕減乃至廢滅
五、無產政黨の新產業補育策
六、產業の社會的管理
七、產業振興策としての行政制度の改革

一　無產政黨と產業振興策の必要

私は日本の資本主義經濟が已に行詰つてゐること及びその理由を、本誌の八月號に於て概述した。次いで、私はいま、當時の約束に從つて、斯様に行詰れる日本の資本主義經濟に對し、將に生れんとしてゐる我が無產政黨は、如何なる當面の轉換策を有するかに就いて述べんとしてゐるのであるが、この論文の精神を徹底さすためには、直に本論に入る代りに、先づ、無產階級の解放上、無產政黨は何故それ自らの產業振興策を有せねばならないか、及び、その產業振興策は當面如何なる性質のものであるべきかについて、私の信ずる所を述べておく必要のあることを感ずる。

今日の資本主義制度の下に於ては、如何にもがいた所で、無產階級の本統の解放は到底所期し得ないこと、從つて、その本統の解放を目的とする無產階級政治運動の目標は、要するに、資本主義制度に代ふるに社會主義制度を樹立するにあること、と云ふが如きことは、無產階級の解放戰に、現に與はれる程の人々にとつては、改めて云ふ迄もない分り切つた無產運動のABCである。併し乍ら、改めて云ふまでもなく、我が無產政治運動の對象とする所のものは、斯様な無產運動のABCすらも

知ることの少ない大衆そのものであつて、從つて、無産階級解放戰の前衛分子にとつては、何等問題でない無産運動のＡＢＣそのものが、我が今日の大衆運動に於ては、最も重大な問題となるのである。いかにも、我が無産大衆の大部分が、今日の彼等の生活に滿足せず、何ものかの不平を抱いてゐると云ふことに間違はない。しかし、彼等はその不平の根源が今日の資本主義制度そのものにあることを未だ知らずして、いま尚ほ傳統的に資本主義制度に對して相當の信頼を持つてをるが普通であり、少くとも、資本主義制度に代ふるに社會主義制度を以つてせねばならぬとの自信を有せないと云ふのがその大部分である。それは如何にも殘念なことである。しかし、過般の關東大震災時に於ける大衆の行動を顧るとき、卒直に、我等は右の事實を認めざるを得ないのである。

果してさうならば、我が無産階級の政治運動が、此際、大衆運動にまで發展するためには、先づ何は措いても、大衆をして、彼等の抱ける生活に於ける不平が、その根柢を現在の資本主義制度に有すること、從つて、彼等のこの不平を根絶するためには此の資本主義制度に代ふるに、より進んだ制度即ち社會主義制度を以てせねばならないことを自覺せしめねばならない。この大衆の第一段の自覺が、無産政治運動のすべての發足點であつて、その他の有ゆる戰術は、斯樣な大衆の第一段の自覺を基礎として始めて築き得る上層建築である。いかにも、已に鮮明な階級意識を有する前衛分子にとつては、いま更ら、斯樣な生温いＡＢＣが問題ではなくて、如何にして、資本家階級の反動的壓迫に抗するかゞ、いま最も重大な力點であらう。しかし、それは何處までも先驅者としての前衛分子にとつての重大問題であつて、彼等よりも遙かに後れてゐる大衆に對しては、斯樣な問題を理解せしむる素地から此際先づ作らねばならない。

所で、大衆をして、斯く資本主義制度に對して不信を抱かしめ、進んで社會主義制度に對する信頼を持たしむるためには、百の議論よりも、現實に、資本主義制度よりも社會主義制度の方が、よりよく大衆の生活を向上せしめ得る事實を示せばよい。事實に於て、由來大衆は、彼等の實際生活に於て、從來の制度よりも、他の制度の方が優れてゐることを現實に教へられる迄は、從來の制度を捨てゝ他の制度を採用しようとはしないものである。されば、大衆をして、無産政黨の陣營に立たしむるためには、要するに、資本主義制度よりも社會主義制度の方がより大なる生産力を有することを、現實に於て證明せねばならない。之を他の言葉で云へば、無産大衆が無産政黨の陣營に來り立つ爲めには無産政黨の産業振興策の方が、資本家政黨の

それよりも、より優秀であることを大衆に理解せしむる必要がある。之に反し若しも、資本家政黨の資本主義的政策が、無產政黨の社會主義的政策よりも、より良く產業を振興せしめ得ると云ふ理解を、大衆に與へ得るが如き場合に於ては、それは時代が未だ、無產政黨の大衆運動にまで發展し得る時機に熟せない證據であつて、斯る場合に於ては、稍々、自由主義的政黨の發達する素地しか未だ出來てゐないと云ふことになる。例へば、マルクスが彼れの唯物史觀の公式に於て『一の社會組織は、すべての生產力が、其の組織內で餘地ある限り其の發展をなし遂げた後でなければ、決して顚覆し去るものでなく、又、新たな、より高度の生產關係は、そのものゝ物質的存在條件が、古き社會の胎內に於て孕まれ了る以前に於て、決して發現し來るものでは無い』と云つた言葉は、以上私の所言を裏書きするものであると思ふ。

　そこで、我が無產政黨が大衆運動にまで發展し得るためには、社會主義的經濟原則に基く政策によつて、ブルジョアー政黨の政策よりも、實際どれだけよく、生產力を增加し得るか、即ち產業を振興し得るか、と云ふことが、此際に於ける重大問題となるのである。之に對し、一部の人々の如きは、無產政黨が斯樣な政策を揭げることを以つて、資本主義に加勢して、その壽命の引延し策を講ずるものであると云ふが如き非難をなすものがある。私はいま、斯樣な非難に對して、正面から十分之を辯駁するだけの紙幅を持たないが、(何れ他の場合に於て評論する積りであるが) しかし、ことのついでに簡單に之に對する私の考へを述べておく。

　繰返し述べた如く、無產政黨の產業振興策は、資本主義原則に代ふるに、社會主義原則を採用したものであつて、それは、資本主義制度の基礎を、一步々々切崩しつつ部分的に社會主義的經濟組織を生育し、その社會主義的經濟組織の力によつて、大衆の生活の向上を圖るものである。從つてそれは決して資本主義制度の命脈を一寸引延ばすものでなくて、却つて、その命脈を一步々々に縮めつゝあるものである。尤も一派の人々の信ずる如く、我が無產階級の解放上、此際、大衆の生活が愈々困窮することによつて、大衆の鬪爭心を尖鋭にする。と云ふことにより大なる重點をおく者にとつては、斯樣な無產政黨の產業振興策は、確かに、イラザル世話に違ひない。しかし乍ら、大衆の爭鬪心を、生活の困窮化によつて、尖鋭ならしむるについては、その前に大衆が資本主義制度に對する代案を持つてゐなくては駄目であつて、單なる不平は、それだけでは決して、眞の階級鬪爭にまでは發展しないものである。例へば、いま、賃

銀勞働者は勿論、會社銀行員又は官吏等の月給取階級、進んでは親の脛をカヂつてゐる學生等にして、その支配者に對し大なり小なりの反抗心を感ぜざるものは殆んどないと云つて大過ない。にも拘らず、斯る場合にそれ等の人々の常に選ぶ途は、現存制度よりも、よりよき制度を見付ける迄は、何と思つた所で、不平を呑んで、命に從ふより外はないと云ふ解決である。蓋し、反抗の結果飛び出した所で、同じ制度の下に於て生活を求める限り、再び同じ境遇と鬪はねばならないことを認めるからである。されば、彼等の不平が眞の階級爭鬪にまで發展するには、必ずや、その前提として彼等が現在制度に對して代案を有することを必要とする。而して、此際、大衆にこの代案を與へる最有力の方法は、即ち、無產政黨の產業振興策である。

なる程、大衆は、例へば大正七年の米騷動の如く、『米が高い、暴利者を葬れ』と云ふやうな、彼等の生活に切實な要求のみをモツトーとしても、大に動くのであると云ふことに間違はない。しかし、斯樣な單なるパツションによつて動く大衆の運動は、米騷動そのものが證明するが如く、極めて線香煙火的であつて到底組織ある永續的大衆運動にまで發展し得るものでない。然るに、いま、我が國の無產政黨運動に於て、最も必要とする所の大衆運動は、云ふ迄もなく、斯樣な線香煙火的な無組織運動ではない。顧るに、我が資本家階級の陣營は尚ほ極めて强固であつて、その壓迫に抗して、無產階級がその歷史的使命を全ふするためには、無產階級は、今後尚ほ尠からぬ歲月に亘る持久戰を覺悟せねばならない。而して、この長期間、無產大衆運動に不屈の勇氣を哺み、組織を與へ、最後の勝利にまで發展せしめるものは、結局、無產階級の歷史的勝利に對する確乎たる信念であるが、今日の我が無產政治運動に於て、大衆にこの信念を哺む役割を演ずるものは、前述の如き無產政黨の產業振興策の外にない。

加ふるに、如何に熾烈な階級鬪爭の焰と雖、何時來るか未だ見當のつかない革命前夜をあてに、大衆の生命を維持することとは出來ない。いかにも我が資本主義經濟は行詰つてゐる。資本主義制度に依存する限り、大衆の生活は今後益々困窮するであらう。しかし乍ら、それは程度の問題であつて、我が資本主義制度の大衆を賄ふ能力が、全然無くなつたことを無論意味するものではない。であるから、若し我が無產政黨が、大衆の生活の困窮化によつて鬪爭心の尖銳化に過大の希望を繫ぐ餘り、只管に、資本主義制度の矛盾の激成にのみ專念し、かくすることによつて、大衆の生活の困窮を益々大ならしめるが如きことあらんか、その結果はブルジョアー政黨に、資本主義制度

のより完全なる運用によつて、より高度の生活を大衆に約束せしむる餘地を貢ぐことになるであらう。云ふまでもなく、斯かる場合には、大衆は無産政黨につくよりも、ブルジョアー政黨につく方が、その生活を向上せしめられることになるから、大衆は無産政黨を捨てゝ、敵陣に走るであらう。以上によつて極めて簡單ながら、無産政黨が彼れ自らの産業振興策を有せねばならない所以、及び之に反對する説の此際採るに足らざるわけを説明し得たと思ふ。

二　無産政黨當面の産業振興策の性質

以上の如く、我が大衆的無産政黨はそれ自らの産業振興策を有せねばならないとして、さて、その政策の性質は如何なるものであることが此際最も適切であらうか。已に、無産階級自らの政黨を持たねばならないと云ふからには、前陳せる所から云つて、必然に、時代は社會主義制度の採用にまで熟してゐることを意味してゐる。即ち、無産政黨の産業振興策が社會主義的のものであるべきことは改めて云ふまでもないことである。しかし乍ら、等しく社會主義的政策と云ふも、その程度にはピンからキリまである。そこで無産政黨は當面の産業振興策として、如何なる程度の社會主義政策を採用すべきかゞ次の問題となる。思ふにこの點について決定權を有するものは大衆の自覺の程度如何である。然るに、我が大衆は、已述の如く、その大部分は未だ社會主義にまで信頼の進んでゐない程度であるから、從つて、その政策は斯樣な大衆をして「いかにもその政策の方がよい」と納得せしめ得る種類のものでなくてはならない。

然らば如何なる種類のものが、此際大衆を最もよく説得し得るかと云ふに、その最必要條件は、大衆をして、その政策の實行性を容易に信ぜしむるものたるべきことである。蓋し、如何に立派に描かれた改造案であつても、大衆がそれの實行性を稀薄であると考へる限り、その案は少數の前衞分子を動かし得るだけで、大衆は決して之について來るものではないからである。

いかにも、無産政黨が政權を握つて、自らその政策を實行すると云ふことは、近き將來のことではなく、從つて、尙ほ當分、その政策の實行性と云ふことを考へるが如き必要は、斯る立場からは殆んどないと云つてよい。併し乍ら、若しも大衆にして、彼等がいま如何に無産政黨を支持するも、而して彼等の支持によつて明日にも無産政黨が政權を握つたとするも、到底無産政黨の約束するものは實行され得ないと認めた場合、如何にして、大衆を無産政黨の陣營にまで招集することが出來るで

あらうか。況んや、資本家階級の社會主義に對する防戰乃至逆襲は、常に、社會主義政策の非實行性そのものを誇張することであつて、それが今日まで、少からぬ効力を大衆に及ぼしてゐる事實を顧るにおいてをや。斯樣のわけで、我が無產政黨の產業振興策、即ち、我が資本主義經濟の行詰に對する無產政黨の代案は、大衆に對する宣傳的効果から云ふも、戰術から云ふも、產業振興策に關する限り、無產政黨究極の歷史的使命を鮮明ならしむることを「主とすべき」でなくて、（さうした目的は、此際、大衆的政治運動以外の分野に姑く讓る外ない）大衆に對する說得力を主としたもの、即ち已に實行に熟した社會主義政策たることを必要とする。

之について、更に異論を立てるものは次の如く主張する。曰く、社會主義制度の實行は、結局、今日の政治關係の下に於ては期待出來ないことであるから、無產政黨の有するあらゆる代案は、要するに、政治的飛躍の後でなくては無意味であると。いかにも、或る程度以上の社會主義的制度を實行しようと云ふには、政治の飛躍がない限り、いまの政治制度に於ては到底その實現を期待することは出來ない。併し乍ら、例へば、先に引用せるマルクスの唯物史觀の公式によると、「……新たな、より高度の生產關係は、そのものゝ物質的存在條件が、古き社會の胎內に於て孕まれ了る以前に於て、決して發現し來るものではない」とある。之による限り、資本主義社會の下に於て、社會主義制度の實現準備は整ふわけで、さうである限り又、資本主義社會に於て、或る程度までの社會主義制度が採用せられないことはない。蓋し、社會革命は政治革命の如く、一朝にして飛躍し得るものではないから、必ずや、それに先行する社會制度の中に、新たな社會制度の基礎となり、その發達の條件となる制度の成長して漸次に、舊制度の中に新制度が織込まるべき筈であるからである。現に、之を我が歷史について見るも、德川封建制度の下に於て、貨幣制度は發達し、町人階級は勃興して、已に、資本主義經濟制度の準備は出來上り、一部分に於ては或る程度までの資本主義制度が實現せられてゐたのであつた。又、現在の資本主義制度に於ても、例へば米國の如きに於ては、經濟統計の完成と金融の社會的管理によつて、これ迄市場の投機に一任せられてあつた物資の需給關係を著しく計劃立て、科學化して、社會主義的經濟制度の長所を利用しつゝある。しかも社會主義的經濟制度は、先づ何よりも先に、斯樣に、大衆の需給する物資が、一の統計の下に、豫算を立てられる狀態におかれる迄は、到底之を實現し得られないものであることは、後述の如く、露國の經驗が敎へる所である。

更に之を他の側面から見るも、例へば、歐洲戰時に於ける交戰國の各種產業の管理、及び食料其他の切符制度の如きは、明かに、資本主義社會に於て、部分的に或る程度の社會主義制度の利用せられることを證明するものである。然り、資本家階級の或る一部は、彼等一部自らの搾取を增大する見込のある場合に於ては、自ら進んで社會主義的制度を部分的に採用することすら決して躊躇するものではない。例へば、我が地主階級が、小作爭議の頻發に苦しむ結果、土地を高く政府に賣りつけんがために、或ひは土地の國有を主張し、或は穀物專賣論を持ち出すが如きである。いかにも、以上は何れも、資本家自らのための、社會主義的經濟制度の利用である。併し乍ら、斯樣に、資本家の立場から、社會主義的制度が、資本主義社會の中に部分的ながら織込まれると云ふことは、それ自らが實は、無產階級の反資本主義的鬪爭の結果であつて、更に、無產階級の聰明と團結とによつて、斯樣な部分的な社會主義的制度を、無產階級の立場から、資本主義制度の中に割込ましめ、之を究極の所にまで發展せしめ得ることを約束するものである。

以上の諸點を、更に最有力に裏面から證明するものは、思ふに、レーニンが新經濟政策の採用について發表した「農業課稅の意味」と題する論文であらう。之によると、社會主義勞農政府をして、新經濟政策の名の下に、資本主義的制度を或る點まで利用せざるを得ざるに至らしめたものは、小ブルジョーの反社會主義的、又は反國家資本主義的運動であつた。他の言葉で云へば、勞農露國の新經濟政策は、支配階級が自己の利益の擁護上、反對の社會制度を部分的に利用すると云ふ點に於て、我が地主階級の土地國有論や我が資本家階級の炭坑國有論やによく似てゐる。併しながら、斯樣に、一の社會制度の中に他の反對の社會制度を織込むと云ふことは、常に支配階級の立場から行はれると限られたものではなくて、被支配階級の立場からも之を主張すべきであり、又實行し得るものであることは、レーニンが、ケレンスキー內閣の立場に於て、（即ち勞働階級の獨裁政治の立場からではなく）無產階級の經濟政策として、先づ國家資本主義の完成に近づくことを目的とした政策を主張したことから之を容易に伺ひ得る。然り、レーニンは、個人的資本主義を先づ國家資本主義にまで發展せしめない限り、社會主義制度は實現の階程に達せないことを力說してゐる。

以上に述べたる所を、理解に便宜のため、更に具體的に我が現狀に即して例示しやう。周知の如く、いま我が產業は、その生產費の騰貴のため外國の競爭に敗け、之を資本主義制度の自然の療治法に放置せば、勞働階級は賃銀の低下を強要せられる

か、乃至は之を拒絶せば、産業の閉鎖の結果、失業に陥る外なき事情にあるものが少くない。斯る場合、一方に地主階級の搾取を低下することによつて農業物價を下落せしめ、他方に電力、石炭等を社會化して燃料費を引下げ、更に、金融制度を統一し公有化して、資金を管理し産業資本に對する利子を低下する政策を無產政黨より提案し、以て勞働階級に對する賃銀低下の代案となしたとする。此際、假令無產政黨の勢力は、資本家黨を壓する實力未だなしとするも、一方に於て相當有力な勞働組合が賃銀引下に反對するストライキを以てこの案を支持し、他方に於て此の案により利益を受くる一部資本家の支持を受けることによつて優に案の通過を見ることを期待し得る。いかにも、その通過せる案は、社會主義的案としては程度の極めて低いもので、しかも、一部資本家階級に利する所が少くないものである。しかし乍ら、斯樣にして、一度び地主階級を滅し、動力と金融とを社會化した結果として、産業の大動脈は少からぬ程度まで、無產階級の支配の手の屆く所に置かれることになり、その結果として得たる無產階級の經驗を基礎にして、更に次の階程の産業の社會化の大なる前提となるのである。而して、幸にして、此間政治事情が熟し、×××無產階級の手に歸したる場合には、無產階級は已に社會化されたる動力及金融の大動脈を通じて直ちに全産業を實質上之の××××に置き、之を自由に、次の××××××の階段にまで登らしむることが出來るものである。併し乍ら、政治事情の熟して×××無產階級の手に落ちたる時に於て、若しも斯樣な程度の社會化すら完成せざりし場合に於ては、經濟の實權は全部資本家の手にあるわけであるから、その反抗によつて、一時××の經驗せるが如き經濟の大解體を起す危險があり、加ふるに斯る場合には、更に大なる危險を犯して、資本家を懐柔する所謂新經濟政策をすら必要とするに至らう。何れに致せ、社會制度の××はそれだけ後れざるを得ないのである。斯樣のわけで、資本主義的支配の下に於て、或る程度までの社會主義的制度が、實現せられ得るか否かと云ふが如きことは、現實の社會から常に眼を放たないものにとつては、全然、問題にならないことであり、又、社會制度の進化の原則から云ふも、之を疑ふ余地はないのである。思ふに、問題は他にある。即ち、如何なる種類の、如何なる點を突ける社會主義政策が、將來の完全なる××××××××に、此際最も組織的なる素地を作り、之を促進すかと云ふことである。更に之を他の言葉で云へば、如何なる點を突ける案が此際最もよく、組織的に資本主義制度の××××××××××××××××××に最も便利な布石を布くかと云ふことであ

る。しかも、その案は、その上に、已述の如く、無產大衆を容易に說得し得るものであるべきことと云ふ迄もない。

三　大衆生活の向上を約束する成算資本家に在りや

我が大衆が、果して無產政黨の戰陣に來り立つか、將又、資本家政黨を支持するか、否かは、縷返し述べたるが如く、何れの政策がより良く大衆の生活の向上を約束し得るか否かによつて決定する。そこで、日本資本主義經濟の行詰れること（本誌八月號の拙稿「何故に日本資本主義經濟は行詰つたと云ふか」參照）を基礎として生れる我が無產政黨の第一の陣容は、「大衆の生活の向上を約束する政策果して資本家政黨にありや」と云ふ論陣に於て、資本家政黨に對し先づ攻勢を取ることを最も有利とする。蓋し、從來、我が資本主義經濟の未だ發展期に在りし時代に於ては、資本家本位に總べての經濟政策を決定することが、延いて、大衆の生活を向上せしむることになつてゐた。無論、この場合と雖、大衆に對する資本家の搾取は多大であつたのであるが、從つて、資本家と大衆との生活の向上の間には多大の差異があつたのであるが、兎に角、資本主義制度の機能が、それに先行した制度のそれよりも遙かに優秀であつた結果、大衆の生活は、資本主義制度を支持することによつて、より良く向上せられたと云ふことに間違はない。斯樣な環境に於て、大衆を資本主義の陣營から、無產政黨の陣營に移り來すためには、先づ、これ迄大衆の生活を向上せしめ得た資本家的政策が、いまや、その能力なきに至れることを明かに指摘することは最も有利な戰術である。そこで先づ資本家的產業振興策について一瞥する。

資本主義經濟の仕組に付いては、資本家の利益と云ふことが、すべての原動力となつて全經濟は運轉する。であるから、今日の我が國の如く、その產業が行結つて資本家が引合はなくなると、產業の活動は制限又は中止せられる。これ所謂今日の不景氣である。從つて、社會が資本主義經濟に依存する限り、再び產業を活動せしめるためには、何としても資本家に儲かる狀態を與へねばならない。資本家的產業振興策とは外形は色々に異るが要するに如何にして斯樣に資本家に儲かる狀態を與へるかと云ふことである。然るに本誌八月號の拙稿に於て詳述せし如く、已に行詰期に轉入せる我が資本主義經濟に於て、斯樣に資本家を再び儲かる狀態に置くためには、無產階級の賃銀又は給料を低下さす外に資本家には策はないのである。例へば今日我が財界に於て絶叫せられてゐる所謂緊縮政策乃至は

財界の整理と云ふが如き言葉も、いま之を評論する紙幅を時たないが、要するに之を露骨に云へば、結局に於て、賃銀又は給料を一般的に低下さす狀態を作出すると云ふ意味に外ならい。（尤も、その過程に於て大なり小なり、資本家的濫費の節約の行はれると云ふ事實はあるが）事實、緊縮政策、乃至は財界の整理の進行と共に、失業者の續出、賃銀給料の低下と云ふことが、眞正面から或は急激に、或は徐々に我が無産階級を襲ひつゝある。

併し乍ら、斯樣に眞正面から、賃金又は給料を引下げると云ふことには、實は無産階級の反抗運動が旺んであつて、或る程度以上に之を行ひ得る余地がない。そこで、資本家階級は間接に裏面から、その目的を達する方法を構じつゝある。例へば、（イ）國産奬勵、（ロ）我が爲替相場の低落、（ハ）輸入關稅その他に由る資本家保護等の所謂資本的産業振興策が即ちその手段であつて、これ等の方法は、何れも結局に於て物價を高め、無産階級の實質收入（一定の賃銀を以て購買し得る物資の實量）を減じ、無産階級の生活程度を低下して、資本家に利益を約束する作用をなすものである。就中、以上の如き資本家的産業振興策の中、最も重大で且つ僞瞞的で、此際、特に無産大衆の注意を換起する必要のあるものは、前記の中（ハ）であるから、茲にはこれに就いて述べるに止め、（イ）及（ロ）については紙幅の關係上、說明を省くことにする。

元來、産業の保護と云ふことは、その國の資本主義の發展期に於ては、未だ一人前にならない子供を親が保護成人せしめると云ふ意味に於て、採用せられた有効な資本家的産業振興策である。現に、我資本主義經濟從來の發達は、各種の樣式による政府の資本家保護に負ふ所が尠くなかつたのだ。併し乍ら、宛も、已に一人前になつた子供に親が補助を與へると云ふことが、却つて、その子の發達を弱め、放蕩に導くが如く、已に産業が一人前に發達した後に於て、資本家を保護すると云ふことは、要するに、何等産業の發達を助けるものではなくて、却つて産業の發達を弱め、資本家に酒色の費用を貢ぐに過ぎないことになる。であるから、等しく、政府の産業保護政策と云ふも、資本主義の發展期に於けるそれと、今日の如く資本主義の行詰期に於けるそれとでは、丸つきり意味を異にする。即ち、前者に於ては保護政策は幼稚産業を哺育する作用をなすもので、從つて間接ながら或る程度まで大衆の生活程度の向上を約束するものであるが、併し乍ら、後者に於ては保護政策は、租稅又は物價騰貴の形に於て大衆を搾取し、之を資本家に貢ぐ作用をなすものであつて、要するに賃銀引下げの一樣式に外ならないの

である。にも拘らず、資本主義行詰期に於て依然、資本主義發展期に於ける保護政策の効果を假裝して之を產業振興策として强賣する所に、資本家的欺瞞がある。兎にも角にも、その國の資本主義の行詰るや、之を轉換する資本家的方策としては、樣式は色々に粉飾せられるが、結局右述の意味の如き保護政策の採用の外、他に何等の策を持ち合はしてゐないことは英國の保守黨が同國產業の振興策として英國從來の自由貿易的傳統を破つて、保護貿易主義を高唱し始めたことや、及び我が資本家及び政府が、我が現在の產業行詰の打開策として、切りに輸入關税の引上げ其他の保護政策に熱中してゐること等によつて之を窺ひ得る。併し乍ら、その結果は何等その產業の振興策とならずして徒らに物價を高め、大衆の生活を壓迫するに過ぎないことは、例へば我が銅の保護關税引上げによつて之を說明することが出來る。即ち銅の輸入關税は大正十年、從來の百斤一圓二十錢から一擧に七圓に引上げられた。之によつて銅業者の受けた利益、即ち大衆を搾取した金額は、一ケ年約七百萬圓であるが、併し乍ら、その金は一厘も銅鑛業の發展に必要な技術の進步改善には利用せられずして、全部、資本家の利益勘定に振替へられたのであつた。（詳はしくは拙著「末期の日本資本主義經濟と其の轉換」第一編第三章參照）しかも、當時、この銅保護關税の增加に就て「銅鑛業保護の必要期間は、要するに數ケ年にして……世界經濟界の安定、銅需要復舊、內地生產費漸減により、全く遠からざる將來に於て保護の必要なきに至らん」と、當業者自ら文書に於て公言せしにも拘らず、最近、更に、銅輸入關税を百斤拾圓內外に引上げると云ふ風說が、新聞に切りに傳へられつゝある。以て、資本主義行詰期に於ける資本家保護の政策が、何等產業自體の發達を圖る能力なく、從つて、少しも大衆の生活を賄ふ間接作用を有せず、却つて、逆に、物價を高めて大衆の生活を壓し、さうすることによつて、資本家に利益を貢ぐるに過ぎないものであることを看取するに難くないであらう。これは單に輸入税による資本家保護ばかりでなく、その他補助金の交付、その他の直接間接の保護について云ふも全く同じである。

そもそも、資本主義的考へ方に從へば、一國の經濟の發達と云ふことは、資本家が隆盛にならない限り、決して期待し得ないものであつて、若しも、資本家に衰微を來たすが如きことあらんか、その國の經濟は必然に亡びることになるわけで、勢ひ、斯る場合には、如何なる犧牲を大衆に强ひても、資本家階級の存續繁榮する方法を講ずる外に、一國の經濟の滅亡を救ふ手段はないと信ずるものである。丁度、我が德川封建時代に於

て、當時の支配階級なる武士が、日本の隆盛は武士階級の隆盛ありてのみ期待し得ることで、武士階級の衰亡は必然に日本の衰亡を意味すると考へ、從つて、武士階級の衰亡を救ふためには、他の農工商を如何に犧牲にするも致方なしと信じ、それに從つて有ゆる政策を樹てたと少しも變らない。併し乍ら、明治維新の社會革命によつて、武士階級は滅亡したが、日本は滅亡しなかつた。否、武士階級の滅亡によつて、日本は資本主義的に周知の如き飛躍的發達を遂げ得たのであつた。この歷史的事實を今日疑ふものは一人もあるまい。にも拘らず、今日の我資本家階級は、そうしてその政府は、僅か六十年前のこの經驗を早くも忘れて、資本家階級の衰亡は即我國經濟の衰亡と依然確く信じてゐる。勢ひ、その政策には、資本家の繁榮を確保するためには、如何なる犧牲をも大衆は忍ばねばならないと云ふ道德的信念が固くコビリ付いてゐる。今日の支配階級――而して如何なる社會制度に於ける支配階級もさうであるが――が斯樣な信念に囚はれてゐる限り、資本主義行詰期に於ける有ゆる資本家的產業振興策が、大衆の生活を壓迫する結果になると云ふことは、實は、當然なことである。現に、幕末に於て、武士階級の存續を圖る。ために、農民の苛斂誅求が行はれたことは我々の記憶に未だ生々しい出來事ではないか。

然るに、實際に於ては、今日に於ける我が經濟の行詰を打開する方法は、後述の如く、多かれ少かれ、資本家的繁榮そのものを制限乃至廢滅する外に途はないのだ。それは宛も、幕末に於ける我が經濟の行詰を打開するには、武士階級の廢滅を必要としたと、歷史的意味に於て少しも異らない。斯る秋に於て、資本家的產業振興策に頼つて、大衆の生活の向上を望むが如きは、宛も、幕末に於て、德川幕府の政策によつて大衆の生活の向上を期待すると少しも變らないことは、三才の童兒と雖も尙ほ之を諒知し得るであらう。社會は生きてゐる。寸時も成長することを休まない。にも拘らず、無智の親は、その幼兒の時に與へた母乳で、已に四五歲に發達せる子供を哺くまんとし、已に三十歲に成人せる子を十五六歲當時のまゝに支配せんとする茲に今日の經濟の行詰があるのだ。如何にも社會が未だ幼兒の時には母乳は最もよい發育の方法であつた。社會が未だ十五六歲の少年期に於ける當時に於ては、父權的支配は彼れの發達のために必要であつた。しかし、そうした方法が何時までも、發達に有効な方法でないことは改めて云ふまでもないことだ。今日に於ける有ゆる資本家的產業振興策は、要するに、この點に於けるが如き時代錯誤のものに外ならない。極めて簡單たがら、以上によつて、資本家的產業振興策によつては、最早、從

來の如く大衆の生活の向上を約束することが出來なくなつたと云ふことは、絮說を要せないであらう。然らば、無產政黨の產業振興策如何。以下に於て私はその大略を述べるであらう。

四　產業に對する資本家的過重負擔の輕減乃至は廢滅

そもく、我が產業が今日の如く大衆を賄ふ能力に減少を來たした主因の一は多くの徒食資本家階級の驕奢に養ふために、產業が余りに過重の負擔を課せられてゐるからである。いかにも直接企業の經營に任んじてゐる所謂企業家の利益は我が資本主義經濟の行詰に連れ、減少しこそすれ、決して增加してはゐない。併し乍ら、今日、產業に寄食して驕奢の生活を暮らしてゐる所謂資本家階級は、斯樣に自ら企業に從事してゐるものに限らない。否々、株式社債銀行等の投資制度の發達、並に、貸貸制度等の爛熟の結果、今日に於ては、無數の資本家階級は、自らは何等產業に與はらず、遊食しながら、企業家其他を通じて、安全に搾取を續けることが出來る仕組になつてゐる。斯樣のわけであるから今日に於いては、經營者たる企業家の勘定では利益がなく、從つて、無產階級の賃銀又は給料を低下さす外なき狀態にありとするも、この事實は產業に對する資本家階級の搾取の余地が全く無くなつたことを決して意味するものではない。にも拘らず今日の資本家的仕組みによると、斯る場合には投資階級に對する產業の負擔は、如何に產業を損失に陥れても、之を支辨せねばならないが、しかし、斯樣にして產業が損失に陥れる場合には、その產業を再び引合ふ狀態に戾すためにその產業に從事する無產階級の賃銀又は給料をそれだけ低下さすことになつてをり、さうしない限り、產業は破產し、從業者は失業する外にない仕組みである。これは如何にも投資階級には都合のよい仕組であるが、しかし無產階級にとつては極めて不都合な仕組である。

按ずるに社會的機能の退化して、社會生活に何等貢獻する所なき機關は、廢滅して行くが世の進化の常である。然るに、いま所謂投資階級なるものを顧るに、無意にして驕奢の生活を送るのみにて、殆んど、何等の社會的機能を有してゐない。斯樣な階級をいま社會から驅逐するも、社會は何等の損失をも蒙らないのみならず、却つて、その負擔から免かれて利益する事情に在る。にも拘らず今日社會の仕組に於ては、多數の有用な生產に從事しつゝある無產階級の飢餓線に彷徨せしめながら、斯樣な階級の利益を余りに厚く保護して彼等に驕奢の生活を保證することになつてゐる。であるから、いま、斯樣な階級に不當

な利益を保證する仕組みを更改して、現に產業に從事しつゝある階級の利益を、出來る丈け手厚く保護する方策を採ることが、產業の振興上、此際、無產政黨の第一に着手すべき、しかも實行容易にして、效果多き方法の一つである。之に對し私はいま、無產階級の歷史的使命に對する準備を考慮しながら、その方法として、次の如き政綱を擧げることが出來る。

一、中央銀行の公有並に金融制度全體の改革によつて、金融を科學的に統制し、產業資本の利子を極力低下すること。(その方法の一端については拙著「金融の基礎知識」參照)

二、資本家に利益を約束する一切の保護政策の撤廢

三、所有權よりも、現に之を利用しつゝあるものの利益を尊重して、所有權のために產業の活動が、壓迫乃至は制限せられることを極力防ぐこと。例へば耕作權、借家借地權等の確立勞働者の工場經營參與權の確保等、等、等、

四、產業の借入金に對する利子負擔を、その產業の負擔し得る能力以內に限らしめることにし、一切の蛸配當を嚴禁すること。

五、不勞所得を社會化すること。

六、社會の活動分子の課稅負擔を極力輕減し、遊食分子のそれを極力重荷する。

以上の政綱によると、なる程、單に遊食の投資家階級の利益のみならず、自ら產業に從事する資本家の利益も亦、自ら資本を所有し、投資家階級と同一利害線に立つ部分に於て、等しく、少からず制限することになる。しかし乍ら、今日の資本主義制度に於て、現に支配權を握れる資本家に對し、その活動の原動力を與へるための利益勘定としては、實は斯樣な種類の利益がなくとも何等差閊へのないものであつて、そのために、企業家の活動が鈍ると云ふ懸念を要せない。斯樣な政綱を採るについて、無產政黨の問題とすべき點は實は他に在る。即ち、斯樣な政綱によつて、社會の管理の下に來つた資金を如何に利用するかと云ふことだ。若しも、これ迄の如く、その利用を資本家に委かしておいたのでは、右の敵から武器を奪つて、左の敵に與へたと同一だからである。そこで、この點については、無產政黨は右の資金を最も有利に大衆のために、大衆の管理の下に利用する方策を併有せねばならない。私はそれを次の第五項に述べる積りである。

その前に、我が產業が、資本家的負擔の過重に苦しんでゐる今一つの方面について、無產政黨は之を除く方法を講ぜねばならない。今一つの資本家負擔の過重なる方面とは、即ち、產業

そのものゝ組織である。元來、今日の社會組織に於ては、大衆の利益から云へば不必要な機關が、如何にも必要缺くべからざる機關のやうな顔をして、それの維持費を産業に賦課してゐる。云ふ迄もなく、斯樣な賦課によつて、甘い汁を吸つてゐるものは、斯種の機關に從事する資本家であつて、これ等の不必要な機關を整理し、統一することによつて、大衆を賄ひ得る我が産業の能力は著しく増大し得るのである。私はいま、以上に於て、社會化に熟してゐる産業の社會化を意味してゐる。思ふに、いま、我が國に於て已に社會化に熟してゐる産業としては次の如き事業を擧げ得るであらう。

一、差當り鑛業（就中石炭、石油、銅）、動力（就中電力）運輸、交通の公營

二、米穀、繭、酒、の政府專賣、

三、肥料、農具の公營

四、中央銀行、貯蓄銀行、不動産中央銀行の公營

五、生命、損害、農作物、失業、疾病等一切保險業の公營

六、都市住宅及土地の市營

八、病院、賣藥、助産、埋葬の公營

九、日常品市場の公營、

云ふ迄もないが、これ等の公營事業は、その能率を發揮するため、それに從事する者、又はそれに密接な利害關係を有する團體よりたる、民主的經營法を採用すべきものであつて、從來の如く單なる官僚的國營事業たらしむべきでない。

五　無産政黨の新産業哺育策

以上第四項に述べたるが如き、資本家的過重負擔を、手だゝ業から輕減乃至廢滅することによつて、それだけ、我が大衆の生活は樂になること云ふ迄もない。併し乍ら、それは要するに消極的であつて、單にそれだけでは、大衆に大なる生活の向上を約束するわけには行かない。元來、今日の我が經濟行詰の根因は、本誌八月號の拙稿に於て詳述せし如く、一言にして云へば、我が今日の産業の發展を約束するに足る資源に欠乏乃至涸渇しつゝあることである。であるから、若しもその根本の資源にして、今日のまゝである限り、無産政黨如何に魔術的政策を有するとも、肝心な種がないのであるから、資本家的政策に比し、云ふに足る生活の向上を大衆に約束することは到底不可能な筈である。

所で、資源の欠乏乃至涸渇と云ふことは、實は、絶對的なことではなくして、常に、その當時の産業組織及び技術の如何によつて決せられる問題である。例へば、幕末に於ける我が國

は、當時の知識から見て、確かに資源の欠乏によつて、周知の如く衰微した。しかし乍ら、維新革命の結果、資本主義制度の組織と技術――何れも輸入模倣したものであるけれども、――とから見た場合に於ては、多くの資源が其處に存在して、明治大正の大發展を遂げ得たのであつた。更に之を歐洲の資源について見るも、例へば一七〇〇年に於ける英國の鐵產額は一萬二千噸歐洲戰前には一千四十三萬噸に過ぎなかつたが、當時の製鐵燃料たる木炭の原料材木が欠乏せるため、早くも、英國は製鐵業に行詰るに至つた。所が、一七一三年から三〇年の頃、木炭の代りに石炭又はコークスを代用する方法が發明せられて、玆に英國は始めて製鐵の大資源に恵まれることになつたのであつた。しかも、その石炭は、十八世紀の初に於ては、水平線以下に採掘し得なかつたが、水平線以下の炭層が完全に、歐洲の資源となるに至つたのは、ワツトの發明した蒸汽機關によるポンプの御蔭である。更に、アルサス・ローレンの鐵鑛が、歐洲戰前の獨逸の大富源となるのは、一八七八年、ベーシツク・ベゼマー法が發明せられて、含燐鐵鑛を優良鋼にまで製錬するに至つたからで、それ以前に於ては、豐富なるローレン地方の鐵鑛も、未だとり立てゝ云ふ程の資源とはならなかつたのであつた。

斯樣なわけであるから、今日の資本主義的經營法と技術とから云へば、如何にも我が國は、已に、資源の欠乏のために、周知の如く產業の衰微を來たしつゝあるが、併し乍ら、無產階級の奉ずる社會主義的經營法と技術の發達とから云へば、必しも、我が國は資源の欠乏に面してはゐないのである。云ふ意味は、社會主義的經濟原則に從へば、いま我が無產政黨は、我が國に、大衆を豐かに賄ひ得る資源の發見乃至利用を約束することが出來ると云ふことだ。私の玆に云ふ所の、無產政黨の產業新興策とは、即ち、斯樣な意味に於ける資源の發見乃至利用を圖る方法を示すものである。

そもそも、一國の自然が、如何なる程度まで、有用な資源として利用せられ得るか否かは、大體に二つの事情によつて決定せられる。(一)は科學及技術の如何であり、(二)は產業組織の如何である。而して、資本主義制度に於ては、この兩方面を、大體に資本家の營利心の追求によつて發達さしたのであつた。然るに、今日に於ては尠くとも現在の我國に於ては、斯樣に、資本家が算盤玉をとつて、發達せしめ得る限りの技術と組織との發達は、大體に、一巡終りを告げて、これ以上の發達は殆んど望めない狀態にある。之れ、我が國に於て、いま、資本家的立場から資源に涸渇しつゝありと云はれるわけである。

所で、斯様に資本家的採算からは、この上技術の進歩開發及組織の改造によつて、我が自然を、資源として利用し得る餘地がないと云ふことは、必しも、本統の經濟的意味に於て、さうであると云ふことにはならない。元來、今日の產業經營の中心をなすものは、周知の如く、株式會社制度である。所が、その會社の支配權を有する株主の多くは、昔の個人經營制度に於ける業主の如く、その事業百年の繁榮と云ふが如きことには何等の興味を有せず、目先きの配當の高下、又は株式取引所に於けるその株の相場の高下による利得にのみ專念するもので、その時の算盤の彈き方一つによつて、旦に株主となり、夕べに株を賣放つことを、何とも思つてゐない人々である。であるから、資本主義初期に於ける個人經營制度の時に於ては、親子二代或は親子孫の三代を續けて、巨額の費用をかけて苦心發明したと云ふが如き、技術及組織上の改良進歩の美談が、少からず物語られたのであつたが、今日の會社制度に於ては、斯様に長年月の後ちに始めて成功を約束するが如き――それも成功するか否かも分らない――研究や新計畫に、巨額の金を貢ぐが如きことは、夢にも考へられないことであつて、たま〳〵、研究せられるものと云へば、精々、近き將來に於て利益を約束し得ると期待し得るものだけであつて、しかもそれすら、利益金の何十分の一にも當らない小額のものである。

然るに、之を社會の厚生と云ふ立場から見るに、今日の如く、我が資源が日々衰亡しつゝあるのを、拱手して、破滅の日まで待つわけには行かない。有ゆる努力をして、如何なる犧牲を拂つても、新に、我が自然を、新に資源として利用し得る科學や技術の發見乃至發明進歩を圖らねばならない。しかも、その研究すべき方面は、いま全々手がかりが無いと云ふではなく、相當の資金と歳月とさへあれば、必ずや成功し得るに違ひない――無論成功を一定期間内に保證し得ないが――と期待し得るものが尠くないのである。例へば、いま我が國には鐵の資源が貧弱だと云ふが、砂鐵鑛であるならば、何億萬噸の鑛量があると云ふ。にも拘らず、これが我が資源となり得ないわけは、砂鐵を有利に製煉する方法が未だ發見せられなかつたからだ。しかも、そのわけは、歐米に於ては、鐵鑛石が豐富にあるので、砂鐵を製煉することまで研究する必要がなかつたからであつて、その研究は、鐵鑛石に惠まれないで砂鐵にのみ惠まれた我國に在りと云はねばならぬ。又、我國には石油がないと云ふが、河川又は海流を利用した水電に豐富であるから、電氣を輕便に蓄電する方法の發明によつて、石油に代用することが出來る。更に、我國は化學工業の基礎材料なる食鹽に欠乏して

ゐるが、しかし、之れは學理上、我國到所に豐富に產出する石灰によつて代用し得る技術の發達すべき余地があると云ふ。其他、石炭の欠乏は、汐の干滿を利用する電力によつて補ひ得べく、肥料の不足は空中窒素の採取によつて滿たし得べく、銅鑛の不足は、製煉技術の進步に由る貧鑛(現在は費用をかけて捨てゝゐる)の利用によつて免かれ得るであらう。其他、專門の科學者に問へば、アレもコレもと、枚擧に遑のない程の、研究の余地が殘されてゐるに違ひない。

にも拘らず、これ等の研究が、いま殆んど我國に於て研究せれてゐないわけは、巨大の費用を要しながら、しかも何時成功するか分らず、資本家的採算には到底乘りさうにないからである。即ち、資本家的仕組みからは、之に注ぐ資金がないからである。所が、我が大衆は、產業哺育のためと云ふ名に於て、實は、年々巨額の資金を資本家に與へてゐる。例へば、單に、輸入關稅だけでも、年々、現實に輸入品に支拂はれただけでも八九千萬圓に上つてゐるからその關稅の保護を受けてゐる我が內地產業の生產高を、假りに輸入高の平均五倍と見ても四億餘圓であり、十倍と見れば八九億圓である。關稅以外の保護を加ふれば、我が資本家が、產業哺育の名に於て、大衆から間接に受取つてゐる額は、如何に尠く見積るも年々五六億圓を下らないことを看取し得る。とも〳〵、斯樣な巨額の產業哺育費、資本家は如何に使つてゐるか。云ふ迄もなく、已に本論文の第三項に於て述べたるが如く、今日の如く資本主義制度がその發展期を過ぎて、その行詰期に轉入せる場合に於ては、その大部分は、資本家の私服を肥やすだけで、產業の眞の哺育には殆んど利用せられてはゐない。そこで無產政黨は、斯る巨額の保護金を資本家に與へる代りに、之を政府に回收して、その金で以て、前陳せる如き諸種の科學及技術の研究及試驗を大規模に行ふべく、一大科學研究所を設立することを主張する。云ふ迄もなく、この科學研究所は、實用を目的とするものであるから、それと適應するやうに、有ゆる工場との間に、有機的連絡を保つことを必要とする。若し、斯樣な科學研究所が、斯樣な巨額の資金を以て活動するに至らんか、蓋し、今日利用の途なき我が自然にして、新に豐富な資源と化するもの多きこと、例へば封建時代から維新時代に轉入せる場合の如きであらう。しかし、之を資本家的產業に委しておく限り、永久に利用せられる途はないのだ。現に營利を離れて、軍事の必要と云ふ立場からは、遂に飛行機が完成したではないか。併し之を資本家に委しておく限り、到底飛行機今日の發達は望めなかつたに違ひない。我が今日の大衆のための經濟に必要な科學及技術の發達も亦、資本家的產業發達

業に委任する限り、到底之を期待することは出來ないのである。

次に、我が國の自然が、今日有用な資源として、十分に利用せられることを制限してゐる今一つの障害は、我が產業が、自然の利用に最も適するやうに按配せられてゐないことである。例へば、今日の我が產業は、全國的に調査考究せられて、如何なる產業は如何なる地方に起すと最も有利とすると云ふが如き立前から、地方的分業に從つて發達したものでもなく、また今日の我が交通機關は、左樣の立場から最有利に各地の連絡を行ふと云ふ風に仕組まれたものでもない。單に、これ迄の傳統や、今日の非科學的交通網や、地方的に孤立分離したバラ〳〵な需給關係やを基礎にして、銘々勝手に無秩序に群立した產業である。であるから、例へば之を全國的に見れば、或る所には、甲を生產することが最も自然を有用に利用する所以である場合に、甲は生產せられずして乙が生產せられて居り、又、甲地と乙地との特長が兩者組み合はされることによつて、始めて最效力ある生產となるべき場合に、甲乙兩地離れ〳〵になつてゐるために折角の資が持ち腐れになつてをり、更に、甲地にあつては勞力が過剩で困つてゐるにも拘らず之を利用し得べき產業興らず、却つてその產業は、勞力の不足に苦んでゐる乙地に於て營まれてゐると云ふが如き齟齬がある。尙ほ又、甲產業と乙產業とを組み合すことによつて、自然の利用も勞力の利用も、最も有效に行はれ得ると云ふ場合に、原料乃至販路に對する必要な連絡のないために、或は甲產業のみに從事し、或は甲產業との組み合せに餘り有效でない丙產業を副業的にやると云ふが如き無駄がある。

そこで、無產政黨は、前記の科學研究所に振當てられた資金の一部を以て、全國に亘り如何なる產業が如何なる地方に最も適するかを科學的に調査研究し、その結果に基いて、原料の供給及生產品販賣の方向、並に連絡及配給機關の再整を促すやう、交通網、販賣網の大改正を行ふべきことを主張する。さうなれば、その地方に最も適するものを生產することが、最も有利となるであらうから、他方、右の調査の結果に基いた教化的宣傳と相俟つて、我が產業の分布及び配合は、漸次に最も科學的なものとなるであらう。云ふ迄もないが、斯樣に、科學的調査に基いて、交通網、販賣網、連絡機關、配給機關を再整するためには、それ等の機關並にその管理を、資本家又は資本家的打算に基いて運用するものに委かしては駄目であつて、必ずや、大衆の厚生を唯一の目的とする立場に於て運用せられねばならない。勢ひ、それ等の機關の運用は、各產業に從事するもの

、民主的經營に賴らねばならぬ譯である。

以上が無産政黨の此際有する産業哺育策の大要であるが、その何れも今の資本家的經濟主義に委しておく限り、到底實現せられる見込はないものである。然り、今日之を實行し得るものは、大衆の支持を受けた無産政黨のみである。しかも、それが實現せられない限り、大衆の生活をこの上向上せしむる見込のないことは、以上に概述した所から、容易に理解し得られるであらう。

六　産業の社會的管理

今日の資本家が、自己の利益のために、有ゆる犧牲を大衆に强ひて憚からず、そのため初め資本主義制度の仕組によつて資本家に委任せられてゐる生産的機能が、いまや、資本家の營利心のために、却つて捨てゝ顧られない狀態に立ち至つたと云ふことは、この論文の到處に於て示唆されてゐることである。そこで、斯樣に無能化した資本家の專政に代つて、民主的に産業を管理することが、産業の振興上最も必要な一つとなるに至つた、と云ふことに就いては玆に詳論を要せないであらう。所で此際、社會が産業を管理すべき方面は、所謂産業の民主主義と云ふ名によつて知られてゐる勞働者の經營參加のみに止らないで、例へば、次の如き諸項を數ふることが出來る。

一、所謂産業民主主義の確立、

二、生産制限の社會的管理、

三、土地、家屋、工場等の遊置が一定期間以上に亘るものに對する社會管理、

四、營業公表の原則の確立により經濟統計を完成し、以て經濟界を統制すること。

右の中(一)乃至(三)は、一つは紙幅の關係から、一つはその意味する所が割合に理解に容易であると云ふわけから、玆に改めて說明することを省き、以下、專ら(四)について述べることにする。思ふに、今日の如き營業の祕密を神聖なる權利とする原則を打ち破り、之を公表することを原則とせしむることには、少くとも、三つの重大なる意味が含まれてゐる。第一は之によつてこれ迄資本家の獨占した有ゆるカラクリの種を明かにして、大衆を僞瞞的に搾取する余地なからしむること、第二は之によつて、必要な經濟統計を正確に完成し得ること、第三は之によつて營業祕密の名によつて從來資本家に獨占せられてゐた、事業經營上必要な知識が一般に發表せられ、祕密的獨占の力によつて保たれたる資本家の社會的機能及びそれに伴ふ位地が、最も有爲な大衆にまで解放せられると云ふこと等であ

る。以上何れも結局に於て大衆のための我が産業の振興を圖り、大衆の生活の向上に資する所勘からぬ作用をなすものであるが、併し、私が、玆に於て特に無産政黨の産業振興策として讀者の注意を振向けたい點は第二の經濟統計の完成である。

周知の如く、資本主義經濟制度に於ては、生産及分配ともに、無計畫に無秩序に無政府的に行はれるが、しかし、之に或る種類の秩序を與へ、需要と供給とを何とか投合せしむる作用をなすものは市場と投機とである。であるから、資本主義制度に於ては、物資の生産と分配との支配權を有し、之を意のまゝに動かしつつあるものは、市場と投機者とである。この支配を除かざる限り、如何に、他の個所、例へば個々の工場、農園等に於て、無産階級が支配權を掴得するも、結局は、市場を支配し、投機に從事する資本家の支配を免かれ得ないのである。現に、勞農露國の如きも、この市場の支配者の反抗のために、遂に新經濟政策を取ざるを得なくなつたと、レーニンは云ふてゐる。伊太利に於ける勞働者の工場占領が、遂に失敗に了つた根因も亦玆に在つた。

斯様のわけで、無産階級自らが、無産階級のために、生産及び分配を按配し、已にそうした機能の退化した資本家に代るためには、是非とも、市場と投機者以外の機關によつて、生産と分配とを適當に處置する方法を採らねばならない。然るに、斯様に市場と投機者以外の機關によつて、生産と分配とを按配し得るためには、先づ、全國的に、如何なる種類の生産が、幾何生産せられ、それが、如何なる方面に、幾何需要せられてゐるかが、社會的に勘定せられる狀態に置かれなくては駄目である。さうでない限り全國的に、需要と供給とを調和さす方法は、今日の如く、市場と投機者に頼る外に手段はないからである。云ふ迄もなく無産政黨の主張する經濟統計の完成は、斯様に全國的に需要と供給とを豫め勘定し、市場と投機者の手を離れて、社會的に生産と分配とを按配するに至る唯一の基礎を築くものである。然り、レーニンの如きは、先に引用せし新經濟政策に關する彼れの論文に於て、社會主義經濟完成の條件として、無産階級の獨裁と相併べて、斯様な生産と分配との社會的管理の可能狀態が具はるべきことを擧げてゐる程である。

斯く述べ來つた所によると、經濟統計の完成は、如何にも、社會主義經濟への準備的效果のみしかないやうに一見せられるか、無論事實はさうでない。實は、今日の資本家自らの立場から云ふも、需要と供給との狀態を、統計的に豫見することが出來ず。互に投機的に産業を經營すると云ふことは、常に多大の危險に曝露せられてゐることであつて、日々、その投機の失敗

によつて損失乃至倒產するものは數ふるに遑のない程である。その最も大規模に來るものが、所謂、恐慌であり、不景氣であつて、斯る場合には、多くの資本家は枕を揃へて討死するのである。（しかし、その犠牲の轉嫁を最も多く受けるものは無產階級である。）であるから、之を資本家から云ふと、經濟統計の完成によつて、投機による危險を出來るだけ小化し、景氣不景氣の波動極力を中和することか、尠くとも彼等の多數の利益に一致する。その結果は、云ふまでもなく、產業の投機性より來たる濫費、負擔等の輕減せられることであつて、それだけ、一國の產業の振興に資するわけだ。現に、米國の如きに於ては、資本家自らこの經濟統計の利益を自覺し、任意的に各種必要なる統計が完成せられつゝある。若しも、斯樣の經濟統計にして完成し居たりとせば、我が國は、大正八年の馬鹿景氣、次いで九年春の大反動と云ふが如き、無用の波瀾と濫費との犠牲を免かれてゐたであらう。しかも斯樣な濫費と犠牲との大部分は、今日の資本主義制度の下に於ては、失業と減賃との名に於て前述の如く、無產階級か負擔せねばならないのである。

尤も、いま無產政黨の主張する經濟統計の完成は、米國の資本家自らか任意的に作成しつゝあるか如き、資本家に都合のよき部分にのみ限られるものでなく、又、それの利用か資本家的利益を目標とするものでなく、專ら、大衆の利益を目的として完成せられ、利用せられべきものである。從つて、實際に、經濟統計を成完する場合に於ては、かうした點に、十二分の注意か拂はれ、無產階級の利益か十分に代表せられねばならないこと云ふ迄もない。

七　產業振興策としての行政制度の改革

以上第四項乃至第六項に於て、私は、無產政黨か此際採用するに熟してゐる產業振興策の、最も重なる點について、一應述べ終つたのであるか、しかし乍ら、それは單にその大骨組みについて述べただけであつて、この精神に基いて、如何に之を實現するかと云ふことは、之を技術的に云へば、主として、實際政治の行政に當つてゐる人々の活用に俟たねばならない。所で、實際の政治の運用に與はつてゐる人々の活動の如何は、實は、その政治組織か最も優秀の人を、適所に於て、自由に手腕を振はしめ得る仕組みになつてゐるか否かによつて決するものだ。そこで、無產政黨の產業振興策は、此際、それの實現を容易にするために、是非とも之に適應した行政制度の改革を伴はねばならない。

元來、今日の我が行政制度は、維新革命政府が當時、我が國

の資本主義化を促進するため、歐米の文明を急速に移植模倣するに最も都合のよいやうに仕組まれたものである。即ち、少數の先覺者が中央から有することを誘導指揮し、監督鞭韃すると云ふ、極度の中央集權制度がそれである。所が、今日の我國は、已に外國産業の移植模倣の余地なく、且つ、維新前後永く國民を指導し來つた有能な官僚は、今や老耄として、已にその指導能力を失つてゐる。斯様にして、現在の我が中央集權制度は、最早、昔日の機能を喪失して了つたのである。

然るに、いま、我が國經濟の振興のために大切なことは、已述の如く各地方〱に從つて、全國としての有機的連絡をとりつゝ、それの自然と人力とを、最有効に利用し得る産業を哺くみ發達せしめることである。これは、維新の革命政府が、外國に於て數百年の苦心によつて精練せられた産業を、そのまゝ容易に移植模倣したやうに、中央の僅少の先覺者によつて、地方に分布さすと云ふわけには出來ない。是非とも、各地方それ〱の大衆が、一致協力して、全國的に連絡をとりつゝ各地方々々で、その地方に最適の産業を創造し發展せしむる外に策はないのである。しかも、斯様にして創造發達せしむべき産業は、已に本論文の第四に於て述べたやうに、個々の孤立した資本家としては發達の余地なく、必ずや、一の有機的團體の一人としての事業として分擔經營せねばならないものである。之を他の言葉で云へば、將來發達すべき我が産業は、最も多くを、それ〱の地方の政治活動に依頼せねばならない種類のものである。然るにその地方の政治は、今日に於ては殆んど斯様な活動の自由を束縛せられてゐる。而して、斯様な役目を直接果すべき、指導的機關、例へば舊郡役所、府縣廳等の役人は、所謂浮草であつて、しかもその從事する職務は猫の目の如く變り、到底、眞面目に、地方の産業開發に努力する事情になつて居ない。斯様な狀態に放置せられる限り、今後の我が國産業の開發はすべて夢である。

云ふ迄もなく、斯様な時代後れな行政制度は、此際、急速に改革せられねばならぬ。然らば行政制度改革の要目は、此際、如何なる點に在るかと云ふに、思ふに、それは「地方の自治を自由に發揮し得る如くし、大衆の聰明を最もよく利用し得るやうに仕組む」と云ふ一言に盡きるであらう。更に、斯様に今日の中央集權を革めて、地方分權にすると云ふことは、之を他の側面から云へば、無産大衆の手に、最も容易に政權を取り得る制度を築くことである。蓋し、中央集權の下に於ては、議會に金權の威力容易に行はれ易く、勢ひ無産階級の利益は中央に於て政治的に代表せられることが最も困難であるが、地方政治に於ては、この困難比較的に少く、且つ、地方政治ならば、之を

無產政黨の政權下におくことも少からず容易であるからだ。そこで、無產政黨は、斯樣な兩方面の事實其他を考慮して、此際如何なる行政制度の改革案を有してゐるかと云ふに、私はその要點は左の諸點に在ると思ふ。

行政制度の改革

これ迄の如き中央集權、劃一主義を廢して地方分權、非劃一主義に基き行政制度を左の大綱によつて改革する。

一、市町村自治體を、今日の經濟事情に適合するやう分割廢合して且つ、その最少單位を自治體としての機能を發揮し得る程度に擴大すること。

二、府縣を今日の經濟事情に適合するやう分割廢合して、その最少單位を尠くとも今日の二三倍以上となし、大臣級の人材の活動に適する範圍とすること。

そも〳〵、從來の市町村又は府縣の區域は、封建時代の社會事情を基礎として發達した區劃を、大體に、そのまゝ繼承したるに過ぎない。であるから、その後經濟狀態の激變した今日の社會事情から見れば、不都合の點が尠くない。例へば、東京と橫濱、門司と下關等、經濟上之を分離して考へることの出來ないものが、異なる府縣の下に在るが如きだ。そこでいま地方自治體の活動を十分ならしむるためには、先づ、之を、現在の經濟狀態を基礎にして再整する必要がある。しかし、地方自治體をして十分活動せしむるにはそれだけでは尙ほ足らない。現在の區劃では餘りに狹く、活動範圍から云つても費用から云つても、人材をして十分に腕を振はしめる餘地が非常に限られてゐるからである。即ち、その最少單位の擴大を主張する所以である。

三、市町村及び府縣の長官は之を公選とし、出來得る限り、その權限を擴張すること。

四、府縣會議員は、半數を市町村會議員より互選し、半數を一般投票とすること。

思ふに、今日の府縣會に於ける最大の缺陷は、市町村自治體の要求も、事情も、何も知らぬ議員が、勝手な政治をやつてゐると云ふことだ。そこで、地方自治を發達せしむるためには、是非とも、この點について改正する必要がある。

五、市町村及び府縣會議員には、獨立の生計をなすに足る給料を支拂ふこと。

六、市町村及府縣自治體に十分の獨立稅源を與へ、最大限の自主的活動を許すこと、

七、自治體の重要任務を經濟活動におくこと。

我が無產政黨が、此際、採るべき產業振興策は、云ふ迄もなく、以上に止るわけではない。併し、いま、極めて限られた紙面に於て、無產政黨の產業振興策が如何なるものであるかの大輪廓を示すと云ふ立場から云へば、以上に示した諸點が、就中、その根幹をなすものと云つて大過ないと思ふ。

四度び勞働費用と平均利潤との問題を論ず

河上肇櫛田民藏兩氏のマルクス辯護說

小泉信三

（一）

本誌第七卷第四號所載拙稿「三度び勞働費用と平均利潤との問題を論ず」（拙著「價値論と社會主義」增補版自三七七至四二六頁收錄）に對して河上博士が直ちに答辯を公にせられ（「社會問題研究」第六十一—二冊）、又櫛田民藏氏が新たに批評を加へられた（本誌第七卷第六號所載）のは、何れも私の深く多とするところである。同時に櫛田氏は別に資本論の字句の解釋に就いて意見を披攊せられ（「我等」六月號）、更に河上博士も亦た同じ問題を詳論して（「社會

問題研究」第六十三―四册）多くの點に於ては楠田氏の意見に賛同し、二三の點に就ては異見を述べられた。何れもマルクス研究者必讀の文字である。たゞ不幸にして是等の解釋、是等の辯護說は、予の見る所を以てすれば、マルクスの價値論價格論の衝突を毫も救濟する効力なきものである。抑もマルクスは其價値論を其價格論分配論の基礎となすものであるが、今其價値論を價格論の基礎たるの資格あるものたらしめようとすれば、此の兩者の衝突は到底之を回避することが出來ず、又此衝突を回避し得るが如き解釋を價値論に下せば、價値論は全然價格論（又分配論）の基礎たる資格を喪失して、全然有つてなきに等しいものたらざるを得ない。此のヂレマに陥ることを避けるには或一つの假定（自由競爭なき場合の價値通りの交換）を承認しなければならぬのであるが、此假定の容認すべからざることを證明するのは、最も容易の業である。河上楠田兩氏の說は、私の見る所では、是等の點に就いてマルクスを辯護することには成功して居らぬ。今左に兩氏の說の承認し難き理由を述べて前論の主旨を補ひ、更に新たに前論の觸れざりし一二の點にも論及してマルクスの價値論に藏せらるゝ根本的困難を指摘したいと思ふ。

（二）

私が前四稿に述べようとした卑見の大體は凡そ次の如きものである。

マルクスが其著作の或部分に明記して居るやうに、價値とは商品と商品との交換比率、若しくは交換價値に現はるゝ共通なる或物であり、而して此の價値は商品を生産する爲めの社會的必要勞働量が之を決定するものならば、價格論で商品の市場價格は其價値とは一致せぬ生産價格を旋廻中心とするといふこと、即ち價値は商品の交換比率に現るゝ共通なる或物ではないといふことは、撞着である。マルクスは右の價値法則を立てる爲めに、度々問題となつた二樣一オク

タア＝錢2ツエントネなる方程式を立て、是は抑も何を意味するかとの推究を行つて、結局右の結論に到達して居るのである。然るに此の交換比率は現實社會に行はるゝ交換比率を意味するものだと解すれば、現實の商品交換比率は、その一時的偶發的に成立するものも、長時間に亘つて持續的平均的に成立するものも、倶に價値とは一致しない（例外的に一致する）のであるから、生産價格說と價値法則とは無論兩立せぬことが明白であるが、さりとて、右の方程式に採用せられた交換比率は、假想上の純粹若しくは標本的交換比率に外ならぬと解釋し、而して純粹又は標本的交換比率とは、價値等しき商品と商品との交換比率であるといふならば、それは畢竟價値相等しき商品に共通の或物は相等しき價値であるといふか、或は等量の勞働を含む商品には等量の勞働が含まれるといふかの Tautologie に歸着するであらう。然らばくの商品交換比率はその含有勞働量に一致するといふ命題は不用意無聯絡の發言であつたかといふに、決してさうでなくて、資本論以前の著作に徵しても、マルクスが、商品の市場價格は一時其價値の上下に離れても、結局是に一致せんとする傾向があると考へてゐたことは、充分明白である。併しそれと同時に、商品の市場價格は價値とは一致せぬ生産價格を其旋廻の中心にするといふ說も、資本論以前に既に明かに說かれてゐる。そこでマルクスは、一方に、一商品の價値の貨幣的表現が即ちアダム・スミスの所謂自然價格に外ならず、而して此の「自然價格が諸商品の價格が絶へず歸着しようとする中心價格」だといふかと思へば、又一方では、「……競爭は諸商品を其價値には歸着せしめないで、費用價格（後の所謂生産價格）に歸着せしめ、」而して此の費用價格がアダム・スミスの所謂自然價格だといふの撞着を犯すに至つたのである（前揭拙著二八八頁）。併しこれはマルクスならずとも、其儘放置するには餘りに明白なる矛盾である。然らばこれを如何にすべきか。マルクスが解する所によれば、價値から外づれた生産價格を成立せしむるものは、利潤率の平均である。そこで彼れは、利潤率の平均なき處に於いては價値等しき商品同志が相交換せられる（若しくはせられた）と言はうと

した。併し前に商品の市場價格は其價値に一致する傾向があるとマルクスが言つた場合の論據に、正しく利潤率平均の作用其者に外ならぬのであるから、マルクスは商品價格は利潤率の平均あるが爲めに其價値と一致するといひ、又利潤率の平均あるが爲めに其價値と一致せぬといふの矛盾に陷らなければならぬ。利潤率を平均せしむるものは、自由競爭（資本間の）である。そこでマルクスに取つては、自由競爭が價格と價値とを一致せしむる爲めの必要條件となり、又妨害條件となるのである（此點は本文後段に詳論する。）此矛盾を廻避せんが爲め、價値概念を交換の彼岸に求めることは、其事自身必しも不可能ではないが、それはマルクスの解釋としては無論容認すべからざるものであるし、縱令マルクスに偶々此種の解釋を容認するが如き文言が見出されたとしても、斯る意味の價値には價格を支配する力を有せず、價値論と價格論との連鎖は此解釋の爲めに切斷せらるるのである。

これが私の言はんと欲したことの大要である。更に詳細更に正確なることは原文に就いて見られんことを希望する。

これに對して先づ河上博士は何と言はれるか。

（三）

河上博士はマルクスの價値法則と價格論とを相衝突することなからしめんが爲め、二重の方法を講じて居られるやうに見受けられる。其の一つは彼の

小麥1クオタア＝鐵2ツエントネル

なる方程式は、小麥一クオタアと鐵二ツエントネルとが相交換せらるゝことを意味するのではなくて、此二物が價値を等しくすることを意味するに過ぎぬと解すること、今一つは問題の章節（資本論第一卷第一章第一節）に於て論ぜらるゝ所

のものは、吾人の目に睹、手に觸れる現實世界の商品ではなくて、資本家的商品から其の資本の生産物たる一面を抽象した、たゞ「商品としての商品」に外ならぬと解することがそれである。此解釋は果して容認し得べきものなりや否や。

先づ第一の點に就いては、博士はマルクスが、交換價値は先づ一財と他の財とが交換せらるゝ比例に現れるものであり、從つて一商品に內在固有の交換價値といふことは意味をなさぬといふことを說いた後、

「一定の商品、例へば一クォータアの小麥はX量の靴墨、Y量の絹、Z量の金等、約して言へば他の諸商品と種々樣々の比例に於て交換せられる。されば小麥は唯一の交換價値を有するものではなくて、幾多の交換價値を有するものである。然るにX量の靴墨はY量の絹やZ量の金等と同じく、總べて一クォータアの小麥の交換價値であるから、X量の靴墨、Y量の絹、Z量の金等は交互に置き換へられ得る、若くは互にその大さを等しうする交換價値でなくてはならぬ、其處で第一に斯ういふ結論が生ずる。同一商品の有効なる諸交換價値（die gueltigen Tauschwerthe）は一個の等しきものを表現する。然し第二に總じて交換價値なるものは、それ自身と區別し得らるゝ或る內容の表現方法即ち「現象形態」たり得るに過ぎぬ」と言ひ（資本論第一卷三頁）、或は右の一節の代りに

「特定の一商品、例へば一クォタアの小麥は他の諸商品と種々樣々の比例に於て、例へば二十封度の靴墨、又は二エルレンの絹、又は半オンスの金等と交換せられるのである。而かも猶ほ小麥一クォタアの交換價値は、その靴墨に現はさるゝと絹に現はるゝと金に現はさるゝとを問はず、依然として不變である。さればそれは種々樣々の表現方法とは區別さるべき或る內容を有するに違ひない」と言ひたる（資本論カウツキイ版五頁）後に接して、

「更に二つの商品、例へば小麥と鐵とを取らう。是等のものゝ交換比率（小泉註、予は久しく Austauschverhältnis を交換比率と譯し、高畠氏は交換比例、河上博士は交換關係の譯語を用ゐて居られるが、所謂比例又は關係が右記一クォ

タア對二十封度又は一クォタア對二エルレン若しくは半オンスの比例又は關係を示すものなる一事さへ分明ならば、譯語の優劣は必ずしも深く論ずるには及ぶまい)はよし如何やうにあらうとも、それは常に一定量の小麥と一定量の鐵とを相等しとする、例へば1クォタア小麥=2ツエントネル鐵とする一方程式に現はされる。此方程式は何を意味するか。……」といふ方程式の左右項をなすものは、相交換せらるゝ商品量を示すものではないと言はれるのである。即ち曰く、「マルクスは、商品世界に於て一商品の或分量と別の商品の或分量とが(價値)相等しとされる事實から出發し推究して、價値相等しき商品には等量の社會的勞働が含まれてゐるとの命題に達するのである」と(二一六一頁。)又曰く「xA=yBなる方程式の意味——それは交換を意味せず等價を意味する」と(六十二冊表紙)。

併し乍ら、斯く解することは著者の文言と餘りに明かに牴觸する。右に方程式に表された一クォタアと二ツエントネルとは、其前の例に舉げられた小麥一クォタアと靴墨二十封度絹二エルレン、又は金半オンスと同じ位置に立つものなることは充分明白であり、而して是等の諸商品量は、「一定の商品が……他の諸商品と種々樣々の比例に於て交換せらるる」ことの例に引かれたものなることは、議論の餘地を剩さぬのである。更にマルクスは右の方程式を掲げた後に、此等兩商品の各自は「それが交換價値なる限り」此の第三のものに約元せらると謂ひ、又有ゆる直線形の面積が三角形に約元せられ、三角形が底邊と高さとの積の二分一に約元せらるゝと「同樣に、商品の交換價値は一の共通なるものに約元せらるべき」ものだと說いて居る。交換價値の方程式が交換を意味せぬといふことは、私を以て見れば、殆ど一の形容矛盾の觀がある。而かも右の方程式から出發した推究の結論としてマルクスが到達する所は、「商品の交換比率其者に於て、其交換價値は其使用價値から全然獨立せる或物として吾人に現れる。……商品の交換比率又は交換價値に現るゝ共通なるものは、即ち其價値であり、」而して其價値の大さを定めるものは、社會的に必要な勞働量であるとの命題であ

る。此場合マルクスが交換價値交換比率なる「現象形態」表現方法」から出發し推究して、現象の奥に潜む或物に到達したのであることは、文義の上に於て全く疑を容れぬと思ふ。河上博士はマルクスが「一商品の或る分量と別の商品の或る分量とが（價値）相等しとされる事實から出發し」たと解せられるが、上記二商品が價値を共通にすることは、マルクスが推究の後に始めて到達した結論である。マルクスは表面の、吾々の耳目に觸れる現象を捉へて、此現象の根元に果して何が存するかを索らうとした。素朴なる觀察者の目に映ずるものは、たゞ小麥一クオタアが靴墨二十封度、絹二エルレン等の諸商品量と交換せらるゝ表面の事實のみに過ぎぬ、然るにマルクスは此觀察のみに滿足しないで、此事實を其奥に潜む或物の表現に外ならずとなし、「此表現方法と區別さるべき內容」「交換比率又は交換價値に「現るゝ共通なるもの」を尋ね求めて價値を得、社會的必要勞働量を得たのである。さればこそマルクスは、始め交換價値交換比率なる語は用ゐるけれども價値とは云はず、所謂「蒸溜的」推究法の歸結として始めて價値の語を用ゐるのである。私が問題の方程式が等價を意味して交換を意味せずといふ解釋に到底首肯し難き所以である。

河上博士は前年予のマルクス批評をば、マルクスの所謂價値は「人類の立場から見た費用價値」に外ならぬといふ立場から批評して之を謬解に基づくものなりと斷ぜられたが、其時上に問題となつた資本論の章句に對して、博士は左の如き解釋を下された。問題の方程式が交換を意味せずして等價を意味すると解釋せらるゝことは、既に其時に始まつてゐたのである。

「『吾々をして更に二つの商品、例へば小麥と鐵とを例に取らしめよ。』此等のものは時を殊にし、所を殊にするに從つて、種々なる比率を以て相互に交換されるであらう。しかし既に相互に交換されることになれば、其等の物の間には、啻に物理的關係があるのみでなく、更に社會的關係があることになる。さうして其の社會的關係を研究しやうといふのが

以下吾々の仕事とする所であるが、今廣く人類といふ立場に立つて、（即ち資本論第三卷で説明するところの、資本家見地からでなしに）（旁點原文の儘）『或る與へられたる分量の小麥が或る分量の鐵と等しい』と觀念され、兩者が互に置き換へられ得ると觀念されるのは、果して何ういふ場合なのであらうか？ 言ひ換へれば、廣く人類の立場から見ると、『其等の物の交換關係は如何にあるとも、それは常に、或る與へられたる分量の小麥が或る分量の鐵と等位に置かるゝところの、例へば一クオータアの小麥は二ツエントネルの鐵に等しいと云ふが如き、一の方程式で示され得る』が『この方程式は何を意味するであらうか？』』それが先づ吾々の問題とする所である。」

即ち河上博士は「此の場合、或る商品と他の商品とが『交換關係』にあるといふマルクスの言葉を以て（小泉註、文字通り『交換關係』とは解しないで）、廣く人類の立場から見て二つの商品が互に置き換へられ得る（又は同一視され得る）關係にあることを指すものだと見」られたのである（一四二〇以下）。併し博士は後に自ら此解釋を不可として撤回せられた。今既に撤回せられた見解に言及することは、予の甚だ不本意とする所であるが、マルクスの眞意を平明に文字の通りに求めずして、彼の推究が交換比率を出發點とせぬと解釋することに如何に無理が存するかは、偶々是に由ても窺ふことが出來やう。マルクスの所謂「交換關係」を「人類の立場から見て二つの商品が互に置き換へられ得る關係」と解することは、無論前後の個所に於けるマルクスの同じ言葉の用法と相容れざるものである。河上博士が此異議をば「けれども同じ語を全く違つた意味に用うるといふことは、マルクスの癖の一で、」あるとして、極めて輕々に斥けられたことは、予のたゞ意外に感ずる所であつた。而して予が特に此の博士の舊説に言及したのは、舊説と新説との間に猶ほ一脈相通ずる所があることを認めるからである。

(四)

併し河上博士は、更に又マルクスの價値法則に上述のとは別の解釋を下すことに由て、それと價格論との衝突を救はうとして居られる。それは即ち既記の如く、資本論第一章第一節に論ぜらるゝものは「商品としての商品」又は「純粋な姿における商品」であると解することである。而して「商品としての商品」は「その然る限りにおいて——假に不規則な振動を無視するならば——相互に價値において交換さるゝものであるものである」と言ふ。それゆへ「例へば單なる商品としての一クオータアの小麥と二ツエントネルの鐵とが價値相等しいものであれば、其等はまた相互に交換されるのでもある。……商品はたゞ商品としての資格においては相互に價値において交換さるゝことを原則とするのである」(二一六八頁)。此解釋はマルクス主義者の間に於て必しも異論なきものではない。現に櫛田氏は資本論首節に論ぜらるゝ價値法則は資本家以前の社會に於ける「歴史上の事實」なりとし、是を以て單に理論上の假定又は哲學上のアルスオブに過ぎぬものとなすことに反對して居るのである。其點は兎に角としても、此の河上博士の解釋は、前節に論じた同博士の解釋とは必しも吻合しない。若し彼の$xWA=yWB$なる方程式が等價を意味して交換を意味せぬものならば、それはよく今日の資本家的商品にも適用せらるるし、又彼の章句に於ける商品が「商品としての商品」に關することであり、而して「商品としての商品」は其價値通りに交換せらるゝものならば、彼の方程式が交換を意味することを承認しても差支ないからである。現に博士自身も「社會問題研究」第六十四册では、彼の方程式が交換關係を現はしたものなることを承認して居られる。即ち度々引用せられた章句に擧げらるる小麥も鐵も共に「商品としての商品であり」「何れも商品としての純粋な姿に於ておいて現はれてゐるのである。さうしてかゝる純粋な姿において觀察する限り……その交換は

いつでも等價物の交換である。」故に「例へば一クオータアの小麥が二ツエントネルの鐵と交換されるならば、その事實は「一クオータアの小麥は二ツエンネルの鐵に等しいといふ一つの方程式で現はされ得る。」と言はれるのである」(二二四一頁)。即ち茲では博士は、その彼の方程式は、交換を意味せずとの主張を放棄して居られる。而して此事は、それ丈けの處では予の贊同する所である。

たゞ疑問は「商品としての商品」は何故に其價値通り相交換せられるかといふことである。此點に關する河上博士の説明は、不幸にして充分明瞭でない。所謂「商品としての商品」は、博士の説明によれば、「商資本主義以前の、所謂單なる商品と甚だ相近く、同時に又他面必しもそれと同一なるものではない。今若し「商品としての商品」の其價値通りに交換せらるゝ理由が、單なる商品が價値通りに交換せらるゝ理由と同一であるならば、それはマルクスが資本論第三卷に稍々詳しく説明した所である。併し此のマルクスの説明の承服すべからざる理由を私は既に再三論述して居る。私は其場合生産者に取つて利潤率の高下は決してマルクスの謂ふが如く「何うでも宜い事」と認むべからざる理由あること、又強いてこれを「何うでも宜い事」と認定するならば、交換が價値通りに行はれるといふ保障も亦た失はれざるを得ぬことを説いた（前掲拙著二八三頁以下同四〇一頁以下）。而して此點は後段櫛田氏の説を批評する條下に更に詳細に論じて、マルクス説の容認し難き理由を明にする積りである。

或は、「商品としての商品」は價値通りに相交換せられるといふは、一の理論的假定に外ならざるものであるか。私は此點に關する河上博士の意見を充分確めて居らぬ。併し若し果して然りとすれば、吾々の問題として居る推究に於て、マルクスは論理的推究の約束を無視して居ると謂はなければならない。相交換せらるゝ一クオタアの小麥と二ツエントネルの鐵とが互に其價値を等しくすることを先づ承認して置いて、さて此の二物間に共通なるものは果して何物なるかを尋ね、

而して「商品の交換比率、若しくは交換價値に現る丶共通なる或ものは、即ち其價値である」と論結するのは、求めんとする結論を前提とするものではないか。マルクスは相交換せらる丶二物間に共通なるものが等量の勞働なることを論結するものである。然るに此場合、交換は價値等しき商品の間にのみ行はれるといふことを前提するとすれば、然らば價値相等しといふことは何を意味するかとの問が起らねばならぬ。若し是に對して、價値相等しとは含有勞働量相等しきことを意味するといへば(マルクシストは斯く言ふの外あるまい)、これに由て吾々の知り得ることは、含有勞働量相等しき商品には相等しき勞働量含有せらるといふこと以外には出でないのである。

(五)

さて上に私の論じたる如く、マルクスは、相交換せらる丶商品に共通なるものが即ち價値なりといふものなりとすれば、資本論の此部分でマルクスの言ふことと生産價格の說とが相容れ難きことは明白である。併し若し價値を斯るものとして說くことが、マルクスの偶然不用意の發言に過ぎぬものならば、無論吾々はそれを看過しなければならぬ。併し事實故にはさうでない。其故に私は、資本論以前の著作に就いて、彼れが生産價格說を得た前後に亘つて、勞働費用に由て定まる價値が商品價格の旋廻中心をなすものだと說いてゐる事實を示した。即ち「賃銀勞働と資本」、「價値價格及び利潤」の中に、彼れは一商品價格は「其製作に要する勞働時間に依」つて決定せらる。價値は「諸商品の價格が絶えず歸着しようとする中心價格である」と明言してゐるのである(拙著二八四、二八七頁)。實に私が前稿に述べたやうに、マルクスにあつては、價格の重心は價値であるといふのと價格の重心は價値からは外れた生産價格であるといふとの「二つの命題は各々充分の理由と由來とを有するものであつて、その何れをも不用意無聯絡の發言として無視する譯には行かぬので

ある。」

拙稿の此部分は、河上博士から直接詳しくは批評せられて居らぬが、博士は上記「二つの命題」が決して相衝突するものでないことは、確かに言明して居られる（二一五一頁）。蓋し博士が解する所によれば、マルクスが、商品價格は商品價値に一致しようとするといふ場合の商品は、「單なる商品か、然らずんば、競爭が同一の生産部門に屬する資本家の間に行はるゝに止まる限りにおいての資本家商品」であり、商品價格が生産價格に一致しようとするといふ場合の商品は、競爭が諸生産部門の資本間に行はるゝ場合の「資本家的商品」、であるからである（同上頁）。併し乍ら博士の此說は甚だ服し難きもので、是に對する反證を示すことは、予の見るところでは頗る容易の業である。

先づマルクスが價格は價値に歸着せんとすると說いてゐるのは果して、「單なる商品」に就いて言はれたものか否かを明にする。

私が引用したのは「賃銀勞働と資本」及び「價値價格及び利潤」の二書であるが、殊に問題の點を明瞭に說いてゐるのは、前者である。さて其處に論ぜらるゝものは、果して「單なる商品」であらうか。マルクスは其處で何故に價値と價格とが一致すると說いてゐるかといふに、彼れは實に價値と價格とが一致せぬ時は利潤率の不均一を來たすから、此の不均一を恢復する資本の流動に依つて需要供給狀態が變更せられて、再び價値價格の一致が實現せられると說いてゐる。即ち利潤平均の作用の爲めに價値と價格とが一致しようとするといふのである。これは果して資本的生産方法以前の「單なる商品」に就いて言はれ得ることであらうか。嚴格に言へば、利潤と「單なる商品」とは兩立するものではない。何となれば、利潤の搾取は勞働力が商品化した曉に始めて行はるべきものであり、單なる商品の生産は、勞働力商品化以前の階段に屬するものだからである。併し資本論第三卷第十章中に、マルクス自身單なる商品生産者に就いて姑らく「資本

主義流に」利潤なる語を用ゐてゐるから、「賃銀勞働と資本」中に所謂利潤は、此の形容的意味に於ての利潤であつたと強いて解釋するならば、敢て必しも妨げぬ。併し資本の流出入による利潤平均の爲めに價値と價格とが一致するといふことが、果して「單なる商品」に就いて言はれたものと解せられようか。度々同じ引用を繰返すが、マルクスは其處では斯う說いてゐるのである。「一商品の價格騰貴の結果は何であるだらうか。多額の資本が繁榮なる產業部門に投ぜられるであらう。而して此の特に有利な產業區域への資本の流入は、それが普通利潤を生ずるに至るまで、或は寧ろ過剩生產の爲め、生產物の價格が生產費（勞働時間）以下に下降するまでは繼續するであらう。反對に、一商品の價格が其生產費以下に下降すれば、資本は此商品の生產から引去られるであらう。：：此の資本の逃亡に依て、斯る一商品の生產、即ち其供給は需要に適合し、從つて其價格が再び生產費の高さに引上げらるゝまで、或は寧ろ供給が需要以下に降るまで、即ち其價格が再び其生產費以上に引上げらるるまでは減退するであらう。」然るに河上博士も言はるゝ如く、「競爭が單に同一の生產部門に屬する資本家の間に行はるゝに止まらず、更に進みて各種の生產部門に屬する資本家の間に行はるゝに至れる場合の」商品は、即ち資本家的商品である。果して然らば、マルクスが玆に論ずるところのものが（即ち資本の「流入」と「逃亡」とに依つて其價格の調節せらるる商品が）正に資本家的商品なることは明白一點の疑を容れざるところではなからうか。

成程マルクスは單なる商品が事實上其價値通りに賣買せられたと、或處には明かに說いて居る。併し其場合の交換賣買が何故に價値通りに行はれたかといへば、それは利潤率の異同が生產當局者に取つて「何うでも宜い事」であり、資本の流動利潤率の平均が行はれなかつたからだといふのであつた。併し右に予の引照した個所に於ては、マルクスは明かに、利潤率が平均する爲めに價格が價値と一致すると說いて居る。利潤率の平均あるが爲めに此の兩者が一致するといふの

と、利潤率の平均あらざる爲めに此の兩者が一致するといふのとは、全然相容れぬことが明白ではないか。

右の引照にも拘らず、河上博士は猶ほ敢て、彼處にマルクスが論ずるものは「單なる商品」に外ならぬことを主張せらるゝであらうか。

（六）

彼處にマルクスの論ずる所が「單なる商品」の價値價格でないとすれば、それは（河上博士に從へば）同一生產部門の資本家間にのみ競爭が行はるゝ場合の、即ち生產部門間に資本の流出入することなき場合の資本家的商品でなくてはならぬ。併し是は彼處にマルクスの明言する所と正に相反する。マルクスは明に資本の「流入」「逃亡」に依つて價格が勞働費用に惹着けられると說いて居るからである。併し私は此の興味ある問題を簡單にこれ丈けで處置し了ることを欲せぬから、更に進んで、異なる生產部門に屬する資本の間に競爭が行はれざる場合に、價格が價値を旋廻中心となすと認むべき理由あること果して河上博士等の所見の如くなりや否やを稍々詳細に論じたい。（博士曰く「なほ小泉教授は、マルクスの『生產價格說が既に完成してゐた筈である』時代に著はされた彼れの小冊子『勞賃、價格および利潤』（「價値價格及び利潤」）に、依然として商品の自然價格（市場價格の旋廻中心たる）は價値に相當する價格であるとのみ說いてあると言はれるけれども、其處では、明かに彼は『獨占およびその他若干の modification の作用——今私は此等の問題に立ち入ることはできないが——を除外するならば』といふ條件を附してゐるのである。商品の價格が各種生產部門の間における資本相互の競爭によつて受くる一定の modification は、そこでは除外されてあると見なければならぬ」と。）

マルクスは資本論第三卷第十章に商品が價値通りに行はれるための條件三を擧げてゐる。（一）交換が連續的に規則正しく行はれること（二）其結果として商品の生産が交換當事者相互の要求に略々一致した比例量に於て行はれること及び（三）何等の獨占存せざることがそれである。此の第三の條件が自由競爭を意味することは言を俟たぬ（第二の條件も亦究局同一事に歸することは予の前稿に説明した所である。前掲拙著四〇四頁參看。）茲でマルクスは自由競爭を商品が價値通りに賣買せらるゝ爲めの條件にして居る。併しその同じマルクスは、別の個所では自由競爭が利潤率を平均せしめ、從つて價値から外れた生産價格を成立せしめると説いて居るのである　河上博士及び櫛田民藏氏は、此兩命題をば、商品をして其價値通りに賣買せられしめる自由競爭は同一生産部門内の資本家間又は「同じ種類の産業の間に於ける競爭」で、價格を價値から引離す自由競爭は「異なれる種類の産業の間に於ける」競爭だと解することに依つて、之を兩立せしめようとして居られる。（改造六月號一三頁）

此解釋にはマルクスに典據がある。マルクスは資本論第三卷第十章に曰く「競爭が先づ一部面（生産部門）内に於て爲し遂げる所は、商品の種々なる個別的價値を平均化して等一なる市場價値並に市場價格を成立せしむること是れである。然るに又、諸種の部面に於ける資本の競爭行はるゝに及んで、玆に始めて種々なる部面間の利潤率を等一ならしむる所の生産價格なるものが生ずるのである」（高畠譯本三一六頁）。「餘剩價値學説論」中に同一事を説く明瞭なる章句があることは、正に河上博士が譯出引用せらるゝ（二一四三―四頁）通りである。而して生産價格が成立すると、「市場價値に就いて云つた事は又生産價格に就ても通用することゝなる。」而して商品の市場價値は「其の價格が回轉し、其の價格の絶え間なき騰落は平均に歸してゆく重心である」といふのである（同上三一一頁）。

マルクスが所謂市場價値なるものは、個別價値に對するもので、簡單に言へば一生産部門内に産出せらるゝ商品の平均

價値であり、資本論第一卷に社會的必要勞働量に由て定まる商品價値といふは、即ち是に當るのである。マルクスは一商品の大部分が生産せらるゝ條件の大體同一なる場合と、不利の條件の下に生産せらるゝものが優勢を占める場合と、有利の條件の下に生産せらるゝものが優勢を占める場合とを分けて、右の平均の意味を詳說して居るが、(同上三一九―三二四頁)假りに一生産部門に屬する生産者が凡て同一條件の下に生産を營むことありとすれば個別價値と市場價値とは同一不二なるべき道理である。(マルクスの市場價値市場價格及び生産價格の關係に就いては、「社會問題研究」第六十一冊に河上博士の記述がある。予も前年カアル・ヂイルに據つて其梗概を記して、大正九年出版の拙著「社會問題研究」に之を載せた。本稿に其詳細を省略することを諒せられたし)。此意味に於ける市場價値は如何にして價格旋廻の中心となるか。獨逸人の口吻を學べば、マルクスは之を behaupten するのみで、殆ど之を begründen しては居らぬのである。

(七)

資本論第三卷第十章は需要供給の商品價格を支配する理法を說明することが最も詳密である。而して其說明によれば、成程市場價値なるものは右述の通りであるが「現實の市場」に於て市場價値通りの賣買が行はれるか否かは、需要供給が之を決定する。即ち價値通りの賣買が行はれるのは「……需要の大さが斯樣に右述のやうに確立された價値で商品量を吸收するに丁度相當した場合に限る」(三二五)のである。然るに需要は價値とは獨立して增減する。故に需給の關係如何に由て「市場價格と市場價値とは不一致を來たすことゝなる。」而して需要と生産物量との差異がより著しき時は、「市場價格は尚著しく過不足いづれかの方面に市場價値と不一致を來たすことゝなるであらう」(三二六)。而してマルクスは明に需要の基礎をなす社會的慾望の「量的性質は極めて伸縮自在にして變動しつゝある」ものなることを認めて居

る。併し需要にして斯の如く、又市場價格の需給に由て左右せらるゝこと斯の如きものならば、市場價値から離れた市場價格は抑も如何にして是に惹き着けられるか。

此場合、需要の增加又は減少に由る價格の騰貴又は下落が、需要其者に反動を及ぼして、價格の下落又は騰貴を來たすといふことは、或場合に或程度まで起り得ることで、マルクス自身も一言此事に觸れては居る（三三八）。併し乍らこれは無論價格が價値に歸着する保障となり得るものではない。若しも價格の騰貴が價格を舊位に復せしむる迄の需要減少を喚起するものならば、世に獨占價格なるものゝ成立すべき筈がないし、又價格の下落が、價格を舊に復せしむる丈けの需要增進を喚起するものならば、需要の減少又は消滅による一産業の衰頽なることは、起り得べからざることである。そこで價値が價格の旋回中心たることを示さんとすれば、どうしても價格が價値以下に離れた場合に商品の供給が減少し、その價格以上に離れた場合その供給が增加するの約束あることを言はなければならぬ。此事は河上博士も認めて居られて、需要が不充分なる爲め商品は市場價値以下に捌かれねばならぬか、或は一部分は全く賣れぬことさへあるが「しかしさうなれば、供給は間もなく減退することによつて、需要と均衡を保たんとするの傾向を示すであらう。」反對に又供給が少きに過ぐる場合も起り得るが、「しかしさうなれば、供給は又間もなく增加することによつて需要と均衡を保たんとするの傾向を示すであらう」と言つて居られるのである（二一三九頁）。併し玆に最も重要の問題が存するのである。河上櫛田二氏が謂はれるやうに、同産業部門內でのみ競爭が行はれて、産業部門間の資本流動が遮斷されてゐる場合、此の供給の減少又は增加は果して如何にして行はれるか。

試みに資本の流入を保たずして生産量は如何にして增加せられ得るかを考へて見よう。先づ勞働者の勞働時間を延長するといふか。然らば搾取率即ち餘剩率の變動を如何にするか。生産技術の改良によるといふか。然らば供給量が增加

するど同時に價値も亦た下落するから、價値と價格との距離は却て增大することがあるのを如何にするか。右に河上博士の謂ふが如き供給の增加は所謂資本の流入なくして行はれ得ざることが明かである。縱令雇傭勞働者の增加が意味する、銀資本及び勞働用具なる不變資本の增加は必要ならずとするも（斯る場合はあり得ぬものと見て好いが）、生產量の增加貨にして原料（不變資本）の增加を要せぬものは到底之を想像し得ぬのである。生產額減少の場合は、略ぼ是と反對なるものと解すれば好い。生產部門內にのみ競爭が行はれて、生產部門間の資本の競爭が遮斷せらるゝところで、價格が價値に一致するといふことの謂はれなき所以は、これでもまだ首肯せられぬであらうか。

產業間の資本流動が遮斷せらるゝ場合には、價値以上に離れたる價格は、その離れたる位置に止まるであらう。（價値以下に離れたる價格がその位置に止まることも同樣である）。而して他方面からの競爭の此價格を引げるものがないとすれば、此狀態は畢竟獨占狀態に外ならぬものである。マルクスは曰く、商品の價格が價値と一致せんが爲めには、「販賣が問題たる限り、契約當事者の一方をして價値以上に販賣するを得せしめ、又は價値以下に賣拂ふを餘儀なからしむる、何等の偶生的又は人爲的獨占存せざること」を要すと。產業間の競爭遮斷せらるゝ時は價値と價格とが一致すといふ河上梅田兩氏の說は、正にマルクスの此言と相容れざるものである。併し兩氏の見解にマルクスの典據あることは予の前に認めた通りである。それ故にこそ私は、マルクス自身に一方自由競爭あるが爲め價値と價格とが一致するといひ、他方自由競爭あるが爲め價格と價格との一致が妨げられるといふ、矛盾があるといふのである。

マルクスがいふ、價格と價値とを一致せしむる競爭とは、同一生產部門內に於ける競爭であるといふは、謂はれなき說である。同一生產部門內に於ける競爭が實現するものは、たゞジェヴンスの所謂「無差別の法則」（Law of indifference）のみである。同一產業內に競爭の行はるゝ限り、同種同質の商品は、個別的費用の同一なると否とを問はず、みな同一價格で

賣買せられねばならぬ。若しそれに二價ある時は、賣手が必ずより貴き買手に集まり、買手は必ずより廉き賣手に集つて、遂に兩者の差が消滅する迄價格の競上げ及び競下げを行はねば已まぬ、といふのが此法則の要旨である。而して名稱こそ比較的新しけれ、此法則其者は、ジェヴンス以前の學者でも、之を辨へぬものは殆どなかつたといつて好い。併し斯くして成立する單一の價格が果して價値と如何なる關係に立つかに就いては、無差別の法則及び同産業内の自由競爭は、吾々に何事をも告げることは出來ないのである。成立する單一價格は、需要供給の關係如何に由て、或は價値と一致することも、價値以上に上ることも、以下に下ることもあり得る。若しそれを矯制して價値に歸着せしめようとする作用があるとすれば、それは價格の騰落に促さるゝ供給の增減より外にはないのである。而して此の供給增減は、産業間の資本流出入に由らずしては、之を説明することが出來ぬ。併し乍ら此の流出入が行はれるとすれば、價格は價値を旋廻中心とせずして、資本家の生産出費と普通利潤との和、即ち生産價格を旋廻中心とせざるを得ぬこと、正にマルクスが説明した通りである。櫛田氏は予が競爭の二つの意義を區別せざることを難じて「この點に就いてのマルクスの研究は、氏（小泉）の論文には閑却せられたかに思はれる。同じ藥でも用ゐどころ如何に依つては効能が違ふばかりか、反對に毒にもなるのであるから…」云々と言はれたが、私は敢て辯明する。私は競爭の二義を辨へなかつたのではない。其一方、即ち同産業内に於ける競爭、從つて無差別の法則は、吾々の論ずる事項に就いては殆ど問題となすに足らざるものであるから、知りつゝ之を無視したのである。而して右一段の説明に由て、讀者は此の「無視」を必ずしも無理ならざることを認められるかと思ふ。若し櫛田氏自身も此理を認めらるゝに至らば、予の幸ひは更に一層大である。

資本論第三卷、殊に本篇に度々引用せられる其第十章の叙述が甚だ亂雜の嫌あることは、マルクシストも承認せざるを得ぬ所であらう。マルクス考證學の權威リヤサノフがエンゲルスの校訂に慊らざる口吻を漏らしてゐるのは、異しむに足らぬ。(予は贊成せぬが、河上博士も或個所に於て本文に訂正を加へ、宜しく市場價値とあるを市場價格に作るべしと主張して居られる位である。)併し此の亂雜の嫌ある叙述の全體を通じて、マルクスが需要供給の價格に及ぼす影響を考察することが如何に周到綴密なりしかは、何人も之を認めざるを得ぬ。「マルクスが價格形成に對する需要供給の作用を無視したといふ非難の當つてゐないことは、競爭の影響を考察すること詳かなる資本論第三卷の正に證明する」所なることは、誠にヂイルの言葉の通りである。併し其代りに、此邊に於けるマルクス自身の叙述を讀んで念頭に起るのは、マルクスの反對の言明あるにも拘らず、價格を決定し、分配を決定するものは、價値(生産行程上に費さるゝ勞働量)ではなく、需要供給ではないかとの疑である。

玆に注意すべきは、既に人の屢々指摘する通り、マルクスが商品價値を決定する社會的必要勞働量(又は必要勞働時間)なる語を二樣の意義に用ゐてゐることである。私自身は、マルクスの所謂必要勞働量なるものは、本來一物生産の爲め技術上生産行程上に於て必要とせらるゝ勞働量の意義に解することを至當となすものであるが、マルクス自ら時々、果して何の程度の勞働が社會的に必要なるかを決するものは社會的需要でもあるといふ見解を漏らしてゐる。即ち此の後の見解に從へば、一商品生産の爲め生産行程上一定量(例へば m)の勞働が費されても、其商品に對する需要が供給量に比して乏しければ、其商品は m 丈けの勞働量を代表せぬものと見、反對に供給が需要に及ばなければ、其商品には技術上の必要量以上の勞働が含まれてゐるものと見るのである。此見解は既に資本論第一卷にも窺はれる。即ち「市場の胃が亞麻布の全量を一ヤアド二志の正常價格で吸收することが出來なければ、それは全社會的勞働時間の中麻織業の形で費さ

れた部分が大き過ぎたことを示してゐるので、各個の麻織りが其の各自の生産物に對して社會的に必要なる以上の勞働時間を投じたのと結果は同じである」といふのである(カウツキイ版六七―八頁)。併し需要を顧慮しての必要勞働時間と、技術上の必要時間とは固より其意味を殊にするものである。「例へば社會的欲望に比較して餘りに多量の細織物が生産されたと假定し、而も此の織物總産額に依つて實現さるゝ勞働時間は、與へられたる條件の下に必要である所の勞働時間に過ぎぬものと假定せよ。斯く假定しても尚、此特殊の部門に於て、餘りに多くの社會的勞働が支出されたことになる。換言すれば、生産物の一部は不用となるのである。されば此の全生産物は、必要なる比例の下に生産されたものとして販賣されるの外はないのである。種々異れる特殊的生産部面に使用し得べき社會的勞働時間に對する、斯くの如き量的制限は、畢竟するに價値法則一般の更に展開せる言ひ現はしに過ぎぬ。尤も必要勞働時間は、此場合異つた意味を含むことゝなるのである。(旁點小泉)これが制限は使用價値に依つて與へられる」(高畠譯本第三卷第三冊三八九頁)。

今姑らく必要勞働時間に斯る二樣の意義あることを認めて置いて、さてその各々の意義に於ける必要勞働が、如何にして價格を支配するかを考察して見よう。

必要勞働時間を後の、需要を顧慮した意味での「必要」時間と解すれば、必要勞働量幾許なりやは需要を俟つて始めて決するのであるから、價値が價格に對して受動的の位置に立ち、價格を價値が決定せずして、寧ろ價値が價格に由て決定せらるゝことゝなるのは明白であらう。上の例に於て、亞麻布は、それに生産行程上に於て費された勞働量からいへば、當さに一ヤアド二志の價値あるべき筈であるのに、生産せられた亞麻布全量が需要に對して過大なる爲め、一ヤアド二志の正常價格では吸收せられぬ故、一ヤアドの亞麻布は二志丈けの價値を含まぬといふ事になれば、商品は畢竟其點で需要量と供給量とが一致する價格(瞬間的の價格は兎に角、少くも持續的正常的價格)丈けの價値をしか有せぬ、若し

くは價格丈けの價値を有するといふことに歸着するであらう。若し果して然らば、價値對生産價格の問題は、全然消滅する。何となれば、生産價格は、即ち資本主義社會に於て、商品の需要量と供給量とが持續的に其點で一致する價格に外ならず、而して一商品の價値は、其生産行程上に費された勞働量の如何を問はず、需要量と供給量とが一致する點で定まるものとすれば、商品は其生産價格丈けの價値を有するといふことになるからである。さうなれば、價値と生産價格との不一致は不可能となる。併し其代りに、生産價格は價値に因つて決定せられずして、却つて價値が生産價格に因つて決定されることになる。これは固よりマルクシストの斷然容認せざる所であらう。

然らば「必要」勞働時間は、技術的に決定せらるるものと解すれば何うなるか。需要の爲め商品價格が此意味に於ての價値から自由に上下に離れることは、マルクス自身の詳述するところである。而して予が説明を試みた通り、此の價格の價値からの離隔を牽制して、全然放恣なることなからしむるものは、資本の流動、利潤の平均作用を除けて外にはない。若し此がなければ、價格は全然旋廻中心を失はねばならぬのである。利潤率の平均がなければ、價格が價値に一致するのは全くの偶然で、價格を價値以上に離れしめるのも、價値以下に離れしめるのも、皆一に需要が爲す業である。此考察が人を導いて到達せしむる所は、商品價格は結局商品價値に由ては決せられないで需要供給に因つて決せられるといふ結論である。勿論「賃銀勞働と資本」「價値價格及び利潤」に於ても、商品價格は需要供給に依つて決せらるるものではあつた。併し其處では價値と一致せぬ價格を成立せしむるやうな需要供給關係は、自動的に變動して持續することが出來ぬ、とマルクスは説いた。併し一八六二年のエンゲルス宛書簡や資本論第三卷にマルクスが言ふ所によれば、資本間の競爭がある處では斯くはならぬし、又資本間の競爭がなければ、價値と價格とは恣に離れ、恣に合することは、マルクス自身の需要供給論を借りても、極めて容易に之を説明し得るのである。

さて斯く價格が任意價値の上下に離れ得る（持續的にも）ことを認めると、例の生產價格說明の圖表が、假定以外に根據のない、實際價格の重心を全く說明することの出來ぬものとなり了るのである。彼の圖表は、利潤率平均以前には商品

資本	餘剩價値	消耗不變資本	商品價値	費用價格	商品價格	利潤率	價値價格ノ差
I 80C+20V	20	50	90	70	92	22%	+2
II 70C+30V	30	51	111	81	103	22%	−8
III 60C+40V	40	51	131	91	113	22%	−18
IV 85C+12V	15	40	70	55	77	22%	+7
V 95C+5V	5	10	20	15	37	22%	+17

が價値通りに賣買せらるゝこと、即ち商品價値と商品價格とが一致することを假定して、此假定の上に構成せられたものである。而して此假定の事實に合せざることは、上に種々の方面から詳論した通りである。而かも一度び此假定を撤去すると、生產價格が價値に依て決せらるゝこと、利潤が余剩價値に依つて決せらるゝことは、皆な說明し難きものとなる。左に其理由を說明しよう。

マルクスの敎へる所によれば、社會の各生產部門內に於て、生產行程上に搾取せられた餘剩價値合計總額が各生產部門の資本額に應じ平均率に由て分配せられて、各生產部門歸屬の利潤となる。即ち餘剩價値總額は利潤總額に等しいといふのである。此場合マルクスの敘述は、人をして誤つて、一產業部門に於て搾取せられた平均以上の餘剩價値は直ちに平均以下の餘剩價値を搾取する產業部門に流入して、其處の利潤を補ふものであるかの如くに解せしめる。マルクスは讀者に表中の五資本全體を單一なる資本、I乃至Vを其各部分に外ならぬものと考へんことを求めて居る、「以上五種の生產部面に放下せる資本の總額五〇〇、生產せる餘剩價値の總額は一一〇、生產せる商品の價

値總額は六一〇である。此五〇〇を單一の資本と見做し、IからV迄は單に其種々なる部分たるに過ぎぬものと見るならば、(一木棉製造工場の種々なる部局、即ち梳綿室撚紡室紡績室等に於ける可變資本と不變資本との比例種々異なり、之に基いて始めて其工場全體に對する平均比例を計算するといふ場合の如く)、先づ五〇〇てふ資本の平均組成は390c+110v…即ち百分率を以て示せば78c+22vとなるであらう。……平均餘剩價値は矢張二二なることが知られる。此の餘剩價値をIからV迄の各資本に一樣に割當てると、次(上)の如き商品價格が生ずるであらう」(高畠譯本、三卷一冊二六四、二六六頁)。

併し一社會の各生産部面を一企業の各部局に喩えることは、甚だ事の眞相を誤解せしむる嫌あるものである。一企業の擧げた總利潤を、企業家が何かの標準に由て企業内の各部局に割當てるといふことはあるであらうが、各生産部門に利潤が分配せられるのは、これと同樣の手續では行はれるものでない。此分配はたゞ資本がより高き利潤を求めて流動する爲め、或商品の供給が增加して其價格が下落し、他の商品の供給が減少して其價格が騰貴することに依つて行はれるのである。圖表に就いて言へば、II IIIに於て搾取せられた餘剩價値其者がIV Vに流入して其利潤となるのではなくて、IV Vの資本の一部分がII IIIに流入して、前の部門の生産額を減少せしむると共に、後の部門の生産額を增加せしめ、斯くして一方に於ては、費用價格と價値との差をより大ならしめ、一方に於てはそれをより小ならしめることに由て利潤が平均するといふに過ぎぬのである。故に嚴格に言へば、利潤の平均、生産價格の成立は、表の如き五資本の分配の下に於て行はれるといふ事は、有りやうがない。I IV Vは一〇〇以下、II IIIは一〇〇以上となつて、始めて、利潤は平均するのである。

故に各産業部門内に於て搾取せられた餘剩價値の合計總額が分配せられて、各産業の利潤となるといふことは、實は甚だ語弊がある。右述の如く、II IIIの餘剩價値が移動してIV Vの利潤となるのではない。IV Vの生産物の供給が比較的減

少して、其價値以上に販賣せらるゝと共に、II III の生產物が供給增加の爲め價値以下に販賣せらるゝことゝなるに外ならぬのである。此場合VI V に於ける搾取餘剩價値以上の利潤は何處から來るか。それは無論此部門の生產物を購買する者の懷から出るのである。又II III に於ける餘剩價値—利潤は何人の利益に歸するか。これ亦た同じく此部門の生產物購買者の利益となるのである。然らば供給の增減に由て定まる價格水準は、果して何の高さに止まるべきものであるか。云ふまでもなく、それは需要彈力性の如何が得て決する問題である。商品に由つては、極めて少量の供給增加が著しい價格の下落を來たすものがあり、其反對のものがあり、又可なりの供給減少も猶ほ甚だしい價格の騰貴を來たさぬことがあり、又これと正反對のことがあり得る。さうすると、資本は利潤の平均する迄流動することは確かであるが、其の平均の實現が、單に有機的組成高き資本を以て生產せられた商品の甚しい價格騰貴に依て行はれる場合と、低き有機的組成の資本を以て造られた商品の甚しい價格下落に由て行はれる場合と、兩者の中間に位する場合とがあり得る譯である。玆に先づ生產上に於て搾取せられた餘剩價値の總額と利潤總額との不一致の生ずべき原因が存するのである。

(十)

併し最も重要なる問題は、若し利潤平均以前に於て價格と價値とが一致すべき理由がないものとすれば、マルクスの價格論分配論は果して如何なる價値を有するかの問題である。マルクス曰く、「若し商品が其價値通り販賣されるものとすれば、種々なる生產部面に放下せる資本量の有機的組成異なるに準じて、之等の生產部面に生ずる利潤率の種々樣々たることは、既に說明した通りである。然るに資本は、利潤率低き部面を引上げて高き利潤を生ずる他の部面に移動しゆく」(高畠譯本三卷一冊三四九一頁)。そこで結局利潤を等一ならしむるが如き需給比例が成立するといふのである。

「若し商品が其價値通り販賣されるものとすれば、」此通りであらう。併し若し商品が其價値通り販賣されなかつた場合には何うなるか。それには種々樣々の場合があり得る譯であるが、最も極端の場合を取つて、假りに上掲の圖表に於て他の諸條件は同一とし、たゞ需要供給の關係上、諸商品が八〇、九一、一〇一、六五、二五で販賣せられたとしたならば、何うなるか。此場合各資本は等しく一〇の利潤を收めるから、無論資本の移動は行はれず、其處に安定狀態が實現せられる。即ち此場合の一〇は各資本に對する確定利潤となるのである。さうすると搾取せられた餘剩價値總額は一一〇であるのに利潤總額は五〇に過ぎぬといふ結果になつて、マルクスに取つて最も重要なる、餘剩價値總額は利潤總額に一致し、價値總額は價格總額に一致するといふ命題は支持せられ難くなるのである。どうして斯ういふことが起るかといふに、抑も一産業部内に於て造り出された價値幾許、搾取せられた餘剩價値幾許といつても、それが生産行程上の事實たるに止まつて、未だ價格として實現せられぬ中は、それは資本の流動にも利潤率にも影響することが出來ぬものだからである。故に右例の如く、各部門の生産物が八〇、九一、一〇一等で販賣せられたならば、各部門の搾取餘剩價値額には異同あるにも拘らず、資本の流出入は行はれずして已むと同樣に、資本有機的組成の關係上、各部門に於て搾取せらるゝ價値額は同一であつても、需要供給の關係上、生産物は其價値以上又は價値以下に販賣せらるゝ時は、矢張り資本の流動が行はれて、（此場合均一なる）餘剩價値とは一致せぬ水準に於て利潤の平均が行はれ得るのである。先づ資本の組成均一なる場合を取つて說明するのが理解を容易ならしむる所以であるから、左に一例を按じよう。

假りに例へばⅠ乃至Ⅴの資本が悉く50c＋50vの有機的組成を有し、餘剩價値率は一樣に百分百、而して簡單の爲め姑らく費用價格は放下資本額に等しきものとすれば、各部門生産物の價値は、一樣に一五〇である。「若し商品が其價値通に販賣されるものとすれば、」平均利潤は五〇％で、利潤合計と餘剩價値合計とは一致すること勿論である。然るに五

商品の一つ、例へばⅢの生産物が獨り需要供給の關係上二五〇（費用價格＋150）に販賣せられたならば、何うなるか。他の諸産業に於ける利潤率は五〇％であるのに、獨りⅢに於けるそれは一五〇％である。そこでⅠⅡⅣⅤからⅢへの資本流動が促され、前者生産物の供給減少と後者生産物の供給増加とが起り來る筈である。如何なる水準に於て利潤が平均するかは、各種商品に對する需要伸縮性の如何を知つて始めて決せられる問題であるが、兎に角利潤が平均を得た場合の價格が一五〇以上二五〇以下の何れかの點に定まること、即ち利潤額が五〇以上一五〇以下の何れかの點に定まること丈は明白であらう。茲に餘剩價値總額は二五〇であるのに利潤總額は二五〇以上たり得べきことが證明せられる。反對に五商品の何れかが需要不足の爲め其價値以下に販賣せらるゝものとすれば、其部門からの資本流出の爲め、他の四商品の供給が増加して其價格は價値以下に下落し、利潤の總額は餘剩價値總額以下に下降し得べき筈である。更に或商品は其價値以上に販賣せられ、別の商品は價値以下に販賣せらるゝ場合、一方の商品の價値以上に販賣せらるゝ程度と他商品の價値以下に販賣せらるゝ程度との相等しき場合、相異なる場合等を一々想像すれば、利潤總額と餘剩價値總額との或は一致し、或は相違する。種々樣々なる場合を想像することが出來やう。兎に角根本の理論は右述する所に由て明にせられ得たものと信ずる。

さて此理を上掲の表に移して考へて見れば、餘剩價値總額と利潤總額とが一致するといふのは、利潤率平均以前に諸商品が其價値通りに販賣されるといふ假定を根據にしての事に過ぎぬことが會得せられるであらう。假りにマルクスの設けた圖表に於て、資本Ⅱ及びⅢの生産物は、其價値通り一一一及び一三一では販賣せられずに、例へば夫れ〴〵八六及び九六（費用價格＋5）で販賣せられるものとせよ。資本は決して他の方面からⅡ及びⅢへは流入しないで、却つてⅡⅢから他の方面へ流出し、斯くして其の靜止に歸した狀態に於ては、ⅠⅣの生産物價格は必ず九二、七七以下でなければ

ならぬこと丈けは確實である。即ち餘剩價値總額は20＋30＋45＋15＋5＝110であるのに利潤總額は（22−x）×5となるのである。

これは生產物の或ものが先づ其價値以下に販賣せらるゝ場合であるが、反對に或者が先づ其價値以上に販賣せらるゝ場合、更に或物が價値以上或物が價値以下に販賣せらるゝ場合にも推究は右と同樣に簡單である。利潤率平均の以前に於て商品は其價値通りに賣買せらるゝものと假定することは、其事自身毫も差支ない事である。併しそれと同時に、商品が先づ價値通りに賣買せられぬと假定することも同じく差支ないことである。而して此の假定の如何に由て、利潤總額は餘剩價値總額と一致するものとなり、一致せぬものともなる。

此の最後に論じた問題は、少しく當面の河上博士の拙稿批評の範圍外に逸する觀があるが、マルクス辯護論者の中には、動もすれば價値と價格とを相撞着することなからしめんが爲め、價値の交換現象上の意義を稀薄にして、マルクスの價値法則は單に二商品の價値相等しといふは二者が其生產上等量の社會的勞働を要するといふことを主張するに止まり、二者の交換比率と勞働費用との關係が如何なるべきかに就いては此法則は吾人に何事をも告げるものではないと解せんとするものがあり、碎目かは知らぬが、河上博士にも稍々其傾向が窺はれるやうに感じたので、特に右の說明を試みた。即ち商品の價値通りの交換賣買が行はれるか否かは、一に需要供給に依て決せられるといふことを承認すると（マルクスも或個所で明にそれを承認して居る）、價値、餘剩價値が價格、利潤を決定するといふ法則の基礎が危くせられることを言はんと欲したに外ならぬのである。

上述の如き次第で私は河上博士の拙稿批評の大體に服し得ざることを遺憾とするものであるが、併し博士が私の用ゐた字句の妥當ならざることを指摘せられたものゝ中には、承認せざることを得ぬものがある。博士は予がマルクス說を紹介するに當り、「商品の價値に相當する價格がその自然價格であるといふべき」を「商品の價値がその自然價格である」と記したことを非とせられた（二一八五頁）。正に其通りである。これは價値及び價格の下に「額」の一字を加へることを遺したのである。次に博士は予の用ゐた「現實の價格」「現實の交換比率」「現實世界の交換比率」などいふ場合の「現實」の意味が不明だといはれた（二一八六頁）。私は答へる。これは例へば、假りに等價値の商品同志が相交換せらるゝものとせよといふが如き、假想上假設上の交換比率に對する「現實の」である。此場合私は個々の瞬間に於けるものも、長時間に亘つて持續する「平均的」「正常的」交換比率も共に之を現實のものとした。用語は或は適當でなかつたかも知れぬが、兎に角意味は右記の通りである。より適當な言葉があれば訂正を辭せぬことは勿論である。又博士は私が商品の價値といふべきところを財の價値と言つてゐるのを二度指摘せられた。（二一五二、二一五四頁）此の過失は甚だ恕し難いものであるが、併しこれがマルクスに對する根本的誤解に基づくものでないこと丈けは幸ひに辯明し得るつもりである。博士は私が財の價値といつたのに對して「河上いふ、財の價値ではない、商品の價値である。財は如何なる社會形態の下にも存するが商品はさうでない」と批評せられた。全然同感である。而して私は本誌四月號所載の論文中に此事を博士に向つて力說したものである。博士の前年主張せられた人類犧牲說は生產物價値に就いてならば兎も角、歷史的產物たる一定の社會形態を背景とする商品の價値の法則としては承認し難きものなる旨を力說したのである。私は言つた。「商品は洵に人間勞働の生產物である。併し勞働生產物其者は直ちに商品ではない。人間勞働の生產物が、歷史的發達の成果たる一定の社會的關係の下に置かれて始めて商品となるのである。生產物が商品となる爲めには……云々」と

（拙著四一六頁）。今却て博士から右の指摘を受けて、それを承服することは、私に取つて最も愉快なる義務である。

（十二）

櫛田民藏氏の予のマルクス批評に對する批評も、河上博士のと同じく、殆ど全く否定的である。たゞ右の一節に擧げた私の人類犠牲說に對する批評丈けは、幸にして大體に於て氏の賛成を博することを得たが、氏の見るところに由れば、予が自餘の點に於てマルクスに加へた批評は、予の此點に於けるマルクスの正しき理解（マルクスの「價値」なる概念は歷史的概念であつて、毫も非歷史的概念たる人類の犠牲たる勞働費用といふ意味を持つものでないといふ）と兩立せぬから、結局「小泉氏小泉氏を評す？」るの結果に陷ることになる。而して私の一方に於ける正しき理解と兩立せぬ誤解若しくは無理解は、予がマルクスの區別した競爭の二義を混同し、資本論冒頭の字句の解釋を誤り、又資本主義以前の商品生產と利潤率との問題に關して故なき非難をマルクスに加へてゐる點に現れてゐるといふのである。

予はマルクスの區別した競爭の二義を決して辨へぬものではないが、而かも猶ほ其一方なる、同產業部門内に於ける競爭は、當面の問題に關しては是に論及するの必要なきを信じて敢て之を無視した次第は、前段に詳論して置いた通りである。其際櫛田氏の名も擧げて、予の理由とする所を論じて置いたから、本稿第一九頁に就てそれを見られんことを希望する。私は櫛田氏の指摘に逢つて、二種の競爭の一方を問題にせざりしことの適當の措置なりしを感ずることが、却て愈々痛切である。同產業部門内の競爭に依つて行はるゝものは、「一物一價の法則」に過ぎぬ。其の「一價」が勞働費用と果して如何なる關係を保つべきやに就ては、同產業部門内の競爭其者は、吾々に何事をも告げ得るものではない。

次に資本論第一卷の首章が通常の讀者が解するが如く、「資本的生產方法の行はるゝ」社會の商品を取扱つたものと解

しては、後の生產價格說と餘り明かに相容れぬから、遡つて、これは後にマルクスが價値通りの交換が行はれた理由を說明してゐる、資本主義以前の商品を論ずるものだと解釋して、價値論價格論の調和を計らうとすることは、一應尤もなる努力である。併し乍らマルクスが、明かに「資本主義的生產方法の行はるゝ社會の富は、無數の（或は夥しき）商品集積として現れ、個々商品は其の Elementarform として現れる。故に吾々の研究は、商品の分析を以て始まる」と言つて居るのに對して、櫛田氏の如く、Elementarform は「原始的形態（それがぬけ出るところの形態）」と譯すべきもので、此語は即ち歷史上の過去に於て通過し來りし「資本主義的生產方法の行はるゝ社會」以前の段階を意味するといふが如きは、私を以て見れば、如何にも大膽に失する。河上博士も此點に於ては必しも櫛田氏に贊同せられざるが如く見受けられるのは、當然の事であらう。Elementarform を原始形態と譯することは、誤譯でないかも知れぬが、之を以て歷史上の或過去の時代を指したるものだといふに至つては、私の到底首肯し得ざる所である。若しマルクスが此場合「資本主義的生產方法の行はれざる社會の富」を指すものならば、此處には全く誤解の餘地のない言葉を用ゐなくてはならぬ筈である。縱令如何に敎科書的明晰はマルクスの所長ではないとしても、斯る重要の個所に於て斯る疎漏を犯すといふことは、多くの人の信じ難しとする所であらう。併し私は片言隻語に餘りに重を措く解釋法の危險多きを認めるから、特にマルクスの資本論以前の著作に就いて、マルクスの思想發達の徑路を尋ね、彼れが價値は價格の旋廻中心たりと說くことが一朝一夕の事でないことを示して、「マルクスの全系統中に明に二つの思想がある。一商品の價格は其價値を中心として旋廻する、即ち商品の價値が其自然價格であるといふ思想と、一商品の市場價格の引力中心點は其價値以外に存する、即ち價値は自然價格ではないといふ思想とがそれである。」而して第一の思想はマルクスの「賃銀勞働と資本」（一八四九年）「價値價格及び利潤」（一八六五年）及び資本論第一卷の主要部分に現れ、第二の思想はその一八六二年の書

値と資本論第三卷とに現れてゐると言つたのである（拙著三八一頁）。而して「賃銀勞働及び資本」と「價値價格及び利潤」に論ずる所が、資本主義以前の商品と解すべからざるの理由は前に（一三頁）述べた。此の後の點は櫛田氏と雖も恐らくは否認せられぬであらう。

（十三）

殘るところは、資本主義以前の商品交換は果して價値通りに行はれたと認むべき理由ありや否やの問題である。此問題は前段河上博士に答へた部分中に自ら答へられてゐる積りであるが櫛田氏は最も詳密に此問題を論じて私の説を批評して居られるから、私も重複を厭はず、稍々詳しく意見を叙べて櫛田氏及びマルクスの説の承認し難き理由を明にしたい。

資本主義以前の小生產者社會に於ける商品交換は其價値通りに行はれたと認むべき理由を、マルクスは數頁に亘つて稍々詳かに説明して居るが、此の原文は私も櫛田氏も共に既に一度引用したことであるから、今其再掲を省略する。要するに、資本主義以前の社會とは、未だ勞働力の商品化が行はれないで、生產者（勞働者）は自ら生產用具を所有し、從つて勞働者が、資本主義社會に於けるが如く、其勞働力を賣却はせずして、自ら勞働の生產物を賣却する時代を指して謂つたものである。マルクスの立場から嚴格にいふと、斯る社會には資本、餘剩價値、利潤率等の概念は未だあり得ない筈であるが、彼れは姑らく理論上の假定として此等の術語を適用して居るから、吾々も此假定に從つて考へて見やう。さうすると、生產者が自己の生活を維持する爲めに要する費額は、一面から見れば賃銀、一面から見れば可變資本であり、その原料道具器具仕事場の設備等の爲めに要する費額は不變資本、而して此の兩者の合計が彼れの資本を成すものである。而して此場合マルクスは、是等の小生產者の資本が「有機的組成」を異にすることを承認して居る。さて小生產者の

一日の勞働時間中、その自己の消費額を償ふに必要なる部分は（姑らくマルクスの術語を借用すれば）必要勞働時間、此以上の部分は餘剩勞働時間である。さて生産者の生活標準が均一で、且つ勞働時間は一樣なるものとし、而して各生産物は其勞働費用（直接に費された勞働量と不變資本消耗によつて間接に費されたる勞働量との合計）に應じて相交換せらるゝものとすれば、各生産者は等價の餘剩價値を收得すべき筈である。反面から言へば、若し各生産者が等額の餘剩價値の收得を以て甘んずれば、各自の生産物は其價値通り（勞働費用額通り）に相交換せらるべき筈である。而してマルクスは斯る社會に於ては事實此事が行はれた。何となれば、斯る事情の下に於ては一定額の餘剩價値を收めるのに幾許の資本放下を要するか、即ち利潤率が幾許に相當すべきかは、當事者に取つては「どうでも宜い事」Gleichgültiger Umstand だからだといふのである。

此說明の當否如何。櫛田氏はマルクスの說明を敷衍して、右述の如き小生産者間の關係を「歷史的事實として見るときは、斯くの如き社會に於ては、同種の産業の間には競爭が行はれても、異種の産業の間には、自然的社會的障害に依つて、競爭の自由は行はれてゐないのである。それ故に事實生産手段の價値構成の差異に伴ふ利潤率の差異と認むべきものがあつても、それがために異種生産の間に、生産手段及び勞働の移動を惹き起すことは一般的には無いのであり、從つて利潤の平均といふこともあり得ないのである」と言つて居られる（二〇頁）。故に私は櫛田氏に從つて、小生産者社會に於ては「自然的社會的障害に依つて」異種生産者間の競爭、勞働、生産手段の移動が遮斷せられてゐたものと假定しよう。此遮斷は完全なれば完全なるほど櫛田氏は滿足せらるゝであらう。さてマルクスが自由に認めてゐるやうに、一商品に對する需要の程度は其價値（勞働費用）と必然的聯結を有するものでないから、需要と供給との關係は價値と一致する價値を成立せしむるが如きものなる場合もあれば、價格を或は價値以上ならしめ、或は價値以下ならしむるが

如きものなる場合もある。即ち價格或は交換比率は、直ちに價値と一致する約束あるものではない。若し一致すれば偶然である。而して此二者が一致せぬ場合に、若し其儘に放置せられたならば、商品交換比率は價値から離れた儘に止まつてゐなければならぬ。若し斯る事なからしめんとすれば、價格が價値以上に離れた場合に商品の供給量を増加せしめ、價格が價値以下に離れた場合に其供給量を減少せしむる機構がなくてはならぬ。然らば供給の増加は如何にして行はれるか、それは結局其の特定の産業部門への勞働と生産手段との流入を待たずしては行はれぬ。(讀者幸ひに、斯る社會には勞働、生産手段の流動なしと抗議せらるゝこと勿れ。此點は此一段の結末に到達する迄に明にする積りである。)供給の減少は如何にして行はれるか。それは勞働と生産手段との其部門に對する補充停止か或は流出を待たずしては行はれぬ。故に産業間の競爭が遮斷せらるゝ狀態は、供給の増減に由つて價格の價値離隔を矯制することが不可能なる狀態でなければばならぬ。假に一産業生産物は、其費用に比して頗る高く賣買せらるゝに拘らず、例へばギルド制度といふ「社會的障害」の爲めに他方面からの競爭者の參加が遮斷せられてゐるものとすれば、玆に一つの獨占狀態が實現せられる。而かもマルクスが商品の價格と價値との一致の爲め必要なる條件の一として、明に獨占の存せざることを擧げてゐるのは、櫛田氏の熟知せらるゝ所であらう。

然るに小生産者交換の社會に於ても、社會全體の生産力を社會全體の需要に應じて、統一的に配分する中央機關は存せぬのであるから、右記生産用具の流出入は、生産用具の所有者が之を自己の勞働と共に自ら適當と認める方面に充用することに依つての外行はるべき方法はないのである。然らば之を行ふに方つて、所有者は生産用具と勞働とを、若し可能ならば、如何なる産業に投じ、若しくは如何なる産業から如何なる産業に移すものと考ふべきか。無論それは比較的不利の方面を去つて、比較的有利の方面に移るものと考へなくてはならぬ。詳しく言へば、犠牲を拂ふことが同一ならば、成る

べく利益の大なる方へ、又收得せらるゝ利益が同一ならば、犧牲を拂ふことの成るべく小なる方へ移動するものと見なければならぬのである。若し然らずして、當事者が此の利益犧牲の大小に無感覺無頓着なるものとすれば、生産用具と勞働とは、價格が價値以下に降れる生産部門に投ぜられて、價格と價値との離隔を益々甚しからしめ、又生産用具が價格の價値以上に上れる産業より引出されて、前者を益々後者と離隔せしめるといふ事の起らぬことを保障し難いのである。而して斯く考へ來る時は、右の生産用具の移動が靜止に歸する時は、即ち當事者の受くる利益と之を收めんが爲めの犧牲との比例に差等(若しくは甚しい差等)がなくなつた時であるとしなければならぬ。之を資本主義流に言ひ現せば、利潤の平均した時でなくてはならぬ。固より生産用具の流動なることは、今日の資本主義社會に於てすら決して完全なる銳敏と精確とを以て行はれてゐるものではないから、資本主義以前の社會に於ては猶更の事である。故に生産用具の流動といつても、それは恐らく、或は生産用具の補充に際し、或は新に勞働年齢に達した者の職業撰擇に際して行はれるに過ぎぬと見てよからう(此點に就ては、實は今日と雖も既投資本及び熟練勞働の流動は一見感ぜらるゝほど自由なるものではない。勞働資本の自由流動は、今日と雖も理論構成の前提に外ならぬのである。)併し兎に角勞働、生産用具の移動が當事者の利害撰擇に由て行はれるものと見なければ、價格の價値離隔を矯制することが全く不可能となる。勞働・生産用具の移動が行はれなければ、獨占狀態の出現を防ぐことは出來ぬのである。獨占價格は生産價格とは一致せぬ。併し生産價格と一致せぬ獨占價格が價値と一致するといふ必然は全くないのである。兩者は一致するかも知れぬし、一致せぬかも知れぬ。一致すれば偶然である。

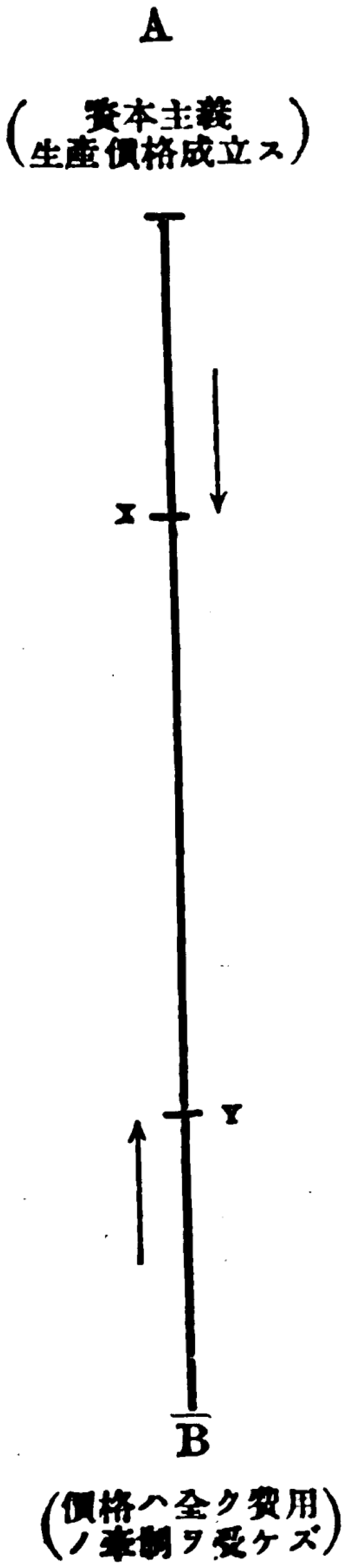
(十四)

又假に小生產者等は、右記の利益と犧牲との比例に無感覺なりとするも、經濟的境遇はその是に無頓着なることを許さぬであらう。假りに一業に從事したものが、需要減退の爲め、自ら其業を已めて他に轉ずるか、若しくは己れの子をして他の業に就かしめんとするに當つて（若し此の轉業の事全く行はれずとすれば、價格と價値との離隔の矯制全く不可能なること前述の如し、）彼れは如何なる職業を撰擇するか。假りにＡＢ二產業の同額の餘剩價値を生ずるものがあつて、Ａは高價なる原料又は使用久しきに耐へる道具を必要とし、Ｂは然らずとする場合に、他の事情にして等しければ、何人も前者を避けて後者に就くは、已むこと能はざる所であらう。蓋し此場合に各當事者が假令犧牲と利益との比例の差等には無感覺なりとするも、原料、道具等に比較的高價を支拂ふことは、何人も均しく能くする所ではないからである。此等の原料道具を備へるには、無論之を購入する資力を有せねばならぬ。其資力はどうするか。小生產者は之を其所得から剩さなければならぬ。而して之を剩すには欲望の滿足を一時放棄しなければならぬ。（近世大資本家の資本に就いては、其成立を享樂の延期又は「節慾」によつて說明する說に對して反對論が喧しい。併し資本主義以前の小生產者に就いては、其の「資本」が斯くして準備せられたといふことは、マルクシストも之を否認せぬであらう。）此の滿足の一時的放棄は、何人も之を喜ばぬことゝなるのみならず、必要なる享樂延期の程度如何に由つては、例へは家族員多數なるが爲めに生計に餘裕なきもの等にあつては、此の「一時的放棄」は之を行はんと欲しても行ふことを得ぬ場合がある。そこで何れも同額の餘剩價値を生ずるものとすれば、原料や道具に「金」のかゝらぬ產業に人が集中して、其生產物の供給が比較的に增加し、然らざるものは人が成るべく之を避けるので、其生產物の供給が比較的に缺乏するといふことが生じて來なければならぬ。即ち價格が勞働費用と一致しなくなるのである。即ち享樂の延期を忍んだものは、その勞働に對するものゝ外、更に別の犧牲に對して報酬を受ける結果となるのである。此結果が果して至當であるか否かは、今予の

問ふ所ではない。ただ同一の報酬を收得するのに同一量の勞働投下の外、更に右の享樂延期なる第二の犧牲の随伴するところでは、その事の賞すべきと難ずべきとは之を問はず、兎に角人が此犧牲（若しくはより大なる犧牲）を避け、若しくは之を避けるのを餘義なくせらるべきことは、之を認めなくてはならぬ。其結果は價値とは一致せぬ價格旋廻中心の成立となるのである。

斯くして矢張り生產價格が成立し、商品の市場價格は其周圍を旋廻せざるを得ぬこととなる。若し何等かの障壁に依つて資本の競爭、利潤率の平均が遮斷せらるゝならば、生產價格は成立しないが、其代り、價値通りの賣買の條件も備はらぬ。需要が增加しても資本の流入が遮斷せられてゐれば、獨占狀態が實現せられ、又需要が減退しても供給の消滅が行はれなければ、謂はゞ買手の獨占狀態が造り擄される。マルクスに據れば、資本間の競爭に依つて價値と價格とは離れるが、されぱとて獨占が此二者を一致せしめるといふ保障はない。競爭なき場合の商品價格に就いては、それは如何なる意味の費用にも牽引せられずして、全然需要供給に依つて定められるといふ以上の事を言ひ得ないのである。

吾々に與へられたる兩極端は、產業部門間の競爭の完全に行はるゝ狀態（A）と資本間の競爭の全然遮斷せらるゝ狀態（B）との二つである。マルクスが略ぼ價値通りの生產物交換が行はれたといふのは、果して左圖AB間の何の點に於



てあり得ることであらうか。B點上に於ては價格は全く如何なる費用の牽制をも受けないのであるから、又勞働費用の

牽制をも受けないことは明白である。今Bを去つてAに近づけば、其一步毎に價格は無牽制(費用による牽制の缺如)の狀態を遠ざかつて、生產價格の引力に支配せられ始め、それがAに接近すること愈々進むに從つて、生產價格が市場價格の旋廻中心たることは愈々明瞭愈々的確になる。故に反對にBに向つてAを離れることは、たゞ生產價格が市場價格の重心たることが不明瞭不的確となる事を意味する。Aを隔たることが愈々遠ければ、價格はたゞ步一步愈々費用重心なき狀態に近づくのである。たゞ其丈けの事である。而してそれは毫も價格が勞働費用を重心とする狀態に近づくことを意味するものではない。

右の理由に基づいて、私は利潤率の平均なき處に於ては生產價格が成立せぬことは明かであるが、若し生產價格が成立しなければ(或は生產價格の成立以前に於ては)何故に商品の價値通りの交換が行はれるかとの疑問を發した。これに對して櫛田氏が、利潤率の平均がなければ價値通りの交換が行はれるに極まつてゐるではないかと答へられたのは、遺憾である(「…利潤率の平均無ければ、生產價格はない。價値と生產價格とを背理せしむるものは、只だ平均利潤だけだから、平均利潤率(從つて亦た生產價格)の無いといふことは、同時に價値で決まると云ふことではないか。」一二一頁)。此前後に於ける櫛田氏の說明がマルクスの解說として正しきものなることは、承認する。併し私は、マルクスの解說を試みようとしたのでなくて、マルクス其者を批評したのである。猶ほ櫛田氏に於て資本論第三卷第十章中の所說と「賃銀勞働と資本」「價値價格及び利潤」の所說とを比較考察せらるゝならば、予に取つては一層好都合である。此等の諸處でマルクスが說く所を綜合すると、結局價格は妨害原因さへなければ、價値と一致しようとするものである。何故に一致しようとするか。それは利潤平均の作用あるが爲めである(「賃銀勞働と資本」「價値價格及び利潤」)。然らば「妨害原因」たるものは何であるか。それは利潤率の平均である(資本論第三卷第十章)、といふに歸着することが、充分明瞭になるからである。

(十五)

マルクスは小生産者社會に於て利潤率の差等が問題とならぬことは、國際貿易に於て「種々なる國民に於ける利潤率の差異なるものが、彼等の商品交換に取つて何うでも宜い事であるのと同じ」だと謂つて居る。これは果して國際間には利潤率の平均が行はれず、從つて價値通りの交換に對する妨害原因がないから、國際間の交換は勞働費用に從つて行はれるといふことを意味するものか。兎に角櫛田氏は斯く解せらるゝものゝ如く見受けられる(「國際間の關係に於ては、價値法則は大體に於て今日尙ほその儘行はるゝものと云つて差支なく云々。」八―九頁)。併し乍ら、予が前節に說明した理に由て明なるが如く、若し資本流動が國際間には遮斷せられてゐるものならば、一般に等費用生產物の相互交換、從つて等價値生產物の相互交換も保障せられ得ないのである。リカルドオが其價値論の外に更に國際價値の法則として比較生產費の說を唱へたのは、實に是を以てゞあつた。

リカルドオは謂ふ。英蘭と葡萄牙との間に貿易の行はるゝ場合、英蘭は羅紗を製造する爲めに一年一〇〇人の勞働を、葡萄酒を釀造する爲めには一二〇人の勞働を要し、葡萄牙に於ては、葡萄酒は僅に八〇人、羅紗は九〇人の勞働を要し、結局二物倶に葡萄牙に於てより低廉に生產せらるゝに拘らず、猶ほ且つ英蘭產の羅紗は葡萄牙產の葡萄酒と交換せられ得るものである。蓋し是に由て、葡萄牙は八〇人の勞働を以て、九〇人の勞働を要すべき羅紗を獲得し、英蘭は一〇〇人の勞働を以て一二〇人の勞働を要すべき生產物を獲得し得るからであると。そこで英蘭人一〇〇人の勞働の生產物が葡萄牙人八〇人の勞働生產物と交換せらるゝことゝなる。リカルドオに從へば、斯る事は同一國內に於ては行はれ得ぬ筈である。然らば國際間に於ては、何故に此事が行はれるか。それは國際間に於ては、國內に於けるが如き自由なる資本の

流動がないからである。本文に曰はく「英吉利人一〇〇人の勞働は、英吉利人八〇人の勞働と交換せらるゝ筈はないが、英吉利人一〇〇人の勞働の生產物は葡萄牙人八〇人、露西亞人六〇人又は東印度人一二〇人の勞働の生產物と交換せられ得るのである。此點に於ける一個國と數個國との相違は、資本が一層有利なる用途を求めて一國から他國へ移動することの困難と、その同一國內に於て常に一地方より他地方へ動くことの快捷なることゝを考慮すれば、容易に說明せられるのである」と（原論、ゴンナア版一一六頁）。

即ちリカルドオは、玆に資本流動の障害の爲めその勞働價値說（リカルドオは其の價値論の章以外に於ては大概價値は勞働費用に依て決せらるゝものとして說いて居る）が國際間には行はれぬことを言つて居るのである。是は當然の結論であつて、マルクスも亦た本來是と同じ事を言はなくてはならぬ筈なのである。

（十六）

マルクスは需要と供給とが平均すれば、其作用は零に歸するから、一定の價格が何故成立するかは、その零に歸する力に由ては說明せられぬと說いて居る。此事は前掲拙著にも引用せられてある通り（二七三―四頁）、既に彼れの「價値價格及び利潤」中にも說かれてゐるが、資本論第三卷第十章には更にそれが反覆詳論せられて居る。「……商品を其の市場價値通り販賣し得る時、需要供給は互に平均する。——需要供給は平均すると作用しなくなる。そして斯く作用しなくなればこそ、商品は其の市場價値通りに販賣されるのである。二個の力が反對の方向に均等に作用すると、兩者は互に相殺し、外部に對しては何等の影響をも及ぼさなくなる。而して斯る條件の下に生ずる諸現象は、右兩力の影響以外の原因に依つて說明されねばならぬ。需要供給が平均すると、それは最早何物をも說明しない。」云々「資本制生產の現實に

於ける內的諸法則は需要供給の相互作用に依つては之を說明し得ざるものとなること明かである。なぜならば此等の法則は、需要供給が作用しなくなり、換言すれば互に平均に歸した時、始めて純粹に實現されたものとなるからである……」（高畠譯本三三五―六頁）。今櫛田氏が「マルクスの價値考察は、常に需要と供給との平均するところに始まる。需要と供給とが平均し、一定の平均價格が成立するものとすれば、それが何故にかく成立するかと云ふことは、最早働きを停止した需要供給の關係からは說明せられない。それは却つて」云々以下前記「改造」第一三三頁に言はれることは、右のマルクスの說を紹介せられたものである。然るに私は平生、彼のマルクスの章句を全資本論中最も不用意、若しくは最も無意味にして、且つ混亂を含むこと最も多きものの一つと考へてゐるものであるから、從つて無論櫛田氏の說明にも服する譯には行かないのである。何故であるか。

需要供給が相平均すれば其作用が零に歸するとは、抑も何を意味するか。需要供給が平均するかせぬかは、價格を條件とせずしては、全く言ふことが出來ぬものである。抑も價格なるものは、一方需要を制限して供給に適應せしめ、他方供給を刺戟して需要に適應せしむる爲めに成立する。此理は近頃カッセルの力說する所であるが、併しこれ丈けの事を理解するには、敢て必しもカッセルを待つものではない。故に需給が一致するといひ、一致せぬといふのは、一定の價格に於て然り若しくは然らずと言ふのでなくてはならぬ。普通に需給が一致せぬといふのは、例へば市場に提供せらるゝ一商品の量が、之を買はんと欲する者の購買要求量に比して過不及あることを指して言ふのであるが、それは畢竟或る一定の價格に於て人の賣らんと欲する數量と人の買はんと欲する數量とが一致せぬといふに過ぎぬ。苟も商品は使用價値を有するものなる限り、如何なる價格に於ても、需給の一致せぬといふものはあり得ない。同樣に需給が一致するといふのも、要するに、或る一定の價格に於て然りといふに外ならぬ。故に需要供給が一致する場合といふのは、其價格では一

致するが別の價格では一致せぬ場合であり、需要供給が一致せぬ場合といふは、其の價格では一致せぬが、別の價格では一致する場合をいふに外ならぬ。從つて需給が平均すれば其作用が零に歸するといふならば、需給が平均せぬ場合にも其作用は零に歸するといへるし、需給は其の相平均せぬ時に作用を逞ふするといふならば、兩者相平均する場合にも其作用を逞ふすると言ひ得る譯であつて、斯く言ふことが殆んど何等の意味をなさぬことは充分明瞭であらう。

商品が其の市場價値通りに販賣せらるゝ時需要供給は平均するとマルクスは謂つて居るが、上述の理に由て、市場價値に一致せぬ價格が成立しても、需要供給は其價格で相平均するのである。たゞ其時々の需要供給關係によつて成立する諸々の價格が、どれも一樣に安定性持續性を有して居るかといへば、それはさうではない。價格は常に需給關係に由て決せらるゝものではあるが、或る需給關係に由て成立する價格は、其自體の中に變動の原因を藏して居るのである。それは如何なる價格かといへば、正統派學者の所謂「自然價格」に一致せぬ價格である。價格が自然價格の上下に外れゝば、必ず供給の增減が促されるので、市場價格は自然價格の方向へ變動する。而して此の供給の增減が資本の流動なくしては行はれ難いことは既に前に詳論した通りである。即ち自然價格は平均利潤を其構成要素となすものである。故に自然價格と價値とが一致するところでは、商品の需要供給は價値通りの價格が成立する場合に安定的持續的に相平均するといふことは出來る。併し自然價格と價値とが一致せぬ場合には、無論斯くいふことは正しくない。資本主義的生產方法の行はれる處では商品の需要と供給とは、價値とは離れた生產價格に於て安定的持續的に相平均するのである。マルクスは「賃銀勞働と資本」及び「價値價格及び利潤」では、利潤平均に依つて價値と價格とが一致するやうに說いてゐるから、其處で「需要と供給とが互に相平均し、從つて其作用が停止する瞬間に於て、一商品の市場價格は其眞價値即ち其市場價格の動搖の中心たる標準價格と一致する」と說くことは、差支ないとしても、それと殆ど同じ章句を資本論第三卷中に繰返

すことは許すことが出來ないのである。そこでは需要供給の持續的平均は生産價格に於て行はるゝものと說かれてゐるからである。若し此場合利潤率の平均がなければ何うだらうかの問題は、既に本篇中に餘りに度々之を論じた。予は此以上讀者を倦怠せしめることを欲しないのである。

（十七）

櫛田氏は又私が河上博士の人類價値犠牲說を單にマルクス價値法則の解釋としては不可なりといふに止め、此說其自身には「頗る傾聽すべきものを含めり」などと言つたことに對して、不滿の感を漏らして居られる（一一一頁）。私は此不滿も至當なりとする譯には行かぬ。此問題は今玆にそれを評論する時を有せぬが、たゞ私は言ふ。私が人類價値犠牲說に傾聽すべきものが含まれてゐるといふのは、次の章句を是認するのと同じ意味に於てである。曰く、In allen Zuständ musste die Arbeitszeit, welche die Produktion der Lebensmittel kostet, den Meuschen interessieren……是は特定の歴史階段と關係なく主張し得ることで、而して吾々の首肯し得る所である。然らば此言は何人に出でたか。外ならぬ資本論の著者カアル・マルクスである。

以上が河上櫛田兩氏の論に對する私の所感の大略である。（十月二日）

末弘嚴太郎著

法窓閑話

（忽廿版）

定價貳圓五拾錢　送料二十三錢

法治國民の必讀すべき國民讀本!!

新らしき法學の權威末弘氏の快著。「法律は民衆自らのものである」との基本思想の下に、自由法論法律社會化論の立場に據つて該博な蘊蓄を傾けたもの。法律に對し民衆がいかなる態度であらねばならぬか、法の前には平等であらねばならぬ筈の民衆が果して、そうであるかを考察して、我等が國家として、社會人として、生存して行くに必要である法律思想の原則、形式、運用に對し誰にも解かるやうに說いたもの。「普選」が實施されて法律思想に向つても革新的の刺戟を要求して居る時、本書の公刊は時宜を得たものである。本書は著者の獨創的法律思想に成る、理は深遠に及んでいるが語の平易なるため萬人均しく理解し得べく、そして著者の氣魄と、行文の流暢には多大の趣味を覺ゆ。法治國民の必讀すべき國民讀本である。

末弘嚴太郎著

嘘の効用

四六判上製　定價二圓六十錢　送料二十二錢

末弘嚴太郎著

農村法律問題

四六判上製　定價二圓五十錢　送料二十二錢

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

新聞記者の見たる解散の鍵

解散の鍵は首相が持つ

東京朝日編輯局長 緒方竹虎

第五十一議會に面して「政局は何うなるとは」到る處話題に上る問題だが、政局が何うなるかを考へるには、何うしてかゝる政局に立到つたかを先づ考へねばならぬ。

イギリス現在の政情ならば、略同數の三政黨が鼎立することも敢て不思議でない。イギリスの自由黨は、この儘に推移すれば、或は衰滅の悲運を見る日があるかも知れない。それには小選擧區であることも、時に大に勢ひを助ける。併し過渡期の今日では、三派各々立場が截然異るだけに、一時鼎立の形を呈することも當然と思へる。然るに我國の三派、ことに政本兩黨に至つては、何れも舊官僚と大資本大地主との抱合つた政黨で、立場は少しも異らない。その立場の異らない政黨が、感情的に黨を樹てゝ相對立して居るから、政局の前途が少しも理論的に考へられないといふ面倒をひき起す。

極く最近に三派は前後して税制整理案を發表した。そして床次本黨總裁は、黨内外の合同論者に對し、これだから政友會とは一緒になれぬといふ顔をして居る。併し是よりもさきに、即ち七月政變の際に、政本兩黨の幹部は『主要政策を同じうする政本兩黨は……』なる申合をして居る。したがつて、今更ら政策の異を立てゝも、政友會の分裂が感情問題の爲でなかつたといふ證明にはならぬ。

斯ういふ行懸りであるから、政局が何うなるかは、三派になり變つて何うすれば一番自黨に有利なるかを打算し、その總和

を得て結論をつける外に致方がない。無論政權を中心にしてゞある。

三派の中で比較的立場の樂なのは、政權を持つて居るだけに憲政會であらう。『憲政會は議會を解散して徒らに政界を紛糾せしむることを好まぬ、しかし政策の遂行を阻害するものあらば、已むを得ず可否を國民に問はねばならぬ』など、地方で演說する大臣の得意は察すべしである。本來ならば、『已むを得ず』どころか、少數黨內閣の憲政會としては進んで議會を解散するのが所謂憲政の常道であらう。主要政策が通へばこその反對黨に頭から追隨を期待するのは、そも〳〵反對黨を侮辱するものである。もちろん反對黨も侮辱に値しはするが、それでなくても、普選を通過したからには、成るべく早い議會に新選擧法を以て議會を改造することが、現政府の政治的義務でもある、と先づ理屈の方から考へて見る。

併し政治家といふものは決して理屈では動かぬ。第一、今の選擧界の實情からいへば選擧は大仕掛の散財である。散財であるのみならず博奕である。前回の總選擧に憲政會は三百萬圓を使つたと云はれて居る。三百萬圓の金は如何に三菱を背景とする憲政會としても大金である。昔は『君と寢ようか五千石取らうか』と云つて『何の五千石』と捲つて出たものがある、天下を取るのに三百萬圓が何かと云ふものがあるかも知れぬが、それは金持の心理を知らぬものである。加藤子と憲政會の幹部とは先づこれを考へるに違ひない。のみならず、新選擧法の中選擧區では、如何に政府黨でも、一黨で絕對多數を占めるといふことは殆ど不可能である。憲政會の一幹部は百八十以上を取ることは六かしいと云つた。假りにこれには遠慮があるにしても二百を出ることは困難であらう。一方、解散は政本合同を取持つことにもなる。この危險性ある選擧といふことが、さらでも冒險を好まぬ憲政會の決心を、一層消極的にするだけは確かである。

政友本黨は解散絕對反對である。理由は極めて簡單である。解散は即ち政本合同か、若しくは黨勢の激減を意味し、何れにしても本黨らしい本黨が無くなるからである。本黨のうちには今尙政本合同論者が相當ある。中橋氏の如きは自ら『陽謀家』と稱し、公々然床次總裁の因循を罵倒して居る。元田氏も腹の中は合同論である。併し何分にも總裁の床次氏が非合同論の張本であるから、本黨全體としては非合同論たらざるを得ない。床次氏と田中政友會總裁とは、同じ內閣にゐたこともあるが、感情は初めから面白くない。殊に今日となつては、床次氏の周圍には硬派の後押があり、兩者の提携は先づ一生不可能であ

る。併し如何に床次氏が非合同論でも、憲政會が天下を取り羽振りを利かすれば利かすほど、地方の地盤は合同を想ふ。したがつて、解散になれば合同の機運は大に促進され、この大勢に逆へば或る程度の分裂は免れない。そこに本黨の合同に反對する根本の理由がある。然らば本黨は、解散を避け得て然る後に如何なる成算があるかといへば別に何うといふものもない。現状維持は解散に優るといふだけである。決算を延せばその内にいゝ工風も浮ばうといふのである。床次氏は先般本黨の宮城支部大會に臨む途次、『解散の鍵は我輩が握つて居る』と新聞記者に語つてゐたが、今後の本黨はこの鍵を色々に使つて飽くまでも解散回避の方法を講ずるであらう。税制整理の立案にも云ふに云はれぬ苦心が籠つて居る。これは強ち卑怯を以て攻むべきでない。本黨分立の理由ありや否やは別問題とし、本黨の實在する以上それはほとんど唯一の自衛策だからである。

政友會では、五十一議會の劈頭『政府は立憲政治の常道に從ひ直ちに衆議院の解散を奏請すべし』との決議案を提出するといふ話がある。何處まで本氣に受けていゝかは判らぬが、政本合同は今日の儘ではほとんど絶望である。解散は無論苦痛だが、解散に遭へば合同の機運は大に促進する。その反對に、この儘過ぎては第一新しい芽の吹く機會の來やうがない、その間には本黨が政府と接近して、アベコベに『冷飯を食はさるゝ』心配がないとも限らぬ。のみならず、餘り店曝しが長くなつては、折角取替へた總裁の御利益が薄くなる。かれこれ算盤を彈いて『解散敢て辭せず』位の決心までは出來て居るやうである。何れにしても、本黨とは合同について出入り二倍の利害の差があるだけ、比較的氣が樂だ、

併し、政友會も『解散敢て辭せず』程度の受身である。憲政會も出來れば無事に濟ませたい氣が先に立つ。したがつて本黨が一生懸命解散回避の運動をやれば、先づ解散は十中八九無いものと見てよからう。現に本黨の某總務と安達氏との間にはある諒解が出來て居るとの噂もあり、或は結局本黨は研究會を動かして解散回避に成功するとの臆測も行はれて居る。併し茲に最後に問題となるのは、憲政會内の輿論の歸趨である。なる程解散は冒險に違ひないが、政界の事は寸前暗黒である、この機會を逸してまた憲政會天下の總選擧が行へるかとの積極的解散論も必ず憲政會内に有力にならう。この際加藤首相に若し解散の意思あらば、いくら本黨が解散回避の運動をしても、解散の機會を掴むことは容易である。この意味から『解散の鍵』は床次氏よりは加藤首相の手中にある。併し、果して加藤首相は『何の三百萬圓』と解散の機會を掴むか否か。

加藤首相の腹にまで探りを入れることは御免を蒙つて、たゞその平生から推せば、それは少し離れ業過ぎる。（一〇、一一）

政黨心理、黨人心理

時事新報政治部長　澁谷作助

解散になるか、ならぬかで世人の注目を惹き、解散は避け得られるか、得られないかで黨人の心膽を寒からしめてゐる第五十一議會。若し解散避け難しとすれば、當然制限選擧で成り立つた最後の議會たるべき第五十一議會。いろ〳〵の意味に於て、特異の議會と見らるゝと共に、之に對する政界三大黨の苦心も亦、尋常一様ではない。其苦心の一つとして先づ表面に表はれたものは其政策である。憲政會は聯立内閣の遺物たる行政整理や財政整理等を別にして、減税を眼目とする税制整理案を眞向に振りかざし、政友會は産業立國といふ觸れ出しの下に、地租委讓を骨子とし、本黨は政府案に輪をかけて自作農全部の免税やら教育費國庫負擔額の増額を並べてゐる。是等の外に、各派夫れ〳〵普選あてこみと見らるゝ政策もあつて、憲政會の所謂勞働立法なども其一つと思なるゝが、果してどの程度まで時代の要求に應ずる立法であるかは、まだ判らない

○

三派の旗幟は之で兎も角もハッキリしたやうである。そして三派は何れも、此政策で勇往邁進するのだと特に附け加へてゐる。そして或黨派の如きは、政黨は政策本位であらねばならぬと、今更の如く力を入れて說いてゐる。勿論從來といへども、議會前に各政黨が其政策政綱を發表することは通例のことで、不思議でも何でもないが、然も主要政策の發表に當りては余程駈引を加へ、動もすれば之を秘策なりとして努めて態度を曖昧にし、假令之を公にするも最初から情實や妥協分子を多量に含ませ、所謂進止自由の餘地を存ぜしめて居た。されば今回の如く、解散の理由となること明白な重要諸問題に對して、比較的

に駈引の餘地が尠ない、妥協苟合の餘地の尠い、所謂自主的政策を各派が揃ひも揃つて公にしたのは、現在の政黨としては、寧ろ思ひ切つた、大膽なやり方であつて、見やうによつては各派互に背水の陣を布いたものと見られる。各派が事茲に至つた内面には、いろ〳〵の經緯があるにしても、此點はたしかに政黨政治、議會政治の一進歩であつて、暗い政治より明るい政治への第一步とも云つてよからう。

政黨にして飽迄も政策本位で邁進する、といふならば、其結果に就て豫め一大決心を要するは當然の事である。即ち今日の場合、之が爲には解散亦避けずとの一大決心に立脚した政策の高調でなければならぬ。而して所謂其自主的政策を高調し、勇往邁進を力說しつゝある憲政本三派が、果して此一大決心を固めてゐるかといふに、之は頗る疑問で、各派の最も大なる惱みは即ち此點に存するやうである。憲政會は議會の第一黨として、政權に座すると雖も、其力未だ政界を壓するに足らず、故に其黨略から云つても、其經綸抱負を行ふ手段としても、此際寧ろ進んで解散により信を天下に問ふ可きであるが、然もまだ此決心はついて居ない。出來得べくんば危道を避け、政權を維持する間に漸次黨勢を擴張しよう、といふ考へから總ての策を講じてゐるらしい。即ち政本の離間、憲本の提携、何れも憲政會の最高政策として見られて居る。本黨も亦出來得るだけ解散を回避せんとする心事は、歴々として現はれて居る。床次總裁は、解散の鍵は我黨が握つてゐると壯語したといふが、鍵を握つてゐるだけに、公黨の面目やら利害やら、考へれば考へるほど人知れぬ惱みがあらう。政友會は、黨員の心事は暫く措き、黨としては解散とまで漕ぎ付けてこそ其本望が成就する譯であるが、然も之には本黨と合同するか、切崩すか、何れにしても解散後の選擧で有利な地に立つ見込が立つてからの解散でなければならぬといふ、頗る複雜を極めた策戰であるだけに、一も二もなく解散に向つて突進するものとは見受けられぬ。一面に解散を恐れるといふ、一つの心の中に此矛盾した二つの考へを抱擁せざるを得ざるほど、苦しい立場に陷つて居る。殊に三派を通じて、解散になるかならぬかの瀬戸際に立ちて、倶に苦しく苦心してゐるのは選擧費の問題である。憲政會が努めて解散を避けんとするのは、前述の如く危道を避けんとする心事と元老などに對する氣兼に基くことは無論であるが、政權を握り、一方財閥を背景とせりと云はるゝ同派にも尚且つ資金調達の惱みはあらう。政本二派も亦同じく調達難の弱點がある。否、在野黨として政府黨以上の苦痛がある。解散に對する各派の決心がまだ付いてゐない原因として、今一つ數ふべきものがある。

それは選擧に對する勝算が立たないことであつて、各派は其黨界より打算して、或は之を以て最も大なる原因となしてゐるかも知れぬ。云ふ迄もなく解散とならば、玆にいよ／＼普選が實施せらるゝ次第であるが、各派とも普選の收穫に對するハッキリとした見込は立つてゐない。選擧通と稱せらるゝ黨人の間では普選が行はれたからとて斯かく急劇に選擧界が變化するものではない、矢張り制限選擧を土臺として、其結果を割出したとて甚しく狂ひはあるまいなどゝ云つてゐるもの丶固り確信あつての打算ではない。制限選擧の虎の卷で、普選の尺度を側ることとは困難であつて、自然各派としては豫め的確に選擧の結果を推定することは出來ないのである。

黨略、黨利、金、面目。三派夫れ／＼其立場を異にすと雖も、是等に對する悩みは皆一つである。政策の大旆を擁して、何れも此循環せる問題を夫れから夫れへと考慮しつゝ苦悶懊悩を重ねて居る。斯くて憲本の兩派は、其希望を解散の回避に繋ぎ、政友は現状破壊を欲しながら、破壊に伴ふ危險を虞りて解散に懼れを懷く。斯くて憲本提携說出で、政本合同說燃ゆ。政黨の心理、黨人の心理、此微妙なる政局の間によく現はれてゐる。

○

解散になるかならぬか。解散避け難しと公言する政黨も黨人も、未だ眞實之を覺悟してゐるのではない。政治は勢なり、政治は妥協なり、政策の異同を以て必ずしも解散が來るものと斷定することが出來ないと共に、尚政策に妥協の餘地ありとして、直ちに解散が避け得られるものと斷定することが出來ないのは勿論であるが、前に云つたやうに三派互に背水の陣を布き、政策本位の勇往邁進を唱へてゐる以上、議會に於ける三派の衝突は最早避け能はざる所で、解散の有無は問題でないのにも拘はらず、解散になるかならぬかゞ、今尚重要な問題となり解散避け難しと公言する政黨自らが、出來得べくんば之を避けたいと百方畫策しつゝあるのは、政界の奇觀である。即ち各派は、政策では自主獨行を高調しながら、議會の運命は成行に任せ、進んで形勢を作り、政局の打開を圖るといふ決斷心、勇猛心はない。勇往邁進を絶叫する政黨としては、矛盾した態度である。矛盾はしてゐるが、之が現在政黨の實情である。此處に民衆に立脚せざる現在政黨の弱點がある。

○

解散になるかならぬか。本黨右に傾いて政局に事なからしむるか。左に動いて政局の波瀾を喚起するか。政府膝を屈して其安泰を圖るか。政友自ら面目を潰すか立つるか。或は三派互に主張を固執して、却つて奇怪的に解散を免かるゝか。明るみへ向つた政治の裏にも何作戰を肚せざる三派の秘策がある。問題がある。政策の爭ひは表面の事のみで事實は依然たる政權の爭奪である。國民はたゞ冷然として政界の雲行を眺むるの外はない。（十月十一日）

自然淘汰促成結構

國民新聞政治部長　細野繁勝

一

日本の政黨には純理が無い。曾て何等の合理的妥當性なくして、專ら政權爭奪を事とし來りしが如く、今も依然として眞實の民意とは沒交渉なる虛僞の取引機關であり、それが彼等の存在價値の總てゞある。現に第五十一議會を眼前に控へて、所謂政本合同だ、議會解散だ、いや憲本握手だ、政府黨萬歲だ、などゝ種々の運動や宣傳が行はれ、實際には政府も國民も、將た各政黨の首腦者それ自身にも、全然見据ゑのつかぬ狀態を呈しつゝあるが如き、皆是れ純理に立脚せざるものゝ悲哀を物語るに過ぎない。故に內政問題以上、國家の消長にも關する對支政策や、米國との關係、直前の支那關稅特別會議すら、全然無關心といふ有樣である。

そこで彼等が現實の姿をありやうに描けば、即ち三派三樣の惱みとでも題すべき表現派ばりの圖案、或は寧ろ怪畫が、日本國民の展覽に供せられてゐるのである。政府及び與黨に自信が無く、政友本黨は勿論、政友會とても何等成算を持つものとは見られない。最近三派の政綱、殊に稅整案が發表されて、之を中心に政戰の舞臺を展開するやうに見られぬでもないが、これはたゞ表面上に於ける政爭の題目を、形式的に揭揚しただけの

ことで、實のところは三派いづれも五里霧中、闇中に偵察戰を試みつゝあるに過ぎぬ。

二

もちろん、憲政會は飽くまでも現政權を維持しようとし、政友會は如何にかして加藤内閣を打破せねばならぬといふ作戰目的を持つてゐる。この點は何人の眼にも瞭然たる事實であるが、しかし政府及び憲政會にとつて最も合理的手段であり、且つ最も有利なるべき筈の『議會解散』といふ問題になると、妙に氣おくれして、その決心がつかない。之に對して政友會は、協調内閣破滅後、純野黨たる立場に在る關係上、内心はともあれ、形勢の趨くところ、議會解散敢て辭せずとの鬪志を固めてはゐるが、さりとて本黨と分離したまゝの戰ひは成算が立たない、故に先決問題として、ぜひとも政本合體—その名儀や形式はどうでも—を實現しようと頻りに焦慮する。

この間に處する政友本黨の灰色は、餘りにも鮮かだ。その總裁床次氏は、中秋の東北支部總會に臨んで、解散の鍵は吾輩之を握ると揚言したとか。あだかも政界のキャスチング・ヴォートを握る得意の人を裝つたつもりかも知れないが、その心情はあまりに痛々しく、その行徑はあまりに情けない。政友會と合體すれば、事實上に併呑された結果となり、憲政會と妥協すれば、自らその存立價値を喪失して黨の分裂は避けられぬ運命となる、さりとて現勢のまゝに解散の鐵槌一下し來らんか、さきに普選反對、特權擁護の勇者たりし歷史は、恐らく現勢力の半數をも保持し難いことを豫想せしめる。かくして本黨に取つての最大恐怖は、解散の一語で、彼等幹部の本心を叩けば、世評は如何にもあれ寧ろ憲政會と手を握つて、次期議會を無事に切り拔けたいのが山々であらう。但し、これを表面に打出すときは、黨内忽ち動搖、中橋、鳩山等の所謂合同組が騷きたてるのみならず、地方の黨員も默つてはゐない、天下も亦彼に有利なる悉くを奪ひ取らねば已むまい。是れ即ち、口に强いことを揚言し、我れにも解散の準備ありなどゝ言ふ所以であらうが、その胸中深く藏する解散除けの護り札は、隱さうに隱しやうがないのである。

三

かくの如く三派三樣、その何れもが、毅然たる態度を持し得ず、愚劣なる間牒心理や、見苦しき巴状戰に彷徨しつゝあるは何故か。そは前述の如く、日本の政黨がその根柢に於て純理に立脚せず、民意と沒交渉の産物なるが爲めに、今や第五十一議

會に直面しつゝ

一、時代の進展と人心の趨向を察知する明無きこと、

二、新興勢力の出現に疑惧すること、

三、總選擧に對して確信を缺くこと、

の三點が共通的に彼等の缺陷となつてゐるからである。

言ふまでもなく次の總選擧は、當然普選法に依つて行はれねばならない、殊に憲政會としては、多年普選即行の必要を呼號したる手前、一日も速かに新選擧民の權利を行使せしむべき道徳的責務を有するのである。而かも彼は、新選擧民の如何なるものを彼に提與するかを讀み得ない、或は三菱その他の資本階級を背景とする金權政治を非として、意外なる反動的形勢を惹起するやも知れぬとの危惧を抱くと同時に、直接的には政本合同の氣勢を促進し、爲めに一敗地に塗るやも測りがたき危險なしとは言はれない——けだし政本合同して憲政會に對抗すれば、たとひ政府の力を以てしても、容易に過半數たることを保證し得ないから——與黨既に然りである、況んや分裂後の政友會と、政友本黨とをや。

四

然らば次期議會は、政府黨の作戰と本黨の灰色的態度に依つて、遂に、無事に經過するであらうかといふに、必ずしも然らず、否、これを今日の情勢より推すときは、却つて反對の方向に引きずられ行くやの徴候がありありと映出してゐる。

政治は所詮、勢である。とりわけ日本の如く純理を缺除せる政黨の行動は、その生命及び特質たるべき固有の主義政見に出發してゐないのであるから一時まに合せの政綱政策の如きは如何樣にも變説改論して憚らない。現に政友本黨の税制整理案なるものを見よ先づ政府案を拉つし來つて之を目安とし、政府との互讓妥協を可能ならしむることを第一義として、作成したとさへ傳へらるゝではないか。この故に、彼等の主義主張を標準として、明日の政情を判斷し、議會の形勢を推定することは、大なる冒險、少くとも甚だしき迂見たるを免れない。そこで吾人が明日以後の政界に現はるべき出來事として、豫め想像して置かねばならぬことは

(一)政本兩派の合同論者がこの上益々熾烈なる運動を繼續すること——これが成功すれば議會召集前、急轉直下的局面を打開するかも知れない

(二)次には、議會劈頭、常任委員長選擧に際して、野黨提携の實を擧ぐること

(三)更に明年一月の休會明け後、税制案、其の他の問題、或

は總括的内閣不信任案の提起せらるゝことに依りて政局一變すること

以下少しくこれが説明を加へねばならぬ。

五

吾人は今更、政本合同運動の本質的價値や、その起伏曲折を述ぶる必要を認めない。しかし苟くも、この兩派にして自滅を欲せざる限り、從來の形式的提携より進んで、實際上の合體に歩み寄るべき可能性は尚ほ十二分に存在すると思ふ。少くとも政友會としては、局面一新の必要上、如何なる手段方法を執りても之が成功を期するの熱意があり、本黨の内部にも床次總裁、山本顧問等の數者以外、合同に依るにあらざれば將來の開運を見出し得ずとするものが多いのである。たゞ今日まだそれが表面に露出しないのは、なるべく多數の黨員――能ふべくんば本黨全部――を政友會と合體せしめんが爲めに、機鋒を包んで時機を待つてゐるものと言へよう。故に新聞紙上、幾たび合同運動打切が傳へられても、裏面の往來は決して途絶えず、而して現在では中央よりも寧ろ地方を根據とし、發源所とする合同機運が、切々促進されつゝあることを否認するわけに行かない。

本來、床次、山本といふ本黨の二首腦が、政友會との合體に氣乘りせず、而して黨員の多くが内心合同を欲しつゝも形勢觀望の姿に在るは、どういふ譯かと問ふ者もあらう。之に對して透視術の心得なき吾等は、實際政界の多くの士に聽いて、或るものを歸納するより外は無いが、今假りに、かくして得たるものを赤裸々にぶちまけるならば、兩派領袖の現在に有する地位が、合同に依つて低下するといふやうな可愛らしい考へ方も其の一つであらう。床次總裁が黨首の地位を喪失することも亦その一つであらう。しかし是等は何れも二義的若しくはそれ以下の要件たるに過ぎず、寧ろ主要原因は、次の政權を我れに受領し得べしとする期待が、山本、床次兩者各々の腦裡に鏤刻されてゐることに在る。然らばかゝる期待は何に依つて生れたかといふに、山本男は元老西園寺公の厚き信任に浴し、次の政權本黨を基礎として打建てらるべき場合に、之を率ゐて大命を拜するの確信を棄てる譯に行かぬ。また床次總裁は、穩健着實ぶりに於て、即今加藤高明子と鼎立する政界の至高權威であるといふ點に於て、元老の信任と諒解とを得てゐる上に、牧野内府からも重要なヒントを與へられてゐる。しかも一方には加藤首相より、若槻、濱口兩相を通じて、方今天下の事、使君と操あるのみといふた風の、次の政權に對する默契的信倚を表されて

ゐるのであつて、第三黨に墮ちたるの變化も、是等千鈞の鐵鎖の前には何等の憂慮を値ひしない、……といふのが、問者に對する解答の要領となる。

吾人は素より是等の消息を全く肯定しようとする者ではない、しかし假りに之を眞實僞りなしとして、その效果を檢討したらどうなるか。元老乃至内府の諒解とか、ヒントとかの、全然齒牙にかくべからざるは勿論、政治の實勢を無視して議會の少數黨に國柄を委託するものありとせば、それは強ひて時局を不安に導くものである。況んや加藤子の構ふる秘密取引の如きは論外も論外、萬々一何等かの事實があつたとしても、桂、西園寺の昔ならばいざ知らず、今日かゝる非民衆的空想、幻覺的脚色に囚はれる者は無からう。若しあれば、それこそ合同運動、否、分裂騷動は世表に躍現し來ること必定。

六

次には議會召集後の形勢であるが、その第一試錬に於て、常任委員長を野黨たる政本兩派に於て掌握すれば、もはや大勢の向ふところは明白である。しかし所謂穩健着實と公明正大の名の下に、百六十名の第一黨を阻外するを非とする聲が本黨から起れば、政情は頗る面白くなる。何れにせよ歳末の議會は、復活の假議院を修羅場化する程の激戰を見ないとして、さて明春の休會明け、いよ〱本舞臺の開幕となつたら如何。

世人は政府及び政、本の三税整案を比較し、憲、本の妥協頗る容易なるに反して、政、本兩派の距離甚だ遠きを論じ、政情變轉の秘機一に之に懸るが如く看てゐるが、議會の問題は豈ひとり税整案のみに止まらんや、假りに恰好なる問題が取急いで發見されないとしても、時と場合に應じて何時如何なる案件をも發唱し提起し得る議會の性質に鑑みれば、豫想以外の事件に依つて政府の危機を迫出し來ることは、想察に難くない。今は突發的豫想外の事項を豫想しなくても、例へば政友會が内閣不信任案を提出した場合はどうなるか。また現に本黨の指摘しつゝある綱紀紊亂の問題を、政友會から高調し來るとすれば、本黨として如何に之に反對し得るであらうか。更にまた、憲政會の在野時代、彼等は盛んに物價調節を叫び、金解禁を唱へ、貴族院改革をも主張したのであるが、その公約の一つとして完全に實行されたものがあるか、彼は却つて研究會と苟合せるのみならず、黨略に酬ゆるに黨略を以てするの現狀であるとして、政友會が政府の不信を擧げて攻撃の矢を連發するとしたら、本黨は如何にして政府辯護の勞を執り得るだらうか。

觀じ來れば政情の變轉はなか〱に豫斷し難いが、解散恐怖

病に罹れる本黨と、次期政權の甘夢に醉ひつゝある床次氏等が、密かに憲政會と氣脈を通じ、極力政府と接近して、內心之に引ずらるゝことを僥望してゐるとしても、事實の推移は着々之を裏切り、却つて政友會に引きずられて漸々、議會解散の無理心中を遂ぐると云ふ結論に進むのではなからうか。政本合體の成るにもせよ、成らざるにもせよ、兩黨別個の形體を持ち續くる限りは、而して本黨自ら憲政會に歸化合體せざる限りは、かくなるべき運命と覺悟して可。

七

以上は主として今後の政情、特に來議會の形勢如何を焦點とした爲め、勢ひ中間色を呈しつゝある本黨の向背に、興味の中心を置くことゝなつた、隨つて洞ケ峠に對する古今普通の國民感情を、やゝ強烈に出し過ぎた嫌ひが無いでもない。しかし特に本黨そのものを非議し、或は特に本黨にのみ多くを期待するが如き不公平は、吾人の斷じて爲さゞる所である、我が國の政黨が、國民と沒交渉なる蝸牛角上の惡戯に耽りつゝあるは各派悉く同一列、素より本黨の劣れるにあらず、政憲二派の優るゝでもない、三派の何れが優越し、何れが劣敗しても、國運民命に多くの新意義を加ふるものでないといふのが、僞らざる吾人の見方である。普選即行を標榜せる憲政會が、政權に坐すれば及ぶ限り議會解散てふ必然の論理を忌避する、是れが何よりも明白な證據ではないか。謂ゆる税整案が何の價値ぞ、そは萬一解散の餘儀なき場合に於て、多數の小農及小作者を引入れんが爲めの地租委税點であり、腰辨及小商人を操縱する爲めの所得税及び營業税改正であり、更に勞働階級の歡心を買ふべく、俄か仕立の勞働立法を企圖したるに過ぎないのである。底を割れば臭氣紛々、時勢人心の捉えられざるも無理がない。

八

日本の政治には、方法があつて目的がない、手段、機略が論究講策せられるだけで原則が缺けてゐる。故に政黨の政綱なるものは、月並のせりふを陳列するか、眼前一時の凌ぎをつける事だけに心目を燒爛して、百年の大計はおろか三年五年の小計も發見されない。本黨最近の税整案の如きは、低級なる批評の範圍を出でず、政見と稱する價値すら無いが、自主獨往を叫んで、民主的政綱を打點すべく努力しつゝありと稱する政友會のそれに在つても、僅かに地租委讓の一案以外、やはり現狀に囚はれて、殆ど見るに足るものなきは、何たる國民の不幸であらう。いやしくも國政の一新的更革を庶幾するといふ以上、法制

も、經濟も、教育も、外交も、その總てを根本から立て直すといふ覺悟の下に、經綸が暢べられねばならなかつたのである。

吾人は必ずしも、現實の勢力たる政黨を無視するものではない、ただその存在を合理的に認識せんが爲めには、各黨それ〴〵の特質生命を欲求する。しかし憲政會が、半官僚的漸進主義を巡るに對し、政友會は向民主的急進主義を取り、そして本黨が國粹本位の保守主義を堅持するとせば、そこにそれ〴〵の獨立性が見出されぬでもない。要するに冒頭に言つた通り、純理に立脚せざる政黨は無價値であるから、成るべく強い刺戟を與へて、彼等の自覺心を喚起することが、今日の要務であらうと思ふ。そして單に內政問題と政權爭奪を本業とせず、大に外政を擴充し、國民生活上の實際問題に眼を開くやうにしたい。この意味から、第五十一議會の政戰と離合集散を見れば、前途頗る遼遠の感はあるが、現狀の偏劣さを國民の展覽に供することも、また普選實施後の一教訓たる價値はあらう。そして議會解散ともなれば、一段と自然淘汰の機運を促成し、進化の歷程を敏速にする效果があらう。（一四、一〇、一一）

次の議會は解散か否

報知新聞政治部長　井上勝好

一

次の議會は解散かどうか。政府はどんな決心を以て議會に臨まんとしてゐるか。憲政會、政友會、並に政友本黨はどんな作戰を以て進もうとしてゐるか。苟くも政治に理解を持つ程の何人も注視してゐるところである。

而して、政黨三派の態度、來るべき議會の向背、夫れは極めて單純な答辯も與へられるが、また頗る複雜な事情も伏在してゐる。蓋し、そこに政府にも少からぬ惱みがあり、政黨にも重大なる苦みの存在する所以である。

即ち單純に通り一片の解釋により政局の推移を判斷すると、政黨三派は重大な惱みを抱きつゝ議會に臨み、種多の曲折波瀾を經て結局議會は解散になるものと觀測する事が出來る。乍併、政治なるものは、左樣に簡單に、左樣に單純に片付くものでなく、また一片の理窟通りに行くものでもない。勢の赴く所、如何に變轉し行くか、そこに生きた政治の妙味があり、特色がある。

二

來るべき議會に於ける政界の向背を今少しく討檢すると、勿論今後の經過推移に俟つべきことと言ふまでもない所であるが、併し少くとも田中義一男が軍服を脫いで政友會の總裁となつた時を以て觀測の出發點としなければならぬと信ずるのである。

世間には種々に傳えられてゐるけれども、田中男の政界乘り出しが、例へ新黨樹立の目的を達成し得ずして今日に及んで居るとは言ふものゝ、田中男としても一大決心を有せずして輕々に乘り出したものと斷ずべきでないと同時に、憲政、政友兩派の提携斷絕、聯立內閣の破壞に於いて政權が他に異動せずして加藤子の憲政會單獨內閣の成立となつた時、政友會としては、政友本黨を伴つて政府に對し決戰を試むべく直路猛進の道をとろうとしたのも當然のことである。

政友會が若し政府と決戰の勇氣もなく議會に直面せんとするが如きことあらば、田中男の乘り出しは全然意味を沒却することゝなり、政憲の提携破棄も無意味となる譯である。

斯くの如くにして政友會は次の議會は解散を必然の歸結として進みつゝあるは當然であるが、一面政府に於ても、政友會の態度に鑑み、且つ普選を憲政會內閣の手によつて實施したい決心の下に進みつゝあることは推察するに餘りある次第であるが、しかしまた、政府として、議會の解散を期すべく橫目もくれずに進んで行くのは尤も拙なる策であつて、解散を避け、政友會の裏をかくの如き手段に出るのが上策である。

加藤子が、貴族院に手を廻して研究會と結び、政友本黨を收化に導いて行かんとするの狀あるは確かにこの見地から來てゐるものであらうと見られると共に、そこに多大の苦心が潜在する。

三

政府の惱みは口に解散の決意を示しては居るものゝ、解散後の議會に確信がなくては清浦內閣崩壞の二の舞を演ぜないとも限られぬ。即ち政府は來るべき議會に於て、野黨の大多數を以

て政府の重大政策の一である税制整理案を否決するか、根本的に修正を加へて可決するか、豫算案の通過を阻止するか、將又不信任案が成立を見た時が、何れか其一を以て議會の解散を斷行するの決心であるが如く觀測されるのであるが、苟くも解散を今日に豫期せんとするには、解散の結果必然行はれる普選法による第一回の選擧に於て完全に優勝し得るの確信がなくてはならない筈である。何等の勝算なく徒らに解散を斷行して快を叫ぶのみでは矢張り先年の清浦内閣の末路と多く選ぶ所がない。

素より普選法による選擧が有權者の増加、社會思想の變化、時代の趨勢から見て果して如何なる結果を生むかは觀測頗る困難であつて、從來選擧通を以て任ずる人々と雖も判斷に苦んで居る筈である。故に政府としては萬已むを得ない所まで行かねば恐らく解散を決行することもなく、愼重なる態度を取ると共に、政友會は最早完全なる野黨として立つて居るから手の下しやうもないが、本黨は野黨には相違ないとしても、政府との間に一脈の相通ずる何者かがあるのを巧妙に利用して解散に致らしめずして時局の收拾に當らんとするの底意がなくてはならない。否、其底意のあることは蔽はんとして蔽ふことの出來ない事實であり、また政府としては其手段に出づるのが上策である。

こゝに於てか問題は一に政友本黨の態度如何に歸着する。

四

政友本黨の態度を論ずるに當つては、先づ例の政本合同問題から論じなくてはならない。

政本合同問題は、一朝一夕の問題ではなく、政憲聯立内閣か成立當時から起つたといふよりも、政友會分裂の當時からこの問題の起るべきことは豫期せられた所のものである。從つて事ある度に提携合同運動の起るは自然の勢である。

否、政憲提携の出來たのが抑も不思議に近いもので、普選の實現なる共同の大問題があつたため、中央に於て主義を異にし、地方に於て選擧の地盤を相爭はなければならぬ兩黨が、僅かに一年に過ぎなかつたとしても、提携して居たのが奇なる勢であつた。これに反し、政本の兩黨は元來一つの釜から育つた者、合同提携の運動が起らなかつたならば夫れこそ不思議であらねばならない。

而して政憲聯立内閣時代に合同問題の起つた際、本黨では一笑にふし去つて、政憲分裂の時にあらざれば、耳を傾ける譯に行かないとして居つたが、愈々政憲の提携破れた時、政友會は、其機會に於て一氣に政本合同を實現して田中内閣の成立を

期さんと欲し、電光石火的の運動を行つたのであつたけれども本黨にはまた床次内閣成立の見込を樹て自重して動かず、遂に合同問題は流産して加藤子の憲政會單獨内閣となつたのである。爾來政本の間は田中、床次兩總裁の會見によつて現はれた形式的の政本提携に續いて、政策第一主義とか、獨往邁進とか政本互に政綱政策の決定を急いで、地方遊說に合同問題の道程を全く變更した形となつて居る。

形の上からすると事ここに及んでは政友會は合同問題を眼中にせず、獨自の立場から來る者は拒まずとの見地に立脚して本黨の分裂に期待するか、或はまた、間近に迫つて居る議會に臨んで、いよ／＼合同問題の本舞臺を開始するより外ない事となつて居る。然れ共表面は兎も角、裏面に於ては不斷の合同運動が行はれつゝあるから機さへ熟すれば急轉直下的に事の成立を見るかも知れない。

乍併更に翻つて本黨の態度を見るに、明かに二個の潮流がある。曰く急進合同派、曰く着實穩健自重派である。前者は中橋德五郎氏の一派であり、後者は床次總裁、山本達雄男を中心とする總裁派である。數の上に於て兩者何れが優位にあるかといふに、床次氏の周圍には將來床次内閣の空想にあらざることを確信して合同の不利を唱へて居り、その勢力は中橋派の比でないと見るのが正當であらう

果して床次總裁を支持する人々が右の確信を以て進むことゝなれば、合同問題は容易に成立しないものと見るのが相當で、勢ひ合同派は脫黨を決行するに至るものと見なければならならい。この事態が出現するものとして床次氏を中心とする本黨は如何なる進退をするであらうか、或は憲本提携、或は野黨として態度を明にするかにあるが、本黨本來の立場からすれば、斷黨として是々非々位の所で行くのが順當である。而し、そこに一の問題がある。即ち是々非々で行けば、税制整理案乃至豫算案に對しては妥協の餘地充分あると見られるが、政友會が政府に對して、不信任案を提出した時、本黨はこれを如何に取扱はんとするか、若しこれに贊すれば議會は多數を以て通過し、解散は到底免れ難いことゝなる。反對すれば解散は此點に於て免れるが、かくてなほ黨内を無事に納め得るの信念ありや否やの疑問がなほ存在する。

五

要するに、今日の政界に於ては政友會が一等自由な立場に居る。この自由な立場を巧に利用して勇往邁進すれば、尤も有利な地位を作り得ることは想像に難くはない。更らに解散を目標

に、總選擧の準備を充分にすれば、今日の黨勢を増すことも減ずることはないと見てよい。

尤も不利な立場にあるのに本黨である。政本合同せんか、如何にしても床次氏は田中男の下に走せ參じなければならない不利があり、合同を排せんとすれば多少に拘らず脱黨者を出さんとするの兆歴然たるものがある。

さらばといつて床次氏を總裁に田中男をその下風に立てることは恐らく不可能であらう。

こゝに於てか、依然第三黨として政府と手を握るか解散を期して猛進するかであるが、例へ選擧準備充分でありとするもいよ〳〵選擧に直面すれば、地方地盤は元來政本兩黨は同一であるから憲政會を有利に導くと共に、政友會に有利な立場こそ與へるが本黨として全國的に利益を得る所甚だ少き恐れがある。これ實に本黨の重大なる惱みと見なければならない。

六

政治のことは前にも述べた通り全く豫斷を許さないが、政友會並に本黨斯くの如き立場と態度を以てせんとしてゐる際、政府並に憲政會は政友會を當面の敵とし、本黨を操縱することに苦心を拂つてゐる所、なみ大抵の業としも思はれない。貴族院の研究會幹部を政務官にして政本兩派殊に本黨を牽制せんとするの策も研究會の熱度に不足があり、これのみによつては成功の程も疑はれるが、政府としては今日の場合議會の解散は終局的にはやむを得ないものとしてゐるが、出來得る限り、回避して來議會の切り抜けを講ぜんとして、惱みつゝあるは事實と認めてよい。

本黨も亦、解散によつて不利益な立場を招くよりも、自重して解散を避くる策に出で、將來に有利な立場を作らんとしてゐる。この計畫が豫期した通りに行くと否か、斷言は出來ないが、政府の考ふる通り、本黨總裁派の企圖する通り、解散回避の策が成熟するものとすれば、來るべき議會は波瀾重疊に免れないけれども、解散はなくして濟むことになるであらう。(完)

十字街頭の遺失物

讀賣新聞
政治部長　中尾龍夫

一、犬の鳴き聲と議會心理

院内の廊下で、今年の議會は泰平無事だネ、なんて話し聲が聽かれる場合でも、ものの卅分としない内に、議場で犬の鳴き聲なんぞの起るのが衆議院の恒例である、まして次の議會は八分通り解散だらうと觀られてゐるのであるから、どうしても一と騷ぎなくては濟むまい、殊に政友本黨の態度如何で、其の騷ぎが醜くくもなり、張合あることにもならう。つい先頃、床次君は仙臺の宮城支部大會の席上で『議會解散の鍵は我輩が握つてゐる』と豪語してゐたが、形の上では確に其の通りである、成る程解散へのキヤスチングボートは疑ひもなく本黨の掌裡にうろついてはゐる、しかし其の本黨が、果して政友會の希望し慫慂してゐる通り、純野黨として進退するかどうかは頗る疑問である。而も解散をコレラの如く恐れてゐるのは獨り本黨ばかりではなく、解散より外に生きる途のない政友會内にも解散眞つ平と云ふ連中が尠くないし、總選擧には比較的都合のいい立場にある憲政會内にも、解散は困ると窃に本音を洩らしてゐる手合が可なり多いから、順當に推移するものとしたら、どうしても解散にならねばならぬ筈の次の議會ではあるが、議場心理の動き方一つで、どう風向きが變るか知れたものではない。尠くも政友本黨は現に追分に立つてゐる。そうして議會を迎えんとする政局は、黑い幕に蔽はれてソツと十字街頭に捨てられてある。

二、政府と與黨の腹

普選になつて、戸別訪問や投票賣買は假りに之を抜きにしても、いざ總選擧となれば、どこの選擧區から打つて出るにせよ、先づ前後二回の依頼狀配布と演說場の借受け、それに各方

面の運動費を合算すると、最少限度一萬二千圓は消えてなくなる、運惡く競爭が猛烈になつたら、選擧費のかさみには限りがなからう。政府としては是非共憲政會と共の他の與黨議員を併せて二百名以上を當選せしめなければ勝算はない、二百名を當選させるには二百五十名乃至三百名の候補者をヅラリ選擧場に送り出さねばならぬ、凡そどれ程の金が要るかは略想像がつこう、而も選擧は水ものであり、所謂普選は第一回の試みであるから、安達選擧の神を陣頭に進めたにした所が、勝手の知れぬ爭ひであると同時に結果の判らぬ戰さである。

加藤首相を初めとして、賢明な若槻、濱口、江木等の諸君が自重するのも當然である、就中加藤首相としては、ふところの痛む仕事であるから、勝算はあるにしても愼重の態度で解散を考へ、出來たら之を避けようと努めるのが自然である。同じ憲政會でも黨に居殘つてゐる留守師團長格の幹部は、まあ解散だらう、と言つてゐるが、政務官連中は解散迄は行くまいと觀てゐる、もの共進めの陣笠組に至つては、十中の八九迄解散を怖れ、逆櫓はないかと探し廻はる人々であるから、大勢は察するに難たくない、政友本黨の出足に注目してゐる所以は其處にある、彼等は解散を避ける爲に、餘り見苦しい態度と術策とを弄せぬであらうが、世間體をつくろひ得る程度で本黨と氣息を通じ得るならば、進んで解散を擇みもすまい。

三、自主獨往の政友會

岡崎小川兩相の退却を豫定の退却とすれば、政友會の現狀は疑ひもなく自主獨往の立場にある、しかし憲政會に振り捨てられ、是れからは一緒にと手を差伸べて本黨の袖さえも摑み得なかつた點から考へると、今の政友會は横道のない一本街道へ追ひ込まれてゐる、その一本街道は解散への道であるから、彼等としては是が非でも解散を覺悟で進まねばならぬし、解散が倒れる道でもあり生きる道でもある、唯本黨との提携若くは合同が確實となるに從つて政治的復活が有望となり、政權に接近する公算が多くなるのである。

であるから、彼等が解散製造に餘念なく、本黨抱き込みに腐心してゐるのは當然である、從て田中總裁は素よりのこと、氏を取りまく一味は今後も同じ目的に向つて邁進するであらうし、議會の近接すると共に解散製造、政本提携に熱中し、議會開會後は狂態を演じて迄も政府に食つてかゝるであらう、政友會本部の玄關には既に政府不信任案が額を出してゐる。

何と言つても、中橋理庵君や鳩山一郎君を煽動して合同熱を高め、内外呼應して政友本黨を動かしたら、政本合同が出來る

ものと早合點したのは政友會の違算である政友會としては、一寸合同も望みがないと見込んだら議會前に本黨の斬りくずしに着手するかも知れぬが、議會前に餘り効果は收められない、しかし自主獨往の政友會が、程なく政本との合同若くは提携を目當に騷ぎ出すのは當然過ぎる程當然であつて、東京驛發の下り列車が品川驛を通過するよりも尙間違ひのない事實であらう。

四、鍵を預かる本黨

本黨が解散の鍵を握るのか、選擧費が解散の鍵を握るのか、其の邊は一寸疑はしいが、現に本黨内には解散忌避黨と解散覺悟組とが渦をまいてゐる、表面上は解散を除けものにしてゐるが政本合同派は解散覺悟組であり、非合同派は解放忌避黨であると同時に公黨の面目を重しとする手合である。更に忌憚なく言ふと、解散覺悟の合同派は田中政友總裁の財布を信頼する愛黨者であり、非合同派は選擧費の調達を困難と懸念しながら本黨自體の局面を打開して行こうとする愛黨者である。一つ語を換へると、合同派は總裁と黨とを殺して黨員を救ふとする一味であり、非合同派は總裁と黨員と黨とを同時に救はふとする蟲のいい同志である。

床次總裁と雖も、解散後の總選擧に投げ出す金の調達が十分確實であつたら恐らく解散を避けはしまい、また、今日政友會と合同する位なら、曩に彼等と別れはしなかつたのであらう、急いで政權に近づくのも必要であらうが公黨の面目を踏み潰すのは更に考へものである。現在洞ケ峠に陣をしいた本黨が、近く政府側に下りて行くか、政友會側に下りて來るかは、暫く臆測を許さぬが、恐らく本黨としては萬人に聞かれて無理のない理由の製作に努めであらう。

五、眞の國民的政治まで

解散か、妥協か、想へば次の議會は全く謎である、政府としては次の議會を解散しなくても其の次の議會を解散する當てがあ、政友本黨は差當つての解散を避けて局面の打開を求めてゐる、政友會は橫町なしの一本道路を猛進しようとしてゐる、之等の相異つた考へを以て進もうとしてゐる政黨の立場を前提として、直ちに解散の外途なしと片づけて仕舞ふのは聊か早計に過ぎる、恐らく各政黨の現狀は此儘大差なく議會迄續くであらう、總ては議會開會後の事であり、開會後の推移は議會心理の中に包まれてゐる、故に其の時の風次第で、或は情實と理由の如何に關係なく、大勢は解散に向つて突進するかも知れぬ。

しかし翻つて考へると、眼前に於ける三派の態度などは餘り

大きな問題ではない、政友本黨が如何なる進退を試みるにしても、普選に依る總選擧は早晩實施さるべき運命にある、其處には唯時の問題が殘されてゐるに過ぎない、恐らく今後數年間は政局の安定を保し難く、現に各黨の恐れつゝある解散も、幾回か餘儀なく繰返へし繰返へされ、各黨代議士の顏觸を一新すると同時に無產政黨の出現に機會を與へ、所謂金權候補の周圍からは黃金の燦光次第に衰へ、遠からず新勢力の壓迫に依る劃時代的新陳代謝が行はれ、新人と新政黨とが生れ來つて、政界の空氣を根本から更新するであらう、眞の國民的政治はそれからである。(大正十四、十、十三日)

在歐通信（第六）

大陸に立つ迄

河合榮治郎

一

R君

僕がオックスフォルドを立つて、ボーンマウスに向つたのは、此で少し休養をしてから、再びロンドンに出て、英國生活最後の纏めをしやうとする爲めであつた。一體に東はフォルクストーンから、西はトウキーや、プリマウスに至るまで、英國の南海岸は贅澤な避寒地であり、又海水浴場である。日本の海岸に見るやうな自然の少いのは稍物足りないとしても、適度に人工を加へて便利に作つてあるのでよい。殊にボーンマウスの海岸は、白い崖の上に松林があり、林間の小徑は散歩するにふさはしく、前には遠霧の間に、アイル・オブ・ワイトを眺める。此の島と海岸との間をサザムプトン、アメリカ間の汽船が往來する。友人Hは毎日此の海岸に立つて、汽船を眺めては歸朝の日を待ち詫びたといふ。冬の日に殆太陽の光に接しない英國では、sunny south と云つて此の邊一帶の海岸に冬も日が射すと云ふので、大變な事の樣に珍重するが、野暮でなくて華美でないボーンマウスは、勉學に疲れた身を休めるに申分ない。

R君

僕は九月末から三月の半ばボーンマウスに立つまで、オックスフォルドに滯在したのではあるが、其れは必ずしも不斷の蟄居の生活でなかつた。學窓の靜さを破る事件が一つあつた、それは千九百二十三年冬の總選擧であり、翌年一月の勞働黨內閣の成立と云ふ、僕が此の洋行生活に出會つた最大の出來事であり、又極めて幸運の事件であつた。ラスキン・コレッヂの副校長ブラウン氏夫妻の家に居たので、僕はよく自分の滯歐中に、

英國に總選擧があればよいがと話し合つたものであつた。所が十一月中旬所用あつて獨逸に往き、十日の旅をして、オランダのフラッシングから北海を渡つて、フォルクストーンに上陸し、夕刊新聞を買つた時、それは選擧戰の記事に充ちて居るのを見出した。

僕は今當時の總選擧の成行に付て、此に詳しく語らうとしまい。要するに前首相ボーナー・ローが當分の間、保護政策を採らざるべしと云つた聲明があるので、首相ボルドウィンは議會に絕對多數の議員を持つたに拘らず、保護政策の採否を民意に問はんとしたのである。保護政策の問題を提げて、總選擧の行はれたのは、千九百五年であつた。そして此の時保守黨は慘な敗北を遂げて、爾來十年自由黨の優勝に指を染めることが出來なかつた。二十年を經て此の問題は再び政界に現はれて來た。唯保護政策を採るべしとの論據が英帝國の結合とか、產業の勃興とかに求められずして、勞働者の失業豫防に求められた所に、時代の趨勢の變化が伺はれるのである。

R君

僕は英國に於て此の政戰に遭遇した幸運を喜び、如何にして選擧の狀況を視察すべきかを考へた。數人の英人に圖つた結果、僕の採つた計畫はかうであつた。第一にノルウイッチ、リンコルン州か又は南部の農業地方を注目すべきである。今後の問題は、保守黨が如何に此の地方を守り、反對黨が如何に此の地方を侵略するかに在る。此の農村に於ける保守急進の攻防を視やう。第二に保守黨無二の堅城であり、保守政策源地たるバーミングハムに足を入れねばならない。第三に首都のロンドンに於て政戰の結果に接しなければならぬ。最後に何れか一つ、全國無二の激烈なる政戰地を選んで、其處に視察を集中しやう、そしてそれはレスターを措いて外にないと思つた。

二

レスター市は製靴工業の中心地と云ふ丈で、土地として決して特筆すべき場所ではない。唯偶然にも此にチャーチルとペシック・ローレンスとが雌雄を爭つた所に興味があつた。チャーチルは精悍の氣に滿ちた才人である。彼が其の父ランドルフ・チャーチルを書いた傳を讀むものは、彼に惠まれた才筆を認めざるを得ないであらう。雄辯に於てロイド・ジョージに次ぎ、單騎敵の牙城に肉薄する戰鬪の氣力に付ても決して不足はない。ロイド・ジョージ內閣の末期に於て、政界將來の立物として、多大の期待を持たれたのは、彼とバークンヘッド卿であつた。然し唯彼に缺けたるものは人の信賴を繫ぐに足る德操である。人は甘

て彼を評して、彼に缺けたるものは己を忘れてムキになる眞劍の心である、彼は余りに自己を考へ過ぎると言つた。今世紀の始め彼は保守黨にあつた、次で自由黨に走つたが、大戰中に於いて、彼の中に巣食つてゐた軍國主義的な帝國主義的な氣持はぐんぐんと育つて來て、少からず勞働黨方面の反感を買ひ、最近に於て彼は明に保守黨に接近し、最も露骨にある意味に於て最も大膽に、勞働黨に攻撃を加へて來たのである。勞働黨の平素の反感から云つても、又有力なる敵の一將を失はしめると云ふ立場から云つても、勞働黨が主力を彼の攻撃に集めたのは當然であつた。彼と反對に立つたペシツク・ローレンスはスノーデンやグラハムと相並んで、勞働黨中の財政通である。チャーチル自ら敵を稱して勞働黨內閣の未來の藏相と稱したが、ともかく色々の意味に於て、此の勝敗は全國の視聽を集めて居た。

僕はレスター市にチャーチル奮戰の跡を辿つて、何となく彼の影の薄いことを感じ、彼を援護する人々の氣力に乏しいことを思つた。そして十二月六日投票の日、バーミングハムに半日を送りロンドンに出た。此の日は夕方から霧の最も濃い日であつた。夜の八時頃チェアリング・クロッス街を歩くと、自由黨系の新聞デーリー・ニュースのスクリーンは既に選擧の結果を報じて居た。そして既に保守黨の敗報は頻々として至り、アスクィスは次の首相になるかも知れないなどと、大きな寫眞を出したりした。其處を辿つてトラファルガル・スクェアーに出やうとしても、雜踏で到底歩けない。其の年第一と云はれる位の濃霧であつて一間先が見えない、自働車は盛に警笛を鳴らすと云ふ有様で、一種悲壯の晩であつた。僕は適度に街頭の模樣を見てから十時に開かれるI、L、P、のクィーンス・ホールの會合に出席した。九時半といふにあの大きなクイーンス・ホールは人で一杯であつた、I、L、P、のセクレタリーなるフェンナー・ブロックウェーは、紅い洋服を着けて演壇に立ち、頻々と來る選擧結果を讀んで、聽衆に報告した。其の報告に連れて群集は一喜一憂した。最も大きな喝采を拍したのは、チャーチルの敗北、ローレンスの勝利であつた。此の時群集は一齊に起つて、レッド・フラッグを歌ひ始めた。又ミス・ボンドフィールドの勝報も人を喜ばせた、相手は自由黨の前大臣サー・ドナルド・マクレアンである丈、殊更之は祝はれた。惜まれたのはヘンダーソンのニューカッスルに於ける敗北で、敗報至るや慘として聲なかつた。勝てないにしても喜ばせたのは、パートランド、ラッセルがロンドン市チェルシアの選擧區で、千數百票を得た事である、ブルジョアーの住宅地に於て之丈を獲たのを喜んだのである。やがて勝の聲を荷つた議員がプラットフォームに現はれて喝

采を受け、敗れた戰士が同情の言を得て次の戰を鼓舞される。其の夜の熱狂の狀は筆に盡しがたいものがあつた。假令全部の報告は來なかつたにしても、ともかく保守黨の敗北は明であつた。勞働自由兩黨の關係がどうなるかに、一抹の疑惑はあるにしても、現內閣は倒れる、今までの政治史に類例のない大きな躍動が此に現はれるといふ、豫感は人々の胸を躍らせた。興奮せる數千の人々は、レッド・フラッグを高らかに歌つて、ホールを出たのが、曉の二時半であつた。僕は大きな歷史的事件に面接しつゝある自分を顧み、驚くべき濃霧の中を、手探りするやうにして、往來を傳つて、辛うじてホテルに戾つた。異常の事件の進展を前にして、興奮は容易に自分を眠らせなかつたが、やがてウトウトと目を閉ぢたのは、明方近くであつたであらう。

三

翌日ラスキン・コレッヂへ戾つた時の食卓は、エキサイツングの頂上であつた。ブラウン氏夫妻は、クェーカーの信者であつて、そして勞働黨員である。彼も亦「良心的反戰者」として、大戰中に入牢の苦に會つた一人であつた。保守黨は約百名を失つて、二百五十名となり、勞働黨百九十余名自由黨百六十名と云ふ形勢となり、英國政黨史上例なき三派鼎立の姿となつた。多分は勞働黨の內閣となるであらうと云ふので、ラスキン・コレッヂの人々は、各々勝手に新閣僚の物色を試みた。首相がマクドーナルドたることは疑ないとして、外相は多分氏が兼ねるであらう。大藏大臣には勞働黨內に人が乏しくなつた。スノーデンを始めとしてグラハム、ペシック・ローレンス等が並んで居る。唯上院議長に付てホルデーン卿が就任するかどうか、上院に黨員の殆どなかつた勞働黨丈に、之は少からぬ問題であつた。

多分は勞働黨の內閣となるであらうとは云ふものの、當時の形勢は決してさうとのみ樂觀はされなかつた。保守黨系の新聞は盛に自由保守の提携を主唱した。色々の領袖を中心としての暗中飛躍は、必ずしも勞働黨の組閣を既定のものとするものではなかつた。勞働黨幹部は逸早く、單獨內閣を組織するの決意と準備を有する旨を發表した。然し問題の疑雲を一掃して、時局を確定せしめたものは、自由黨大會に於けるアスクイスの演說であつた。僕は當時のアスクイス一派の公明な態度に感歎するものであるが、次の內閣は反對黨中の多數黨の負ふべきものなりとし、勞働黨に其の重責と名譽とを奪ふべき理由毫もなき旨を切言し、自由黨は其の政綱の許す限度に於て、之を援助すべき旨を聲明した。勞働黨の人々が之でやつと事が決定したと、稍眉を開いたのは此時であつた。自由黨としては、政略上

からもあゝするより外なかつたかも知れない、然しあの時のアスクイスの態度は水際立つて冴えて居た。一つは自由黨中左翼を代表するアスクイスやサー・ジョン・サイモンの一派が今度優勝の地位に立ち、ロイド・ジョージを始めサー・アルフレッド・モンドを主とする右翼の一派が之によつて慘敗を遂げたので、自由黨と勞働黨との間は、無緣の關係ではなくなつた。勞働黨內閣の成立は、一は自由黨內部に於ける勢力の消長に負ふ所が尠くない。遮莫あの時のアスクイスの聲明は、いついかなる時にも進退を公にし得る心の準備を有することを示すものであり、又逸早く其の態度を宣明することによつて、卑怯なる妥協苟合を排せんとするもので、いかにも英國公共生活の公明さを思はせるものであつた。

R君

此の後勞働黨はアルバート・ホールに於て祝勝の大會を開き、遂に內閣を組織するに至つたのであつて、確に世界の勞働運動史上に於て、特筆すべき大事件であつた、然し其は今此に、僕の述べんとする所ではない。唯僕の云ひたいことは、此の事件が必ずしも勞働黨の自ら喜んで迎へた事ではなかつたと云ふことである。世人は勞働黨が一躍して政府に立つに至つた變化に驚くが、寧ろ僕は勞働黨にとつてあれは有難迷惑であつたと思ふ。シドネー・ウェッブは勞働黨は千九百三十年に於て、多數黨となるだらうと豫言をして居た、其の時に於て政府に立つも決して遲くはないし、寧政略上は有利であつたに違ひない。然るに豫期せざる三派の頭數の關係から、少數黨內閣を作らざるを得ざるに至つたことは、彼等にとつて喜に非ずして、責任上止むを得ざるより來るものであつた。彼等は寧ろ退いて靜したかつた、そして羽翼の成るを待ちたかつた、然も彼等の立つたのは、責任を避くる卑怯の誹を免れん爲であつた。同黨の聲明に於て我々はレスポンシビリチーを避くるものに非ずと言つたのは之である。蓋しチャーチル一派は常に揚言して "Labour is unfit to govern" 「勞働黨は政治を行ふの資格なし」と誹つたものである、勞働黨の奮起は之に答へて、"fit to govern" たることを示すにあつた。

かうした少數黨內閣が、いかなる方針で進むべきかは、尠からぬ興味がある。僕の見る所では勞働黨內一派の意見は、政權を得たるを利用して不正に非ざる範圍に於て、黨勢擴張と黨是の宣傳に全力を傾くべきを主張した。之はI、L、P、方面の急進派の意見であつて、かくて始めて少數黨內閣に甘んずるを償ひ得べしと云つた。他の意見は實際に於てマクドーナルド等の採用した方針で、一般人民に勞働黨が "fit to govern" たる

ことを示すにあつた。勞働黨組閣當時勞働黨に屬せざる英國國民中に、三つの不安の問題があつた、一つは財政に關するもので、いかなる急激突飛な社會主義的立法を採るかの不安である。第二は英國海軍、第三は英帝國の運命に關するもので、彼等の感情は、此の二つに付て、異常な神經質を以て、勞働黨の態度を注視させた。若し勞働黨の政綱が一々實現されるとすれば、必ずや此の三者に付て、彼等の失望を買ふに相違ないのである。然し民衆中のより少からぬ部分は、勞働黨が行ふ政綱の內容に對してよりも、寧ろ勞働黨員の輕擧と妄動とによつて、政界に不當の動搖を與ふることを嫌ふものがあつた。若し勞働黨にして輕擧妄動を愼しむならば、此に勞働黨が從來負うた不當の不信用を減ずることが出來る譯である。之が結局內閣の採つた政策である。今日に於ては、世人の勞働黨を見るは、保守自由に對すると毫も差別はない、反對するは唯其の政綱の如何にあつて、政治に携はる能力の有無にはない。此の意味に於て內閣は所期の目的を達したと云ひ得る。曾てマクドーナルドが自分が內閣を作つた時、自分の堅く決心したことは、自分の爲めに英國首相の地位を落すまいと云ふことにあつた。在職九ヶ月間、自分は世界に於ける英首相の威重を減じたかと問うて、聽衆をして「否」と一齊に叫ばしめたのは、此の間の消息を表はして居る。

四

R君

僕は其の後千九百十七年倶樂部に於て、勞働黨中重要の地位にある某氏と會食し、談會々內閣の人物に及んだことがあつた。其の云ふ所に依れば、內閣成立後に於て、一段と器量を上げたのは、マクドーナルドである、其の頭腦に於て雄辯に於て、行政的手腕に於て、黨員統卒力に於て、彼の衆望は群を拔いて來た、彼の地位は遂に他の覬ひ得ないものとなつた。台閣に立つて割合に人の失望を買つたのは、シドネー・ウエッブであつた。元來勞働黨內閣の出來た時に、一つの疑惧は行政官吏の操縱にあつた。彼等の大部分は保守黨に屬する、そして行政の實務に携はつて經驗を持つ。一方に於て彼等の經驗を自由に活用し、他方に於て彼等の制約から免れて、彼等を驅使することが必要であつた。之に成功したものが成功した大臣であつた。マクドーナルドの外相は假令次官にポンソンビーと云ふ好個の人材を持つたにしても、之に成功した一例であつた。之に反して、之に失敗したものが商務院總裁としてのシドネー・ウエッブで、すつかり行政官吏に驅使されて、彼等を操縱することが出來なかつ

た、例へば失業問題の調査會などを、ウェッブを議長とすることによつて、遂に失敗に了つたと云ふ。

之に反して名聲を揚げたのは保健大臣のウィットレーと、石炭局總裁のシンウェルであつたと云ふ。大臣になる前のウィットレーはグラスゴー附近の所謂、クライド社會主義者中の頭目として、寧ろ院内野次の親玉を以て目さらる、に過ぎなかつた。然るに台閣に立つや住宅問題の解決に付て、彼は異常の行政的手腕あることを示し、院内に於ける反對黨との應酬に付て、卓越せるパーリアメンタリアンたることを示した。人の注意を惹せしめたのは彼で、今やマクドーナルドに次ぐものと云ひ得る。興味あるは殖民大臣としてのジエー・エッチ・トーマスであつた。彼は夙に能才を以て認められて居た、院内の應酬に於て、黨員の操縱に於て、難問を談笑の裡に處理する手腕に於て、彼は確にマクドーナルドに欠ぐものであつた。唯彼に乏しきものは、凛として奪ふべからざる操守の足りないことである、此の點に於て政黨の首領として、台閣の宰相として、足らざるを思はしめる。彼は殖相として、盛に帝國主義的意見を明にして、急進派の反感を買つた。僕は彼の帝國主義に尠からぬ興味を抱くもので、勞働黨中に將來帝國主義に傾く一派が出來る可能性あることを僕は認めるもので、彼の言動はやがて來るべき一つの傾向を逸早く示すものではないか、之に付ては後便に於て更に語るの時が有らうと思ふ。

R君

曾て僕はオックスフォルドのマンスフィールド・コレッヂのフェローの室に於て、二三氏と話をして居た時、會々自由黨の人々に及んだことがあつた。坐上の人々はロイド・ジョージの近狀に頗る不滿であつた。僕は日本に於て彼は平民宰相と稱せられ頗る人氣があつた、彼が千九百十年頃の活動を思ふと、どうしてさうも人間が違つたものかと尋ねた。人々は云ふ、彼も曾てはよかつた、然し時の經過はあの人の本質を露した。彼の往年の活動もパッショネートの傾向から來たもので、確信から來たものかどうか疑はしい。何分彼はウエールス人だからね、此の戰爭に於て識者をして、操守を欠いた政治家と認めしめたのは、ロイド・ジョージとチャーチルだと云ふ。

アスクイスには確實さがある。然し强さが欠けて居る。マクドーナルドが勞働黨の上に持つ樣な firm な押さへがない。あの人にロイド・ジョージやチャーチルの戰鬪力があつたなら申分あるまい。光輝ある經歴と云ふのが彼のを云ふのであらう、オックスフォルドの秀才として、辯護士として、政治家として、彼は常に凱歌を揚げて進んだ。然し近時に於ける酒とカルタと

が、彼の精神に弛緩を來して、さしもに英國第一と云はれた明晰の頭も著しく鈍つた。然し彼は流石にヴィクトリア時代の殘した唯一の政治家で、氣品と莊重とを兼ねた態度と辯論は、グラッドストーン時代の俤を偲ばしめるものがある。ジョン・モーレーのなき今日に於て、彼丈が議會に於て高らかにグリーク、ラテンの詩をすら〳〵と引用し得ると云ふ。僕の彼を好むのは、短い tribute を述べる時にある、逝ける人を吊ふ場合とか、食卓の席上とかに於て、彼の爲す演說は、いかにも高雅でそしてユーモアに富んでゐる。若し彼が失つたならば、英國は僅に持つ最後のものを失ふ悲があるだらう。

曾て人はサー・ジョン・サイモンに望を嘱したことがあつた。あれが人格と能力とを備へた人だと思はれたが、法曹出身の氏は動きのつかぬ論理に囚はれて、イマジネーションに欠けてゐる。ずつと若い所にラムゼー・ムアーが居る。其の政治家としての天分は未知數であるが、リベラル左翼に屬する新進で、黨中有數の新知識である。氏の著書には最近のリベラルを伺ふに足るものがある。

五

僕はボーンマウスを出て、ロンドンに來てから後、五月の末かにブライトンに於て、自由黨の大會に出席したことがあつた。前年の總選擧前迄アスクィス派とロイド・ヂョージ派と分裂して居たのが、保護政策に反對する立場から、選擧間際に、合同が成立した。そして百六十名の議員を得たのである。自ら內閣を作ることは出來なかつたにしても、不運の續いた自由黨に久振りに希望が返つた時であつた。勞働黨內閣を援助することは、保守派をして云はしむれば、鞭たる、駄馬に等しいものであるが、又自由黨に云はしむれば、自由黨の政綱の許す限に於てのみ、勞働黨內閣の存續を許してゐるのだから、結句自由黨の內閣と異る所がないと云ふ。見樣によつては埋草の勞とも云へるし、又見樣によつては、活殺の樞機を握れるものと云へる地位に在つた。

第一日にロイド・ジョージの演說があり。其の後グレー子爵の演說があつて、翌日アスクィスの登壇を見た。ロイド・ジョージは實に演說が巧い、丁度華かな學生時代の辯論のやうな趣がある。一句一句を短く區切つて、要所々々に聽衆をして拍手せしむるやうに出來てゐる。アスクィスは之に反して、決して雄辯家ではない。寧ろ文章家と云ふべきであらう。其の辭句はよく洗練されてゐる。聽衆が拍手をする時、彼は決して時を與へな

いで、其の雄辯を續けて往く、些も人に求めることをなさゞる氏の佛を認めることが出來やう。今も尙僕の記憶にあるのは、ロイド・ジョージが自由黨の歷史を述べた時に、クロンウエル、ピム、ハムデンから始めてグラッドストーンに及んだことであつた。永い名譽の歷史を誇るの色は、辯士と聽衆とに一樣に認められた。此まで來た此の政黨が將來どうなるかは頗る我々に興味を唆る問題である。アスクィスの話の中で耳に殘る一言があつた。人は自由黨に內紛の多きを云ふ、成程アイルランド自治問題以來、自由黨には內紛と分裂とが絕えなかつた、自分の如きもグラッドストーンの全盛時代に於てすら、まゝ反抗の態度を採つた、而してロイド・ジョージの如き、恐らく職業的の反逆者であらう。然し各人に各自の意見を認め、個性の發現を尊ぶ所にリベラリズムの妙諦がある、分裂と內紛とは自由黨なればこそ起り得ると云つたのは、勿論多少の諧謔を加味してはゐるが、味ふべきものを含むではないか。

僕は同大會に臨んで、自由黨の意氣の盛なるを見、やがて死ぬ政黨とは認められなかつた。唯自由黨の難點は、いかに勞働黨と差別し、いかに自由主義と社會主義とを區別するかにあるであらう。彼等は產業の公有は個人の自由に反すといふ。而して自由の觀念を以て、彼等を社會主義者から區別する要點とする、然し果して之が可能であるかどうか。自由主義にも十九世紀以來幾多の變遷があつた。十九世紀初紀のリベラリズムは自由放任主義であつた、然し前世紀末に於てジョン・スチュアート・ミルの思想を中心にして自由主義は大きな轉回を試みた。ミルは始めて自由が何故に必要であるかを求めて、人格の圓滿完全の成長に欠くべからざるものなることに得た。然し自由を單に自由の爲めに必要なりとするに非ずして、人格の成長の爲に必要なりとする時に於て、自由は一方に於て其の肯定の論據を確實にし得たと共に、他方に於て人格の成長の爲に必要の場合あらば、自由はある場合に於て之を捨てねばならないことになる、かくてミルの思想は自由主義に一つの轉回を與へることになり、之を更に充分に基礎付けて、人格の成長の爲めに強制の甘んずべきを說いたのが、テー・エッチ・グリーンであつた。之が千九百五年以後の自由黨の指導原理となつて、活潑なる勞働立法の制定として現はれたのは、人の周く知る所である。アスクィスもグレーも共にオックスフォルドに於て、グリーン等の思想の影響を直接受けた人達で、即ち人が十九世紀後半の自由黨を動かせるものはジョン・スチュアートミルにして、廿世紀以來の同黨を導くものは、グリーンの社會哲學なりと云ふ所以である。若し自由黨が自由なる言の意味を單に外的強制なき狀態を

云ふのでなくて、人格成長の爲の手段としてのみ價値ありとするならば、今日の經濟生活に於て、少數の企業者に企業の自由を與へるも、其の人の人格の成長の爲に得る所尠く、而も其の反面に於て、多數の勞働者の人格成長の條件を妨げつゝあることに顧みるならば、産業の公有を自由に反すと云ふ立場から反對するのは、意味なき空語に終らないか。十九世紀初頭に於けるリベラリズムの立場に於てならば兎も角、既に現代に於てリベラリズムに一轉回を爲したる以後に於て、尙竿頭一歩を進むることなしに自由の標語に囚はるゝは純理の許さざる所で、社會主義に反對する論據の極めて薄弱な所以である。

自由黨が進むべきを進まずして、躊躇逡巡する際に當り、其の進むべきに進んで、リベラリズムを社會主義に展開せしめたものは、即ち現勞働黨である。個人の人格の成長を以て、社會制度價値の窮極の標準とし、之に必要なる理由の下に産業の公有、民主的管理等の政綱を採るに至つた。之れリベラリズムを論理的に展開せしめたもので、此に自由黨に比して論理に於て徹底する所以があり、此に又等しく社會主義たるも、マルクス主義と趣を異にする要點がある。此の關係は英國勞働黨を解するに必要な關鍵で、英國自由黨は、かくの如き勞働黨あることにより、其の存在の意義を減ずるのである。人は英國自由黨の凋落を云々す、若し單に英國が二大政黨の國なるを以て其の理由とするならば、そは必ずしも首肯し得ない、然し自由黨の爲さんとする所を既に併せ、其の爲し得ざる所を併すもの他にあるならば、政黨としての自由黨の意義は乏しからざるを得ぬ、此に同黨凋落の理由を求むるならば、其は首肯に値する。同時に此の事は英國勞働黨の如き社會主義の政黨なき國に於て、自由黨の存在は尙意義あることを語るものである。若し英國自由黨の凋落を以て、すべての國に於てリベラリズムの無用を云ふものあらば其は大なる誤である、單に英國に於てのみリベラリズムは其の使命を果したのである。

六

R君

僕は曾て保守黨議員M氏を議會に訪つて、院内食堂で語つたことがあつた。其の人は勞働黨內閣の沒落の近いことを豫言し、自由黨が結局二つに分れて、あるものは勞働黨に、あるものは保守黨に加はり、此に勞働黨と非勞働黨との二つの對立を見るだらうと云ふ。僕は一體保守黨なるものの存在の意義は何かと尋ねたら、今日の保守黨は決して保守姑息の政黨ではない、他の政黨との差は、英帝國の維持と云ふ一點より外に求め

ることは困難だと云つた。此の一言は中々に興味がある、英國民衆の多數が直接私有財産の維持等に多くの利害なきに拘はらず、然もあれ丈保守派に投票を集めるのは、英帝國の維持と云ふ感情にある、太陽の沒することなき國土の光榮を維持したいと云ふにある、今日保守黨が多數の人の琴線に觸るゝ旗印は、實に British Empire の二字に在る。

僕のロンドン生活當時に於て、首領ボルドウインはロンドンに於ける三つの集會に於て、更めて保守黨の主義綱領を述べた、今納められて "Unionist Principles and Aims" の一書となつてゐる。僕は此の政黨を眺める毎に、一種の興味を禁じ得ないのは、不思議な保守黨があればあるものだと云ふことである。英國の保守黨は保守の名にふさはしくない程に進歩的の色彩に富む。十八世紀の中頃に於て、先づ自由貿易を唱へたものは、進歩黨たりしホイツグ黨に非ずして、保守黨に屬する學者であつた。十九世紀の中頃に於て、逸早く勞働者の生活に着目して、立法の必要を唱へたものは、シヤフツベリー卿、オースラー、サドラー等の保守黨の人々であつた。首領ジスレリーが天才的の炯眼を以て、社會問題の重要さを觀破したるは、人の知る所である。最近に於ても、主要な勞働立法は尠からず保守黨の手に作られた。若し自由黨を以て、英國を代表する特有の政黨と云ふならば、保守黨も亦英國ならで持ち得ない、適應性と伸縮性に富んでゐる、此の種の保守黨のあつたことが、英國の社會の變遷に、色々の意味に於て重要の關係があつた。

保守黨が保守でありつゝ進歩的であり、急進黨が徒に急激に走らずして、保守的分子を有することは、英國政黨の持つ特色である。否必ずしも之は政黨のみでなく、すべてのものが極端と極端と對立せずに、一縷の毛細管が其の間を通つて、浸透の職能を盡す所に英國の特色がある。學者が單なる學究に非ずして、政治的能力があり、政治家が單なる俗才でなしに、學問の骨を解し、牧師が俗事を解し、lay man が宗教を解す。個人主義に團體主義の傾向が交り、經驗主義に一抹の理想主義が殘つてゐるなど數へ來れば限がない。之を一方から云へば不徹底とも云へるし、妥協とも云へる。然し互に反撥し排斥することなしに、無用の鬪爭を費すことなしに、漸に社會の進化の成し得られる所は、此の國ならで望み得ざる所で、之を獨逸、露西亞、日本等の國と比較する時に其の差の大なるを認める。其の由つて來る所は恐らく、各々に各々の立場を認めて、個人の自由に寬容であつたことにあらう。かくて相互が互に浸すことなしに自己を守り、自己を失ふことなしに、對手を解する餘裕を持つのであらう。極端から極端に原動と反動とを繰返し、反撥

し排撃せねばやまない國柄から見て、眞に美しきものが此に在る。

英國へ來た人の恐らく一様に感ずることは、政治と云ふことに意味と價値を認めて來ることであらう。日本に於て政治と云ふ仕事は決して、最も高貴な職業とは思はれて居ない、野心を有する事業のやうに考へられ易い。然し英國に於てウエストミンスターは人の憧憬の的である、m.p. になると云ふことは彼等にとつて戀の持つやうな純粹な引力がある。政治はすべての人に正しき生活をなさしむるに必要なものだと云ふ意識があり、正しきことを求めるものは、畢竟政治に往かなければならぬと考へる所に、政治と倫理とに密接の關係がある。プラトー、ヘーゲル等が試みた政治と道徳との調和は、稍此に實現されてゐると云へやう。從つて英國政治家は、一面に於て教授であり講師である。彼等は大學の教授や操觚者が他國に於て爲しつゝある、使命を盡して居る。若し日々の新聞を讀むならば、いかに彼等が演説に講演に、東西に奔走しつゝあるかを知る、而もそれは必ずしも政黨の宣傳のみでなしに、一種の公民教育である。視野の廣さに於て、教養の豐さに於て、望む所の高さに於て、僕は彼等の演説に於て胸を動かすものに觸れることがある。マクドーナルドが曾て某所に於て爲した演説は、英國政治家の心掛を現はすものとして、其の一節を英文のまゝ此に引用する。

And it was not in the House of Commons or on the platform that one lived. It was at one's fire-side, looking at a beautiful picture hanging on one's wall, with a book in one's hand, and thoughts as far removed as East was from West from the mere temporary and superficial conflicts that divided them. No man should go to sleep with the conflicts of public life on his mind. Somebody said that after a strenuous life a man should retire to a monastery in order to prepare himself for death. The wise man retired to a monastery every night in order to prepare himself to sleep.

之と共に僕の感ずることは、ユーモアが英國社會に於て果す一種の職能である。主義を固く採りながら、重箱の隅迄ほぢくらないで、どこやらに餘裕を以て事を處理する妙味が英人にあるが、かうした場合に、ぎごちない場面に笑の溝を作て、事を流して了はせるのはユーモアであり、ウイットである。曾て勞働黨内閣の勞働大臣トムショウが保守黨に失業問題の對策を迫窮された時に、彼はシルクハットから鼠を出すことは出來ないとどつと笑はせて、議場の重苦しさを破つたことがあつた。蓋し

支那の手品師がシルクハツクから鼠を出す奇術は、英人一般の知る所で、"rabbits out of silk-hat"と云ふ言に一種のユーモアがあるのである。又曾て議場に於て勞働黨議員がアスター夫人に對して、鳥の樣に云々と云つたのを捕へて、夫人が息卷いて失言の謝罪を議長に求めた。議長は悠然として、貴婦人は今少しユーモアを解しなければならぬと退けた。其の後ですぐ勞働黨議員が孔雀の樣に誇らかに云々と言て、再びアスター夫人に當つたら滿場どつと笑つてそれで話が片付いて了つた。デモクラシーは論爭の政治である、ともすれば角の立ち易い論爭に圓みを與へるものがユーモアである、不眞面目に亘らないユーモアは、英國の公生活に欠けてならないものである。

七

R君

僕は此で前便で書き漏らした勞働者教育に付て一言を述べたい。最近に於て英國に注目すべき運動は、所謂成人教育であるが、此の成人教育よりも前に起り、其の刺戟となつたものは、勞働者教育である。此の運動も亦千八百八十年の始め頃、オツクスフォルドから生れた。元來グリーンが既に公民教育に興味を以て、バーミングハムの學校に通つたことがあり、教育問題の調査會の委員になつたことがあつた。彼の感化を受けたものにアーノルド・トインビーやロックなどがあつて、遂にオツクスフォルドに、勞働者教育の企を試みた、トインビーの名著「英國産業革命史」は當時の講演の筆記である。彼は若くして仆れたが、彼の志を紹ぐものとして、ロンドンにトインビー・ホールが作られ、オツクスフォルドにバーネツト・ハウスが作られ、遂に勞働者教育は一般の社會運動となつた。

目下の英國に於て勞働者教育をなす施設は、凡そ三種類を區別することが出來る。右翼の立場を代表するものが Workmen's Educational Association（略してW.E.A.）であり、中央の立場にあるのがオツクスフォルドのラスキン・コレツヂとバーミングハムのフアークロフト・コレツチである。千九百九年にラスキン・コレツヂの教育方針が溫健に過ぐると稱して、分離して別れロンドンにレーボア・コレツヂが作られたが、之が左翼の立場を代表する。此の内僕は何れも往訪して廻り、殊にフアークロフトには二三の講義を一緒に聽いたこともあり、ラスキン・コレツヂには、一學期間副校長と起臥を共にした。レーボア・コレツヂは實にマルキシストの立場に立つのみならず、教育の方針もいかにマルクシズムを教へ込むかにあるやうである。他の學校は寧ろいかに社會の問題を判斷すべきかを教

へ、如何なる思想を採るかは、之を各人に任せてある、從つて經濟史、經濟思想史、社會哲學史等に重を置く。僕は勞働者教育の方針としても、一般教育の方針としても、寧ろ此の方法が採らるべきであると思ふ。

R君

僕は獨乙に於てレヴエンシユタイン (Levenstein) が其の著 "Arbeiter Frage" に於て發表したやうに、現代英國の勞働者中の智識階級の愛讀書の統計的調査を試みたいと幾度か心動いた。又求めれば助けて呉れる機關は幾らでもあつたのであるが、遂に試みずして了つた。唯此に千九百六年某雜誌が、勞働黨議員ケヤー・ハーデイー、ラムゼー・マクドーナルド、ジョン・バーンス等三十餘名に書を寄せて、「何書があなた方の今日の思想を構成したか」を尋ね、其の回答を掲げて居る。此の記事は頗る興味がある。回答者は多く千八百六十年前後に生れた人である。彼等の回答中に於て最も多く擧げられるのは「聖書」であることは第一に眼に着く。次にヂツケンスの小說である、此の人の貧民生活の叙述が、いかに讀者に奮起を促したかを見ることが出來る。第三にヘンリー・ジョージの「進歩と貧困」("Progress and Poverty")である。彼が千八百七十年代に英國青年を動かした力は將に吹き捲くる風に等しきものがあつた。第四にカーライル、ラスキン、マジニー、ミル等の社會思想家である、カーライルの "Heroes and Hero-Worship", "French Revolution", "Past and Present" の如き、ラスキンの "Unto This Last" ミルの "On Liberty", "Representative Government", マジニーの "Duties of Man" は彼等の對人世對社會の態度を決定したものと見える。次で詩人としてはスコツトランドのバーンス、シエークスピア、スコツト等が擧げられる。最後に彼等のすべてにではないが、尠からぬ數が擧げるものに、ビーチャー、チャンニング、ブルツク、ロバートソン等の宗教家の著述がある。要するに彼等の回答に於て顯著な事は、彼等が現代社會の解剖や、社會の原則を述べる科學の本から受くること尠くして、先づ人世社會に對する倫理的問題を敎ふる書物から、得ることの多かりしことである。此に英國社會主義者の特質がある。僕は其の後現今三十代から四十代までの年齡の人、即ち彼等よりは約廿代若い數人に付て、此の事を調べたことがあつたが、ウエッブの書物、カーペンター、ブラッチフォードの書物竝に稍少くマーシアルとホブソンの經濟書を加へる外に、前述のものとの間に大きな差が認められない。若い人に付ても著しく影響したものはカーライルの思想とウイリアム・モリスの "News from Nowhere" 等であつた。

八

僕は六月の末から約二週間、英國に於ける最後の旅行を試みた。マンチエスター、リバプール等の工業地方を巡つてから、南ウエールスのスワンジーに開かれる「炭坑夫聯合組合」(Miners' Federation) の大會に列席せんが爲であつた。

マンチエスターを中に置いて、東はリーヅ、シエフイールドから西はリバプールに至る一帶の地は、人の知る樣に英國工業の中心地であり、世界工業化の發源地である。其の昔英國の工業は地理上の關係から又、木炭の豐富な點から、ロンドンの南ケント州にあつた。後工業燃料が木炭から石炭に移つてから、工業は石炭產地のランカシア州に移つたのである。所が極めて最近に於て、ケント州に何億噸かの石炭の地層が發見されたので、再びケント州に黑い國 (black country) が出來るだらうと云はれてゐる。あるものにはあるが上にも加へらるで、日本の樣な石炭の乏しい國には惠まれないで、英國などに新發掘を見るなどは、天の配劑の不公平を羨まさるを得ぬ。

マンチエスターに於ては、プリンシパル・グラハムに會つた、數學の學者にして、クエーカーの信徒、曩に擧げた "Conscription and Conscience" の共著者の一人であり、兼て有名なラスキン研究者である。然しマンチエスターに於いて、僕の重を置いたのは、消費組合 (Co-operative union) の本部を訪ふことであつた。英國勞働運動は第一便に述べた樣に三方面に分たれる、一つは生產者としての勞働組合であり、二は消費者としての消費組合、第三が市民としての勞働黨である。殊に消費組合は他の二者に比して、多くの注目を惹かないが、其の有する勢力の大なるは、少しく數字を顧みるものの驚く所である。最近に於いて組合に屬する家族數三百五十萬、組合員は千二百萬人乃至千五百萬人、之が爲めに千五百の店舖を持ち、一年の賣上高二億磅、組合は自己所有の工場を有し、其の精粉工場、製靴工場、家具工場、製衣工場は何れも英國最大規模のものであり、セイロン島に茶園を有し、カナダに農場を經營し、數隻の巨船は大西洋を往復す、自己所有の工場に於ての一年の生產額六千萬磅に達す。消費組合と勞働黨との關係は、勞働組合と後者との關係ほど、表面上密接には見えないが、萬一の場合勞働黨の施設に反して、資本家がボイコットでもする場合があれば、消費組合の巨大の生產力は直に勞働黨を助けることが出來るだらうと云はれる。マンチエスターを訪つて、其の卸賣部を一巡するものは、其の規模の大なるに驚き、其の附屬のコレッヂを觀察するものは計畫の遠大を贊賞する。

リバプールに於て僕の爲したことは、同港埠頭の人夫に關する失業施設の調査であつた。人の知る様に、ドツク人足は船の發着により、又天候の關係上、仕事が甚だ不規則で一週間の内平均二日位しか賃銀を得られない、所謂 Casual labourers で之に對する decasualization の施設は、先づリバプールに試みられ、次で他の港に適用されたので、勞働問題を專攻するものの、注意を逸し得ない所である。それと、僕は此の土地とバークンヘツドとのI、L、P、の支部と兼て打合せをして、之を訪ふて社會主義團體の、地方支部に於ける活動を見た。一體に英國に於いて、我々の注意すべきものは、中央都市のことよりも地方政治にある。行政上からも、地方政廳の行政、貧民法の實施狀況、地方教育の設備等に却つて英國研究の要部があるが、政黨や社會主義團などに付ても、地方を忽にすると、點晴を忘れるの憾がある。僕はリバプールのI、L、P、の支部に於て、丁度グレーシア夫人が巡回講演をして來たのに出會つた。氏の亡夫グレーシアは「Meaning of socialism」の著者で偉い本ではないが、一寸捨て難い本である。同夫人の如き人を數人、間斷なく全國を廻らせて、支部〳〵で講演會を開くのである。其の日は先づ我々の理想の住宅の話しから始め、理想の田園都市に及び段々結局勞働黨を助けることの必要に說き及ぶ。聽衆は日本と支那との區別がハツキリ分らない位の人達で、此の連中に對して爲す講演の方法として、此の種のやり方は有功であるかも知れない、それとラスキン、モリス流のユトーピアンの色彩あるは、又以て英國社會主義の一特色であらう。

リバプールから一直線にウエールスを貫いて、スワンジーの坑夫大會に列する。石炭なる商品は英國社會に於て重要な地位を持つ。水力電氣の殆ない英國に於て、石炭は生活上最も必要であり、鐵工業を以て立つ英國に於て、石炭は工業の活殺を握るものであり、重要輸出品たる石炭は、英國貿易上重要であり、又鐵道、運送業に大きな關係がある。更に又、炭坑業は其の勞働者の多いことに於て僅に農業に劣るのみであり、勞働者中組合に屬する率はある地方に於て百パーセント、いかなる地方に於ても六十パーセントを下らない。最も産業同系統の組合の完成した所であり、同組合の勞働組合大會に又勞働黨に有する力の大なることに於いて、要するに英國勞働運動中最も注目すべきものである、炭坑坑夫組合先づルビコンの河を渡れば全軍之に次ぐと云はれ、同組合の敗北は、英國勞働界の衰運を語るものである。僕の列した時、非組合員を使用する炭坑に對し、いかなる態度を採るべきかと云ふ問題と、採炭の際シヨベルに沿いた石炭はどう計算するかといふ細い問題が議題で、重要問題は

秘密會で討議するので、收獲は割合に尠かつた。恰も同時にヨークに於て開かれた鐵道從業者組合の大會に於て、ジエー・エッチ・トーマスの帝國主義的思想を彈劾した議事などの方が面白かつたと思つた。

九

R君

僕の英國滯在も終りに近づいた時、此に一つ略すことの出來ない一夜を持つた。それはミアヘッド教授を訪れたことである。ロンドンでジエームス・ボーナー氏に會つた時、切にミアヘッド氏を訪ふべく僕に勸め、大變丁寧な手紙を送つて呉れた。折返しカベントリー在の同教授から、是非自分の宅に來て呉れ、道順はかくかくと細に書いて、若しそれが云ひ過ぎた希望でないならば、一夜を自分の宅に泊つて呉れないかといふことであつた。氏はバーミングハム大學の哲學の前教授、雜誌マインドの前主幹、"Library of philosophy"等の叢書の主幹として常に成功する。氏はグリーン、ケヤード等の門下生として殘る少い人の一人である。"Service of State"はグリーンを傳へたものであり、其の他"Social Purpose""Life and Philosophy"等の著があり、最近にはジョーンスと共にケーヤドの傳を書いた。それよりも氏は"Elements of Ethics"の著者として、我國に於て教育界に大きな問題を起した人として記憶されて居る。氏は決して獨創の思想家ではない、唯英國アイデアリストのすべてがさうであるやうに、人を育てることに妙を得た偉大の教師である。僕がボーナーに勸められて氏を訪うたのは、四十年前の昔を聞かんが爲であつた。

停車場に着いたら、氏は自動車を以て迎へに來て呉れた、直に氏の家に赴く。氏は今停年で隱退して靜な晩年を、此の田舍の小さな家に、讀書と寄稿と講演とに過して居られるのである。夕食少し前共に打連れて、庭を散歩し附近の牧場を廻る。氏の夫人はグラハム・ワラスの令妹であつた。十余年の病の後逝かれたので、今近所の老婦人がハウス・キーパーとして家事の世話をしに來れる。食卓には我々兩人と氏と其の婦人とが並んだ。一體に外國の食卓は女中が出入するので、ゆつくり話をするのに適しないが、かうして一家殘らず卓に就いて、女中の出入がないと實に落付いて話がハズむ。氏は一冊の帳簿を出されて、泊られた人の署名を求めるのだと云ふ。開いて見ると、ジエー・エス・マッケンジーとかロイドとか、兼て書物の上で名を知る人々の署名がある。やがて客間に退いた時、氏は逝ける夫人の刺繍を示されて、一種沈痛の面持で亡夫人を語られた、

聞けば十年間あらゆるものを抛つて、周遊の爲に努めたが遂に夫人に先だたれ、かくして知人を招いて、慰められて寂しい余生を送ると云ふ。話は四十年前のオツクスフオルドに始まり、現今のリアリズムに及ぶ、氏は今自分などがグリーン等に付て何かを纏めなければ、其の人を失ふ、誰かど British Idealism の歴史を書かなければいけないと切言せられる。

寢る前に今一晩泊つて呉れないか、唯午前丈は自分は讀書をするがと、深切に云つて呉れた、ベッド・ルームには印刷した書簡用紙から封筒まですつかり備へてあつて、氣持よく接客の設備が出來てゐる。翌朝靴を出せ／＼と云はれるので、どうも女中が居ないから、氏が靴掃除をされるらしいので、恐縮したので躊躇したが、果して氏自身がされたのであつた、假令それは極めて大雜把ではあつたにしても。是非にと勸める氏の好意に背いて、自分等は翌朝氏に別れたが、氏の口から伺つた昔物語りは永く自分の忘れえない樂しい思出であつた、否それよりも孤獨の寂しい晩年を送る老教授の、知人を招いて慰め慰められる生活を思つて、美しい余生の送り方だと思つた、隱退後の晩年にあゝしたこともしてみたいと、年寄りじみた物思に耽りながら、自分はロンドンへの歸途に就いた。

十

R君

僕の英國に別れを告げるに當つて、何を英國から得べきかに就て、此に最後の纏めをしてみたいと思ふ。

英國の持つ一つの特色は、其の社會の發達が、歐米諸國中最先頭に立つてゐる事にある。固より各國は夫々異つた國情を持つので、社會發達の階段を一定の型に入れることは困難である。が若し大體の傾向を採るならば、英國は他の國よりも約四分の一世紀進んでゐると云へるであらう。現代資本主義の最も成熟した國として、之に伴ふ諸々の現象は先づ此の國に現はれる。資本主義そのものの方面からも、之に對する反抗的方面から云つても、此の國ならでは見られない運動が捉へられる。やがて現はれる將來の社會の何であるかは、此の國に來て、其の萌芽を認めることが出來る。僕の見る所によれば、歐米諸國は其の中世との關係に於て、三つを區別することが出來ると思ふ。一つは中世を過去に持つて、之より完全に離脫した國である。英國がそれで、フランスが稍之に近い。第二は未だ中世的の制度と思想とから脫し切れないもので、獨逸、オーストリヤが之に當り、歐洲南部に於て此の傾向が最も著しい。而して中世を全然持

たざりしものがアメリカである。歐米を巡つて切に感ずることは此の事で、此の關係が其の國の色々の方面に重大の影響を及ぼして居る。中世から蟬脫した最も現代的社會の體樣を見やうとすれば、英國に來るの外ない。從つて英國に學ぶ者の注意すべきものは、書物よりも寧ろ新聞であり、雜誌であり、人々との對話である。旣に英國の特色が社會の新しい運動にあるならば。之は書物として纒められるには、余りに時が近すぎる。新聞雜誌に表はれる片言雙語の中から、何かを掴まなければならない。此の點に於て忘れてならないものは、議會に於ける議事の速記、勞働組合や勞働黨等の集會の演說、實業界の巨頭の株式總會等に於ける演說などである。眼光紙背に徹するものは、此の中より受ける示唆は、實に尠くないことを發見する。此の點に於て英國の生活は、獨逸で書を讀む學徒の氣持では、何物をも得られない。獨逸式の日本の學生が英國に失望するもののあるのは、此の呼吸を解しないからである。落ちる一葉の梧桐によつて、やがて來ん秋を知らうとするもののみが、此の國の妙味を解する。

　其の次に、英國の注意すべき特色は、社會に漲る道德的基調にある。マーツは曾て「十九世紀に於ける歐洲思想史」に於て、英國の產した固有の學問は、人は之を經濟學と云ふが、自分は寧ろ倫理學にあると思ふと云つたが、自分は此の言に同感である。此に道德的基調と云ふのは、必ずしも英國の民衆が道德的に正しいと云ふのではない、僕の云ひたいのは、英國人は社會の輿論により、傳統的の道德により、政府の命令により、動くことなくして、常に自己の良心の判斷によつて動かんとしてゐることである。少くともさうありたいと願つてゐることである。從つていつの時代にも國民の社會制度に對する批判が活々と働いてゐる。之が英國に於て現狀打破の社會運動が常に存する所以であり、又一方に於て若し其の批判が當該制度と適合すれば、驚くべき社會の團結力を表はす所以でもある。旣にかくの如き要求があるからには、此には自己の內面生活の存在を意識することが強くなければならぬ。之があれ丈經驗哲學の風靡した國であるに拘はらず、一種の理想主義の之と併存した所以であり、又最近に於ても唯物史觀に共鳴し得ない所以である。此の傾向が學問殊に社會科學の方面に表はれて、一種の特色を帶びることになる。自己の內面生活を尊ぶ彼等は、余りに細いスペシアリストとなるに甘じ得ない、彼等が大きな綜合的な研究を好む所以は此にある。同時に彼等の自己は發動性に富むでゐるから、退いて事實の觀察に甘じ得ないで、進んで實際の經綸を喜ぶ、之が英國に於て純理の研究よりも、政策の研究

の喜ばれる所以であらう。曾てマックス・シェーラー（Max-Scheler）は、獨逸人が世界に嫌はれる原因を研究した中に、獨逸學問の欠點として、特種の問題に貴重な幾多の研究のあるに拘はらず、之を綜合するシンセシスに於て欠けてゐることを擧げたが、丁度之と正反對のことが英國に認められる。英國に於てプラトーが喜ばれる所以も、即ち此に在るのである。

若し第三の特色を求むるならば、個人主義的色彩の强いことである。之は第二の道德的な基調と密接な關係があるが、要するに制度又は團體は、個人の爲の手段であつて、夫れ自身何等目的ではないと云ふ見解は、英國民衆の牢乎抜くべからざる確信である。此の主義の哲學的基礎付けを何所に求むべきかに付ては、多くの議論はあるにしても、僕は此の見解を正しいと見る、そして此の見解に觸れることが、社會に對する深い思索を養ふに欠くべからざるものと見る。英國に於て新聞に雜誌に、個人の對話に、此の思想が當然の前提として受け入れられてゐることは、著しく吾々の注意を惹く點である。

以上述べた三點は英國社會の特色と云ふべきであるが、此に英人の欠點とも云ふべきことは、彼等が思索に長じないことであり又體系を作るに拙いことである。彼等は多くの場合に於て論理を以て動かずに本能的に動く。動いた後でも精緻な説明を爲さない。僕が前便にも述べた樣に、彼等の制度的本能に、他國に先んじて、民權政治、階級鬪爭を實現したに拘はらず、其の精緻なる説明は或はフランスのモンテスキュー、或はドイツのマルクスに委した。此に於て英國に學ぶものは、前述した多くの英國の特色よりして、多大の暗示と教訓を受けるが、其の各々に付ての説明が、英人自身の話なり書物なりから求められない。之が英國で育てられたものが、非常に良い傾向と着眼とを持つに拘はらず、其の傾向が單なる暗示に止まつて、充分の洗練を欠く所以であり、學者として着眼はよいが、淺薄にして深さを欠くの憾ある所以である。此の英國の持たざるものを與へて與れるのが獨逸の學問である。英國で得た暗示に内容を盛つて、深い洗練を與へて與れるのが獨逸である。此の點に獨逸學問の貴重性があり、此の意味に於てのみ獨逸學問の意義がある。

× × × × ×

R君

僕の英國滯在も一年半に及んだ。僕が上述の樣なことを考へて英國に別れたのは、七月十六日であつた。其の日英國海峽を渡つて大陸に向つた、此に久し振りで僕の前に新しい場面が展開して與れた。

英國に於けるマルクス價値論々爭

小泉信三

私のマルクス價値論の批評も大正十一年二月以來既に五度に上り（中四回は本誌・一回は三田學會雜誌掲載）、直接間接此問題に就いて發言した人々としては山川高畠河上千葉百瀬加田福田櫛田等の諸氏の名を數へるに至つた。櫛田民藏氏は私を最もマルクス批評に熱心なるものと評したが、此の熱心は又マルクシスト側のマルクス辯護の熱心に負ふところが尠なくないのである。さて日本に於けるものは右の如しとして、西洋諸國に於ける同問題に關する論爭は如何なるものであつたか。獨逸學界に於てはボエム・バヱルクのマルクス批評とルドルフ・ヒルフアヂングのボエム批評とが兩陣地から出た最も優秀の作物なりしことは既に人の知るところであらう。(私のマルクス批評をボエムの祖述となす批評家がある。精しくボエムの説を知つてゐるものは不承知であらう)。英吉利に於てはマルクシズム其者が獨墺兩國に於けるほどの勢力にならなかつたから、マルクス批評も亦た左程盛大には試みられなかつた。併し兎に角英吉利に於ても十九世紀末葉にマルクス價値論は一時論爭題目として世の視聽を動かしたことがあるのである。

一八九四年資本論第三卷の校訂を了へた頽齢のフリイドリヒ・エンゲルスは其序文中にレキシスの利潤率問題解決を評した後、それに關聯して左の如く述べて居る

「……當英國に於てジエヴオンズ・メンガー流使用價値及び限界價値説の基礎上に樹立された俗學的社會主義と少なくとも同樣に尤もらしい一俗學的社會主義が、此のレキシス説の基礎上に樹立され得ること――凡そ是等の事を看破するには、思想上何等の大努力をも要しないのである。否、それのみではなく、若しジヨオジ・バアナアド・シヨオ君にして此のレキシス利潤説を知るに至つたとすれば、彼れは蓋し雙手を伸して其れに攫み掛り、ジエヴオンズとカアル・メンガアとを解雇し、以つて此

礎の上に將來のフエビアン教會を新築し得たであらうと予は憶測するものである。」(邦譯資本論第三卷序一八)

此文句に由て推察せらるゝ通り、此時の論爭に於てマルクス批評に最も努めたのはバアナアド・ショオであつた。ショオは一八八九年五月の雜誌 To-Day に Bluffing the Value Theory と題する一文を寄せて、一面マルクス論爭の經過を述べ、一面其論敵たるマルクス主義者、ハインドマンを揶揄して居る。本篇の材料は專ら之を此文に仰ぐのである(Dokumente des Sozialismus. Hrsg. von Ed. Bernstein Bd II. (1993) 80頁所載獨逸譯文に據る)

論爭の端を開いたのは、社會主義的傾向あるユニテリヤン牧師でジエヴォンスの價値論を奉ずる P. H. Wickstead であつた。彼れの論文は To-Day の一八八四年十月號に發表せられた。論者は無論ジエヴォンスを是とし、マルクスを非としたのである。ショオが始め此論爭に參加したのは、實にマルクス辯護者としてであつた。彼れは筆を取つてキックスチイドに當り、キックスチイド非にしてマルクス是なることを論じたが、彼れは自ら告白する通り、此時には經濟學上の初心者で機智と若干の文筆的熟練の外には、ジエヴォンスの鉄劍に向ふべき何等の武器を持たなかつたのである。キックスチイドは之に答へて更にショオ非にしてジエヴォンス是なることを論じた。其後時を經て Grahan Wallac は同じ To-Day に寄稿してマルクスもジエヴォンスも倶に正しいといふ意見を述べた。マルクシストたるハインドマンは是に激して To-Day に寄稿し、啻にキックスチイド、ジョオ、グラハムヲレスのみならず、彼自身と外二人とを除くの外全英吉利國民の見解は悉く非なりと言明した。ショオの文章は此のハインドマンを評して、ハインドマンが「ジエヴォンスの價値論をもマルクスの價値論をも理解せず、未だ曾つて之を理解したることなく、又恐らく遂に之を理解せぬであらう」ことを證明せんが爲めに草せられたものであるといふ。

さてショオ自身の思想の變化に就いていふと、始め彼れがキックスチイド反駁を試みた後、論爭は To-Day 誌上から、Hampstead Historic Club の會合に移された。此倶樂部は始め Arthur Wilson の宅に開かれた資本論講讀會であつたが、講讀の進行幾許もならずして忽ち論爭が始まることを常とした。マルクスを攻擊するものはジエデニヤンたる F. Y. Edgeworth とミルを奉ずるシドニイ・ヱッブであり、Belfort Bax とショオとは「超越的マルクシズムの立場」から壘を守つてジエヴォンスとミルとを嘲笑した。ショオは「支ふべからざる

陣地の防禦に」瘡痍滿身の姿であつたが、ハインドマンは此論爭に參加せず、「彼早學ぶべきものを有せぬ人として」遠方からジエヴォンスを輕蔑して、たゞ例の如く其機關紙 Justice の紙上でジエヴォンスの英吉利の炭層は間もなく涸渇すべしといふ予言と恐慌を太陽黑點に歸するの說とを嘲つてゐた。

一八八七年二月十八日ハインドマンは Freemason's Tavern でフエビヤン協會に向つて一場のマルクスに關する講演を試みた。ショオは此時既にマルクス說の承認すべからざることを認めてゐたので、講演後の討論會に於てマルクス價値論の弱點を指摘し、ショオの記憶する所によれば、エッヂも亦た「資本論」の既刊部分には餘剩價値の分割に就いては全く何物も說かれて居らぬことを指摘した。ハインドマンは憤慨してショオ、エッヂを以て誹謗の言となし、心中秘かにマルクスを崇物視するものなりと責め、餘剩價値と稱せらるゝものが現に存在すること（ショオ謂はく何人も之を疑ひたることなし）の論理的證明を試み、又資本論中の絕對餘剩價値と相對的餘剩價値とに關する部分の解說を試みた。

次いで資本論の英譯が出た。ショオはハインドマンの太陽黑點說に對する失當なる攻擊に激せられ、Pall Mall Gazette（一八八七年五月）に寄書してハインドマンに攻擊を加へ、次いで Nationalreformer（一八八七年八月七日、十四日、廿一日）紙上に資本論の批評を公にして詳かに其價値論の弱點を論じた。併しハインドマンも「マルクスの研究の全幅の意義を理解せる」他の二人の者も之に答へなかつた。

同じ年の六月十六日ショオは Socialist League の Bloomsbury 支部に於て能力レントに關する講演を試みて熟練勞働の價値は需要供給に由て定まると說いたのを Edward Aveling が失當となし、其の八月四日の講演でマルクス價値論に據つて之を攻擊した。暫く時を經てキックスチイドは Alphabet of Economic Science を著して、商品の使用價値と交換價値とは共に人又は社會が所有する商品量の異なるが併し相聯絡する函數であるといふ說の意義と眞實とを明にしようとした。次いでシレスの To-Day 三月號への寄稿となり、編輯者はハインドマンに其沈默を破つて異端邪說を粉碎せんことを求め、遂に其寄稿を得たのである。

ショオはハインドマンに對して先づ二個條の一般的意見を述べる。日はく

「（一）予はニユウトンの光線說が支持すべからざるものなりしことを信ずる。併し予はそれが爲めに、ニユウトンが其理論

に依つて說明せんと試みたる諸現象が存在せず、若しくはそれの諸學說は皆人を誤り、又其斷定は皆な謬りであつたと主張することをなさぬ。即ち例へば予は靑色と黃色との混合が橙色となるべく、若しくは窓から跳躍すれば予は風船乘ボルドキンの如く空中に飛揚すべしと信ずるものではない。同樣に予はニユウトンが畢竟愚物なること、若しくは彼れの光線說を覆へしたヤングが彼よりも優れた天才なりしことを信じないのである。同樣の前後不一貫を以て、予はマルクスの價値論は謬れるもので、ジエヴオンスが之を覆へしたことを信じて、而かも其故にハインドマンの堂々たる論理を以て、マルクスは偉人なり、資本論は妄言の集積なり、社會主義は幻想なり、ジエヴオンスはマルクスよりも遙に優れるものなり。恐慌は太陽黑點の直接の結果なりと推論することをなさぬ。予はマルクスが十九世紀のアリストテレエスであつたことを最も美しい形式に於て承認することを辭せぬ。併しハインドマンは予が個人的に知つて居る通り、一二の點に於てはアリストテレエスよりも賢いことを主張してゐるのだから、予は彼れが、若し予が價値の點に於てはマルクスよりも善く理解して居ると主張しても、僭越を以て予を責めざるべきことを期待する。

(一二) 予は一理論に取つて致命的なる事實が單に(其理論の)創唱者が一瞬時もそれに就て疑を懷かなかつたといふ主張のみに依つて、其理論に取つて無害なるものとなさるゝことを容認する譯には行かぬ。マルクスが資本論第一卷に揭げられた儘の彼れの理論が支持せられざるべきことを知らなかつたといふことは決して承認して間違のないことではない。フリイドリヒ、エンゲルス自身その第二卷(ハムブルグ一八八五年)への序文中に、ロオドベルトスが價値理論(マルクスが發展せしめたる)の眞の創唱者であつたと主張する人々に、吾々が資本論の既刊部分に依つて追詰められてゐる矛盾をロオドベルトスの手で解決せんことを求めて居る。それは即ち此理論に從へば人間の勞働は餘剩價値を造り出すが機械はさうでないにも拘らず、猶ほ事實上、例へば一〇〇〇磅の可變(賃銀)資本と九〇〇〇磅の不變(機械)資本から成立つ一〇〇〇〇磅の資本の搾取か九〇〇〇磅が可變資本、一〇〇〇磅が不變資本に放下せられた同一額よりも少なからぬ餘剩價値を齎すといふ矛盾である。エンゲルスは解決が資本論最終第三卷に與へられてあることを主張するが併し彼れはロオドベルトス其他に依つて既に價値論に關する一切を知悉する者共に、第三卷發刊以前に此困難を解決することに依つて其智識を證明せんことを嘲笑的に促して居るのである。それにも拘らず、ハインドマンは既刊の卷に說かれ

てゐる儘の理論が資本主義の有する經濟現象に對する主要の辨たることを主張すると同時に、此理論が最早何等の困難何等未解決の矛盾を蔵せぬといつて居るその論文の中で、彼れはエンゲルスの權威に訴へ、エンゲルスの發言を詳密に引用して居る。其故次の事を確定して置くを要する。最上マルクス主義者たるエンゲルスは、此理論の不完全と不充分とに關しては、キックスチイドとハインドマンとがそれを目前にする限り、キックスチイドに同意して、ハインドマンに反對するといふ事是である。矛盾を發見したキックスチイドは、此理論を排棄して、マルクスの上層建築には重大なる損害を與ふることなく周到なるより近世的なる價値分析を以て之に代へた。エンゲルスは秘密の第三卷に存する所の解決への通路を扼する特權の位置を占めて居る。併し乍らマルクスの綜合に缺陥の存することに關する全くの無智識をば、其の「一天才の學説に對する根本的理解」の一例として提供するハインドマンに就いては、吾々は何と言つたら好からうか。

相交換せらるゝ二商品に共通なるものは抽象的なる人間の勞働であつて、これによつて幾足の靴にマホガニイ製食卓一脚の價値があるかを決定し得るといふのがマルクスの説であると述べた後にジエヴオンスたるショオが左の言をなすのは不思議ではない。

「……茲に起つた疑問、即ち製靴師の勞働及び指物師の勞働が、その特殊性質を無視せらるゝことに依つて抽象的人間勞働に還元せらるゝ過程が何故靴及び食卓の利用にも適用せられぬかとの疑問は自然である。穿き物として及び食物臺としての其の特殊の利用を無視すれば、其處に彼等の抽象的なる可欲性、即ち人間欲望の滿足に役立つといふ彼等に共通なる性質がある。此の抽象的なる可欲性が價値の眞の基礎、根元、實質、究局原因、有効原因——何と名付けても好い——である。それは商品其者が存在する以前に在るもので、商品が生産せられ、勞働がそれに投ぜらるゝ原因である。而してこれが依然同一なる限り、商品製作の爲め社會的に必要なる勞働時間の如何なる變化も其價値を一イヨタも變ずることは出來ないのである。ハインドマンは起り得べき靴の價値下落を次のやうに説明して居る『何人かゞ有用性と等しき諸物をより少なき勞働精力の支出を以て生産し得べき新機械若しくは何等かの新方法を發明した。』此命題の文句を以て彼れは經濟上の自殺を犯して居る『等しき有用性』なる句は、嘗て彼れがジエヴオンスを地獄に墮としたよりも更に深く彼れを地獄に陷らしめたものである。機械が一商品の量を増加せしめ、買手が充分の當てがひを受けて、其商品の

其以上の供給が前ほどに望まれぬ時に至つて始めて價値は下落するのである。」

ショオ等自身はジエヴォンスと共にリカルドオの地代論を其の社會主義經濟理論の根據とするものである。從つて又此點からマルクスに批評が加へられる「同種同價値の商品は單に勞働力のみの生産物でなくて、又原料の生産物でもある。而して此の原料は農業家及び鑛山所有者の皆な承知して居る通り、甚だそれに近づくの難易と適應性とを異にするものである。社會主義秩序の下に於ては吾々はそれを其の平均的生産費を以て取得するだらう。併し個人主義的自由競爭は、決して製造せられた商品の價値をば、使用せらるゝ原料中の最も近づき易からず、最も支配し易からざるものから之を製作する費用以下に久しく引下げることを得ない。比較的有利原料の所有者に剩さるる利潤は『餘剩價値』の主要源泉たる經濟的レントである。此要素の根本的理解なくしては、社會主義を之と對抗する諸系統に對して經濟上に辯護することは不可能である。故に例へば個人主義的協同組合三昧も、個人主義的無政府主義も、ハインドマンの資本論の罵詈的反覆及びバラフレエスに比して毫末も劣るものではないと同時に、それはリカルドオの理論に基づく批評に堪へることが出來ないのである。」

ショオのマルクスに對する批評は畢竟次の三點に歸する。マルクスが商品の相互に測定せらるべき點を明にしようといふ目的を有しながら、僅に此等の點の一のみ、即ち其の抽象的人間勞働の生産物たる性質のみを考慮することが其の一。商品は其の抽象的有用性に關聯しても同樣の方法で相互に比較し得べく、實際上商品の交換に關して行はるゝ比較はその抽象的人間勞働に於ける比較ではなくて、其の抽象的可欲性の比較にある」ことが其の二。マルクスは資本論の今迄に公刊せられた部分だけのところでは、經濟的レントの法則を無視して居り、而して此事は彼れの理論から「與へられたる經濟的諸現象に對する鍵としての資格を奪ふ」ものである。「蓋しこれは今迄の處「嚴格なる論理を以て推究すれば、『餘剩價値』の可能性を事實上、否定することになるからである。これが其の三である。

ショオはハインドマンを以て「其のブラックフライヤア・ブリッジのセントヘレナから時々社會民主黨の名義を以て僞マルクシズムを發行」するものと評して居る。ジエヴォンスの價値論は一八七一年に大成せられて、英吉利伊太利和蘭及び瑞西に於て古き勞働價値說を擊破して到處に地歩を占めた。ハインドマンは之を愚說と斷言して居ない。然らば彼れは何故に其斷定を發

明しないのか。「謙遜が彼れを抑制するものと解して宜からうか。」ジェヴォンスの「經濟學理論」の第三版が出た。而かも彼れは之を批評しない。キックスチイドは平易なる形に於て此理論の嘆賞すべき解說を公にして、Justice 紙上で罵詈はせられたが批評はされて居らぬ。ヲレスはキックスチイドを批評したが、そのヲレスに對しては、その經濟的レントの指示は苟も科學的社會主義に關して述作し講演するものゝ面目を汚損するものだと言はれた。而かも此非難の根據となるものは全く重要ならざるマルクスの言の引用に過ぎぬ。而かも此に次いでハインドマンは恬然として「此問題を論ずる爾かく多數の人を困惑せしめるものは貨幣と從つて價格と結着ける諸現象かも知れぬ」と言つてゐる。或は然らん。「蓋し貨幣と結着ける諸現象の一は努力の嫌忌とより勤勉なる同胞を輕蔑せんとする傾向だからである。」

終りに臨んでショオは曰はく、「予はマルクシズムを以てカアル・マルクスを責めずして、彼れが其門人から偶像崇拜よりは善き何物かを受くべきであつたと信ずるものである」と。

ショオは論爭の當事者であるから、其の論爭の叙述が決して不偏不黨のものでないことは言を俟たぬ。又彼れのマルクス批評の當否も茲には論じない。たゞ彼れが言つてゐる事で直ちに賛成して好いものの丈けを擧げて置かう。右の最後の一句、又前段の、アリストテレスの誤謬を指摘して差支ないものならば、マルクスを批評することも僭越を以て咎むべきではなからう云々などはそれである。

時評

黑船來る！

一日天氣晴朗の日、米國の金融資本家團を代表して、モルガンが東京驛のプラットホームに姿を現はしたとしたら、どうだらう。警視廳は三千人の巡査を召集して警戒するだらうか。政府は三井、岩崎、大倉、澁澤等の寢込みを襲ふて檢束するだらうか。この機會に、金融資本家が國際的に接近しては一大事と、一切の金融資本家から、モルガンと挨拶を交はす機會をも奪ふだらうか。そしてモルガンは日本の銀行家の間にばら撒くために、三十萬圓持つて來たなどゝいふ子供だましに宣傳をして、てれ隱しをする必要を感ずるほどの、狂態を演ずるだらうか。

露國勞働組合の代表者の來朝に當つて、政府と警察との取つた處置は、丁度この通りであつた。否なこれよりも、もつと甚しい狂態を極めたものであつた。獨り東京ばかりでなく、横濱でも、名古屋でも、大阪でも、京都でも、神戸でも、勞働組合の幹部は片端から檢束され、組合から差し廻はした案内役さへも、中途で警官をして拉し去らしめた。會場に干渉して歡迎會の催しを不可能にしたばかりでなく、工場の視察をさへも妨げた。甚しきに至つては、大阪では、露國代表者は宿屋を求めることすらも出來なかつた。

日本の政府は、レプセに行つたところを、モルガンにも行ふであらうか。何人も否と答へるに違ひない。全ての人々は、一人の例外もなく、それを疑はぬ。これは日本の政府と外國の資本家階級との關係は、外國の勞働階級との關係とは全然異るといふことを、全ての人々が認めてゐることを意味してゐる。言葉を換へて云へば、全ての人々は、今日の政府の階級的性質、資本家的性質を、當然自明のことゝして、疑ふの餘地なき事實として、公然の事實として少しも怪んでゐないと云ふことを意

味してゐる。

今日、特殊な野蠻國ならざる國柄では、勞働組合運動の國際的性質は、一般に承認せられてゐるばかりでなく、實踐の上でも普通のことになつてゐる。現に勞働組合の國際的團體としては、國際勞働組合聯合と赤色勞働組合インタナショナルとの二つの有力な團體があつて、特殊國たる日本を除く殆んど全ての國の組合運動は、この二つの國際團體のいづれかに屬してゐる。その外にも、金屬工、交通勞働、坑夫、印刷工といふように、同一産業または同一職業の組合の間にも國際的の組織がある。この種の産業別または職業別の國際的團體は目下三十一あつて、各國の有力な組合は、大抵これに加盟してゐるものである。また各國に於ける有力な組合の大會、ことに組合の全國的大會には、互に代表者が交換せられるようなことは日常普通のことであつて、何人もこれを怪む者がない。

ところが日本では、勞働組合が國際團體に加盟することは愚か、外國の組合との間に文書を交換することすらも、政府はこれに對して異樣な眼を光らせ、勞働階級が他國の勞働階級と接近することは、直ちに陰謀、反逆、賣國の行爲でもあるかの如く考へてゐる。これは特殊國の特殊心理以外、普通の常識では、とうてい想像すらもなし得ぬ事柄であつて、この點では、露國の勞働代表は他國では見られぬ珍らしい觀せ物を見て歸つた で、來甲斐があつたと云はなければならぬ。

日本の支配階級の斯ような心理は、そも／＼何を意味してゐるだらうか。勿論、これは日本の支配階級が、極度に階級意識に目醒めて居るか、乃至は階級的本能が極度に强烈なことを意味することは無論であるが、それは同時に、日本の政治が、今日も尙ほ封建時代の密使政治そのまゝであることを意味してゐる。日本の支配階級は、上半身は黃金色に光つた工業資本主義に變形し、ことにその頭は、立派に資本主義の最新形態たる金融資本主義に化成してゐるが、その下半身には、封建制度のぬけ殼がそのまゝくつ着いてゐる。彼等は陣羽織をフロックコートに着替へた攘夷論者である。たゞこの攘夷論者は、外國の資本家階級だけは、攘夷にあらずして人間だといふことを學修したのである。そこで外國の勞働階級の代表者が來たと云へば、すわこそ黑船來れりと、火繩銃を取出して身構へする。

斯ような無智と攘夷根性とは、支配階級のマウスピースとして、乃至はその喇叭型の擴聲器の役目をつとめてゐるブルジョア新聞とによつて、憶面もなくさらけ出されてゐる。日本の有名な大新聞の社說には、露國の勞働代表に對する政府の狂氣じみた遣り口を讃美する理由として、次の如き一節がある。

『……彼等（露國勞働代表）の所謂聲明書には、日本で禁書となつてゐる共產黨宣言の結論ともいふべき一句がしば〱繰りかへされた。日本政府はロシアと違ふから、片言隻句の爲に一行の自由を拘束はしないが、兎もあれ國禁の書中の結論をお土産にするとは、お客として傍若無人だ。……禁書である以上は、之を警戒するのは當然である……』。

この博學な記者先生が、『禁書の結論』と申されたのは、云ふまでもなく『萬國の勞働者團結せよ！』といふ一句を指したものである。この『片言隻句に白晝の銀座に虎が飛び出した以上の騷ぎをすることは、お說の通り、さすがに日本の政府は、たゞにロシアとばかりでなく、すべての文明國の政府とも違ふところであるが、いま時まじめな顏をして、種ケ島の火繩鐵砲で、支配階級のために掩護射擊をしてゐるブルジョア新聞記者も、恐らく日本以外の國では珍らしい。

そこで日本の組合運動は、世界的の水準にまで進出するためには、國際的團結の權利を獲得するために、支配階級と有力に鬪はねばならぬことは無論であるが、同時に、黑船におびえる攘夷論者支配階級と政府とを、こくめいに敎育しなければならぬ。

いふまでもなく、最も效果のある敎育方法は、實物敎育である。言葉を換へて云へば、しば〱黑船を見慣れさすことによつて、膽力を練らせることである。二度よりは三度、三度よりは五度である。レプセの請待を手初めに、日本の組合運動は今後續々、第二、第三、第四、第五の露國勞働組合の代表者を請待すべきである。獨り露國の代表ばかりでなく、機會あるごとに、各國に組合代表者を請待すべきである。たゞに請待するばかりでなく、經費の許す限り、露國を初め各國の組合運動の調査と國際親善の實を擧げるため、代表委員を派遣すべきである。更に容易な手近かなこととしては、少くとも各國の組合の全國的の大會に對しては、友誼的の挨拶を送つたり、又は階級的利害の問題については、努めて各國の組合に對して、訴へや飛檄を發すべきである。これは封建的障害のために發達を阻止せられてゐる勞働階級の國際的精神を喚起する效果があるばかりでなく、日本の支配階級と政府を敎育する最良の方法なのである。勞働階級が國際的團結の權利を獲得する唯一の道は、實際に國際的運動に進出することである。

明春を期し、東洋諸國の組合大會を支那に於て開催する計畫が、總同盟の鈴木氏によつて進められてゐることは、日本の勞働組合の國際的運動への一步として、極めて重要視すべきものである。この計畫を完成し、意義あり光輝ある大會たらしめる

爲めには、全國の勞働組合は區々たる感情や行掛りを一掃して、極力この計畫を支持しなければならぬ。

勞働組合法とその代價

行政調査會に附議せられてゐる內務省の勞働組合法案は一般に、比較的よい法案と認められてゐる。私もまたこの法案が、『比較的』よい組合法案であることを認めるに躊躇せぬものである。

けれども『比較的』といふことは、言ふまでもなく『比較的』であつて、比較的よくないものに比較した場合にのみ、比較的によいのである。曾て發表せられた政府の組合法案——例へば組合の組織の範圍や形態を限定したような法案——に較べても、今度の組合法案は『比較的』幾らかよいと云ふことが出來るけれども私が、特にこの法案の『比較的』よいことを認めるに躊躇せぬといふ意味は、一年前に治安維持法の如き野蠻な法律を案出した同じ政府の案出した組合法案としては、『比較的』よいと云ふ意味である。

內務省の原案の『比較的よい』とせられる點を擧げれば、勞働組合の目的を、勞働條件の維持改善と定義はしてゐるが、『その他の共同利益の保護增進を目的とすることを得』とあつて、——これを正當に解釋すれば——少しも組合の行動範圍を制限して居らぬこと、人員の最低制限も十人以上であつて、且つ組織の形態や範圍をも限定して居らぬこと。組合員たることを理由とする解雇、不雇傭を禁じたこと、或る點まで、組合の團體協約權を公認したことなどである。

けれども相當によい代物でも、値段が法外に高ければ、値段との比較に於いて、却つて最惡の代物となることを忘れてはならぬ。かりに政府の勞働組合法案が、比較的よい性質と條件とを備へてゐるにもせよ、これに對して、政府が勞働者に支拂はしめようとする代價が、暴利的に高價であるとしたならば、比較的よい組合法案も、却つて最惡な法案とならざるを得ぬ。

組合法案は第一條から第十二條までに於いては、『比較的』によい代物を勞働者に提供してゐるが、第十五條に至つて、法外な勘定書を突きつけてゐる。即ち、勞働組合の決議が法令に違反する（正確に云へば、違反すると勝手に認めた）場合には、地方長官はその取消を命ずることが出來る。尤もこれに對して

は、行政訴訟を起す道が開かれてはゐるが、この救濟の道が、實際上には有名無實なものであることは云ふまでもない。假りに不當な取消命令に對して行政訴訟を起し、その結果が、萬が一にも組合側の勝訴となつたにしたところで、それまで決議とその遂行とを阻止することさへ出來れば、大多數の場合、取消命令の目的はすでに達し得られてゐる。

然るに取消命令から更に一歩を進めて、地方長官に、組合に對して解散命令を下す權能を與へようとする修正意見が現はれてゐる。地方長官が決議の取消命令を持つ結果は、勞働組合の行動を、或る點まで地方長官が左右することになる。況んや地方長官が解散命令權を持つことになれば、事實上、地方長官が完全に、勞働組合運動の指導權を握ることになる。これが政府の『比較的』よい組合法案に對して、勞働階級が支拂はしめられようとしてゐる代價である。

第一條から第十二條まで、相當に御馳走をしておき、第十五條で喉元をしめて、そつくり吐き出させる計畫は、さすがに巧妙な仕掛であつて、恐らくこれは加藤首相の郷里、長良川あたりの鵜飼の船頭から教はつて來た秘訣に違ひない。

然るに一方には、東京及び大阪の工業資本家は、行政調査會の保守的分子と策應して、內務省の組合法の原案から、その『比較的よい』部分だけを取り去らうとする猛烈な運動を始めてゐる。

彼等は第一に、組合の目的を、勞働條件の維持改善と定義することに反對して、資本家の補導の下に出來てゐる、工場內の曖昧な團體に、勞働組合の仲間入をさせ、組合運動の鬪爭的性質に割り水をしようと試みてゐる。

第二には、組合の最低人員を引上げて、組合の成立を困難にすると同時に、組合の組織形態と範圍をも、資本家的支配に都合のよいものに限定しようと試みてゐる。

第三には、組合員の資格を、現に雇傭關係の下にある勞働者に限らうと試みてゐる。組合員の資格が、現に雇傭關係の下にある勞働者に限られたなら、組合運動の活動力は最低限度に切詰められる。そして現在の組合運動の首腦者の大部分は、組合運動から排除せられることになる。失業者は失職の瞬間から、組合員たる資格を喪失する。組合員は馘首せられた瞬間から組合員たる資格を失ふから、最早や組合が彼等を代表して、傭主と交渉することは出來ぬ。そこで若しこの規定が嚴密に實行せられたなら、傭主に取つては、組合は無いに均しいものである。

第四には、組合員たることを理由とする解雇や不雇傭を禁止した第十一條と、團體協約權を認めた第十二條とに對しては、

彼等は最も猛烈に反對する。その理由は明かである。現に彼等は、組合員に對するブラツクリストにより、組合員たることを理由とする解雇と不雇傭とを組織的に實行して、組合の發達を防止してゐるのである。

ことに注意に値ひすることは、行政調査委員會の內部に現はれてゐる修正意見が、これ等の工業資本家の修正意見と精密に一致してゐることである。言葉を換へて云へば、行政調査委員會と名づける政府の一機關を構成してゐる委員の約半數は、直接に工業資本家の利害を代表してゐることである。

のみならず、政府部內に於ける『比較的』進歩した意見を代表する原案に對しては、

第五には、勞働組合の政治的行動の禁止、乃至は組合の基金を政治運動の目的に支出することを制限して、無產政黨の發達を阻止しようと試みてゐる。英國でも、勞働黨の長足の發達に恐怖と嫉妬を感じた支配階級によつて、同じ企てが試みられたことである。佛國でも保守黨の政府は、勞働總同盟(ソー・ジー・テー)の行動が、職業上經濟上の範圍を踏み越えて政治行動の圏內に踏み込んでゐるといふ理由を以つて、總同盟の解散を裁判所に要求したことがある(勿論ものにはならなかつた)。勞働階級の政治的覺醒に對する恐怖と嫉妬とは、支配階級の共通の心理である。資本主義が現在の段階に達しては、勞働階級の經濟上の闘爭と、政治上の闘爭とを區別することは、絕對に不可能である。ブルジョアジーの經濟上の支配が、直接に政治上の支配によつて維持せられてゐるからである。

同一政府部內からも修正の要求が現はれてゐる。即ち陸海軍の方面からは、陸海軍所管工場の勞働者を、農林省の方面からは、林業及び漁業勞働者を、いづれも組合法の適用から除外する要求が有力に起つてゐる。これは軍需品工業の勞働者約十萬人、林業漁業の勞働者約百五十萬人から、組合組織の權利を剝奪しようとするものである。現在といへども官業の勞働者は、私營事業の勞働者以上に、組合運動に對する不當の壓迫と干涉とを蒙つてゐる。けれども官業勞働者の斯ような不利益な地位は、現在ではたゞ事實として存在するだけであつて、法律によつて確認せられては居らぬ。全べての組合が法律によつて積極的に公認せられて居らぬから、官業勞働者の組合も、少くとも法律上では同等の地位に置かれてあるものである。然るに組合法の制定と同時に、陸海軍工場及び林業漁業の勞働者はその適用から除外せられることになれば、約百六十萬人の勞働者は、法律によつて積極的に團結權を剝奪せられるに均しいものである。勞働組合法に、若し斯ような修正が加へられるとすれ

ば、組合法は勞働者の團結を公認する法律ではなくて、團結禁止の法律である。

これ等の修正要求が勝利を占めたなら、『比較的』よい法案のうちから、『比較的』よい全ての點を引去つた上に、最惡の性質を附け加へることになる。

これ等の修正要求に對して、政府がどこまで原案を維持し得るかゞ、そもそも疑問である。よし原案が維持されても、資本家の代表者から成る議會に於ける運命は更に疑はしい。假りに原案のまゝで議會を通過したら、どうだらう。組合員の資格と制限、組織の形態その他の點では『比較的』よいものを與へられる代價として、組合運動は、全然地方長官にその指導の權利を引渡さねばならぬ。政府と資本家とは、一杯の羹の代りに、勞働階級の相續權を奪はうとしてゐるのである。

これに對しては、一二の組合ではその態度を表明してゐるが、組合運動全體としては、今日まで何等の運動も起つて居らず、何等の意志表示すらもなされて居らぬのは、寧ろ怪むべきことである。この種の當面の利害問題こそ、組合運動の一致を發見するに最も容易な問題であつて、共同戰線の絕好の基礎となるべきものである。

―爭議の助太刀と治警十七條の改惡―

政府は組合法案について、勞働爭議調停法案を行調委員會に附議してゐる。勞働爭議調停法案は、すべての企業に於ける勞働爭議に適用せられるものではあるが、法案の目的は交通機關その他の謂ゆる公益事業の爭議を處理することであつて、その他の事業の場合は、ほんの附けたりに過ぎぬ。またこの法案の目的は、爭議の『調停』にあるかのようであるが、その實これ等の謂ゆる公益事業に於ける罷業禁止の目的を以つて立案せられてゐることには、一點の疑ひがない。

この法案の巧妙な點は、どこまでも強制調停の形態を避けなるべく任意調停の外觀を保ちつゝ、しかも實際には強制調停の效果を收め、勞働者の罷業權を事實上に剝奪する所期の目的を果さうとしてゐることである。

謂ゆる公益事業の場合には、爭議當事者中の一方の請求があれば、爭議は否や應なしに調停に附せられるものであるから、

半強制的である。のみならず、行政官廳が必要と認めた場合には、爭議は強制的に調停に附せられる。

尤も原案では、爭議が調停に附せられても、罷業は續行することが出來る。これに對しては、調停中は罷業を中止せしめるといふ有力な修正説が現はれてゐる。調停委員會の決定は強制的ではなく、之に對しては、必ずしも服從の義務はない。この點では、法案は大に任意主義を發揮してゐるが、この法案の巧妙と狡猾もまた茲にある。

調停委員會は開會の日から、十五日以内に決定を告ぐる規定になつてゐる。日本の現在の勞働組合の力では、十五日間は丁度決勝的の期間である。多くの場合、最初の十五日間に戰利を收めねば、罷業の勝利は覺束ない。大多數の罷業の勝敗は、最初の十五日間によつて決定すると云つてよい。然るに爭議が一度び調停に附せられてゐるならば、傭主側が調停委員會の決定以前に、勞働者の要求に屈服する道理がない。なぜならば、勞働者側が容易に敗戰することが見え透いてゐる場合には、傭主側でも調停の請求はしないし、行政官廳でもその必要を認めない。傭主や行政官廳が調停の必要を認めるのは、原則として、勞働者側の戰鬪力が可なりに有力であつて、傭主に取つて形勢重大と思はれる場合に限られてゐる。そこで言葉を換へて云へば、勞働者側の勢力が相當優勢であつて、勝利の可能性のある時だけ、調停法は勞働者に對して強制的に作用するものである。斯うした形勢の下に、爭議は調停に附せられる。そこで一週間目か十日目に要求を容れなければならぬ立場にある傭主も、調停委員會の決定までは、頑張るに極まつてゐる。十五日間の罷業によつて罷業基金が盡き、鬪志が沮喪し、勞働者側に取つての決勝的な重要期間が過ぎ去つたところで、調停委員會の尤もらしい決定が與へられる。この決定には、勿論強制力はない。これに從ふと否とは任意である。その結果は任意の強制である。

調停中は罷業を中止する修正が加へられたなら、この作用は一層明白に、一層有効になる。即ち調停法は傭主側に、最長十五日間の罷業對策準備の期間を與へるための法律であり、勞働者側の勝利の機會を——從つて罷業の可能を——絶對に無くするための立派な法律となるのである。

斯ように政府の爭議調停法案は、最善の場合にも、勞働爭議の場合——特に勞働者側が相當に優勢な場合——に、傭主側に助太刀をするための法律であり、最惡の場合には、任意調停の名目の下に、事實上、勞働者の罷業權を剝奪する——一層適切に云へば、××する——法律である。

ことにこの法案は、謂ゆる公益事業なるものを一般企業から區別して、その從業勞働者に不利益な差別的待遇を與へるものだといふ點に於て、原則的根本的に排斥せらるべき法案である。

法案によれば、爭議が强制的または半强制的に調停に附せられるのは、鐵道、電車、船舶等を用ひる交通業、通信事業、電氣瓦斯の供給『その他、公衆の日常生活に直接關係ある事業にして、命令を以て定むるもの』である。產業の大部分は、公衆の日常生活に直接影響するものであるから、御都合次第で、大多數の產業部門に適用を擴ろげることも出來るが、先づ差當りは、謂ゆる公益事業の場合に適用せらるゝものである。

然るに謂ゆる公益事業を『公益』事業としてその他の事業から區別することは、全然獨斷的な區別であつて、何等の適當な根據がない。第一に、これ等の謂ゆる公益事業なるものは、多くは一般公衆に利便を供給してゐるものであつて、その供給が斷絕することは、公衆の不便を意味してゐる。然るに生活資料を供給する多くの產業部門は、公衆の生活の根本條件に影響を與へるものであつて、一層基本的な意味に於て『公益』的の事業である。然るにこれ等の企業の場合には、生產を制限し、又は中止するの自由は、完全に資本家に與へられてゐる。

第二には、謂ゆる公益事業なるものも、少數の例外を除いては、その他の企業と何等の差異のない營利企業の原則によつて經營せられてゐるものである。市營の電車の如きも、債券所有者に利子を支拂ふてゐる限りは、公益的の原則によつて經營せられてゐるものではなくて、利潤收得の基礎の上に——卽ち勞働××の基礎の上に——經營せられてゐるものである。

第三には、假りに謂ゆる公益事業には、その他の一般企業と區別する充分の根據があると假定しても、少くとも次の如き一點に於ては、一般企業も何等の相異はない。卽ちその勞働條件は、勞働者の生存と直接の關係があるといふことである。謂ゆる公益事業が、その他の企業以上に、公衆の日常生活に直接の關係を有すると否とに拘らず、その勞働條件の如何は、その他の一般企業と同じく、勞働者の生活と直接に關係するものである。

謂ゆる公益事業の勞働者を差別的に取扱ひ、その罷業を製作するためには、先づ第一に、これ等の事業を、利潤の收得を目的とする一般企業の原則から、純然たる公益を基礎とする經營に移さねばならぬ。第二には、これ等の產業の經營に對して、從業勞働者に管理權を與へねばならぬ。第三には、その從業者に對して少くとも一般企業の勞働條件よりも優れた模範標本的

の勞働條件を與へねばならぬ。たとへこの場合にのみ、謂ゆる公益事業の勞働者の罷業權を制限することにも、多くの論據を生ずるものである。

調停委員會の構成も、大多數の場合傭主側に有利となることは爭はれぬ。殊に第十九條の規定は、爭議調停中は、その爭議に關係ある組合員以外の者が、爭議を應援することを絕對に不可能とするものであつて、一方には治安警察法第十七條を撤廢しながら（治警法下にも、爭議の應援は現に行ほれてゐる）却つて治安警察法を更に改惡したものを、爭議調停法のうちに復活しようとするものに外ならぬ。

數字の僞瞞

統計上の數字——ことにお役所的統計の數字——が、社會現象の眞相について、飛んでもない間違つた概念を與へることの屢々であるが、今度の失業調査の結果の如きも、恐らくその著しい實例の一つである。

全體に亙る調査の結果は明かでないが、東京に於ける失業者は一萬人といふことである。その他の都市について、部分的にその結果の報導せられてゐるものを見ても、大體に於いて、調査の結果に現はれた失業者の數は、最も內輪な豫想よりも遙かに少ないといふことに一致する。

今度の失業調査の結果、全國の失業者の實數として、假りに十萬といふ數字が得られたと假定する。六千萬の人口中の十萬といふ數字は、果して現在の日本に於ける失業問題の重要さを表はしてゐるだらうか。決してさうでない。この十萬といふ數字が、失業といふ社會現象の大いさを表はしてゐると考へるは、道ばたに行き斃れてゐる者の數が、直ちに飢えたる者の數を代表してゐると思ふのと同じである。

失業の廣さと深さを知るためには、職業の斷續狀態を計算に入れなければならぬ。これ等の半失業者に生活標準の低下と共に、現に就職してゐる者の實際收入の減少と、從つてその生活の低下を計算に入れなければならぬ。特に日本の場合には、家族制度の結果として、失業者または半失業者は家族の厄介になり、家族全體の生活を引下げることによつて、どうなり斯うなり其日を送るといふ事實を計算に入れなければならぬ。殊に失業者が、都會にのみゐるものと考へるのは、大きな見當違ひで

ある。全くの失業者が、何日間も食はず呑まずで、都會に集まつて失業調査のあるのを待つてゐるかの如く思ふのは、あまりに呑氣な話であつて、よく〳〵身寄りのない者を除くの外は田舎に歸る。お役所的な見解では、これは歸農といふことになるが、これ等の人口は決して農村が吸收したものではなくて、農村に於ける過剩の人口である。彼等の生活は、家族の食物を減することによつて、辛うじて維持せられてゐるものである。

政府は失業調査に現はれた失業者の數が、意外に少ないことを辛うじて幸ひにして、無産階級が失業から受けてゐる疾苦を出來得る限り小さく見せようとする。それと同時に勞働階級の失業運動に對しては、政府は警察力によつて飽くまで××を試みてゐる。現に失業問題のために開かれた集會にして、×××によつて蹂躙されないものはない。これが『働かせろ！然らざれば食はせろ！』といふ勞働階級の叫びに對する、ブルジョア政府の答へである。

無産政黨準備委員會

無産政黨準備委員會は、第一回の綱領小委員會を開いて、綱領の大部分を決定し、第二回の委員會によつて、組織形態が討議せられる筈である。

この矢先きに、無産政黨樹立の促進のために多大の貢獻をし、現に準備委員會の構成要素をなしてゐる政治研究會の内部が、綱領及び組織の問題について左右の兩翼に分れ、最近の大會は、謂ゆる右翼は少數で敗れたゝめ、政治研究會を脱退すると傳へられてゐる。

また準備委員會そのものゝ内部でも、綱領委員會に於ける討議が動機となつて、自ら右翼と呼んでゐる一二の組合代表者は、とうてい左翼との間に一致の行動を取ることが不可能であるといふ意見を公表し、準備委員會から脱退の計畫すらもあると傳へられてゐる。

吾々は固より、新聞紙に傳へられたこの種の取沙汰が、單なる取沙汰であることを希望するばかりでなく、單なる取沙汰でなければならぬと信ずるものである。

如何なる團體にも、左翼と右翼が發生する。最も嚴密な意見の一致を基礎としてゐる無産階級の政治黨派でも、そのうちには

自づから右翼と左翼が分裂して、別々の團體を造つたなら、水入らずの團體が出來るかと云へば、決してさうでない。右翼と左翼との各々の內部に、また右翼と左翼が發生する。これは一人一黨とならぬ限り、如何に團體を小さくして往つても、とうてい回避することは出來ぬ。これは團體運動の例外ではなくて、その常態なのである。從つてこの事實に堪へ得ないといふことは要するに團體的運動の資格のないことを意味してゐる。

そこで右翼にしろ左翼にしろ、少數で敗れたものは、その團體の內部に止どまつて、自己の主張が多數を制するために努力すべきである。討議に負けたとか、少數で敗れたとか云つて、直ちに脫退分裂の騷ぎが起るのは、二た口目には切腹して武士の面目を立てようとする封建時代の根性である。遺憾ながら日本の無產階級運動は、尙ほ多分に、封建根性によつて支配せられてゐる事實に眼を閉ぐことは出來ぬ。

無產階級運動が組合運動でも政黨でもが大きくなればなるほど、大衆的となればなるほど、氣心の知れた少數の親分の、水入らずの懇談了解で處理してゆくことは不可能となつて來る。大衆運動の一致を保ち、その內部に於ける諸要素の間の眞實の妥協に達する唯一の道は、第一には公然の討議である。第二には、多數決での服從である。この團體訓練なくしては、無產階級の大衆的運動は不可能であると云つてよい。

殊に無產政黨の場合には、現に主要な各團體の綱領草案は、少くとも主要な點に於て豫期以上の一致を示してゐる（前號に揭げた四團體の草案の比較分類を參照）。從つて、右翼と左翼との意見の不一致は、分裂の眞實の理由となることは出來ぬ。

無產政黨は、無產階級の有ゆる要素の、協同戰線の一つの形態である。無產政黨は社會民主黨でない如く、共產黨でもない。又あつてはならぬ。若し何人かゞ、無產政黨を社會民主黨たらしめようとせぬ限りは、若し何人かゞ、無產政黨を共產黨たらしめようとせぬ限りは、そして無產階級の一部の要素の協同戰線の形成であることを眞實に意識するならば、そして人々が、無產階級の利害と一致とを全てのものゝ上位におき、一切の私情を棄てゝ無產階級的、團體的の訓練と規律に服するなら、準備委員會の前途には、決して解決することの出來ない困難はない。

ブルジョアの支配階級とは、全注意を準備委員會の上に注いでゐる。彼等は準備委員會の成行によつて、無產階級の政治的實力を測量しつゝある。不幸にして準備委員會が、階級的單一的無產政黨の樹立に失敗したならば、政治上經濟上の一切の戰線に亘つて、ブルジョアジーは猛烈な攻擊に轉ずるに違ひない。如何なる代價を拂つても、準備委員會の分裂を防ぎ、單一無產政黨の樹立に成功することが、右翼に取つても唯一の勝利であり、左翼に取つても唯一の勝利である。

讀書散步

讀書そのをりをり

牧野英一

書物は、わたくしは假綴のものを好みます。職務の關係からも、研究の關係からも、將たまた單純な興味の關係からも、わたくしは多くフランスの書物に親しむのでありますが、そのフランスの假綴の書物がわたくしには氣に入るのであります。

假綴の書物の手に採つて輕いのをわたくしは好みます。假綴の書物の眼に見ては淡い味なのをわたくしはよろこびます。

假綴の書物を求めて來て、その頁を丁寧に根氣よく切るのがわたくしには大きな樂しみであります。――わたくしは、讀むに從つて切るといふことは致しませぬ。机の上を清め、其の眞中で、全部の頁を一度にみんな切ります。切り了へて机の上に据ゑて見たとき、はじめて、わたくしは、其の書物がわたくしのものになつてくれたやうな氣がします。

頁を切らないうちは書物に親しみがない。頁を自分で切らない以上はまた書物になつかしみがない。――さうして、斯やうに頁を切る樂しみはフランスの假綴の書物に限るやうにおもひます。その脆い綴りの、薄つぺらな表紙の、フランスの假綴りの書物に限るとおもひます。

□

書物を讀むには靜かなところがいいにちがひない。しかし、わたくしは、むしろ靜かでないところで書物を讀まねばならぬ境遇を經て來たのであります。――第一には寄宿生活であり

ます。第二には圖書館生活であります。さうして、大學に於けるわたくしの研究室も、少くとも數人の雜居になつて居るので――燒けあとの假の研究室では、數十人の雜居であります――これも靜かといふわけにはまゐりませぬ。

わたくしは、このむしろ靜かでないところで書物を讀むことが面白いのです。横でタイプライターの音がしたり、かたはらで人の話し聲がする間に、書物を讀み續けます

大學の圖書館は、甚しい一種の雜音のするところでありました。しかし、わたくしは、そこが好きでした。ベルリンの圖書館や、パリーの圖書館や、さてはロンドンの圖書館など、それぞれの圖書館のその一種の雜音が、一種のなつかしみ味を以て、今なほわたくしの耳の底に殘つて居ります。

ローマの圖書館では、わたくしが、ただひとりであつたことが屢でありました。ロしマらしい古い建物のうす暗い部屋で、夕方の小暗くなるまで、ひとり窓の下で讀みふけりました。ローマの圖書館は寂しいところであつた、としみじみ今もおもつて居ります。

□

大學の圖書館では、學生の時代にも書庫の檢索が許されましたので、根氣よく書物を見ました。それは、無論、見たのです、讀んだとまでは敢て申しますまい

學生時代に檢索の許されたのは、法律文庫だけでありました。さて英法のいの一番から、佛法の書物、獨法の書物と見てあるきました。イタリヤ語の書物に至るまでくまなくよく探して見ました。

何々の書物は赤い表紙で、何々の書物は青い表紙で、何々の書物は大きな型であつた、何々の書物は千頁にあまつて居たなど、二十五六年前のことが、今なほよく記憶されて居ます。どの邊の書棚のどのあたりにあつたかなどをよく覺えて居ます。

わたくしは、それ等の書物がみんな燒けてしまつたのだとは、どうしても考へることができませぬ。忘れては圖書館へ出懸けようなどとおもふことが、今もともすればあります。

□

ベルリン大學の刑法研究室は、わたくしの居たところは、大學から遠く離れて、リスト先生の邸宅の近傍にありました。そこでも圖書の檢索が許されました。否、そこでは、圖書の檢索が許されたといふのでなくして、圖書館の書庫の中に机を並べて勉强するのでありました。わたくしは、刑事政策に關する書物

の部室に机を一つ貰ひまして、二學期の間そこで勉強しました。書棚の右の一番上の棚から左の一番下の棚に至るまで、くりかへして書物を見ました。――東京の大學の圖書館の法律文庫に通じたくらゐは、ベルリン大學の刑法研究室の書庫に通じました。ベルリン大學のその研究室では、粗末な机で、堅い木の椅子で、むしろ暗い部屋で、さうして、外は電車の音の絶え間のないところながら、わたくしは、大になじみまして、いい心持になつて勉強しました。

そこで机を並べた人人はいまドイツ、スイスをはじめ諸國の大學で有力な教授になつて居られます。

わたくしは、今でも、深く、其の研究室の主任であられたリスト先生に感謝して居ます。先生は一九一九年に故人になられました。

□

圖書館の書物の前に立つと、自分の搜さうとして居る書物からは、おのづから一種のにほひがして來るものであると、これは、たしか、穗積老先生がわたし達にものがたられたことのやうに覺えて居ります。

問題を手にして、しかし、どういふ書物を見たらわかるかといふことの當てがなくして圖書館の書庫へはいり込むと、おのづから一定のところに足が止まり、さうして、自分の目の前に、何となく此の書物ならばといふやうな書物が見出されて、それが、果せるかな、恰好の書物であつた、といふやうなことが、隨分多いことであります。神秘を感ぜざるを得ないやうなことがあります。

□

書物に書き入れをすることと、アンダーラインをすることとは、わたくしは避けて居ります。――何としても書物に對して濟まないやうな心持がされてなりません。

古人の書き入れの書物を見ると、一種のなつかしさに堪へないところのあることは、わたくしも認めるのです。また、友人から借りて來た書物にその友人の加へたアンダーラインを見ると、なかなか參考になることの多いものであるといふ經驗もあるにはあります。しかし、わたくしは、どうしてもそれをする氣になりません。折角わたくしのものとなつてくれた書物が、わたくしから離れて行くであらうといふやうな氣がされてなりませぬ。

□

自分が親しく手にして讀んだ書物であると、あとで、いつでも、自分の見出さうとするところが容易に見出し得られます。しかし、全くおなじな書物でありながら、他人の書物なり、新らしい書物なりに就いてそれを試みると、甚しく骨が折れ、時としては、どうしてもそれの見出し得られないことがあります。わたくしは、書き入れとか、アンダーラインとかいふことを愼しんで居りますので、わたくしの書物とても、ほかの書物とても、かはりはないのです。それがさうでないので、不思議のやうにおもはれてなりませぬ。

□

昔し讀んだ書物を取り出して見て、昔しわからなかつたところが、相かはらずわからないといふことが多いのであります。どうにかならぬものかなどと悔やしくおもはれてならないことがあります。

昔しはたしかに解らなかつたところが、今度は、何でもなく讀み過ごされることがあります。昔しは何故解らなかつたかといふことが怪しまれるやうなことがあります。しかし、兎に角解るやうになつたのでありますから、そのうれしいことは、全くうれしいことであります。そんなとき、ひとりで嬉しがつて居るうれしさが、また、よほどうれしいのであります。

□

數年前にやや永く病にかかつて、海村の小さな家に一年近く暮らしたことがあります。熱がをさまつてから、極めて氣輕に讀書をはじめて、昔し讀んだ書物を若干讀みなほしました。また是非讀んでおきたいと思つて居た、書物を若干讀み得ました。

遠くの浪の音を聞きながら讀みました。軒の鳥の聲を聞きながら讀みました。日なたぼこをしながら讀みました。ほの暗い電燈をわびしみながら讀みました。

書物を讀むことを好み、またこれを職務として居る身でありますが、却つて、健康なときは書物を讀むことがおもふに任せぬやうにおもはれます。今から考へて、そのむしろ重かつた病氣がわたくしには大きな幸福でもあつたのです。再び病氣になりたいとおもふのではありませぬ。しかし、わたくしはその病氣を怨みませぬ。否、むしろ喜んで居ります。

□

大學の學生であつたときのことです。毎週一度、ブリデル先生の宅に集つて談話をしお茶の御馳走になることがありました。集る常連は數人。場所は大學構内の教師館。そこで、フランスの小説の輪讀などをやりました。

ドーデーの小説を讀み合つたことがありました。秋が更けて風がやや寒くなると、アルプスの山の中に放ち飼ひになつて居た羊が、群を爲して、山のゆるやかな傾斜を南に下るといふやうなはなしを讀んだことがありました。サヴアのアルプスとか、プロヴアンスの野とかいふことをブリテル先生が説明されるのが何ともいひやうなく樂しいことでした。青葉の蔭でもおもしろいことでした。春の日の下でもうれしいことでした。

わたくしは、特別の興味を以てサヴォアの山とプロブアンスの田舍とを見てあるきました。其のサヴォアからも、プロブアンスからも、ブリデル先生に繪葉書を書くことをおこたりませんでしたが、わたくしが、サブオアを經、プロヴアンスの旅を終へてロンドンに着いたとき、ブリデル先生のおもひがけない訃を聞きました。

□

ベルリンでドイツ語の先生のところへ稽古に通ひました。それは、やや年增の女の先生でした。日本人の學生に稽古をしなれて居られるといふので、或先輩の紹介で、わたくしもそこに通ふことにしましたのです。

柔和な先生で、よく教へてくれられました。わたくしは、若干の詩と小説とをその先生のところでみました。

ベルリンに着いたのは秋の暮で、木の葉は悉く落ち、空は兎角くもりがちで、まことに陰鬱なベルリンでした。

通ひはじめた先生は、柔和ないい先生でありましたが、何とも謂はれぬ一種の寂しさのある人でありました。ドクトルで良人には不幸にしてはやく死別されたのであつて、今は、年老いた父母と、十二歳ばかりになる娘との三人暮らしであるといふのでありました。三人ともにお愛想がよく、なかなか親切でありましたが、われわれにドイツ語を教授する其の收入で暮らしを立てて行かれるのであると聞きました。——何となく物語めいた家庭のやうにおもはれてなりませんでした。

そのうちに、春になつて天氣がよくなり、世の中が陽氣になりました。それでも、その女の先生は朝から晩まで、ドイツ語の教授で、ただただ、忙しくして居られるのでありました。

或とき、その娘さんの手跡で手紙が來ました。母が病氣であるから一週間だけ休んでくれるやうにとのことでありました。

胃の痛む持病があるとのことで、また、それに、甚しく惱まされたのであると、あとで當人から聞きました。病氣は十分本復されませんでしたが、しかし、其の教授をまたはじめて居られました。いそがしく、いそがしく、多くの人人に教授をされるのでありました。氣樂に食事をする時間もないくらゐのいそがしさであるといふことでした。——そのくらゐ働かねば三人の暮らしを立てて行く收入がないといふのでありました。

いつしかまた秋になりまして、わたくしは、イタリヤへ轉學することになりました。ベルリンに着いた日のやうな寂しい日に寂しく其の先生とわかれました。先生の寂しい顏が今なほ忘れられませぬ。さうして、先生と一所に讀んだ詩と小說とがまだ忘られませぬ。——戰爭と共に音信が絕えたままになつて居ります。

□

パリーでは、僧院のやうなところに、數月間厄介になりました。その僧院は、やはり、學校になつて居るので、カトリックのお坊さんが三人居られました。わたくしは、そのうちの若い一人からフランス語を教はりましたのです。

僧院には大きな庭がありまして、マロニエが繁つて居りました。月の晚などは何とも謂ひやうのないなつかしみのある家でした。お坊さんの先生から、わたくしはフランス文學を敎はりましたので、若干の書物をそこで讀みましたことです。

書物を讀みながらいろいろ滑稽を謂ふ人でした。その滑稽の間に、フランス語の一種の面白味を理解することができるのでありましたが、わたくしは、その滑稽が如何にをかしくても、そこに僧院と其の先生とに固有な一種のわびし味を感じないわけに行きませんでした。

書物を二人で讀んであと、おまけとして、そのお坊さんがオルガンを彈いてくれられることなどがしばしばありました。そのお坊さんは音樂に關しても一隻眼を持つて居られたので、わたくしは、その方面に付いてもいろいろ敎へられたことがありました。オルガンの一くさりが濟むと、夕方の風が、さわさわと、庭のマロニエの森をわたるといふやうな中に、わたくしは春から夏へかけて、讀書生活をその僧院に送つたのでありました。

パリーでは、わたくしは、その僧院で、寂しい暮らしをしました。暮らしは寂しかつたが、その僧院は書物を讀むにはふさはしいところでありました。わたくしは、何の爲めにパリーへ來たのかとみづから怪しんだこともありました。わたくしは、

パリーを見ないで、ただ、僧院で書物を讀んで暮らしたのでありました。

わたくしが書いた葉書だよりに對して、そのお坊さんの先生から返事がありました。お坊さんの先生は兵隊に召集されたので、その返事は戰場から來たのでありました。

近く歸朝した友人に聞きただして見ると、其の僧院はとりこわされたさうです。古い由緒ありげな僧院でありましたが、今はあとかたもなくなつて、そのあたりは、賑やかな通りにかはつてしまつたとのことです。

デカタン的讀書

菊池寛

讀書は、亂讀に如かず。亂讀以外の讀書、學問のための讀書研究修養のための讀書、必要のための讀書は、同じ讀書でも、一つの勞働である。

自分は昔から亂讀主義だ。殊に學校生活を離れてからは、研究的讀書は殆んどやつたことはない。モット、社會科學的な本も讀んで見たいと、常々思つてゐるが、さう云ふ方面には中々頭が向かない。

亂讀にかけては、自分は誰にも劣つてゐないつもりだ。中學の一二年時代から、町の圖書館へ出かけて、手當り次第に本を讀んだ。文學、歷史、自分は今でも歷史は好きだ。中學を出てから大學を出るまでに八年もかゝつたが、その間、自分は亂讀を續けたものである。東京へ來た第一日に、上野の圖書館に行つて本を讀んで以來、學生生活に於ける自分の娛樂、消閑は圖書館通ひであつた。貧乏で本が買へなかつたから、本は圖書館で讀む外はなかつた。

中學の一二年の頃に、萩のやおぼろの「女武者」といふ本を貸本屋から借りて讀み、とても面白くて堪らなかつたが、それは上卷だけで、下卷は其後何うしても讀めなかつたのだ。下卷

はヤット上野の圖書館で發見して、讀んだ。だが、下卷の方はチットも面白くなかつた。恐らく上卷と下卷とを讀む間に、自分の趣味なり、鑑識が變化してしまつたためである。その頃、自分の讀みたいと思つてゐたものは、西鶴の好色本であつたが、それは何處の圖書館でも貸出禁止になつてゐた。その後二三年經つて、早稻田の圖書館で初めて宿望を達することが出來た。その時程感激したことは、自分の讀書生活中では、他に例がないと云つてもいゝ。その後上野の圖書館以外、大橋圖書館、日比谷圖書館、京都にゐた時には京都の圖書館、その何れへも自分は百回以上、多いのは二三百回も通つてゐる。學生時代は大抵圖書館へ行つて本を讀んでゐた。だが、本を讀むと云つて、自分は系統的に讀書したのではない。文學歷史を中心として、雜書を漁つてゐた。殊に德川時代の隨筆雜書を貪り讀んだしかも後で役に立てやうといふ樣な心持は少しもないから、只讀み去り讀み來つて、何も頭に殘らない讀方だ。讀書と云つてもデカタン的の讀書である。讀書そのものゝための讀書だ。こう云ふ樣な讀書が却つて本當の讀書かも知れない。小說類の中では、自然主義風の作物よりも、歷史小說風のものが好きで、古くは村上浪六、奴の助、塚原澁柿園、松居松葉の歷史もの（馴染が多いと云つて松居さんが自分で云つてゐたが）などが好きであつた。自分が歷史小說を書く素因も、その邊にあると思ふ。だが、自分は大抵の作家は一通り讀んでゐる。江戸時代の作家、明治時代の作家、現存の作家でも例へば鈴木三重吉氏などの作品でも、自分は通讀してゐる。鈴木さんの作品はそれまで一冊も讀んだことがなかつたが、京都の圖書館で一冊讀んで面白かつたので、一週間位のうちに、全部讀んでしまつたことがある。兎も角、學生時代は金もない故もあつて、讀書の外の樂しみもなかつた。だから、日曜などでも朝から、圖書館へ行つて本を讀み、厭いたら新聞を讀んで、また本を讀んだ。

だから、今でもちよつと面白いエピソードが頭の中に殘つてゐても、それが何んな本にあつたのか、ちつとも思ひ出せない。たゞ、德川時代の文學、風俗、雜記、そんなものに親しんでゐたゝめに、歷史小說などを書いてもアットホームな氣がする。それが自分の讀書から得た賜物かも知れぬ。だが、自分は正統な日本文學には余り精通してはゐない。王朝時代の物語なぞは余り讀まなかつた。京都の大學時代には、大學の研究室で、英語で讀める戲曲は大抵讀んだ。

作家生活を始めてから、殊にこの數年、讀書をやる機會がない。たゞ、英米の戲曲とか、通俗小說類は時々讀む。殊に通俗小說類は、參考のために可成り集めて、自分も讀み、人にも讀んで貰つて、梗概などを聞いてゐるが、しかし、外國の通俗小說は、筋が單純で、余り參考にはならない。兎に角、作家生活をしてゐると、昔やつた樣な無責任な暢氣な讀書などをしてゐる閑がない。だが、自分もモツト、身邊の落ちつきを得て、暢氣に本を讀んでゐる樣な生活には入りたいと思つてゐる。



改造社出版圖書目錄

（大正十四年十月現在）

（1）經濟及社會

著（譯）者名	書名	內容一斑	版數	型 頁數	定價 送料
法學博士 穗積重遠著	離婚制度の研究	○離緣狀と緣切寺○緣切寺滿德寺○クリスト教の婚姻非解消主義○イギリス其他各國の離婚制度の研究	新刊	菊上 九四〇頁	一〇・〇〇円 內・三六
法學博士 河田嗣郞著	家族制度と婦人問題	（一）家族制度論○家族制度の性質と機能○外五項（二）婦人問題○女子勞働問題等を檢討す	7版	四六上 三五三	二・〇〇 ・二〇
京大教授 宮本英雄著	婚姻の基調	婚姻法の將來○夫婦間の貞操○寡婦の再婚○離婚防止○婚姻媒酌○家族制度と婚姻等結婚に關する研究	5版	四六上 二〇八	一・五〇 ・一八
法學博士 福田德三著	社會政策と階級鬪爭	（一）社會政策序論○「社會」の發見○外三項（二）階級鬪爭と其當事者等其他の深刻なる研究	30版	四六上 三五四	三・〇〇 ・二四
法學博士 福田德三著	社會運動と勞銀制度	（一）社會運動の理論的根據（二）勞働爭議の意義及種類（三）勞銀制度を博士一流に檢討す	15版	四六上 三二〇	二・五〇 ・二〇
法學博士 福田德三著	ボルシェヴィズム研究	○マルキシズムとしてのボルシェヴィズム○レユン國家論○ボルシェヴィズム○「資本主義への降伏」等	10版	四六上 三九四	二・九〇 ・二二
慶大教授 小泉信三著	改訂 價値論と社會主義	○緒論○ロオドベルトス研究○マルクス研究○雜錄（三章）○追補河上博士との論戰記錄	8版	菊上 四三三	三・二〇 ・二八
商大教授 孫田秀春著	勞働法總論	○勞働法の基本觀念、研究方法の變遷、理想○勞働法の法源○勞働法の効力等勞働法概論	5版	菊上 三四〇	二・六〇 ・二六
ジノヴィエフ原著 富士辰馬譯	勞働政黨と勞働組合	○組合運動の原則的諸問題○ロシャに於ける組合運動○勞働組合世界的名文獻の翻譯	4版	四六並 一六四	一・九〇 ・一四
ニコライ・レーニン原著 茂森唯士譯	レーニズム	○ロシャ革命の國際的意義○ボリシエヰキーの成功の一根本條件○ボリシエヰーズム發達の諸期等	4版	四六並 三二四	一・二〇 ・一六

著者	書名	内容	版	判型・頁	定價・送料
經濟學博士 本庄榮治郎著	日本社會史	○日本社會史の觀念○氏族制度の社會○莊園制度の社會○分權的封建制度の社會○郡縣制度の社會等	21版	菊上 三六六	二・五〇 ・二四
法學博士 河田嗣郎著	農村問題と對策	○農村問題と對策○農業改造方策○都會と田舍との分裂○農民土地愛着心冷却の傾向等外數項の熱論	14版	四六上 三四四	二・〇〇 ・二〇
法學博士 末弘嚴太郎著	農村法律問題	○序章○部落有財產と農村生活○永小作の法律關係○小作問題と小作法○小作爭議と小作調停法	21版	四六上 四二八	二・五〇 ・二二
法學博士 末弘嚴太郎著	嘘の効用	○嘘の效用○改造問題と明治時代の省察○役人の頭○小智慧に捉はれた現代の法律學○其他八項	41版	四六上 四三四	二・六〇 ・二二
法學博士 末弘嚴太郎著	法窓閑話	新法學の權威が新しき國民はいかに法律を心得ねばならぬかを說いた法治國民への國民讀本	新刊	四六上 四一三	二・五〇 ・二二
佛國藏相カイヨー著 龜井貫一郎譯	民衆の苦悶	○大戰の問題○世界的破綻○歐洲再生の力○佛獨、一般財政經濟の混亂○佛國賠償問題と戰爭債務等	4版	四六並 三四〇	一・三〇 ・一六
森戸辰男著	青年學徒に訴ふ	近時澎湃たる社會科學問題に關し政府者に對し巨砲を放つ。學生諸君は本問題の內容發展を本書で知れ	1[illegible]版	四六並 二〇〇	一・三〇 ・一二
ウンターマン著 森喜一譯	哲學思想の史的考察	○著者はマルクス派學徒で古代より近代に至る哲學思想の史的考察と共に進化學說の變遷を語るもの	4版	菊上 三四三	二・〇〇 ・二二
ヨゼフ・ディツゲン原著 山川均譯	無產階級の哲學	現代のブルジョア哲學に對し無產哲學の新提唱新時代學徒の必讀すべき文獻	5版	四六上 三八八	二・五〇 ・二二
賀川豐彦著	生存競爭の哲學	生存競爭の原理を闡明し生存反動の哲理を說き生命力と愛の力が生存競爭を超越するを進化論的に證す	12版	四六上	二・〇〇 ・二〇
文學博士 高田保馬著	階級及第三史觀	(一)階級篇○階級の本質○マルクス的階級概念外一篇(二)第三史觀篇○經濟史觀より第三史觀まで等	5版	菊上 五〇四	二・八〇 ・二四
森戸辰男著	思想と闘爭	○震災と主義者と反動勢力○國粹主義者と政治的殺人○大杉榮君の追憶○外四項	4版	四六上 三三六	二・〇〇 ・二〇
細井和喜藏著	女工哀史	我國の工場及女工生活を知る世界的勞働記錄十五ケ年の氏の血と肉とから成る本書を國民は一讀せよ	10版	四六並 四六八	二・〇〇 ・二〇
トロツキイ著 茂森唯士譯	文學と革命	○非十月革命文學○革命の文學的同伴者○アレクサンドル・ブロック○未來派○時の形○外四項	新刊	四六上 三八八	二・〇〇 ・二〇

著者	書名	内容	版	判型・頁	定價・送料
帝大助教 平野義太郎著	法律における階級鬪爭	○法律に於ける階級鬪爭○階級鬪爭とローマ法○資本主義的法律組織の下に於ける階級鬪爭○外四章	8版	菊上 三四三	二・五〇 ・二六
法學博士 河田嗣郎著	農政四十三講	○農村問題解決の鍵論○小作爭議と農村破壞○外四十一項、農村問題を知らんとする人の必讀の書	5版	四六上 三九八	二・五〇 ・二二
法學博士 堀江歸一著	續國際經濟と國民經濟	○經濟組織の改造と政治の革新○政治的議會より經濟的議會へ○産業資金の供給○外九項	5版	四六上 三九四	二・五〇 ・二二
農學博士 小野武夫著	農村研究講話	○緒言○基礎的研究の必要及び其綱領○農村問題とは何ぞや○村落の研究○農家經濟の研究等	新刊	四六上 三二八	一・五〇 ・一八
マーシャル著 帝大教授 大塚金之助譯	マーシャル經濟學原理（分册三）	現代の經濟學書中、此書程、學としての生命と光の鮮かなるものはない。本篇は主として生産を解く。	新刊	菊上 四九八	三・五〇 ・二六
マーシャル著 帝大教授 大塚金之助譯	マーシャル經濟學原理（分册四）	譯者は、晩年のマーシャルに親炙したる人、原理に流れつゝある血を其儘移植したる名譯。	近刊	菊上 三五〇	三・七〇 ・二八
經濟學博士 本庄榮治郎著	近世農村問題史論	經濟史の權威たる著者が近世日本に於ける農村問題を史的に考察したる日本農政史の一方面である。	近刊	四六上	價未定
京大講師 山口正太郎著	中世寺院法と經濟思想	○序論○利子禁止思想の歴史○中世寺院法と猶太人○中世寺院法と商業○中世寺院法と組合及び會社等	新刊	四六上 三三三	一・五〇 ・一八
室伏高信著	印象と傾向	著者が歐米漫遊中、彼地の文豪、政治家、社會運動家、哲學者、科學者に會見せし趣味ある印象記。	4版	四六上 四二〇	二・〇〇 ・二〇
ロマン・ローラン著 大澤章譯	先立ちて來る者	深遠たる思想と熱意ある筆致を以て世界の思想界に牢乎たる位置を占むるローランの「先驅者」の飜譯。	新刊	四六並 二九六	一・五〇 ・一六

(2) 政治及法律

著者	書名	内容	版	判型・頁	定價・送料
法學博士 末弘嚴太郎著	農村法律問題	○序章○部落有財産と農村生活○永小作の法律關係○小作問題と小作法○小作爭議と小作調停法	21版	四六上 四二八	二・五〇 ・二二
法學博士 末弘嚴太郎著	法窓閑話	○法窓閑話○誤判賠償の根本原理○陪審法會議廢止論○小作人と土地所有權○法律小話（十二話）（外二篇	新刊	四六上 四三三	二・五〇 ・二二
帝大助教 平野義太郎著	法律における階級鬪爭	○法律に於ける階級鬪爭○階級鬪爭とローマ法○資本主義的法律組織の下に於ける階級鬪爭○外四章	8版	菊上 三四三	二・五〇 ・二六

新聞のフエヤ・プレー

原田讓二

一

近來新聞界の著しい傾向は、内からも外からも、『記事の正確』を求めようとしてゐることである。記事の正確はもとより新聞の大切な生命であつて、今更これが問題となることはおかしい位のものであるが、それにはそれで相當の理由がある。内からといふのは、記者自身の倫理的要求から發するもので、ジャーナリストとして、或はニユースペーパア・マンとしての職業的自覺にもとづくものである。これは最近日本に勃興して來たジャーナリズムの研究が、漸次學問的に新聞記者養成の途に歩を進め、一面また新聞道德完成の運動が起りつゝあるに原因すると見るべきであらう。新聞界の先覺者、乃至これらの人々に導かるゝ幾多の若き記者達が、日夕自己の職業の責任感から、肉體的または精神的苦鬪をつゞけつゝあることは、これと關係なき外界の人の到底想像だも及ばざるところである。新聞は新聞記者が勝手に作り上げるのだといふおほまかな觀念は、なほ今日の社會に九十パーセント位は存してゐる。或はそれ以上であるかも知れない。一國の大臣がすでにそれなのだ。

ごく最近のことであるが、或る大臣は公けの席上において、「近頃の新聞に出てゐることは、すべてデタラメである」といふ意味のことをいつた。これが政策的にいはれたのならば恕すべきであるが、聽者の多くはさうは聞かない。直ちに新聞の本質に立ち入つて、これによつて、新聞そのものを定義するおそれがある。その人柄からいつても、輕卒のそしりは免れないであらう。しかして、その大臣のいつたところは、當時の新聞紙上に現れた政界事情、政局觀察の記事を指したのであるが、それはその結果から見て、或はまたその問題の推移經過の上の現れにおいて、多少の間違があつたのであつて、當時の政界の根本の

動きを見誤つたものではないのである。物の大局の動きは隠さうとしても、隠されるものではないが、その動き方の微妙ないきさつにいたつては、當事者がこれを秘することもできるし、自己の都合のよいやうに欺いて發表することもできる。この間に處して、新聞記者はいかにしてその報道的職責をはたすべきであるか。叡智も、敏察も、堪能も、努力もなほ且つ何らの効をなさない場合がしば／＼ある。そればかりか、時には逆宣傳にかかつて、飛んだ浮目を見ることさへあるのである。いはゆるデタラメの種といふものは、多くかういふ邊から下ろされるのだ。今日の政黨者流は、彼らが新聞を正解してゐる以上に、この道にかけては、智力を發達させてゐるものである。しかも社會は、新聞を印刷された活字以上には値ぶみしない。新聞記者の嘆きや不平は、全くそこにある。

我らが常に社會に向つて要求するところの新聞の理解なるものは、單に讀者をして新聞社を見學せしめるだけのことではない。新聞の編輯術、印刷術に對して大體の知識をもつことは、むろん新聞を理解することへの道程であるに相違ないが、何よりも先づ知つていたゞきたいことは、新聞記者が漫然と新聞を作るものでないこと、新聞紙に現れる見出し一行の中にも、彼らの倫理觀念の動いてゐること、いはんやその長き活字の羅列の裏には、彼らの血と汗との戰ひが營まれてゐること、その事である

さて次は、記事の正確を求める外からの傾向について述べよう。世間ではよく新聞のことを斬捨御免だといふが、今の時勢においてはさういふ專擅的行爲はなし遂げられるものではない。その日／＼、公衆の前に、萬人の目の前に提供される新聞が、或る卑しき意圖をもつて、個人の名譽を傷けようとするならば、今日の社會が果して默つてゐるであらうか。しかもなほ、この非爲を敢てする新聞があつたとすれば、それは新聞のリーグから除かるべきものである。しかし、さういふ大げさなものでなくて、細かい間違の記事が今日の新聞にはかなりに多い。たとへ數行の小記事であつても、關係者の身になつて考へれば、不正確なことを書かれたのでは、迷惑は大きいのである。火事の火元が間違つてをれば、當人は道徳的にも法律的にも影響を感ずる。殺傷事件で、加害者と被害者との名前が逆さになつてゐるために、被害者側から新聞社にど鳴りこんで來るといふ例もある。これらはすべて抗議を申込むのが當然であつて、新聞もまた明かに男らしく取消すべきである。かういふ種類の正誤取消件數が、この兩三年來非常に激增したことは、新聞關係者の認めないではゐられないところであり、また新聞紙面の片隅を注意して見てをれば、すぐ氣のつくことである。これを形の

上でのみ見れば、近頃の新聞はます〳〵ウソを書くといふことになるが、さうばかりに斷定できない。今日までも新聞に間違は多かつたのであるが、讀者の方で、いはゞ遠慮して、或はきた大きいものには捲かれよ、つゝけばかへつてボロが出るといふ消極的の考へから、たゞ〳〵泣寢入りにしてゐたに過ぎないのである。したがつて無自覺時代の新聞はそれがつけ目で、かへつて傲然と構へ、たとへ抗議を持ちこむものがあるにしても、おつかぶせてしまふといふ惡い癖があつた。それからまた自矜の念が強くて、數行の取消文を掲載することにすら、自己の權威を損するものとしてゐた。そこに自らを反省する餘地をもたず、是が非でも押し通さうとする非文明的錯誤に陷つてゐたのである。新聞の弱い者いぢめ、斬捨御免主義などといふ評語は、おそらくこの邊から出來したものであらう。

しかるに時代の推移は、双方ともにこれをゆるさなくなつた。讀者の側からいへば、個人の名譽を維持するためには、新聞社に對する正誤取消の申込は當然の權利である。たとへ新聞紙法の條文に通曉しないでも、これほどの法律生活なら、今日誰でもが營んでゆける。取消申込の多いわけが、うなづかれるではないか。更にこれを新聞側から見れば、記事の間違は、事件關係者から取消を申込まれるまでもなく、自ら進んで正誤なり訂正なりをしたければならぬ。六號活字ベタで、ほんの申譯的の取消をするなどといふケチな量見ではいけない。取消を出したがために、その新聞の聲價がおちるやうに考へることは、新聞の傳統的見え坊にわざはひされてゐるのだ。この殼を破つてしまはなければ、新聞の眞のフエヤ・プレーは演ぜられるものでない。とにかく最近の新聞の風潮は、この取消尊重に傾いてゐる。新聞倫理の黎明期のために祝福にたへない。しかしながら我らをしていはしむれば、新聞紙法の改正はこのましいことであるが、進んで紙法無用の時代にまで漕ぎつけなければならないのである。

二

こゝに投ぜられる一つの問題がある。それは新聞がフエヤ・プレーの精神に立脚して行動しつゝある際にあたつて、一記事中の行爲者が、現行の新聞紙法をたてに取つて、虚僞の取消文掲載を强請した場合ありと想像せよ。これは必ずしも絶無とはいはれないのである。世の中には隨分づう〳〵しい人物があつて、事實それに相違ないにかゝはらず、しら〴〵しくも取消を申込んで、自己の非を隱さうとするものがある。かういふ人間にかぎつて、取消文も辯護士を代理として、内容證明か何かで

郵送する。その行爲のどこかに、既に威嚇的なところがある。かかるものに對しては新聞紙はあくまで戰ふべきであるが、この事自體がすでに新聞紙法の惡用であつて、事實の有無にかゝはらず、取消はなさねばならぬといふ條文に乘ずるものであるから、今後改正される紙法においては、十分この事例を考慮すべきであらう。新聞紙は他人の名譽を故意に毀損せんとするもの、またこれを常習とするものといふやうな既成概念にもとづいて、紙法を立案すべき時代は、もはや過ぎ去つたのである。

新聞の取消にもいろ〳〵なのがある。社會的地位ある人が、一度堂々と公言しておいて、他にさしさはりがあるといふので、あわてゝ取消すのがある。官吏が正直なところを語つて、あとから上官に小言をいはれ、どうぞ正誤してもらひたいと申込むのもある。官廳が秘密の計畫をすつぱ拔かれて、一度は取消して來るが、やむなく一樣に發表するといふやうなものもある。この種の取消は、取消のための取消で、本人はその形式手續を終りさへすれば、それで氣がすむのであらうが、社會は決してこれを取合いはしない。取消を形式視する讀者心理は、當然取消されなければならない重大なる誤謬に對しても、同樣の程度で働きかけるものであるから、やがてこれが新聞の批判する上に、有力なる對象となつて來るのである。すなはち、一度び紙上に印刷された事實は、到底抹殺し得ざるものであるから、新聞の態度はあくまで愼重でなくてはならぬといふ斷案が下されるのである。

ところがこゝに、新聞製作者側から一つの希望がある。新聞の態度が眞劍であり、新聞記者が一箇の敬虔なる眞理の探究者として立ち働く場合に、社會が不眞面目であり、無理解であらば、その結果はどうであらう。人生の斷片を紙上にのせて、その中から比較的眞實をつかみ出さうとするのが新聞記者の仕事である。さうして、たとへ、それが不完全に作られたものであらうとも、人々はこの活きた記錄の中から今日の自己の生活を見出して、明日の生活に働きかけ、更に新らしき生活を生みだすのである。一枚づゝの新聞紙は、人間生活の連續であり、推積であり、活きた文明史であり、社會史であるべきはずだ。かうした重大なる事業は、新聞記者の手一つでなさるべきものではない。全く社會との共同事業である。社會にこの理解なくしては、新聞は進歩の道をたどることはできない。

たとへば、こゝに一つの社會事象が起るとする。この時、この事象の中心となるべき人物、または周圍の人々が、たゞ自己一身の地位や名譽や、一時的安寧を保つとにのみ急にして、對社會といふこと、社會生活の連帶責任といふことをかへりみなか

つたならば、彼らは新聞記者に對して、お座なりのインターヴヰユーを與へるか、しからざれば口をかたくつぐむであらう。その結果は、新聞がもうらうたる事實を傳へるか、不確實なとを書くか、それより方法はないのである。誤聞も取消もたいていはかういふ卑怯な人間の行爲から生じる事が多い。

けれどもひるがへつて、當人の身になつて見れば、さういふ態度を取るとは普通の人情である。讀者諸君は、相當地位ある刑事被告人が、新聞寫眞班に包圍されて、いかにして自分の顔を社會から横にそ向けようかと苦心しつゝある、いたましい印象を紙面に見たとがあるであらう。我らといへども、この寫眞に對しては、面をそむけざるを得ない。そしてかくまでにして、なほ且つこの一齣の寫眞を印刷しなければならぬかを悲しむものである。恐らくこの日、この寫眞を撮影したカメラ・マンさへもが、夕食がまづくてしかたがなかつたであらう。職業本能といふものは恐ろしいものだ、また悲慘なものだ。しかもこれを敢行するには、異常なる勇氣を要する。世間は、このカメラ・マンの行爲を非難するであらう。しかしそれは、記者が事實の眞相に突入しようとして、あらゆる惡罵と戰ひつゝ進むのと、少しも變りはない。彼は時として、自己の行爲が残忍であると感ずるであらう。またよけいなおせつかいであるとも思ふであらう。そしてむしろ、イージー・ゴーイングを欲するであらう。けれども、さういふ心のひるむ刹那に、奮ひ起さなければならぬものは、記者的良心だ、道徳的勇氣だ（職業外の人には非道徳的勇氣だと思はれるであらうところの）。かうして初めて、我らの職責は果たされるのである。

これらの事情がよく考へてもらへるならば、社會も今少し正直であつてよいはずだ。今の社會はあまりに卑怯にすぎる、自分をぶちまけるだけの勇氣に乏しい。公人といはるゝものが、平然として僞りを語り、その僞りが新聞に公表されても、恬として恥づるところを知らないではないか。さきに引例した一刑事被告人などは、自ら心に愧づるところがあるから、レンズに向つても正面を切り得ないのであるが、これらの公人は社會に大きな顔をして直面しながらも、なほ自分のやましい心を秘しかくしてゐるのである。かういふ人々の行爲は、前に述べた新聞記事を不正確なものにすると以上に、その内質に罪惡的暗影を投ずるものである。社會道徳家はいふ、今日の新聞くらゐ、好んでいやな暗い記事を掲げるものはない、新聞は何故に今少し明るい記事を採り入れないのであらうかと。これは新聞製作上の根本態度問題であり、またいろいろ議論のあるところであるから、簡單に答案を與へることはできないが、少くとも次の如

きとだけはいへる。

いかに醜惡なりと見らるゝ記事も、これに關係した當面の人物が、人間の眞實に立ちかへつて、大膽に自己を告白するならば、暗澹たる陰影の中に、おのづから一脈の明るさを漂はせるであらう。これ藝術價値の本質と同樣であつて、そこに眞の人間性の發現を見、道德心の閃めきを認め得るからである。だから明るい新聞といひ、暗い新聞といふも、これを作り出すにあたつて、やはり社會は連帶責任をもたなければならぬ。要するに記者も社會も、道德觀念の同一線上に立つべきものである。新聞の改善は内からだけではできない、業外からも同じ力が働かないと、完璧を期するわけには行かぬ。

三

私は新聞及び社會が、新聞記事の正確を求める傾向を、かりに新聞の公正運動とよぶ。この運動は今日いろ〳〵の形において、その現はれを見ることができる。フオース・エステイト。エヂタア・エンド・パブリツシヤーなどに似た『新聞及新聞記者』、または『新聞の日本』その他の諸雜誌が生れたことも、たしかに公正運動の一つであらう。新聞はこれまで殆ど他の批判をゆるさいないとふ、極めて横暴的な地位を自占してゐたのであるが、こゝに第三者が現れて、新聞業界のみを視野として、彼らの行動に目を注ぐことになつた。新聞が理由なくしてこれらのものを恐れ、これら第三者もまたコワ持てのみをもつて任ずるならば、公正運動はかへつて、惡弊を伴ふ不公正な運動になつてしまふのであるから、これは必ず兩者が協力して、正しい道を進まなければ、實績をあげることはできない。次に新聞自身の公正運動としては、私の記憶の限りでは、東京夕刊新報が早くより、「不正確な記事のために迷惑を感ぜられる讀者は、社長親展としてその旨を申越されたい」といふ意味のことを、題字の下に掲げてゐたと思ふ。それから兩三年前に、東京・大阪兩朝日新聞が記事審査部を創設して、爾來審査月報を發表してゐるが、これは日本における新聞公正運動の最も具體的のものと見るべきであらう。なほ最近には、新刊の新聞『日本』が、他新聞の記事の不正確をたゞすべきことを標語の一つとしてゐる。その他、なほ地方新聞界にも、この種の運動が行はれてゐるかも知れないが、私はいまだ、これを知るの機會をもたない。

アメリカにおいて、この公正運動が最初に實行されたのは、今から十二年前の一九一三年七月で、ニユーヨーク・ワオールドが Bureau of Accuracy and Fair Play を創設したに始まる。つゞいて同年十月には、フイラデルフイヤのパブリツク・レツ

チヤーが、Efficiency Board を設け、オハイオ州ファインドレーのモーニング・レパブリカンも同樣の制度をしき、これは記事の審査をなすと同時に、善正にして忠實なる働きをなした記者に對しては、特にボーナスを與へるといふ制度を加へた。當時ウオールドの新運動は、全米新聞界に多大の衝動を與へて、その反響は大したものであつたが、例のサタレメント・ピーの主筆マッタラチー氏の如きも双手を擧げたものだ。しかし、どこにでもあるやうに、また一方には、ウオールドが今更かういふビューローを置かなければならぬのは、彼れ自身が今日まで、いかに不正確と不公正とを働きつゝあつたかを、社會に告白するやうなものだといふ批評が投ぜられた。事實それが告白であつても、正義と善良とに向つて一歩を進めようとする企てに對しては、かゝる消極的の見方は何ら意味をなさないものである。」

　ウオールドのこの企ては、その前年社長ラルフ・ピューリツア氏が、コロムビヤ大學の新聞學科で『新聞職業論』(一名記事の正確)を講演したのが動機となつたもので、したがつてこの講演は、ウオールドの公正運動の宣言とも見るべきものである。私が先年ウオールド社を見學した際、その編輯局の掲示板にタイプライターで打つた、一つの小さい注意書を見たことがある。それには、リポーター諸君の想像力はもはや十分である。今日最も必要なものは『正確』でなくてはならぬ。これに關するピューリツア氏のパンフレットが入用な方は、審査局(前記の局名をかりにかう譯する)に申出でられたしとあつた。この社に審査局が設けられてから十年余りを經過してゐるのだが、依然として『記事の正確』が叫けばなければならぬのか。これは新聞事業のつゞく限り、新聞記者に對する不斷の注意であるとおもはれる。しかしながら、さらばといつて、新聞の改良に絕望することは少しもない。いつの社會にも道德は高唱され、いつの時代にも法律は現存すると同樣であるから。では進んで、ウオールド審査局の組織と成績とを調べることにしよう。

　ウオールド審査局の目的とするところは、ジヤーナリズムの新理想を全米の新聞紙に光被させることにあるが、その實際運動としては、飽くまでも記事の正確を期し、公明正大を旨とし、輕卒不注意を矯め、捏造記事と捏造記者とを新聞から除去し追放するにあつた。當時ウオールドはこの精神のもとに、各地通信員の協力を求め、いろ〳〵注意を與へたが、その前文として次の如き宣言をなしてゐた。

　一、ウオールドは記事の正確であらんことを目標とする。すなはち、あらゆる讀者に對して公明であると共に、紙上にその

名を記載された人々に對しても公正であることを望む。

一、記事の正確と公正の態度とは、ジャーナリズムと切り離さるべきものではない。不正確なる記事はしば〳〵罪なき人々を傷ける。一新聞の眞の勢力は、これを愛讀し、これを信用する讀者の數によつて計量されるものである。

一、公明正大の一語は、誹毀法を約言したものと見るべきである。一度び記載されたる記事が眞實であり、公正であれば、筆者は誹毀法をも、民法刑法をも何ら恐るゝに足らない。

かういふ主張のもとに組織されたウォールド審査局は、アイザック・デイ・ホワイト氏を局長としてゐるが、氏は十二年の長きその職にあつて、なほ倦むところを知らない。新聞事業としては傍系的の地味な仕事であるが、新聞精神の監理がこゝで行はれてゐると見れば、權威ある聖職といふべきである。溫厚なる中老紳士の氏が、自ら私に語つたところを綜合して見ると、審査局開設前のウォールド紙は隨分誹毀の告訴に惱まされたものだが、近年やつとその數が減じて來た。初めの一年間（一九一三年）は殆ど成績をあげることができず、二年目から少しづゝ目に見えて來て、一九二〇年には訴訟件數十四、一九二一年には僅に八件になつた。同局は全く編輯局とは獨立して、數名の局員がをり、記事に對する外部からの苦情は全部こゝで引受けてゐるが、關係記者の審問も行へば局員を派して再調査をもする。記事ばかりでなく、また不都合な廣告の抗議をも受けて、それぞれ處置をつけてをる。なほ局内には二人の主任があつて、一人は毎日ウォールド紙並に他新聞を精讀して、批判的にその矛盾、誤謬、不正の個所を指摘してゐる。これがウォールドと他紙との比較研究の材料になる。他の一人は夜の勤めで、こゝに廻つて來る朝刊のゲラ刷全部に目を通して、若しも誹毀法に觸れるやうなもの、不正確なものと見るべきものがあれば、筆者と話し合ひの上、これを正しくし、或はまた抹殺してしまつて、失態を未前に防ぐ。この方の主任は、記者であると共に法律家たるを要し、記事中を現れて來る法律上の問題について、リポータアの質問にも應ずれば、注意をも與へる。しかして讀者或は事件關係者から要求して來た記事の審査に對しては、その結果誤りあらば、直に紙上において訂正するはいふまでもなく、右提出者には詳細なる審査報告をなすと同時に、訂正記事の切拔をも併せて送附する。大抵の人はこれで滿足するが、なほ損害賠償の訴訟を提起するもののある場合には、審査材料の一切を裁判所に提供して、公平なる裁斷を待つことにしてゐる。審査の報告書はその都度編輯局内に掲示するが、印刷にも附し、またまとめて年報をも刊行する。こゝに注目すべきことは、記

者名の索引カードが作られてゐて、記事審査の結果が一つの符號となつて、筆者のカードに記入されるとだ。すなはち、○印は何事もなきもの、Xは多少の過誤はあるも、大目に見て Excuse すべきものCは Careless で、C……C'までに分ち、―それ〴〵その程度によつて等級を附せられるが、C'をもつて最惡となし、これに相當する記者は退社を命ぜられることになつてゐる。

　これによつて考へさせられるのは日本の事情である。日本の新聞社では、記者を處分する場合に、どちらかといへば、一般道德の上に立つて處分する方が多い。たとへば、その人の素行がおさまらぬとか、懶惰で職に不忠實であるとか、若しくは職業を惡用して不德を働いたとかいふやうな場合には處分するが、彼が記者的本分をつくし得なつた時に、これを處罰することは先づ少いといつていゝ。彼の書いた記事が不正確であるがために、他に及ぼす影響が甚しいのみならず、新聞社自身の信用をも害するといふ理由で、退社處分を受けたものは殆どないといつていゝ位だ。もちろん故意に僞りを報じて、何らかの利益を得ようとたくらんだがために、處罰されたものはないでもないが、これらはこの例にはならぬ。記者の處罰に際しても、彼は職業上の過失はなしたが、人間としてはよいところがあるのであるから、こんどだけは默過してやらうではないかといふ風に傾く。まことに人情味があつて、うれしく感ぜられる。過酷な罰則だけが、記者を善良に導くものではないから、かういふ方法もたしかに有效であらう。

　しかしながら、今日の新聞社が、一般道德と記者道德とを區別して、むしろ後者よりも前者を重んずる傾向のあるのは、未だ新聞倫理の精神に徹しないためで、いはゞ倫理的誤想に陷つてゐるものといはなければならぬ。由來人間の道德に、ちがつた二つのもののあるわけはない。記者道德といふ名稱は、道德が一つの職業の上に分派した形をいふのであつて、これを內質的に見れば、人間基本の道德觀念の上に、その職業意識が正當に植ゑつけられてゐるのが記者道德である。記者道德を一般道德と區分するならば、それが職業意識によつて一般道德よりも鋭角的の現れをなしてゐる點だけを區分すべきである。これは商人道德も、醫者道德も、官吏道德も、辯護士道德も同様であつて、同じ性質の分類法に從ふべきものである。

　彼は不道德なるも大記者であるといふ命題があるならば、それは甚しき矛盾を含むもので、大記者は必ず大道德家でなくてはならぬのである。新聞記者なるが故に、人間の道に除外例はない。たゞこゝに、商人が商機を見るに敏なると、新聞記者が

事象に對する鋭感とを、素人自身が惡どく感ずるからとて、これをしも道徳で律しようと企てるならば、それは笑止千萬なことだ。商人も記者も、自己の職業を遂行するために、詐術を用ゐることはゆるされないが、自己の感覺と知識とを縦横無碍に使用するに遠慮はいらぬ。しかし世の中では、記者道德といふ意味を惡意に解する人が少くなく、記者自らのうちにも、これを自家辯護に利用しようとするものがある。誤れることの大なるものである。

以上私はアメリカ新聞の記事審査制度を説明して、これに對應すべき日本新聞の現狀を說くに、あまりに多辯であつたが、要は新聞の健實性を進めるために、一層公正運動を具體化したいとおもひ、それにはウオールドの審査局の話も多少の參考になるだらうと信じたからに過ぎない。次に私は、アメリカ新聞に公正運動の起らざるを得なかつた原因を見、ひいて我れ／＼の反省に資することにしたいとおもふ。

四

アメリカ新聞の虚報や捏造記事が或る時期において、大いに讀者を惱ましたことは想像され得る。しかし、今日なほその通りであるとは、私は信じない。アメリカの新聞にたづさはつてゐる有力な記者の意見を聞いて見ても、その新聞に對する態度は嚴正であるし、新聞倫理の研究も一般にさかんであり、かつ全米各大學の新聞科で養成されつゝある新らしいリポータアが、みなこの新理想のもとにはぐくまれてゐる事實に徵しても、アメリカ新聞界の血清注射は相當に效果を擧げてゐると見るべきであらう。

たゞ新聞當事者の恨みとするところは、理想の炬火は常に現實の霧に包まれやすいことである。新聞商品主義流れが理想至上主義をともすれば驅逐せんとすることである。ヘイドとゼキールの二重人格が紙面に反映して、或る時はコンマーシヤリズムの權化である惡魔であり、或る時は理想に燃える學者であり、人格者であるのである。この二つの思想のためにアメリカの新聞が自ら戰ひをつゞけてゐることはよくうかゞはれる。この矛盾を解決しようとして案出されたのが、朝刊と夕刊との分離營業で、一つの新聞社が毛色のちがつた別々の名前の朝刊と夕刊とを發行してゐるのである。言葉をかへていへば、朝刊は書齋のフアウストであつて、夕刊は地獄に墮ちたフウアストである。この形容はもちろん不當であるが、朝刊は比較的嚴肅な顏をして朝の讀者にまみえ、夕刊はセンセーショナルな呼聲をあげて、夕の客を迎へるといふ位に解くべきであらう。かうした經營方法

はやがて日本にも移入されて、新聞自身の人格的悩みを緩和する一方法として、朝夕刊の別途經營が實現するにちがひない。しかしこれが嚴正なる批判は、またおのずから別問題である。

アメリカ新聞の捏造記事に對して、痛烈なる攻撃を加へたるものに、アプトン・シンクレヤ氏があつた。彼は新聞記者の經驗者であり、またジャーナリストとしての優れた才能を多分にもつてゐるものであるから、その經驗と觀察とは相當有力ではあるけれども、一面片よつた見方をもつてゐるといふことも出來る。何となれば、彼は社會主義者として、反資本主義の立場からのみ新聞を見てゐるからである。これは彼のアメリカ教育制度を批評した『グース・ステップ』も同樣であつて、『ブラス・チエツク』と同一の缺陷におちいつてゐるのである。もとよりアメリカの大資本主義が新聞に影響してゐることは當然のことで、大なる經濟力が一國の政治外交を動かし、その間に新聞を利用して種々の政策の行はれてゐることはいふまでもない。『ネーション』の主筆ヴイラード氏が、かつてハースト系新聞の內容を論評したのも、アメリカの資本力と政治の野合がいかに新聞を害しつつあるかを示したものであつた。

なほこのほかに、いはゆる新聞のヨタ記事を蒐錄したものに、マックス・セローヴア氏の『アメリカ新聞の噓八百』Fakes in American Journalism と題する書物があるが、これもやはり目的は資本主義攻撃の材料に供するにあるらしい。(むろんその中には、これから私が引例しようとするものも含まれてはゐるが)これらの一つの主張や意圖のために掲げられたフエークの實例から離れて、純正なる新聞學の立場からこれを研究しようとするならば、私はラルフ・ピユーリツア氏の『新聞職業論』から引用するのが最も近道であるとおもふ。

アメリカ新聞のフエークにも、時代によつて變遷がある。ラルフ・ピユーリツア氏が先づ一と昔前のフエークとして擧げてゐるのは、『月世界のヨタ』だ。これは當時(一八三五年)のニユーヨーク・サンの主筆リチャード・アダム・ロックによつてなされたもので、御ていねいにも、「これは近くエデインバラ哲學雜誌で發表される一大論文だ」といふふれだしで掲載されたが、或る有名な天文學者なにがし氏が喜望峰で精巧なる望遠鏡によつて月世界の怪異を發見したといふのである。月體の表面を細密に描寫して、そこに生えてる植物、咲いてる花はおろか、住んでゐる人間のことまで活々と書き立てゝゐる。これには讀者も驚いて、サン紙の賣行は忽ち五倍に增加した。その頃はまだヨーロッパとの通信が自由でなかつたので、こんな大ウソもしばらくは生命を保つてゐたが、やがてニユーヨーク・ヘラ

ールドの通信が來て、化けの皮がやぶれてしまつた。

それから約三十年後の一八六四年には、それよりもずつと性質の悪いフエークが行はれた。ジヨオ・ハワードといふ青年記者は將來を囑望されてゐた男であるが、株式に手を出してゐたために、とんでもない大損造をやつて、自分を滅してしまふと同時に、新聞社をも犧牲にしてしまつた。時恰も南北戰爭の危機が迫つて、義勇軍が振はず、ニユーヨークの經濟界はこれが影響を受けて、大變動が起らうとする時であつたが、ハワードは、「十八歲から四十五歲までの市民四十萬人が義勇兵に召集せられる」といふニセの宣言書を作り、これに大統領署名、國務卿副署といふ正式の形をとゝのへさせて、ニユーヨークへ電送した。これをほん物と信じ切つて掲載したのが、ウオールドとジヤーナル・オブ・コンマースの二紙であつた。直ちに大統領は新聞の發行を禁止し、主筆の逮捕を命じ、家宅搜索を行ふといふ段取になつたが、萬事はハワードの自首によつて明瞭になり、彼の共犯者であつた聯合通信社のマリソンも投獄された。ところで、こゝに注目すべきことは、それから二三週間内にそのニセ宣言書と同文の宣言書が政府の手によつて公布されたことである。ハワードはたしかに先見の明があつて、周圍の事情が大統領の宣言書を必要としてゐることを感知したのであるが、彼はこれを自己の利慾のために惡用したのである。道德に裏づけられない記者の才能の恐るべき破綻は、當然かうした運命の道をたどらなければならぬ。日本においても、やゝこれに類した事件が絶無であるとはいはれないが、幸にして日本の新聞界はまだ／＼道德的潔癖家がそろつてゐる。

それからアメリカに十年が經過した。今日立派な新聞だといはれるニユーヨーク・ヘラルド・ツリビユーンの前身であるニユーヨーク・ヘラルドさへもが、かういふいたづらをやつたのである。このフエークは『無害』ではあるが、最もセンセーシヨナルなものとして、引例すべき價値がある。或る日、ヘラルドの編輯長は小さい見出しで、セントラル・パークの動物園の檻は弱くて危險だと書いてある新聞記事を見た。編輯長はこいつは面白いと思つて、早速そこへ腕つこきの記者を派遣した。その記者は想像力もかなりすぐれてゐたが、不謹愼な點でもあまり負けてはゐなかつた。そこで恰も『うそつきの王樣』の如くふるまひ、この二つの武器を縱橫に振り廻した。

その翌日のヘラルド（一八七四・一一・九）は書きも書いたり、一頁にわたつて、前夜動物園の檻を破つて飛出した猛獸どもが、道行く男女や子供を襲擊した物凄い光景を書きつらねた。これを讀んだ人達は、急いで外で遊んでゐる子供を呼びか

へす、戸を締める。中には恐いもの見たさに、わざ〳〵武裝して出かける連中もあつて、大した騷ぎだつた。しかし冷靜なる讀者は、その記事の最後を讀み落さなかつたにちがひない。それには、かうある――「もちろん、以上のやうな出來事があつたわけではない、みんなほんたうではないのだ、がしかし、市當局が直ちにセントラル・パークの動物小舍を丈夫に仕直さないと、いつかはさういふ恐ろしい夜が來ないとも限らない、たゞそれを書いて見ただけのことである。」

それからいよ〳〵現代式の虛報に移つて、『救はれた猫の話』が例に擧げられてゐる。その頃ニューヨークで汽船の遭難が引續いて起つたことがあるが、或る新聞のリポータアは、汽船の難破に際して、一人の船員がわが身の危きを忘れて、船の飼猫を救ひ出したといふ話を書いて、大いに人氣を博した。その後、そのリポータアの告白によると、「難破船の一隻が猫を飼つてゐたことだけは事實だが、水夫は猫を救ひに船へは歸らなかつたのだ。そいつを僕は逆に使つて、猫をフイーチユアにしたまでのことさ。ところが他社の連中は猫を書かなかつたといふので、社會部長 City Editor から呼びつけられた。その次の遭難の時には、今度は僕の方で猫はやめにしたが、他の連中は一齊に猫を持ち出した。僕としては眞實を報道しただけのことだが、社からひどく叱られた。爾來新聞では、難船と猫とはつきものになつたわけだ。」

猫について、『熊』の虛報がある。これは南方州の或る片田舍で、夕方農夫の妻が赤ン坊を抱いて、森の中へ夫を迎へに行つたが、垣根の向ふに薄ぼんやりとした影を認めて、テツキリ夫だと思つて赤ン坊を渡すと、それが熊だつた、赤ン坊は熊に食はれてしまつたといふのだ。ニューヨークの新聞は打揃うて、この怪異な事實をのせたが、あとでウソだと知れて、その通信員は解雇されると同時に、町にも住んでゐられなくなつた。」

動物に關する虛報は、日本の新聞にもよくある。大蛇を發見したといふやうな地方通信はたいてい眉つばもので、誰かゞ生み出した噂に過ぎないのであらう。これについて思ひ浮べるのは、三四年前花月園の豹の子が家出したといふ新聞記事である。底を割つて見ると、案外妙なジャーナリズムが飛出すかも知れない。動物はものをいはない、動物は人格をもたないといふことが、虛報の題材として持つて來いなのであらう。

五

わが國では明治四十年代から大正の初年へかけて、社會記事の勃興時代で、刑事事件の起るたびに各新聞の競爭は激烈で

あり、リポータアは足とペンとをもつて、惨憺たる强行軍を行つたのであつた。警視廳が探偵犬を輸入したり、科學的搜査といふことをいひ出したのもこの頃である。かういふ時代には、ジャームナリズが變體的發達をなすものであるが、このジャーナリズの發酵的繁榮について來るべきものが、沈靜と覺醒との時代である。次に列擧するところのフエークスは、恰も日本のこの期間を彷彿せしむるもので、何となく苦笑を禁じ得ないが、われらのリポータアはそれほど作意の天才ではなく、また惡意的執拗をもつてはゐない。

『死體檢視』の虛報―――或る郊外の町に殺人事件が起つた。そこへ特派された夕刊新聞の記者は、翌日行はれるはずの死體檢視の記事を豫想的に書いてしまつたのである。死體置場の附近に劃された交通遮斷線から、醫者や係官が自動車で乘込むところまで手に取るやうに描寫して、おまけに被害者の兄が檢視に立會はしてくれと嘆願に來たところをスケッチしたペン畫まで景物に添えておいた。かうしておけば、檢視のすんだ頃、ちようど新聞がこの町について、大好評を受けるだらうと、ひそかに得意になつてゐると、翌日になつて、檢視は俄かに延期になつてしまつた。しかし新聞を積んだ汽車の方はまちがひなく町に到着して、夕刊第一頁にはデカイ見出しで、檢視の記事が一ぱいのせてあつた。

『若い女の溺死事件』―――ニユーヨークの隣州のとある工場町で、或る晩一人の若い女が水車働きの男と湖水にボートを漕ぎ出して、女は溺死し、男はやつと泳ぎついて助かつた。その男のいふところによると、座席を取りかへようとした拍子にボートが顚覆して、二人共水中に落ちたが、暗夜ではあるし、女を搜したけれど見つからず、自分もあまり泳ぎが上手でないので、命から〲岸についたといふのである。翌朝になつて、女の死體は男の證言通り、ボートの覆つたあたりの湖底で發見され、死體には打撲傷も何もなく、明かに溺死であることが判明した。この女は醜業婦であつた。しかも見屛の醜い女で、素性も明かではない。

ところが、ニユーヨークの新聞は何と報じたか。「美しい若い社交婦人が、自分の名譽を死守してゐる最中に溺死した。警官が相手方の男を逮捕しないので、町民の憤慨は極度に達してゐる。或る不思議な勢力が犯人を保護してゐるのだ、正義も法律もあつたものではない」とある。この記事には官憲はもとより、町民も非常に怒つた。しかし一週間にわたつて、虛僞の通信が揭載され、最後にその記者は、溺死女の愚かな親戚をおだてゝ、知事に對して、地方官憲の非を鳴らし、正

當な結末を見るように十分干涉して貰ひたいといふ嘆願書を出させることにして、この事件のクライマックスを飾つた。もちろん、嘆願書は知事の手許に屆く前に新聞に出た。

『ソウ事件』のでたらめ――これはソウ事件の探訪をやつた一記者の告白である。「ソウがいよ／＼養老院に送られると、新聞記事はもう種切れになつたのだが、ニユーヨークの各新聞は、今少しマッチーワン（養老院の所在地）に滯在せよといふ命令を特派員に下した。自分が先づ思ひついたのは、ソウを迎へた養老院の連中。それらはいづれそれ／＼に面白い經歷をもつてゐるに相違ない連中の姓名を取ることだつた。これを種に一つ連中がソウのために歡迎會を開いたといふ記事をデッチ上げてやらう。そこで彼らの間に交はされた會話の一つ／＼を活寫的に書いて、社へ打電した。すると社會部長からお褒めの電報が來た。

「次の日はます／＼もつて種なしだ。私はホテルでふと、『養鷄法』と題するパンフレットを見つけた。何心なく開いて見ると、養鷄法十則なるものがのつてゐる。これあるかなと心に叫んで、ソウが養老院の養鷄主任になつて、自ら案出した養鷄法十則を鳥舍の戸に貼りつけたといふことにして、また電報を打つた。社會部長よろこぶまいことか、早速ボーナス五十弗の小切手を送つて來た」。

虛報の實例はまづこれ位にして、今一つ、かなり重要な意味をふくむものを最後に揭げることにしよう。ラルフ・ピユーリツア氏が、「虛報は結局虛報であつて、それが正直なる過ちから起つたものかどうかといふことを見分けるには餘程困難である」といつてゐるのが、この實例なのである。――ニユーヨークの附近で、或る將校が或る男が自分の妻と關係したといふので、その男を射殺したことがある。一人のリポータアが、その妻君にも自己の名譽のために何かいひたいことがあるだらうから、一つ行つて來いといつて、兵營内の官舍へやらせられた。このリポータアはすばらしい訪問記事を取つて歸つて來た。翌日になると、その妻君がボストンから、訪問を否認して來た。自分は現にボストンにゐたのであるから、インターヴヰユーを與へるわけがないといふ。そこでリポータアは社會部長から辯明を求められたが、彼のいふところはかうであつた。「私は兵營に行つて、ブランク夫人の宅をたづねましたところ、そこだと敎へられて、玄關のベルを押したのです。すると一人の婦人が戸をあけて現はれましたから、ブランク夫人は御在宅ですかときくと、私がブランクだといふのです。で早速インターヴヰユーに取りかゝりましたが、その婦人は滔々と、しかも尤もらしく、

私の質問に答へたのです。私はブランク夫人から、あつぱれ美事なインターヴキューを得たものと信じ切つて歸社しました。」

この不運なリポータアの處分について、ピユーリツア氏はいふ。彼はナポレオンが麾下の一將軍に對して取つた原則によつて、解職されたのである。すなはち、ナポレオンは一回の敗戰の如きは、自ら恥とするに足らないとしても、かゝる悲運の將軍を部下とするとは到底堪へ得ないところだといふのである。かくして彼のリポータアの解職は正に當然であつたといはなければならぬと。

六

ひるがへつて、新聞の誤報、虛報、乃至捏造記事のよつて起る原因はどこにあるか。それをいささか調べて見ることにしよう。まづこの三つのものは、それ〴〵ちがつた概念を有するものであるが、見方によつては、さう判然と區別の出來ない場合がある。たとへば、新聞自身は單なる不注意から生じた誤報であると認めるものが、その事件の關係者に取つては、明かに虛報であり、更に進んで捏造だと斷じないとも限らないからである。しかしながら、それらの解釋がいづれであらうとも、この三つのものの內質的根底が『不正確』であることにまちがひはない。しからば、この不正確はどこから來るかといふことになる。

新聞記事の不正確が個人の心理によるものであることはもとよりであるが、今日の新聞組織が『正確』を稀薄に導きつゝあることもいなむべからざる事實である。近代のニユース蒐集術は、異常なる變化發達をなして、極めて短時間のうちに、出來得るかぎり正確を期することがその目的であつて、これがためには機械力と人力との限りを盡しつゝあるのである。新聞が分秒を爭ふといふ實際は、新聞社內の組織と印刷機能とをよく知らなければ、到底想像だも及ばないところで、我れ〳〵の如き實際家から見れば、その日〳〵の新聞に大なる過誤のないのは、むしろ不思議な位のものである。世の中に恐ろしいものはいろ〳〵あるが、感覺の上の綱わたりをするやうな新聞の仕事は、その恐ろしいものの一つに相違ない。

新聞の材料は揮發性をおびたもので、いかにも逃げやすい。自分が眼前でつきとめた事實は、比較的眞に近いものであるが、それが數時間の後、或はその翌日になると、甚しく稀薄な、變質したものになつて、だん〳〵に眞實に遠ざかつて行く。それは人から人に傳へられる間に、それ〴〵の個人差を通過するからである。かういふ狀態にあるニユースを、リポータアなり通信員なりが敏速に取り集めて、通信機關によつて送話

社會科學 形式

社會學研究者の唯一の手引
各學派の原理解說
共同社會の一大檢討

社會學は現代諸科學の根幹だ。本誌の企畫は實に社會學の動向根幹を示し、各派の原理及びその逕庭を綜合的に批判解示し、社會學に志す人々に學としての社會學を釋說せしむる大研究。近代社會學の動向、共同社會の眞義を知らんと欲する者の必讀の一書。

定型としての共同社會（共同社會とは何ぞ內的結合とは何ぞこれ社會學近來の大問題だ共同社會は利益社會と並び社會の基本的關係をなす。本書は社會學重要研究の隨一。）……高田保馬

社會學に於ける文化の取扱……松本潤一郎
社會學の曠野に心理學的研究は行詰り文化的研究の擡頭を說明す。

發達諸段階に於ける社會の全體性……小松堅太郎

[illegible]史論

難（五）人口の減退及び勞力の[illegible]
の兼併及び荒廢（七）小作制度及び小作問
題（八）凶荒に對する政策（九）農民騷動[illegible]
近世農村問題の特質

我國唯一の農政史として各家に推薦す

價貳圓參拾錢　送料廿一錢
東京芝區愛宕下町　振替東京八四〇二
改造社

する。速記者がこれを受取つて翻譯する。各部の主任が目を通して、相當に削除する。整理部の机に廻はると、編輯記者が更に筆を入れて、自分の主觀を通して適當な標題をつける。アメリカの新聞であれば、リライタアが整理部へ廻はす前に、短くも長くも書き直す。かうして一つの記事が幾つもの個人差の排列の中をくゞつて來るのであるから、最初の生の材料がいくらか變色若しくは變體しないわけには行かない。その結果として、ニユースの確實味が減殺される。したがつて、不正確のそしりを招くやうなことにもなる。けれども、これらの各箇の個性を通じて、一貫した公正の精神が流れてゐるならば、この過誤や過失は防ぐことが出來るのである。一新聞社の正しい傳統的精神が尊重せらるゝのも、全くこの過ちをなからしめんがためである。

新聞製作の事業の多忙であることは、アメリカ新聞が一夜に扱ふ語數の示すところを見ても明かである。たいてい大新聞といはるゝものは、平均十六萬六千語の記事を取捨選擇してゐる。これはその社に使用される特別寄書家、リポータア、通信員等約二千名のものの大部分によつて書かれる。そのうち電信によるものが五萬四千語、電話が二萬語、合計七萬四千語は四人のリライタアによつて書き直され、殘りの語數は約四十名のリポータアが原稿として提出し、または他の通信社から送つて來るものである。そしてこれら十六萬六千語は、十二人の編輯記者によつて整理せらるゝのであるが、彼らはこれを六時間内にかたづけて、僅か六萬語にコンデンスしてしまふ。すなはち、差引十萬六千語は抹殺されてしまふわけである。それからこれが工場に廻送されると、五十六臺のライノタイプが一分間平均十六語の割合で、活字を鑄造する。輪轉機にかけると、一時間十二萬の新聞が刷り出される。以上は十年前の狀態であるから、今日はそれよりも語數もふえ、印刷能力も增加してゐるものと見るべきである。

日本の新聞は彼と比べて、スタフの組織は大體において似通つてゐるが、國字の相違がすべて機械の上に影響して、作業能率の上に甚しく劣るものがある。まづ第一にアメリカの記者はタイプライターを使用するが、われ／＼は鉛筆をなめる。あちらの電信は自動印字機を用ひるがために、こちらのやうに片カナを本字に翻譯するなどの二重の手間がいらぬ。日本ではモノタイプすら完全ではなく、一字々々を植字するのであるが、ライノタイプは一行づゝの活字を生み出してゐる。これだけの大なるハンデイキヤツプをもつてゐるわれ／＼の新聞が、彼れとひとしく迅速なる報道の任務を果さんとするには、機械力の不

足を人間力をもつて補はなければならぬのである。讀者は今、われ／＼が語數上の統計を示し得ないとしても、我が國の新聞製作が、彼れに比して一層の努力と勞苦とを要することを想像するに十分であらう。

七

次に私は個人の心理とフエークとの關係、すなはち新聞記者が我れ知らずフエークに陥るやうになる。その心的經過を討究して見たいとおもふ。ラフル・ビユーリツア氏によれば、フエークのそも／＼はユーモラスの記事に、その端を發してゐるのである。この種の記事は筆者が馬鹿々々しい誇張の筆を弄して、喜劇的場面を粉飾してゐるので、全く想像によるものである。ではこの記事がどこが惡いかといつても、そこには何等筆者の惡意を認めることは出來ない。事實は事實として忠實に提供してあつて、その上の作り話は讀者が一見して、明かにそれと感づくからである。しかし、こゝでよくないことは、これが第一階梯となつて、だん／＼深みにはまつて行かなければならぬからだ。滑稽味のある、うまい記事を書いてほめられると、次の場合にも、それ以上面白く書きこなさうと、つい喜劇的想像の虚構事實をさへも織込んでしまふ。かうなると、どこまでが事實で、どこまでが小説的であるのか、ちよつと讀者が判斷に迷ふことになる。すなはちこの記事に現はれてゐる興味線と、記者の責任線とは交叉してしまつて、ゴツチヤになつてゐるのである。しかし人々はいふ、すばらしく面白い、そして何ら他人に害を與へてはゐないではないかと。またかういふ種類の記事を好む編輯長は、明るい新聞を作るに熱心だから、このまゝによし／＼ですまして行く。

やがてその記者の文學的努力は、ユーモラスの事實はあらうがあるまいが、どうでもよいといふところまで進み、新聞記事が一つの喜劇の創作になつてしまふ。しかしながら、世の批評に對して、何人に害惡を加へたかと反問し得るのであるが、少しばかり考へて見ればよくわかることで、然り、この記事は何者をも害してはゐない、けれども記事中の人物とは無關係である他の數人の者と一箇のインステイチユーシヨンとを害してゐるのである。いふまでもなく、筆者自らを害し、この事實の報告を受けた社會部長、これを編輯した記者、更にこれを印刷せしめた編輯長までを害し、最後にこの記事を發行した新聞そのものを害したのである。この害するといふ意味は、彼らの最も尊重すべき『正確』に對する鋭感を鈍からしめたことで、したがつてその新聞の純眞を毒したわけである。

かやうにしてこの種の記者は、進んで眞面目な人物、眞面目な出來事に對しても、同樣にこの筆法を用ひるやうになり、悲劇を高潮に達せしむるためにも、哀感を切實ならしめるためにも、例によつて彼の想像力を驅使するに至るであらう。しかもなほ或る種の新聞は、これらの記事は何ら社會に害惡を流しはしないといふであらうが、『新聞記事』なるものは『事實』と同意語であるべきはずなのに、世間でこれを『虚言』の別名の如くいつてゐることには氣がつかないのである。これは果して誰の罪なのであらうか。

フェークが更に惡化すると、記者が自ら面白い記事を製造するやうになる。それは恰も活動寫眞のロケーションの如く、それぞれ必要なる人物を狩出して、一つの場面を演じさせ、これを撮影した寫眞を新聞に掲載して、記事の裏書きをさせるのである。アメリカ新聞がストライキの暴動化を捏造するために無賴漢を雇入れ、ピストルの射ち合ひをやらせたなぞは、これが最惡例であつた。記者の詐術は歩一歩惡德の深みに墮ちて、彼れの救ふべからざる無責任と、不謹愼と野卑とは、遂に正直な人々の人格を傷け、貞淑なる婦人達の名聲を汚し、これら罪なき人々の生涯を破壞してしまひ、或はまた自殺を遂げしむるやうなことになるのである。こゝにおいて、彼らの行爲は、全く殺人罪と變りはないことになる。幸にしてアメリカには嚴しい誹毀罪の制裁があつて、記者は直に牢獄に送られ、新聞社は莫大な損害金を取られて、因果應報はてきめんである。ところが、かかる新聞の經營者に限つて、金錢上の神經は彼ら特有の良心と隣合せであるから、これではならぬとそろ／＼本心に立ちかへるが、記者の方は身を滅ぼすより外に道はない。その初め、ほんの滑稽、無害であつた想像力のちよとした飛躍から、遂には刑事上の罪を犯すに至るフェークの全進展は、まことに以上の如く、寒心すべきものである。」

ラルフ・ピューリッツア氏はかく述べ來つて、更にかう一口にいつてしまへば、アメリカの新聞悉くが惡いもののやうに聞えるが、眞に惡いものは十指を折るほどしかない、それも年と共に減少しつゝある。今日我れ／＼が『正確』に對して拂ふ努力は大したもので、これを物質的に見るなら、一つの記事の蒐集費は平均四ドルであるが、これを更に正確なものに調査するには六ドルを要すると語り、最後に聲を勵まして、左の如くいつてをる。

「正確對不正確の關係についていへば、我れ／＼は千の正確は當然とするけれど、たゞ一つの不正確は我れ／＼の横面をヒシヤリと打つものなることを記憶しなければならぬ。しかし我れ我

れはその衒はざる千の正確の實行に向つて進まなければならない。その一つ〳〵は、實に名もなき記者達の苦心經營の結果によつて得られるのである。或る時は肉體上の困苦と直面し、世間のしら〴〵しい瞞着にあひ、傲慢不遜な拒絶を受けながら、これをなし遂げる。この難事業たるや、沈默とごまかしと盟つきの固い同盟の中から、眞實を掘り出し、或は裂き取るにある。恐怖、無智、虛榮、疑惑、憎惡、これらのすべてのものが、眞理の探究に反抗して聯盟を結んでゐるのだ。記せよ諸君、彼が汗血をしぼつて得たところの正確に對しては、その記者は何ら酬いられてはゐないのである。

特種を取つた記者は賞與を貰ふ、記事をうまく書いた記者はほめられもするが、記事を正確に書いたといつて、彼は少しも認められはしない。長いとかゝつて、艱難と戰ひ、やつと正確を求め得て歸つた彼は、當然の事として期待される。それは我れ〳〵が、「しかあるべき事」となすものの一つに過ぎない。記事の正確のために彼を稱揚するとは、あだかも貞操のために婦人をほめ、勇敢なるがために軍人をほめるやうなもので、當然すぎる當然である。」

八

今日まで、我れ〳〵の先輩は、この分りきつたことさへも、我れ〳〵にはいつてくれなかつたのである。日本の新聞界は、修行者に取つても、學徒に取つても、全く手探りでやつて來た。新聞のプリンシプルを說くものはあつても、體驗の力をもつて、これを肉づけてくれるものはなかつた。テクニツクを敎へるものはあつても、新聞の德性を語り、新聞の精神を傳へようとするものはなかつた。今、ピユーリツア氏のこれらの言葉は、酬いられずして新聞事業の下積みとなつてゐる。幾千萬の隱れたる小戰士に對して、無上の慰安と激勵とを與ふるものである。正しい事をなすのが我れ〳〵の本務である、他から賞讚されるために務めを果たすのではなくて、務めをし遂げたことに自らの滿足を得ればよいのである。これがピユーリツア氏の敎ふる、我れ〳〵の職業精神だ。

我れ〳〵が今日、新聞界で求むるところの偉人なるものは、彼が思想家であり、評論家であり、またすぐれたペンの持主であるだけではいけない。また彼が新聞記者として天稟の才を有し、しば〳〵同業者を驚嘆せしめるやうな材料の提供者であつても、直ちに我らは全幅の尊敬を彼に拂ふわけには行かない。一人の傑出せる記者が、一人で新聞を作る時代ではないのである。彼は僅に一新聞の上に、一部の讀者の心をつなぐ、一つの

星であるに過ぎない。科學的に製作される今日の新聞は、小さいものの連鎖的協調が完全に行はれて、初めてよきものを生むのである。いはゞ無名の兵士の共同動作が、新聞のオーガニゼーションの基調をなしてゐるのである。そして、これを貫く精神が大切である。この精神の鼓吹者がゐない。この精神の統率者がゐない。我れらが求むるところの偉人といふのは、彼のことであつた。

たとへ、彼が外的には知られてゐなくとも、新聞技術の卓越者でなくとも、一社の中心生命として、新聞天職の傳統的精神を個々に傳道する力をもつてゐるならば、彼を偉大としなければならぬ。かくして、この精神が一般に普及した時において、彼の役目は、草花の球根の使命とひとしく終りを告げるのであるが、その祝福さるゝ新時代の來る前に、我れ〳〵は今、彼の出現を熱望してやまないのである。新聞新入生の技術練習の以前に、また各大學の空疎なる新聞講座よりも先に、まづ『正確』を基本とする新聞精神の傳道を必要としなければならぬ。百の花やかな名記者出でよと叫ぶ前に、一人の地味なる新聞道を說く老實なる記者を求める。これが何よりも、今日の新聞で大切なことである。

九

以上述ぶるところによつて、社會が新聞に要求する『記事の正確』に對して、ほゞその答辯をつくしたやうにおもふ。それと同時に、われ〳〵が新聞記者としてつくさなければならぬ本分についても、大體を語つたつもりである。殘るところの問題は、かやうにして得られた記事の確實が、世間でいふところの正確と同様のものであるか、どうかである。世間で求める正確は、絶對的のものであるらしく、さうしてこの絶對的正確が人間の力で得られるもの、得られないのは記者の不誠實と不注意のためであると、世間は考へてゐるやうである。我れ〳〵をもつてすれば、この要求はあまりに殘酷であつて、これに應ずるとは到底不可能であるといはなければならぬ。この意味の正確を追求するならば、恐らくいづれの時代にいたるも、これを捕捉することはできないであらう。さうして、新聞のつゞく限り、不正確は殘るであらう。

事實 Fact は我れ〳〵の目によつて、或は耳によつて知り得らるゝものである。眞實 Truth はその事實の底を流れてゐるもので、事實は知り得ても、眞實を見得ないものは多い。また事實を認識したと信じてゐるものも、その內質の眞實をつかまな

いならば、彼は單に假相を見たに過ぎないのである。こゝに一つの社會事象の現れがあつて、記者がこれを探査するために送られたとして、その場合彼が忠實に外的事實の多くをノートに記して歸つたばかりでは、彼の任務は果されたとはいへない。彼は同時に事實の下底に潜んでゐる眞實をつかんで來なければならなかつたのである。一時代前の探訪記者なるものは、正しくその前者であつた。今日の刑事巡査なるものも、多くはそれである。

或る一つの事件に對して、事實を列擧するだけであるならば、それは何ら害をなすべき性質のものではないが、若しこれらの事實から類推して、一つの誤つた斷案に到達するとせば、これは取返しのつかない危険を冒したものである。更にまた一つの斷案を假定して、これを證據立てるために、都合のよい事實を拾ひ集めようとするならば、それはまた一層悪性の冒險である。今日の刑事警察において、同一犯罪事件に二人の犯人が現れたり、拷問問題や人間蹂躙問題の續出するのは、全くかういふ探査方法を取つてゐるためだ。すなはち、物的事實のみに執する刑事らは、心的眞實を見ることを忘れてゐるのである。いな、彼らには眞實を透觀するだけの知識的準備ができてゐないのである。新聞記者が警察の記錄によつてのみ、事件の眞相を傳へうとすると、やはり同一の過誤におちいる。警戒すべきとである。

私はおもふ。世間のいはゆる記事の正確、不正確は、主としてこの外的事實を對象としていふものであつて、眞實を顧みない傾きがありはせぬかと。もとより新聞は、抽象的哲理を說くものではなくして、事實と眞實とを合せて語るものであるから、事實の完全を期すると同時に、眞實の發見をなさねばならぬ。しかしながら、前にも說いたやうに、事實はそれ自身においては一定不變であるとしても、一瞬ののちには過去のものとなり、實在から現象に變じ、これが個々の主觀に映ずると、いろ／＼に着色され、したがつて事實そのものの絕對的正確は求められないことになる。しかるに一方、事實を外象とする眞實は曲げることも、動かすこともできない。眞實これを表面に描出しないでも、慧眼なる讀者は忠實に描かれたる事實を通して、これを見得るのである。それほど事實と眞實とは皮一重であるのだ。

若しジャーナリズムが、この事實の方面にのみ偏するならば、それはセンセーショナリズムに墮する。今までの新聞は、いはゆる報道主義――事實列擧主義で、無反省、無批判なるこの行き方がセンセーショナリズムに到達したのである。世間

が正確、不正確の標準を事實の上にのみ置いたのも、結局は新聞がかういふ風に導いたともいへる。しかし新聞は、だん／＼にセンセーショナリズムからアイディアリズムの新路に向つて、光明を仰ぎつゝある。すなはち、事實主義から眞實主義への轉換期が來たのだ。この眞實主義といふのは、昔の評論偏重時代の理想主義や、新聞が民衆の一段上にあるといふ顏をする指導主義などとはちがつて、新聞全體の上に人間性の眞實を現はさうとする新理想主義をいふのである。

十

一枚の新聞紙は、朝食後の話題を供したのちは、押入の片隅に投ぜられるであらう。二錢の銅貨によつて購はれた夕刊は、電車の中で泥靴に踏みにじられる運命しかもつてゐない。會社の重役室では、その日も新聞の誤謬が指摘されて、新聞記者の不德が鳴らされた。官廳の高等官食堂でも、新聞記者の無作法が話題になつてゐる。僅に一枚の新聞だもの、批評するはやさしいとである。しかしながら、これらの紳士が、一新聞社の中の光景を晝夜にわたつて目擊したならば、彼らは何といふであらうか。しかもなほ不用意の批評を放つであらうか。自分達の朝食前に、まちがひなく間に合ふやうに配達された新聞は、その朝午前二時までも多くの人が働いてこしらへてくれたものなのだ。事件を探り、書き、活字に拾ひ、印刷し、配達する。それがみな時間と競爭しながら、心と力とをすり減らしてなされつゝあるのである。

關西には新聞電車といふものがある。終電車の出たあとで、午前二時頃大阪の郊外へ新聞を運搬するために特發される。これに便乘するものは、たいてい夜勤で遲くなつた新聞記者達であるが、彼らは積み重ねられた新聞の上に馬乘りになつてゐなければならぬ。誰いふとなく、「土足で上つては、もつたいないやうだ。」もちろん包裝はしてあるが、この下には今、自分らが汗水流して作つて來たばかりのインキの匂ひの高い、ホヤ／＼の新聞が横たはつてゐるのだ。泥靴で踏むには忍びない。誰しも、自分の生んだものは可愛い、他人にも可愛がつてもらひたいのが人情である。愛は理解を生む。(一四・九・一三)

狼へ！(二)

(わが勞働)

藤森成吉

二、牧畜その他

一月たらず家にゐて、たまつてゐるいろんな用事を片つけた。それがどうにか濟むと一緒に、今度は一家全體を連れて、北海道北見の農場へ立つた。

そういつも子供達を親類へ預つて貰ふわけには行かなく、一つには弱い彼等を、この機會に北海道の豪壯な大陸的氣候で鍛えてやりたいと思つたのだ。

北海道は初めてではない。その丁度二年前、拙作「舊先生」その他の實際の用事を兼ね、滿一ケ月あまり、ほとんど汽車の利用出來るかぎり、一人で縦横に旅行した經驗を持つ。今度の目的地、「家庭學校」農場も、實はその時計らずも立ち寄つて、いろんな人達と知り合ひになつたのだ。

もう一遍、是非家ぢうでやつて來ないか、住む小家位はいくらでも貸す、と、たびたびその人々から云はれてゐたのを幸ひ、農業の方の實際勞働をやつて見るべく、あらためて萬事の世話をたのんで出發したのだ。だから、今度は農場ぢう私の本姓本名を知つてゐた。六回の勞働中、そんなことはこの一回だけだ。家庭學校については、それが少年感化事業の場所だと云ふ以外、べつに書かない。勞働即感化と云ふモットォに從つて、それに農場が附屬してゐる。附屬してゐると云ふより、農場のホンノ一隅に學校の建物が出來てゐる、と云つた方が適切だ。それほど廣い。本部のある第一農場の方だけでも、周圍四里ある。第二農場に至つては、十里餘り離れた鬱々たる山奥の大森林地帶だ。日本內地とちがつて、すべて北海道式、乃至大陸式だ。

林の傍の小さな家を貸して貰つて、私達はしばらく住むことになつたが、來てから見ると、純粹な百姓仕事より、牛の世話

の方にいろいろ便宜が多い。そつちをやつてゐながら百姓の仕事も見る事にして、で、私は牛舎の一員に加へて貰つた。女房は子供達の世話を見てくれるので、勞働は私だけだ。

この前北海道へ渡つた時は、何しろ自由な一人旅だつたので、今度も何が北海道位までと無頓着に飛び出した。が、途中ではかなりへこたれた。子供連れなぞではもう來るものではない、と、つくづく思つた。何しろ汽車汽船だけでも何日とかかる。このあいだの氣苦勞。——そのことを農場のS君に語ると、

「いや、北海道もここまでは、ちよつと思ひ切つて來んと來られん。何しろサツポロあたりの人間でさへ、北見だつて云ふとへえつて云ふんだからね。君は詩人だから來られたんだ。」

と笑はれた。

その旅疲れと、あまりにいい周圍の自然とに引きずられて、七月中ブラブラして、八月からいよいよ勞働しはじめた。それから九月中旬出發するまでの詳細は、いろんな個人的禮儀の問題によつて、今何も書くわけには行かない。さぞあつけないだらうが、悪しからず諒恕を乞ひたい。

ただどんな勞働をしたかについて、大體書かう。

まづ、毎朝四時に牛舎へ駈けつける。起きるのは、勿論その前だ。夏の眞ツ最中で、おまけに北に偏つた北海道の端だ。日は隨分長い。然し起きる時分は夜明け前だ。その暗いなかでランプの光に支度して、青葉どほり駈けてゆく。同じ農場内だが、牛舎までは小さな山を一つ越してゆかなければいけない。なのに、もう家の傍の、木柵を結つた廣い林のなかでは、遠く放牧の牛を呼ぶ「モウ、モウ……」と云ふ聲が聞えるではないか。

牛舎へ行くまで、半分は木柵と木柵のあいだの山道だ。その峠の頂邊まであがると、眼の下に廣い牛舎の建物が、眞ツ白い霧につつまれて見える。太陽は勿論まだのぼらたく、爽かな朝風が水のやうに身體へ浸みる。セイセイはづんだ口の中へも、一杯吹き込む。その時の氣もちよさ。これはあとにも一言書くつもりだが、私に取つて永久に忘れられない憶ひ出だらう。

が、いくら爽かだと云つて、又恍惚とするやうな眺めだと云つて、そんな峠のうへで、ぐづぐづしてゐれば仕事におくれて了ふ。その時の私自身のやうに、どんどんペンを駈けおろさなければいけない。

もうそろそろ牛が集まりかけてでもゐればいい。が、大抵は影さへ見えない。と、私も木柵を越して、林の奥の方へと呼びに行く。「モウ——モウ——モウ、モウ、モウ、モウ……。」と大聲に怒鳴りながら。

初めのうちはナラの林だ。が、そのうちに荒涼たる白樺の林になる。大きなその樹が、横ツ倒しになつて半ば腐りかけてゐるあいだを、くゞツたり乘り越えたりして進むと、又ビツシリ茂つた雜木林になる。牛達は、昨日の夕ぐれからその奥へはいり込んでゐるのだ。が、いくら呼んでも呼んでも、滿山ただ寂として、牛の足音一つ、啼き聲一つ聞えない。一體どこに彼等はゐるのだ？、又「モウ——モウ——」を繰り返しては耳をすます。と、ポトリと、ただ幽寂な露の落ちる音がひびいて來るだけだ。

詩かも知れない。が、ただの詩ではない。雨のふつたあと。又はふつてゐる日なぞは、その露で木も草も一杯だ。で、忽ち濡れしよぼたれになる。その冷たさ。殊に九月へ入つてからは冷たくなつて、ズボンから脚へ徹して、まるで感覺を失つてしまつた。

この牛集めは、もし馬へ乘れる仲間が當番になつた時には、裸馬で思ふまゝに林のなかを乘り廻す。だから割合早く見つかる。私はつくづく、自分が乘馬を心得てゐないことを口惜しく思つた。

とにかく、そのうちいい按配に牛が現はれて來ると、牧場から牛舍へ通じる道へかけた太い横棒をはづして、だんだん戻つて來る牛の群をとほす。「モウ——モウ……」と聲をかけると、大きな顏をあげて、太く「ウオウ……」と應じる愛らしさ。

牛舍の入り口をくゞるにつれて、慣れた仲間が、二十何疋の牛を兩側のめいめいの場所へ追ひ込む。そしてすぐ、鐵の鎖で頸をつなぎつける。

その前に、ケーキ（煮た大豆と醤油粕とを混ぜたもの）を、各の牛の頭の先きの、セメントでたたいた溝の中へ分配しておく。これは牛の大好物な、又滋養に富んだ食料だ。それを、早速牛達は首を突き出して食ひはじめる。そのあとから、片隅の水道のカランをひねつて水を流してやる（が、時々水が出なくなつて、バケツで何度となく池の方へ水を汲みに行くのが、又一つの仕事だ。）と、牛達は順々に飲む。

「タラツプ、タラツプ……」

さもうまさうな音を立てて、ゆつくりと大きな舌で吸ひあげるのだ。

それからいよいよ搾乳にかかる。

まづ布巾を、溫水入りのバケツでしぼつて、當の牛の乳房を奇麗に拭き取る。それから木の腰かけを板の間へ据ゑて、腰をかけ、バケツを兩膝のあいだへシツカリ挾み込んで、兩手を乳房へかけてかはるがはるに、或は片手づつで搾り出す。

そう云へば何の事もないやうだが、初めのうちはとても搾れはしない。いくら力を入れても駄目だ。力など入れれば入れるだけ、牛が痛がつて出さない。と云つゝ、入れなくても出ない。コツだ。同時に生來の上手下手がある。

出ないのもつらいが、痛いのもつらい。初めの日あたりは別に氣もつかないが、二日目ごろからたまらなく指と腕が痛くなる。何しろ、兩手を始終或る高さの空間にもちあげてゐてやる仕事だ。腕がだるくなつたり、又おもに力を入れる親指と藥指がしびれて來るのは當然だが、その筋がずツと腕を傳はつて肩と頸へ凝つて來る。その痛さと苦しさ、……時々どうにも我慢が出來なくなつて、搾るのをやめてホツと溜め息をつく。が、そんな休んだりしてゐれば、切角出はじめた乳がまた止つて了ふ。

主任獸醫の話によると、搾乳は牛に對する一種の催眠術だそうだ。兩手で交互に二つの乳房を揉み出してゆくと、迸り出る乳がシユツシユツと、又チユンチユンと、噴水のやうにバケツの內部へ當つて規則的な音を立てる。

そのリズミカルな快い音響と、人間の手の調子的な觸角に一種恍惚とした氣もちになつて、牛は無意識的に澤山の乳を出す。それが、即ち熟練とコツに外ならないそうだ。

だが、そんな魔術が出來るやうになるには、尠くとも二月の総業が要る。それ以上は、いくらやつたところで、人間の天分でどうにもならない。が、日本人は、元來西洋人より搾乳が巧みだそうだ。やつぱり手先きの器用さからだらう。もつとも同じ農場のS君（米國へしばらく行つてゐたことのある）の話では、アメリカあたりの牛は乳房が大きく、搾りにくくて困つたとも云ふ。

橫道へそれたが、とにかくこの搾乳には、新しい惱みを惱んだ。搾れないだけではなく、手間ばかりかかる。それ位ならまだいい。「しぼりあげ」と云ふことが、搾乳には絕對要件だ。牛が乳を出したいのに、搾り手が下手糞な爲め存分出すことが出來ず、そのまま幾日も置かれると、乳房炎と云ふおそろしい病氣に罹る。しぼり殘りの乳が中で溜つて、腐つて、固くシコリを起すのだ。そいつを揉みほどすのが大變だ。と云つて抛つておけば牛の生命に關する。

私は、再び指や腕に赤くヨヂウムを塗りたくるやら、又滑稽なことには、切角沼から取つて來て瓶へ生けておいた高い蒲の穗へむしりついて、兩手で握つて揉みおろして、一生懸命練習して、女房達から笑はれるやらした。でも、だんだん、少しづつは、搾れるやうになつた。初め四ポンド平均位きり搾れなか

つた牛を、あとでは七八ポンドまで出せるやうにし、又牛の數も次第に增して、どうやら外の仲間並みに、一定十三ポンド乃至十九ポンド位まで出せるやうにもなつた。

その白い乳の入つたバケツを持つて驅け出して、アメリカ製のポンド計へ掛けて見て、存外目方のあつた時のうれしさ。滅つた時のがツかりさ。又切角かなりまでしぼり溜めたバケツの乳を、突然ポンと牛に蹴飛ばされて、あツたら殘らず板の間へ呑ませてしまつた時の口惜しさ。蹴られなくても、ヒヨイヒヨイ身體を動かされては、お尻ならず腹のあとを追ふ辛氣さ。その他蹴られ損ひ。角の突かれ損ひ……。

が、そんなことを書いてゐてはきりがない。扱つたいろんな牛の憶ひ出も、一切省く。

ただ、たツた一頭だけゐた種牛——牡牛——のことを一寸書く。それは、牡のくせにプリンセス、ホワイトローズなぞと云ふ名を持つた、おとなしい、が、實に體格の偉大な、奇麗な、少し大きすぎると云ふ評判のあつた牛だつた。時價三千圓だそうだつたが、何故かひどく好いてくれて、傍へ行くと、よくなつかしそうに私の方へ顏を突き出しては、大きな舌で身體ぢう舐め廻してくれた——。

搾乳のあいだに、なほ牧草なぞを牛に食はせる。搾つて了ふと、又片端から鎖を解いて追ひ出す。そしてあと、板の間から溝から、全部掃いたり水を流したりして掃除する。その飛び廻る時の新鮮な健康感、——私は、この時に初めてほんとうに勞働の愉快さを知つた。

一體筋肉風な勞働であればあるほど、——過重でない限り——或る生理的幸福感を人間に與へるらしい。又それが屋外的な、ヨリ自然に親しい勞働であればあるほど、增して來るらしい。私の自然好愛的詩人的感情からではなく、この點から云つて、農牧勞働者は工場勞働者より、本質的にたしかにずつと幸ひだ。今のやうな社會組織のもとでは、農業勞働者はいろんな不當な荷重にシツカリ壓へつけられてゐるから、勿論工場の仲間より幸福だとは決して云へないが。どころか、收入の點なぞから云へば、比較にならなくヨリ不幸だが。

スコツプで牛の糞をすくつて、椽架の中へ盛りあげて、一人でさげて糞捨て場へ捨てに行くのも一仕事だ。隨分重い。その時は、よごれた草なども一緒に積み込んでゆく。第一牛舍の方ばかりではなく、それに隣り合つて建てられた、仔牛や故障牛のゐる第二牛舍の糞や汚物も、一切一緒に運んで捨てるのだ。雨の日などには、北海道獨特の深い泥濘道がすべつて、坂をあがる拍子にあぶなくころんで、糞をひつかけたりする。

その他あつちこつちの掃除がすつかり濟むと、初めて「殺菌場」で手を洗つて、歯ミガキを使つたり、顔を洗つたりする。そして食堂へ集つて、麥半分の質素な朝飯を食ふ。（食事は、三度とも簡單至極なものだ）。それが大抵七時、又は七時半。だから起きぬけのまんま、水一杯、乳一杯のまずに、三時間乃至三時間半働くのだ。

一時間ばかり休むと――食事時間まで入れて――又仕事に取りかかる。いろいろに手を分けて、或はあつちこつちの畠の手入れをする者、馬車を驅つて、一里あまり隔たつた市街地（町のこと）へ牛乳やら荷物やらを運搬する者、或は牧草刈りに行く者……。

牧草刈りについて一言書かう。

その畠は二個所に離れてあつて、隨分な面積だ。チモシイとクロオバアだが、クロオバアの方は仕事も簡單だし、特別記すこともない。が、チモシイ種の牧草畠の仕事は、隨分な骨だ。

獨特の大鎌を振り廻して、片端から切つてゆく。と云へば豪勢だが、慣れなくては、又力がなくては、とても切れるものではない。草がみんないたづらに寢て、鎌が空走る。おまけにべらぼうに石ころが多く、カチカチ切り當てて、たちまち刃がこぼれて切れなくなる。で、それをゴシゴシ砥石で研ぐ。實は研ぐ方が仕事の位なものだ。上手に鎌が研げれば、それで一人前だと云はれてゐるほどだ。いくらこすつてもこすつても、仲々刃がつかない。が、そうしてゐてはキリがないから、いい加減で見切つて又暑いなかを刈り出す

北海道と云へば、人はすぐ夏でも涼しいところだとばかり考へてゐるやうだ。のんき千萬だ。なるほど朝晩は涼しい。夜明け前なぞむしろ寒い。九月初め頃になれば、もうゾッと身に泌みる寒さになる。が、それだけ日中の暑さと云つたらない。朝早くから、もう焦げつくやうな眞ッ赤な日がカアーッと射してゐる。日中には、てんで高い高い天から直射の感じだ。脳の眞ン中から足の先きまで、突き透されるやうだ。そいつを全身に浴びながら、むれあがつた長い牧草を刈る暑さ。……たちまち、髮も顔も身體も汗だらけになる。額からダラダラ垂れ落ちる汗が、痛く兩方の眼へ泌み込む。何度拭いても拭いても、眼鏡が霧のやうに曇る。喉はヒリヒリ煎りつくやうに乾く。で、みんなバケツの水を牛のやうにガブガブ飲んで下痢をやる。

一畝と云つても、どうしてちつとやそつとの長さではない。それをなりたけ幅廣く、又速く、二本も三本も切つてゆくのは、容易なことではない。そこへ石ばかりではなく、又他の太い雜草、たとへば蓬なぞがあちこちに群をなしてゐる。そんな

ものを切れば、ドシドシ刄が鈍つてゆく。

そうやつて伐り倒した草は、あとから長い柄のフォークで掻きひろげて太陽にかはかす。乾き切ると、ところどころへ又掻き集め、それを一まとめにフォークで突き刺して持つて行つて、どこか恰好な處に乾草の大山を作る。大抵頭の上へ振りかぶつてゆくので、乾いた固い草が頸首へ散亂して、チクチク針のやうに突きささる。

大山が出來ると、雨が降つても濡れないやうに——濡れれば、切角の香りも滋養分もみんな逃げて了ふのだ。——上から燕麥の空き袋の大布を何枚も掛けつらねて、その上から繩張りをしてシツカリ押へつけて、風に捲られないやうにとめる。

そうやつて一旦積んでおいて、あと馬車で牛舍の二階の納屋へ運んでゆくのだが。馬車は、北海道特有の二輪車だが、大きさは大抵内地のそれと異らない。そいつへ山のやうに積んでも、が、とても運び切れない。三回どころか、四五回位でやつと片つく。それほど大きな草の山だ。

牧草を刈る期間なぞの詳しい事は書かない。が、そんな牧草だけでは、澤山の牛の冬ごもりの食料には足りない。で、その外に、普通の「山草」も刈つてをく。その時には、隨分遠くの山まで、攀ぢあがつて、刈つて、肩やら馬車やらで引き出す。それに使ふ鎌は、普通の草刈り鎌だ。又少しおくれると、あつちこつちのデンドコン畠の收獲がはじまる。夏から秋へかけては、牧夫の仕事は實にいそがしい。

その仕事を午后三時半頃までやると、又搾乳がはじまる。朝と同じやうに牛を牛舍へ集めて、乳をしぼつて、あと又掃除するのだ。それが終つて夕飯を食ふ頃には、どうしても普通六時半から七時だ。午飯時には一時間位の休みがあるが、それにしても隨分長い勞働時間だ。

勿論この農牧經營は、普通の營利事業ではない。が、現代では、どんな種類の經營でも、尠くとも損をしないだけの收入は考へなければいけない。そこで名目は何でも、實際はやつぱりそんな結果になる。勞働即教育としては徹底しても、勞働以外の勉强時間も精力も、少しも剩されない。——たゞ一言云つておきたいのは、牛舍で働く連中はみんな立派な青年だ。普通の感化部の少年達の勞働は、決してそんなに長くも、又はげしくもない。又、少年達には決して金を與へないことになつてゐるが、牛舍の青年達には、手當として毎月五圓出る。食料と寢室以外、それで一切の費用を自辨してゆくのだ。

當時牛舍の寄宿舍には、十人足らずの若者がゐた。彼等は前述の勞働のほか、なほ殺菌場やバタ製造場や、事務所の手傳ひ

やら風呂わかしやら、あらゆる仕事を受け持つてゐた。そして夕飯すぎのわづかな時間には、疲れた疲れたと云ひながら、山一つ越してよく私の小屋まで雑談にやつて來た。彼等の睡眠不足でよくつゞいてゆくのに、私は感嘆した。

「若ければこそ……。」

そう云ふ私は、外にいろんな仕事もあり、午前中だけは缺かさず一緒に働いたが、午后は時たまやつたきりだつた。が、いくら若いにしても、家の者達にも睡眠時間はかなり大事にさせてゐる私には、無理な氣がした。仕事そのものも、やりやうに依つてはもツと幾らでも短い時間で出來る。

仕事のことは、これ以上書かない。純粋の牧畜以外にも、時々畠の蟲取りなどを手傳つた。——たとへば、夥しいキヤベツの青蟲取りなぞ。

見聞した小作百姓達の生活についても、冗々しくなるから端折らう。

が、一言。——一體北海道の百姓は、内地とちがつて澤山の地面を借りる。一人平均五町歩と云はれてゐる位だ。然し、何しろ新しく開墾したり、手を入れなければいけないやうな土地ばかりで、そのうへ氣候や交通の關係もあり、みんな粗耕的だ。殊に、この邊の土地は、一時ものになるまいと云はれた位、痩地が多い。だからいくら澤山の地面を借りても、又少しは年貢がやすくも、内地の農業のそれと比較するわけには行かない。みんな暮しはらくでない

特にこの北見の土地によく適つた作物もある。たとへば薄荷の如き、世界にも稀に見る好適地らしい。今でも、北見一國のその年の出來榮えで、世界の薄荷相場に影響すると聞く。が、それなぞでも、所謂仲買の市街地商人達の狡猾な術策に陷つて、百姓達は見す見す毎年損をしてゐるらしい。

かう云ふ問題については、よつぽど周到な、又親切な研究と調査が必要だ。なのに、丁度私の滯在中、内務省の役人達が四人、わざわざ視察に派遣されて來たことがあつた。勿論「移民地視察」とは云ひ條、暑中のこと、遊覧地視察を兼ねての旅行だつたらう。それにしても、一晩彼等の調査ぶりを見て、すつかり失望してしまつた。

農場の客室に、彼等はみんな泊つた。かねて校長とも顔見知りらしく、それは當然でなくもない。が、その晩、近傍の代表的小作人四五人を呼び集めて、茶と菓子を一緒に食べながら、いろいろ質問し、又返答をきく様子を、私も丁度その坐へ呼ばれて眺めたが、一々齒痒いことばかりだつた。それは、一つには、案内役に一緒についてゐた網走支廳の農業技師か何かの不

埒さにも依る。

何でもその地方の農業の有望なこと、利益のあることばかりへ談話と質問を向けて、如何にも移民地として理想的なやうに役人達に思はせやうと、露骨不遠慮に努める。折角百姓が實際の苦痛を話し出すと、「あんまり長くなるから」と勝手に打ち切らせたり、「なかなかうまいことを云ふね、」なぞと、戯談氣味にはぐらかしたりして了ふ。

一體そんな調子で、又そんな場所で、百姓達が正直に收支なぞを打ち明ける筈もない。が、苟くも農事の忙しい最中を、わざわざ時間を潰させて呼び迎えて訊く位なら、明暗兩面を公平に、虚心にきくがいい。あまりと云へば、彼等に對して禮を失してゐるではないか。それに滑稽なのは、その所謂代表的な四五人の小作人が、最も成功した有福な「代表的」選拔だつたことだ。

その夜おそく、月光を踏んでひとり小屋へ向つて林の中をめぐりながら、私は憮然とした。あのまま、所謂實地調査となつて、中央官廳その他へ報告され傳達されるのか、そんなことにわざわざ手間と費用をかける位ならしない方がましだ。いな、はるかに増しだ。勿論いくら役人達でも、多分それだけの實狀報告ではなく、別な方面も探索するだらう。が、その調子では、いくら研究を重ねたところでやつぱり同じことではないか？……。

由來官廳の仕事や調査は、その迂愚と不徹底でいつも識者の物笑ひになつてゐる。今更そんな事について慨嘆するのは、或は野暮すぎる沙汰かも知れない。が、いつもかうだと定つたら、民衆はそもそもどこに訴え、どこに解決を求めたらいいか。いな、求めざるを得なくなるか。古來の春秋の筆法を借りれば、農民をその行くべきところに行かせるものは官廳だらう。

私が勞働をしてゐることがあらはされた時、或る新聞なぞは、某華族の公園の草拗りと比較したと云ふ。そんなすばらしい位地の人と同じに見られたのは、ケチなブルジョアの家に生れた文士風情として、光榮と恐縮のほかはない。が、少々當を失しすぎる。勞働の本質そのものから云つても。……尠くともこの觀察官吏の一行に依つて、私は自分の勞働計畫が彼等よりはずつと上皮を剝いてゐることを知つて、いささか自信を感じた者だ。

それはそれとして、この北海道行きについて御厄介をかけた校長その他職員諸氏には、ふかく謝意を表しておく。北見の自然は、――前にも書いたやうに――私に取つては永久忘れない印象だらう。これは、決して私がなまけてゐたからではな

い。

工場勞働と農場勞働と、將來の新世界にひろがるべき各の特殊性についても、自分の感想を持つてゐるが、そんなことは勿論はぶく。

三、豚飼ひ

これについては、今いろんな事情から、前回よりもなほ書くことが出來ない。東京郊外とばかり、勞働場所さへ書けない。前は牛、今度は豚、なぜそんな同じやうな仕事を重ねたか？これは、最初の豫定のなかには少しも入つてゐなかつたのだ。云はば飛び入りだ。北海道にゐた時、ふとある人の話から、その場所の珍奇さに惹かれて働く氣になつたのだ。だから、その場所を云はない場合には興味のほとんど全部はなくなる。もつとも、この記錄にはそんな興味などどうでもいいが。

何よりいけないことは、この記錄にをそらく一番重大な問題が、まるで書けないことだ。それは、いづれ他の何かの形式で書くだらう。

が、どんなことをしたかを書くだけでも、萬更無意味ではないかも知れない。一寸自分の仕事外となれば、殊に現代では、あきれるほどみんな無知識だ。これほど新聞雜誌の夥多な、知識と報道の自由な時代で。——この一點についてさへ、私は××××××××××してゐる者だ。試みに、戯れに質問を呈して見やう。牛の乳房は、一定普通幾つありますか？……愚にもつかないこの簡單な常識的試驗に、現代の所謂知識階級中パス出來る者は、案外尠くはないか。現今の知識階級とは何ぞや？——それについては、たしかに改めて檢討する必要がある。

「産業の代表的なもの數個を經驗する」なぞと書いたが、複雜廣汎な現代分業では、その代表的なものでさへ數個やそこらではない。その點から云へば、私の前言なぞ恥しすぎる。が、その一々を踏んで見ることなぞは、神ならば知らず、私の分際ではただ夢を語るにすぎない。

それにしても、幾分でも人生の正確な知識を握つてゐることは、誰にとつても必要なことだ。又その欲求は、非常に大切だ。その方面からも、文藝は現代に大きな寄與の力を持つ。もつとも今の日本文壇のやうな、重箱の片隅を楊子でほぢくつて得々としてゐる文藝では問題にならないが。

ペンが横へ走つたが、で、勞働の事實だけを書く。

その場所には、豚ばかりゐたのではない。鶏も、家鴨も、ホロホロ鳥も、兎も、山羊も、どつさりゐた。が、私は、そのう

ちの豚をおもに受け持つたのだ。豚だけでも、大豚小豚合はせて百何十頭からゐた。その半分、五十何疋を、私ともう一人の若者とが主になつて見た。

ほかの五十何頭は、新しい奇麗な小屋に入つてゐたが、私達の方は、古いきたない四棟の小屋の住者だつた。例の大地震で、各々の室のセメントの床がすつかり毀れるやら、陥沒するやら、そして今は、おそるべき深い泥と腐草とに埋もれてゐるのだ。生憎建てかたが無鐵砲で、東西の方向になつてゐるので、中へは一日中日が射さない。そのすばらしい臭氣。不潔さ加減。…………が、今となつては、建てなほすなら格別、もう根本的掃除のやりやうもない。

「社會の下積みとなつて、どん底の勞働をして見る」（新聞記事に載つた言葉）と云ふたら、まづここらが名實だらう。が、實際私達より氣の毒なのは、豚だ。

一體彼等は、世間の人間の考へしてゐるやうな、きたないことの好きな動物では決してない。いな、實に清潔好きの生物だ。きたなくしておいて平氣でゐるのは人間で、豚ではない。論より證據、奇麗にしてやれば非常によろこぶ。糞便などは、ちやんとする一隅を定めておいて、外の場所へは決してしない。きれいなら、身體もよく肥る。子供も澤山生む。その又仔豚の發育も大へんいい。

これは、一般勞働者に對する世間の誤解と一緒に憤慨してもいい。所謂ブルジョア階級の人間は、勞働者と云へばただ漫然と、きたない生活をいくらでも平氣な、むしろ好きな生物として概念づけてゐはしないか。意識的にではなくとも、すくなくとも無意識的に。――そして、自分達の借衣裳の贅澤さやらきらびやかさやらを以て、彼等より一等うへの、どころか奈くちがつた、階級の人間のやうに誤信してゐはしないか。

飛んだ自惚だ。諸君よりも、眞の清潔好きの點では、彼等の方が一般に一歩上だと私は信じる。

又世間の人間は、豚の健康乃至肉體的力について、實におどろくべき想像をめぐらしてゐる。私が豚を飼つてゐたと云つたら、すぐ二三人から質問を受けた。

「豚は、たべたいだけ、そのたんびお尻の肉を切り取つてうツちやツておけば、ひとりでにもとどほりになるつて、ほんとですか」。

戯談ではない。貴婦人がたよ、そんな豚も、滿洲の果へでも行つたら或はゐるかも知れません。が、まづ日本には居ません。どころか、日本の豚は――と云つてももとは西洋種だが――大事に飼つてゐても病氣に罹りやすい。私のゐるあいだでも、二疋や三疋は、いつも物を食はない病豚だつた。

これも、プロレタリアに對する神話的見解と似てゐる。一般世間人は、自分が勞働階級の一員になるなぞとは、考へただけでもおぞ毛を振ふくせに、勞働者達は、いくらこき使つても平氣な、鐵の鑄物のやうな人間と考へてゐるらしい。でなかつたら、現在のやうなプロレタリアの無理と悲慘を、どうして平然と無視してゐられるのだ？

本筋へ戻つて、さてそのあはれな豚達の爲めに、私は毎朝八時頃から夕方六時頃まで働いた。どうかすると、眞ツ暗になつてもまた濟まない。

まづ片端から小屋の戸をあける。これが又手酷く壞れてゐて、みんな容易にあかない。豚が突いたり食ひかじつたりした穴へは、間に合はせにトタン板を叩きつけて塞いであるが、そいつの角でたちまち手の指なぞ痛める。あけると、マングワの先きで木製の餌箱を引つかけて引きずり出し、又戸をしめる。その際をねらつてはよく豚が飛び出して、あつちこつち追ひ廻してはやつと又中へ入れる。

五十近くの箱をすつかり出すと、傍の小川の水を二つのバケツへ汲んで、兩手にさげて運んで、バケツ一杯三個分位に箱へ分け入れ、ガシヤガシヤ、ガシヤガシヤ、竹箒で引ツ掻いて掃除する。それから、一々戸へ立てかけて乾す。餌箱はどれも傷んで、釘が矢鱈に突き出てゐるので、手袋をはめてゐても傷だらけになる。

さて十一時前になると、ガタゴト殘飯の手車が着く。それも、勿論仲間の者が引いたり押したりして來るのだ。酒の空樽へ四樽位一杯、そのほか蓆包み二つ位、飯だの、魚の骨だの、菜ツ葉だの、糠味噌大根の尻ツぽだのが、どツさり積み込んである。その不思議な匂ひのする奴を、まづバケツで少し汲み取つて輕くし、あと車から引きずりおろして十七樽位に分配し、それへバケツで川水を汲み込んで一杯にする。麥粥を少しづつ入れもする。

出來あがると、二人の仲間が一樽づつ天秤棒でかついで、各棟の前へ平均に配置する。一方私達二三人は、殘つてゐる五樽分位の餌を、古い小屋の中の豚へ配つて歩く。大抵バケツに二杯位づつ、一定の豚に分けてやるのだ。なみなみ滿たしたバケツをさげて驅け廻ると、臭い水ですぐビショビショに身體が濡れて了ふ

それが濟むと、やつと晝飯になる。これも一寸特筆に値ひする。みんなの飯を一つのバケツへ、汁を他のバケツへ入れて、仲間の一人が賄部から貰つて來るのだ。そして、くすぶつた狹い土間へ、みんな腰をかけたり、胡坐を掻いたりして、きたない食器で食ふのだ。うつかりしてゐると、犬やら仔豚やら鷄やらが入つて來て、遠慮なくバケツの中へ首を突ツ込んで失敬する。

午后の豚の世話は、午前と同じことを繰り返す。餌箱の掃除。餌の配給。――尤、水や晝のほかに、午后は特別、例の土

間の隣りの釜場でグツグツ煮た物を、バケツに一杯づつ御馳走に樽へ入れてやる。それはほんとうのゴッタ煮だ。野菜の屑でも、殺した豚の骨でも、皮でも、死んだ鶏の雛でも、何でも悉く叩ッ込んである。その猛烈な臭氣の爲めに、煙突を拔いてありながら、トタン屋根がみんなボロボロに紙のやうに腐つて、雨の日なぞは筒拔けに降り込んで來る。

雨と云へば、その日ほどつらいことはない。みのと古麥稈帽に身を固めて仕事をするが、ただでさへ水を扱ふ濡れ商賣だ。身體ぢう濡れる位はともかく、切角洗つた餌箱も乾かなければ、そのこぼしたよごれ水もそのまんま地面へ溜つて、ズブズブと泥沼のやうに脚をうづめる。泥の飛沫は飛ぶ、仕事ははかどらぬ。仲間の一人の唄だ……。

とんだ濡れ場だいやになる。

前に、古小屋の掃除は手のつけやうがないと書いたが、やつぱり少しづつは見てやらないと益々ひどくなる。で、時々泥にまみれた草なぞを、マングワで引つかけては引つ張り出す。そして車に積んだり、擔架に取つたりして、ゴミ棄て場へ運んでゆく。そうやつてもう長く小屋の前へ積んだまますつかり腐つてしまつた奴なぞも片つける。美事に醱酵して、焚火のやうに熱く、掻き取るとポツポツと湯氣が立つさわぎだ。

豚の話は大體それ位にしておかう。そのほかに、山羊や兎に餌をくれたことも少しはある。草や豆腐のおからをやるのだが、仕事としては云ふに足りない。

私は元來動物好きなので——豚なども隨分可愛いものだ——仕事としては總體決していやではなかつた。殊に自然としては、此の邊の郊外のそれは實にいい。

勿論私は相變らず家を出て、ひとりで或る家に下宿してゐたが、そこへ住んで見て初めて、大武藏野の心臟の鼓動を聞かされたやうな氣がした。殊に時期は、丁度日本の最も美しい秋の時節だつた。

北海道の奥の夏の自然に、うしろ髮を引かされるやうな氣もちで別れて來た私は、それとは又すつかりちがつた種類の美で心から打たれた。

一方にはそう云ふ自然の場所があり、一方には例の龜戸一帶のやうな土地がある。そんな世界が一緒にこの世界に存在してゐると云ふことは、實際何とした矛盾だらう。しばらく石鹸工場の空氣に慣れて北海道の旅に立つた時、私はまつたくうそではないかと思つた。夢かまぼろしのやうな氣がした。それほど二つの世界は懸け離れすぎてゐた。いつになつたら、一體この「萬人の所有たり」と昔蘇東坡がうたつた自然は、工場勞働者の渴いてゐる懐へ戻つて來るだらう？——それは、勿論××××のほかにはない。

どこにでも味はれる現代勞働の特質の退屈と悲惨については、讀者の想像に任せておかう。

闃夜經

日夏耿之介

纖々と　黒闇のなかを
黄金色の音がかすれる……………………
斯の豫感に得たえず
目途もなく　ただ　蒼白めて
小昏い部屋のいと低い扉ぐちに佇つたときだ。

闇黒は　重壓つよく犇々と
ちいさき造化をひき締める
戸外では　嚴冬の冴えた白刃が
嶮しい山腹の葛折なす凍路のやうに

骨肉にきしむ　この夜半だ。
黯憺と　徒に忙しい宏大のひと間のなかで
油汗してもろ手を高くさしあげて
吐く息だに　ひそかに凝し　卒然と
肺の臓いつぱいに儂が名稱を叫ぶ
連呼する　呼號する　悲鳴する
呼吸づまり　心困しく身を悶え
只管指す方角へ盲驅する　仆れ伏す
胡床する　骨身を延ばす　端坐する。

黑闇の裡を　縱々と
黄金いろの音がかすれる…………

疲憊に竊る

肉身を　冷たい床の上に臥せて
纖細い呼吸に生存ながら　もだもだと
なにひとつ思念へられぬ
空寞の　疎懶の頭腦で受身らしくも
奥ぶかい昏闇を手探る　瞳を凝らす
卑陋しい歎願に身を墮す
拱手する　合掌する　嗤笑する。

膝まづき　胸慄へ
昏黑の央で
考試されてをる少人の一座のやうに
おどおどと　小答へる　言葉を呑む
瞳をあげて
儂が名稱をそつと呼びつづける
手を懈く

昏闇の　厳しい空のただなかに
儂が名稱の文字をしたためる　眼を落す
大氣かじかむこの夜半だ。

明を失なふ雙瞳のさきに
數十歳の悲喜をつらねた顛末が
一瞬に　斷れ落ちた映畫のやうに逝きすぎる
もやもやと飛沫のやうに
四方八方の厚い土壁に滲入てゆく。

噫　こころ淋しい　息ぐるしい　侘　から
昏迷から　こころなさから
いとせめて　自分の文字を書いてみる
儂が手も足も　竦然と
畏怖のため　暗黒のために

神經質に慄へてゐる
山嶮しいこの嚴冬の小夜なかだ。

噫　勞憊の心肉が
軸くだけ　泥土にまみれ
斯の昏闇にいどまれて
怖づ怖づと　絶念の　捨鉢の死に身を晒す

纖々と　黒闇の裡を
黄金色の音かかすれる……………

嚴冬の山嶮しい
九折れなすひと間のなかに俯し仆れ
果てしない　いと崇き
穹大のをちを仰向いて……………

―終―

山川均君についての話

堺利彦

山川均君について何か書けと云ふ注文を受けた。私の『堺利彦傳』が進めば、自然それを書く事になるのだが、『傳』は當分『改造』に載せる事をやめ、來年の春ごろ、單行本として出す事になつてゐるのだから、今こゝには、思ひだすまゝ、ほんの面白半分、ザット山川君の人物、風貌、閲歴を書いて見る。

（一）

明治三十三四年の頃、私は萬朝報の編輯局で初めて山川均の名に接した。山川均、守田文治といふ二青年が、結婚の神聖云々の論文に依つて不敬罪に觸れた。その論文の載つてゐる雑誌は是だと云つて、皆が編輯局でそこを廣げて讀んでゐた。私もそれを覗いて見た。論文の内容には記憶が無いが、圏點の澤山打つてある其の活字が強く私の目を刺激した事を覺えてゐる。この人達は京都の同志社を脱走した連中なんだそうだ。まだ丁年未滿なんださうだ。など、人々が噂してゐた。雑誌の表題は、たしか『福音の友』といふので、一人が駿河臺の中形堂から發行してゐたのであつた。

それから明治三十七年、私が幸徳秋水等と共に週刊平民新聞を出してゐた時、守田君が巣鴨から出獄して平民社に尋ねて來た。そして山川君も近々歸つて來るといふ消息を傳へた。私等はその時はじめて二君が社會主義者である事を知つて、非常に嬉しく感じた。然し山川君が出獄して直ぐ平民社に來訪した時には、私は不在で會はなかつた。それから山川君は郷里の岡山縣の倉敷に歸つて、暫らく蟄伏してゐた。

明治三十九年の末、私等が日刊平民新聞を發行する機運に際會した時、私等の間に、山川君を呼び迎へようといふ議が起つた。幸徳秋水が殊に山川君の才力人物を認識してゐた。山川君は喜んでやつて來た。私はその時はじめて、眉目清秀なる廿七

歳の山川君を見た。

(二)

日刊平民新聞第一號に『前半身に對す、山川生』と題した一文が載つてゐる。それをこゝに抄錄する事が、最も善く山川君の心事を示すに足ると思ふ。

『予は不敬事件の爲に三年有半をば、三十尺の赤煉瓦に、世間の光も風も斷ち遮られた獄裡に暮したので、あらゆる實世間の智識も經驗も、今は宛らリツプ・ヴン・ヰンクルが彈械の腐つたる烏銃の如く、………小石川警察署に着いて雜然たる領置品の裡より、始めて此の憐むべきリツプの眼を、鋭くも刺したるものは、實に平民新聞の第一號であつたのだ、………そして尚半ば霧に包まれた心地で、其夜直ちに元の平民社を訪ふたのであつた、

『回顧すれば、予が初めて社會主義なる一語を聞たのは、卄九年であつたと思ふ、狂熱なる忠君愛國教より、狂熱なる自由平等の燎火のバプテスマを與へられたる予が耳には、社會主義の一語は實に、絕妙の音樂の如くに響き、社會主義の何たるかをも解せずして、早くも社會黨を以て許してゐた、第二の故郷たる洛陽を去つて友と三百里外に袂を別つた時、一宵浪花の埠頭に立つて、今より十年を期して、冀くば勞働者の爲に、東西に於て社會主義の旌旗を揚げんと誓つた事がある、………瞑想すれば此の狂少年が意味もなき十年後のユートピヤは、不思議にも今や恰かも事實となつて、………果して社會黨は顯はれた、自分は無限の感慨の裡に、斯の友と謀り、同じ日、同じ時に其の黨籍に記入せらるゝことが出來た、………若し夫れ此の新平民新聞運動の陣後に從ふを得たるの光榮に至りては、彼の狂熱の少年が十年の昔に於て、敢て期し能はざりし所である』

(三)

日刊平民の編輯局に於ける山川君は、寡言沈默、只こつ〳〵と働らいてゐた。論文の作に於いて、英文の反譯に於いて、山川君は總てに頭角を現はしてゐたが、當時、私が最も深く山川君に敬服したのは、山川君が何人にも勝れて雜務に忠實な事であつた。大論文を喜んで書く記者は幾らもあつたが、自ら進んで行數を勘定したり、清書をしたりする記者は滅多になかつた。それで我々は少し皮肉に、そうした雜務をやる人の事を『奴隷』と稱して、他の『天才』と區別し、『ヤア、今日は之をやる奴隷は居ないか』などと云つたりしたが、我が山川君は最も多く奴隷的任務に服して、少しも厭な顏をしなかつた。

日刊平民の『平民社より』といふ欄内に、こんな一節が見つかつた。『山川君の持つてゐる鉛筆は軸が二寸ばかりしかない、どうしたのだと聞くと、何時の間にか斯んなになつて居るのだといふ、自分で嚙むのぢやないかと云へば、どうもそんな事と見えると云ふ、見えるがいゝぢやないか』

もひとつ、こういふのがある。『山川君が巣鴨にゐた時、新米の看守がやつて來て「オイ千七百八十七號、其方は社會で何をして來たか」と、サモ横柄に聞くので、癪に障つたから「人殺しです！」と答へてやつたら、御看守様ビクリとして匆々あちらに行つたさうだ』

山川君は日刊平民に折々『麥粒』若しくは『麥』と署名してゐた。そこにクリスチヤン出身の名殘があるのだと私は思つてゐた。處が、麥はバタニンのバクだといふ説もあつた。後に飼犬の名をバクと呼んだ事もある。その頃には無政府主義的傾向も可なり强かつた。

（四）

日刊平民がつぶれてから、山川君は守田君と一緒に淀橋の柏木に住んでゐた。守田君は山川君より一つ二つ年少であるけれども、細君はあるし、世話好の性質でもあるので、山川君を内に置いて世話してゐるといふ格に、同志間に『おぢさん』と稱されてゐた。山川君は又、餘り金取り仕事もせず、平氣で『おぢさん』の世話になつてゐた。その頃、秋水は國に歸つてゐたが、私だの、大杉君だの、荒畑君だの、皆その近邊に住んでゐたので、新聞などでは我々の事を『柏木團』と呼んでゐた。

實際、我々は一團體の形で、片山君、西川君、田添君等の社會新聞派と對立してゐた。我々の方の機關紙としては、森近運平君が大坂で平民新聞を出してゐた。これは日刊平民當時、姑らく存在してゐた日本社會黨内で、議會政策派と直接行動派との爭ひが起つた結果で、モツト早く云へば、社會主義と無政府主義との爭ひであつた。そしてその頃が最も顯な分派爭ひの現象を呈した。

然し、何しろ謂ゆる柏木團では、山川君と大杉君とが花形で、『金曜講演』など盛んにやつてゐた。私自身について云へば、社會黨時代から、丁度兩派の中間に立つ地位に居たが、實際上には矢張り柏木團に屬してゐた。そして幸德・大杉＝山川＝堺といふボカシになつてゐたと思ふ。だから柏木團だけについて見れば、山川君が中央であつた。

それから四十一年の夏、赤旗事件が起つた。これは山口孤劍君の出獄歡迎會が神田の錦輝館で開かれた時の事で、その散會

間際に、大杉君等が『無政府共産』と白字に染め抜いた二本の赤旗を不意に掲げだしたので、警察官が大いにうろたへて、それを取上げようとして、その揉みあひの間に官吏抗拒といふ犯罪が成立させられたのであつた。その時、山川君と私とは、旗の持主と警察官との間に立つて、成るべく無事にその騒ぎを片付けようとする、調停者と云つた樣な態度であつた。然し、山川君も私も、皆な同じく官吏抗拒と目された事は無論である。

（五）

赤旗事件の前に、屋上演説事件と云ふのがあつて、山川君、大杉君、私、その外數名が一二個月禁錮された事がある。これは小いさな事件で、皆が面白い獄中生活をした。私は短篇小說を書いて、みやげに持つて歸るほどノンキであつた。山川君もその間に機緣が生じて、出獄後に大須賀里子さんと結婚するほど幸福であつた。その頃、女子醫專の學生が三人、我々に接近してゐたが、その中の一人が里子さんであつた。運動上の花形でもあり、苦味を交へた好男子でもある山川君が、早く好配を得たのは當然であつた。

『金曜講演』の連中で新年會をやつた時の事がチョット面白いから、私の古い文章の中から左に引用する。「色々趣向を凝した末、或人の年始の葉書にあつた、「君が代の社頭の松に首くくり」といふ俳句を實演しようといふ事になり、戸山が原から可なりな松の木を一本切りたほして來て、それを會場の正面に然るべく飾りつけ、其うしろの壁に大きな鳥居の畫をかいた紙を張りつけ、それで「社頭の松」といふ心持を見せ、それから仲間の中の山川といふ、思ひきり痩せた男が此役には打つてつけと云ふ輿論で、無理やり其男に誰かの古シャツの破れたのと、古寝間着のしほれたのを着せ、密柑箱か何かを踏臺にして松の木の下に立たせ、本當に咽を締めては少し可哀そうだと云ふので、汚れた兵兒帶を繋ぎあはせて脇の下から縛りあげ、無論際所目には首だけ釣つて居る樣に見せかけて、帶の上の端を松の枝にゆわえつけ、いよいよこれで出來たと云ふ時、幕の外では早や會衆が待ちかねて頻りに催促の拍手をする、ではいよいよ幕を切つて落さうといふので、ソツト踏臺の密柑箱をはづす時には、若しや此まゝ本當に山川を參つてしまわせるのではないかと心配したが、はづして見ると本人は存外平氣で、それから幕を切つて落すと、大鳥居の前の松の枝に、首をガツクリと前に傾け、痩せた兩手をダラリとドげ、細い兩足の尖つた指先を力なげに揃へてブラさがつてゐる其姿が、如何にも眞に迫つて大喝采を博した。」

（六）

赤旗事件の爲、山川君は二年間、千葉監獄に居た。私とは永いあいだ監房が隣同志であつた。山川君は獄中生活の先輩として、寒さを防ぐ方法について、いろ／＼私に敎へてくれた。蒲團をはすかいに、さゝえの様な形に卷いて、その尻先を手拭で縛り、そして巧みにその中にもぐりこむ法などは、蓋し最も有益であつた。寒さの爲、夜四五遍も小便に起きると、その度毎に足が冷えて堪らないと云つて、山川君は寢たまゝで土瓶の中にしてゐた。然しそれだけは、私は眞似をしなかつた。又、飯に砂が多くて、どうにも嚙めないで困つた時、山川君が名案を授けてくれた。即ち先づ飯にタツプリ湯をかけて、箸でよく交ぜると、砂は皆な底に沈んでしまふ。と云ふのであつた。成るほど智惠者は違つたものだと思つた。

山川君は千葉で英語の外、ドイツ語と、フランス語と、エスペラントをやつてゐた。私もドイツに少し目鼻がついたので、フランスの方も少しかぢつて置かうと思つて、獨習書を暫らくやると、早く何か然るべき本を讀んで見たくなつた。そこで隣りの山川君に相談すると、或朝、運動に出されたついでに、モリエールを一冊、私の室に放りこんで呉れた。

私が千葉から妻に送つた手紙の中に、こういふ一節がある。『扨茲に一つ特筆大書すべき事がある。先月の或日曜、合葬式の志しとして、小判形の饅頭二個を、囚人一同に賜はつた。實に夢かとばかり嬉しかつた。山川などは餘んまり旨かつたので、其晩熱が出たと、翌朝看守殿に申上げてゐた。』

私には赤旗事件の外、新聞紙法違犯か何かの二箇月がくツついてゐたので、山川君は私より先に出獄した。私が歸つた時には、山川君は既に郷里にゐた。それから數年間、我々は會ふ機會を得なかつた。

（七）

大逆事件の後、我々の運動は全く屏息した。私等が東京で『賣文社』に依つて衣食してゐる間、山川君が郷里で薬種屋を營業してゐた。細君はお醫者さんの方はやめて、寫眞をやつてゐたが、それも後には山川君の商賣になつた。山川君が小學校だの町役場だのの注文に依つて、寫眞機を肩げて出かけて行つた姿を想像せよ。細君はそのころ病歿した。

大正四年九月、私が雜誌『新社會』の『小き旗上』をした頃には山川君も又そろ／＼動き出してゐた。その少し前、山川君は久しぶりで一度東京に遊びに來た。私は山川君を帝劇に案內

して、四階か五階かの高い所から、谷底の瓜や茄子を見るやうな芝居を見物した。こゝは天井が好く見えると云つて、山川君は喜んだ。

　それから山川君は倉敷の商賣を切り上げ、何程かの金を握つて福岡に行き、鹿兒島に行つた。福岡では印刷業を計劃し、鹿兒島では山羊の飼養を試みたが、皆な失敗した。兎にかく山川君は九州で一旗上げる積りであるらしい。然し、何と云つても矢張り東京より外に浪人の居る處は無かつた。それで大正五年一月には再び東京に來て、私等の『新社會』と『賣文社』に關係してゐた。

　それから以後、『新社會』と『賣文社』は社會主義の山寨の形を成し、山川君と高畠素之君とが、盛んにその才力技能を發揮してゐた。山川君の二度目の蟄伏は實に大なる智識の蓄積され、大なる才力の圓熟される機會であつたのだ。

　山川君の來た時、賣文社は永田町の溜池橋のそばに在つた。私は麴町八丁目の今の家に住み、毎日賣文社に通ひ、山川君は賣文社内に住んでゐた。その頃よく、私は山川君と二人で、山王台に散歩した。その散歩の記念として今でも私の家に鉢植の楓の林がある。二人で小さい實生を抜いて來て植ゑたのだ。その頃、私は又、折々山川君と、溜池橋のそばの香林亭といふ小い西洋料理に行つた事を思ひ出す。二人で一杯飲む爲であつた。その頃は山川君も、一合かそこらの酒をチビ〳〵と樂しむことを知つてゐた。どうかすると、ほろ醉の上機嫌で、小唄を口ずさんだりすることもあつた。(唄と云へば、柏木團の頃、皆が、添田啞蟬坊を師匠にして、ラッパ節の呼賣をやつた事があつた。山川、大杉、荒畑等の諸君も、皆やつた。只だ私だけには、どうしてもそれだけの音樂的才能が缺けてゐた。)山川君の醉つた時に、一つの面白い特色があつた。それは、エヘラ、エヘラと只だ頻りに輕い靜かなタワイのない笑ひ方をする事であつた。瓦斯の火が燃えてゐる。それがおかしい。猫が坐つてゐる。それがおかしい。椅子とテーブルがある。それがおかしい。何んでも斯でも、目に入る物、存在する物、が皆おかしいのであつた。

(八)

　賣文社は漸く少し發展の形で京橋南鍋町に進出した。『新社會』は追々社會主義の雜誌らしくなつた。山川君はいよ〳〵その精彩を發揮しかけて來た。

　その頃、青山菊榮が山川菊榮になつた。菊榮氏はそれから少し前、主として大杉君等のグループに出入して、有力な新らし

い婦人として多くの人から囑望されてゐたが、そこに丁度、山川君が正出現をして、自然に兩君の結合を見た。凡そこのくらい立派な、このくらい素晴らしい、似合の夫婦が、滅多に世の中にあるものではない。後に山崎伯爵は『均菊相和し』といふ熟語を製造したりした。(兩君の結婚前後の事については、多少面白い逸話もあるのだが、滅多な事を書いて叱られてはならぬから、やめておきます。)

これから以後、『新社會』の紙上には、山川均、山川菊榮の名が屢々相並んで現はれた。

(九)

大正六年八月號の『新社會』に、『小說、赤い蒲團、山川均』と題した一篇の文字がある。これは私が戯むれに題を出して、山川君に強制したのであつた。餘り面白いからこゝに轉載する。山川均君の作つた小說は蓋し之が唯一の物である。

小說 赤い蒲團 (出題者 堺利彦) 山川均

七月二十三年の午後、シャツ一枚で編輯室の椅子に凭つ掛つた輪井さんは、兩手で頭を抱えたまゝ頻りに考へ込んでゐた。テーブルの上の原稿紙には『小說、赤い蒲團』と萬年筆で書けるだけ大きく書いてあつたが、三十分の後にも、原稿紙の枡目は一向塞がつていなかつた。

こゝへ詰襟の上衣をぬいだSさんと、浴衣がけのAさんとが這入つて來た。

『大いにやつてるな。』書きかけの原稿紙を見たSさんが、洪水色の顏に、例の何か冷やかしてやらうかなと云ふ笑ひ方をして、斯う云つた。

『十二、大いにやつてないよ、一層のこと賣文社に代作を賴むかな。』輪井さんは斯う云つて、ニコリともせずに二人の方へ向き直つた。

『ところがA君、赤い蒲團は抑々因緣があるんです、輪井君の、いつかの新社會の鹿兒島だよりに、川向ふが色町で赤い蒲團が欄干に干してある……』Sがこゝまで云ふと、

『ぢや、それだけでモウ立派な小說になつてる譯さ。』Aが急に眼鏡を取られたといふやうな目付をして、その跡を引取つて斯う云つた。Sの烈しい笑ひ聲が、蒸し暑い、沈滯した、一と塊りになつたような室内の空氣をズタ〳〵にした。

『小說になつて?』輪井さんは頭の中でAさんの云つた通りを繰返して見たが、ドウもそれが小說になりそうな氣がしなかつた。欄干の赤い蒲團は、畢竟、日光に觸れしめる目的で、欄干

に掛けられたモスリン乃至は金巾の赤い蒲團であつて、如何なる推理に依つても赤い蒲團そのもの以外の或るもの、例へばそれが小説になると云ふ結論が出て來そうには思はれなかつた。

一人になつてからも、輪井さんは口の中で『赤い蒲團』『赤い蒲團』と何度も繰返しながら、獵犬が鼻の先で枯草を分け分け獲物の匂ひを捜すやうに、雑草の生い茂つたような記憶の中から、赤い蒲團の一つ一つを捜し出して見た。

勿論その中には、Kさんの痩せこけた細君が何時も坐つていた、赤い模様の蒲團もあつた。まだお嫁入しない前のB女史の本棚の上に、置時計の敷つけられた赤い小さな蒲團もあつた。併し、どれもこれも縫ひ直した所でオシメ位が關の山で、小説なんかにありそうなのは見付からなかつた。

それらの中には薄暗い電燈の小蔭に幾枚も積重ねられた色の褪せた赤い蒲團もあつた。その前には同じ色の筒袖を着た、古い顔をした數人の仲間が蹲くまるようにして並んでいた。力のない目と目は折ふし行き合つたが、言葉を交えることは稀だつた。

蒲團と直角した壁の上には、高い所に、鐵の頑丈な格子を入れた小いさな窓があつた。それと反對の側には、厚い壓迫するやうな花崗石の鴨居の下に、兩眼を見開いたやうな二つの圓い視察孔と、四角な通風孔とを持つた真黒な鐵の扉が、大きい口をアングリ開いた化物のように室内を見つめてゐた。

扉の直ぐそばに坐つた仲間の一人は、斷えず通風孔から外の氣配を覗いてゐた。盗むやうな草履の足音が廊下を往き過ぎると、『シーツ』『シーツ』といふ聲が、監房の次から次へと傳はつた。さつきから囁き合つていた九百六十號と十八號との話聲がピッタリとやんだ。

『あの血走つた目をしたNは今どうして居るだらう。』輪井さんは不圖こんなことまで思ひだした。死にかけてゐるといふMがその赤い蒲團にくるまつて、板敷の上に轉ろがつて居る様が目に見えるようにもあつた。

一時間の後に、輪井さんの原稿紙は白い元のまゝでテーブルの上に載つかつてゐた。烈しい笑ひ聲が又た向ふの室から聞えてきた。

（十）

大正八年五月號の『新社會』に『山川均著、デモクラシーの煩悶』といふ廣告がある。その廣告文には斯う書いてある。

『昨年春以來、或は匿名を以て、或は變名を以て、謂ゆるデモクラシーのチャンピオン等を片端から薙倒した一論客があつ

た。其の批評の鋭利、其の攻撃の痛烈、其の文章の精彩、忽ちにして讀書界の耳目を發動させたが、其の筆者の誰なるかは、久しく不明に屬してゐた。然るに其中、我が山川均先生の名が漸く世上に喧傳されるに至つた。覆面の論客は即ち此の新思想の新人であつたのである。本書は即ちそれらの論文十數篇を集めたもの、……』

これから以後、山川君が初めて一般社會に認識されて、謂ゆる『名士』になつた。年はもう四十に近かつた。あれだけの才力の人が四十になつて初めて世に現はれるとは、おかしなわけだが、そこが入獄と社會主義運動とで月日を過して來た人の運命であつた。賣文社は、山川君なり、高畠君なり、そうした意味での、隱れた有力者の集まりといふ所に、自然の重味があつた。その頃の賣文社は有樂町の三階建に在つて、外形上にも可なり堂々たるものであつた。

大正七年　新思想の大雜誌として　内藤民治君の『中外』が出現した時、賣文社はそれに可なりの手傳ひをした。中にも山川君は最も大なる貢獻をした。殊に　北昤吉氏の『近世社會主義の檢討』を罵倒し嘲笑し、揶揄し、翻弄して、徹底的にヤッつけたのは、痛快とも何とも言ひ樣のない程だつた。

これより先、山川君は荒畑寒村と共に、『勞働者』といふ題名で、新聞形の小雜誌を出してゐたが、それが祟つて、大正七年の暮から翌八年の春にかけて、又四個月の入獄をやつた。その山川君や荒畑君の不在中、賣文社に一變化が起り、高畠君等の一派が『國家社會主義』を唱へだしこ。それで山川君が歸つて來た八月の春、賣文社は解散し、『新社會』は高畠君と別れ、新たに『マルクス主義』の旗印を掲げた。

山川君の運動上に於ける態度は、前にも云つた通り、直接行動派であつこ。大逆事件以後、大杉、荒畑の二君はサンヂカリストとして立ち、山川君も同じくサンヂカリストであつた。然し大杉君のは無政府主義から來たサンヂカリズムであり、山川君、荒畑君のはマルクス主義から轉じたサンヂカリズムであつた。そんな事で、最初は大杉、荒畑の二君が提携してゐたが、後には山川、荒畑の二君が提携してゐた。大正七年の『新社會』には、經濟行動と政治行動とについて、山川君と高畠君との論爭があつたりした。

然し世界の形勢は一轉した。歐洲の大戰爭はロシヤ革命となり、ボリシエヴイキ革命となつた。山川君も荒畑君も（私も）、次第に皆なコムミユニストに化した。

これから後の山川君の事は私が話すまでもない。『社會主義』は最も多く山川君に依つて指導されてゐた。『社會主義研究』

『前衛』『赤旗』等の諸雑誌が、山川君に依つて直接に經營され、若しくは間接に補助されて、最近數年間に於ける左翼社會運動の指導精神であつた事は、誰でも知つてゐる。最近に於ける無産政黨運動に於いても、最も多くの指導力を示した者は矢張り山川君である。山川君は今、それほど重要な人物になつてゐる。

（十一）

最後に、私は子としての山川君、ユウモリストとしての山川君を一言したい。

山川君が社會運動者として一番苦痛を感じてゐるのは、親を心配させる事であるらしい。二人の老親を國に置いて、屢々入獄したりするのが、堪らないほどつらかつたらしい。南鍋町の賣文社時代に私の初めて氣づいた事だが、山川君は毎日繪葉書を一枚づゝ國許の兩親に送つてゐた。それが何年續いたか知らないが、最後の入獄の時には、その事を親達に內證にしてあつたので、四個月の不在中の分として、葉書二十枚をスツカリ書いて置いて入獄したのだつた。今では母御は既に亡くなられ、父御だけが倉敷に居られる由。

山川君は『謹嚴その者』などゝ評されたりするが、一面には素晴らしいユウモリストであり、皮肉屋である。皮肉屋たる事は、菊榮さんと同じく、總ての評論文の上に現はれてゐるが、ユウモリストの方面は最も善く私信の上に現はれてゐる。左に見本一通を抄錄する。それは獄中の私に宛てゝよこしたもの。

『今春は當分靜養の目的で歸鄕すると、間もなく志兄等の事件が起つたのですが、何さま新聞の騷ぎが大きく、小生の如きも、東京電話では東京で檢擧せられて居り、岡山の新聞では、鄕里に潛伏中を逮捕され、大阪電話では、今東京に護送中といふ始末、小生は檢擧せられる心當りもなく、また現に本人は茲にかうして居るとは信じて居るものゝ、あまり評判が高いので、（本人の意識は一番あてにならぬといふ、かねての志兄の教の如く）或は逮捕護送されたのが本統で、茲に居るのは小生の拔け殼かも知れず、その邊を慥かめかた〲、殊に志兄等の上も案じられるので………

『地震後は身體の具合がよく、食つても食つても腹が空き、食糧問題を引起した程で、屹度ビツクリ療法で病氣全快だらうと云つて居ると、十月の初から熱が出て、………

『都落ちの一人に數へられるもいやなので、ぐづ〱してゐるうち、かねて地震前から少々異狀を呈して居つた脊椎骨が、地震のために狂ふたものか。段々痛みだし、とう〱カリエスと

いふことになつたので、飛んだ厄介なものを、文字通りに脊負ひこんだと思ふて居ります………

『菊榮は相變らずのうちでも先づ良い方で、一人が悪い時期には一人が稍々よいのは天佑です、尤も一人が良くなると一人が悪るくなると思へば天佑なるやも知れませぬ、………』

(十二)

猶ほ一通、近ごろ山川君から私の妻に宛ててよこしたものを載せる。これには山川君のユウモアが現はれてゐると共に、亦た現在の生活狀態が善く現はれてゐる。

『相變らず病人の種子が盡きず、内に（内外に非ず）多事にて、つい御無沙汰の口實を得て居ります、尤も今度の家は燒場のすぐ下にて、毎日一つか二つお棺を見ぬことなく、風向き次第ではこうばしい香も嗅がれます、就てはまさかの時は醫者にかけつけるより燒場にかけつける方が簡單にて、枕を高うして病氣が出來る次第です、

『ついでにもう一つ御披露に及びます、この家は去年の夏、三人强盜が押し入り、西洋人の妻君が御亭主に殺され（この所、註釋を要す、妻君は强盜に斬られたが死に至らず、御亭主が椅子を振り上げ滅多打ちに打ちのめして妻君を殺したのです）そのため先頃まで明いてゐた家だそうです、門前を通る人が、とう〳〵這入りましたな、などゝ不思議そうに話して往く、どうもおかしいと思つたら右の次第、あまり振り返つて標札を見てゆく人が多いので、小生の惡名しかく有名であるかと悲觀してゐましたところ、絕對にそうではなかつたのです。

『以上の説明により、この家が眞實の西洋館たることが自づからお解りになつたと信じます、「眞實の」といふ意味は、東京郊外の防腐劑を塗つた文化バラック、よく云へば和洋折衷、眞率に申せばまがいものゝ洋館とは類を異にした徹底的の西洋造りといふ意味です、窓には雪白のカーテン——一見して西洋洗濯代を想はしめるような——が掛つてゐます、床には五色の花のような——但しこれは雨に逢つた花で少しよごれてゐます——カーペットが敷かれてゐます、このカーペットの上に尻を落ちつけ地震で潰ぶれそこねた、ひよろ〳〵のチャブ台——唯一の家具——で出來損ねの米の飯をかき込んでゐるとなんだか船の底で飯を食つてゐるようで、今にマルセイユあたりに着きそうです、

『私はその事件のあつた當の部屋に獨りで寢てゐるのですか、まだ幽靈は出て來ませぬ、どうせ會話は出來まいと思ふて馬鹿にしてゐるのでせう』

（十三）

右の手紙でもわかる通り、數年前から山川君の健康は段々に衰へつゝあつた。よく下痢をしては賣文社を休んでゐた。賣文社の小いさな黒板に、『山川君又々ストマック、ゴーダウン』と誰かが書いて大笑ひをした事があるが、それほどゴーダウンが有名であつた。最後の入獄は殊に善くなかつたらしい。

私は曾て山川君の足を竹の筒に喩へた事がある。すると山川君は、寸毫も『贅肉』を持たない事を自慢した。それほど山川君は痩せてゐる。

私は賣文社で、折々山川君が物を云はなくなつて、大へん不機嫌に見えるので、何か氣に障つたのかと密かに心配した事があるが、それは多くの場合、熱が出て來たのを、人に知らせまいとして、默つて我慢してゐるのだつたと、後に思ひあたつた。

震災の時、山川君の大森の家がつぶれた。その以後、山川君は兵庫縣の垂水に行つて住んでゐた。今年の春、私はその垂水の家を訪問して、山川君と二人、裏の高い山のツツジの咲いてゐる中を散歩したが、思ひの外、山川君の健康は好かつた。菊榮さんも弱い弱いと云はれてゐるが、今は思ひの外、丈夫に見える。一子振作君、九歲、これも弱いには相違ないが、この頃は元氣で學校に通つてゐる由。

山川君の現在の住宅は神戸のそばの御影町で、即ち右の幽靈屋敷である。最近の消息に依れば、一家三人が來客と連れ立つて、直ぐ近くの摩耶山にケーブルカアで登つたりして居るさうだ。

本誌十月號、錦田氏論文「現代に於ける自我問題の一面」の正誤。

頁	行	誤	正
123	11―12	第十二行が改行となれるは誤	第十一行より第十二行へ直ちに接續す
137	4	醸	讓
138	3	夫れ不快	夫れ快不快
139	14	彼の認識超個人我	彼の超個人我
140	4	見解に認められる	見解は認められぬ
144	4	自覺的	無自覺的
147	14	時の意識は流れざる	時の意識は流れて流れざる

今秋野球戰評

今秋の野球に就て

早大野球監督　飛田穂洲

技術の進歩と普及の程度とは必ず一致せねばならない。技術の向上には興味が伴ひ、興味の誘致は軈て一致的普及を迅速ならしめる。日本の野球會が今日に至るまでには勿論、數十年の歷史を顧なければならぬ。第一次に於ては明治三十五六年頃一高が横濱外人への挑戰、第二次には天下球兒の血を湧したる早應戰、第三次は早慶戰中止後外國野球團の招致。これ等が次から次へと極めて好都合に行はれた爲め技術の進歩發達には何等の障害を與ふる事なしに次々へと送られて來た。一高と横濱外人との試合の如き今日の野球から見るならば幼稚なものであつたに相違ない。併し此の試合が野球開明への第一烽火であつた事は爭ふの餘地がないのである。更らに早慶試合に至つては日本野球の聲價を絶頂に誘つたもので、今日ある礎石を造つたものと言はねばならぬ。惜しいかな開戰僅に四年、鋒を交ふる前後九度、互に勝敗あり壯烈益々加はらむとして中止の運命に逢着した。實に日本野球の一頓挫であつた。けれども煽つた火の手は容易に鎮まらうとはしなかつた。殊に中止されたる早慶試合がこのまゝ永久に葬り去られやうとは如何にしても考へられなかつた事は云ふまでもない。

第三次の外國野球團交戰の希望は、早慶戰を奪はれた早慶兩チームの間に自然的要求されなければならなかつた。兩者の技術攻究熱は早慶戰中止に依つて冷却さるべきものではない。直接輸贏を爭ふ機會を奪はれたが、間接には飽きまで競爭心に燃えた早慶は、互に劣らじと外國野球團を招聘し、更らに自ら渡米する便宜を造つたのである。早慶試合が中止されたる明治三十九年以後、早慶兩チームが招致したる外國チームの數はかなり多きに達してゐる。就中日本の野球會に深い印象を殘したものは、シカゴ大學野球團であつた。シカゴが本邦野球界に歡迎されたる所以は、それが米國中西部に於ける代表的大學なると、強烈無比、チームに氣品ありしとに依るところが多い。シカゴが最初早稻田に招かれたのは十六年前の明治四十三年であつた。

その頃の日本の野球界は米國中西部大學チームに對する智識乏しく、シカゴのチームを左程の强敵とも知らなかつた。勿論相當な成績を擧げ得る事と自惚てゐた。しかるにシカゴの强味は全く豫想以外のもので、その投手團の整備、攻擊力の豐富なるは到底早慶の比ではなかつた。當時の慶應は攻守共歷代の慶應チーム中に於ける白眉と稱され、慶應の黃金時代を以て自ら任じてゐた程の整頓にありながら、シカゴの堅城には弓矢の射甲斐なさを嘆じたのであつた。投手團の貧弱なりし早稻田の如きは散々の敗北、手も足も出ないと云ふ有樣で、シカゴ軍は完全に勝利を獲て歸國したのである。

シカゴと戰つてから日本の野球界は、米國一流の大學チームに比し遙に見當りする事を知つた。未だ學ぶべき點の餘りに多きに驚いた。早慶兩チームが技術の研究に沒頭したのは、これから後ちである。シカゴが第二回に來征したのは大正四年であつた。當時の早慶兩軍は技量の沈滯期にあり、第一回に全敗した經驗から到底勝味なかるべしと思はれた。果せるかな早慶遂に一回も勝つ能はず、シカゴは第二回の全勝を擅にして凱旋したのであるが、敗れながらも早慶兩軍は相當の試合をなし、殊に早稻田は投手川島の奮鬪目醒ましく二回迄もシカゴを苦しめた。シカゴに猛球チャーデンあり、監督ペーヂと代る代る投球し、早慶兩軍の攻擊力は、此の兩者の爲めに完封され、僅に守勢を保つたに過ぎなかつた。其他に於てはシカゴにスタープレーヤーとも思はれる選手なく第一回よりも組し易く思はれたが、攻擊能力を失つた早慶は如何にしても勝ち得る試合を望む事が出來なかつたのは事實である。

かくて前後二回の全勝にシカゴの印象は全く日本の好球兒に深く深く殘され、米國大學の强チームと云はゞシカゴ大學を聯想すると云ふモチ方となつた。大正六七年は早慶共に强味減退の兆あり、外國チームの來りて冒すものもなく、シカゴが第三回に招かれたのは大正九年の春であつた。シカゴは三度早慶兩軍を脅さんとして來つた。當時早稻田の投手團は依然として芽生えしなかつたが、慶應には新田小野の右投手が揃つて、往年の小山菅瀨の時代に劣らぬ確實さを示した。しかも市軍は全勝に馴れ、早慶の伏兵に氣付かず、第一回第二回の如き用意の周到を欠いてゐた傾もあつた。

全勝軍は初めて一敗地にまみれた。慶應先づ勝ち、早稻田續いて勞敗に討ちとり、玆に早慶兩軍は多年の宿望を達した、それのみならず、慶應は前後四回戰つて一回の引分け、一敗二勝した。シカゴは三度目に完全に敗れた。早稻田は、東京に於て一引分、一勝一敗、大阪にて一勝一敗、京都名古屋に敗れたが、早慶共に各二勝したのであるから積年の恨、その一部を晴したわけであつた。

大正九年秋以後の日本野球界は、科

學的研究の極致に進み、將く早慶戰復活の聲を絶てるかの感があつた。それは三田稻門戰が白熱的に行はれた影響にも依らう。更らにまた明治大學野球部の擡頭により、明治を中心として早明、慶明の試合が興味を呼んだ關係もある。兎に角早慶戰中止により普及を妨げられた日本の野球界は外國野球團の襲來並びに明治法政立教等の新進が早慶に肉迫するに及んで、津々浦々に野球謳歌の渦を捲起した。此の一事に想到する時、特に日本の大學テームに大なる刺激を與へたシカゴ大學テームは日本野球界を啓發した功勞者なる事を認めねばならない。自然の勢に乘じて進んだ日本の野球界であるから早慶試合が中止され、外國テームの襲來なく共當然今日の隆盛に到達したに相違ないと斷ずるものがあるかも知れないが、それは正しい議論とはうけとり難い。私自身は尠なく共外來テームの啓發を認めるのを妥當と思ふ。

シカゴは四度早稻田に招がれて來朝した。我等はこの馴染深いテームを迎へてその啓發的功勞を感謝すると共に、反面不倶戴天の仇敵に積年の恨みを晴さうとした。シカゴ自身は大正九年の苦戰に鑑み、昨年以來非常な練習を積み、日本の大學テームに對して充分なる準備を怠らなかつた。第一回は兎に角第二回第三回は日本テームに對して何等危惧の念を起す事なく、日本テーム組みし易しとして外征の途についたのである。然るに今回は寧ろ日本の大學テームに對し、少なからざる警戒をした。

シカゴが此の春、示した中西部大學聯盟（ビッグテン）の試合に於ける成績は、第二位であつて曾つて來朝したインデアナ大學と快勝を爭ひ一對二で敗れ、惜しくも第一位を逸したのであるから中西部に於ける第一流たるは云ふまでもない。そのシカゴが二年越のテームを編成し、日本外征に備へたのであるから、十六年間の苦心の結果は遅々ながらも日本テームの上に認めねばならぬ。シカゴは外征の途上その技倆を磨く意味に於て、米本土にも數試合を試み、布哇に五回の試合を行つた。ホノルヽの試合は五回の內三回敗れ、二回勝つたのであるが、相手方は必ずしも强テームではなかつたので、明治がホノルヽの强テームに對し八勝五敗の成績をとゞめたに比較し、布哇の時はシカゴの外征軍は日本大學テームに對し、好成績を收め難からむと豫想された。此の布哇の戰跡明治との比較が日本に傳へられてから、シカゴの强味に就いて疑問が生じ、果して早慶明殊に外人との試合に馴れたる明治に善戰し得るであらうかと疑はれた。

この疑問は確にシカゴを利益したやうに思はれた。往年のシカゴにあらずとの安心が日本テームのシカゴに對する戰鬪心を鈍らせはしなかつたか。試合は多くの場合大事を豫感する程度に於て充分の技量を發揮し得る。敵を侮らぬまでも、敵の强味を尊重せない場合は必ず負けない迄も不覺の試合が彼

等を待つてゐる。此等は先輩なり監督者なり多くの經驗を有してゐるものが口を極めて選手達に忠告を試みても殆んど無益な事である。彼等が自ら敵に對して或る觀察をなすと容易にこれを除き去る事が出來ない。九月二十三日の第一回シカゴ戰に早稻田が數度見舞はれた機會を逸し、不運な得點を敵に與へて敗れた後すら恐らく明治も慶應も、シカゴを强敵なり緊褌せざるべからずとの快心を植付ける事が出來なかつたであらう。殊にシカゴが慶應と五回まで戰つて雨の爲め引分けた時、シカゴの打撃は全然得點の範圍から離れてゐた。寧ろ慶應の方が好況にあつた。此等シカゴの無抵抗的攻撃力を見て第三戰に見ゆる明治は昨年の渡米今夏の布哇遠征に得たる外人との試合馴れ、それ等を賴みとして既にシカゴを眼中に置かなへつた。

果してシカゴは湯淺の爲めに翻弄し盡されホームベースには餘りに縁遠く置かれてあつたに拘はらず、明治も又早稻田の轍を踏んで屢々敵陣に斬入りなから牙城を一歩の前にして遂に達する事が出來なかつた。最も强打の梅田が戰前負傷して此の戰に加はり得なかつた不幸はあつたが鈍棒様への明大敵投手は必ずしも恐るべきでない限り一點を得るにさして困難とも思はれなかつた。實に兩軍にとりて貴重なるは一點である、その一點を望んで、シカゴは全く湯淺の好投に網を斷たれ、明治はシカゴの粘り强き守備に土俵際に押しなから十回のドロンゲームを餘儀なくされた。其後雨の爲めに豫定の試合が行はれず、再び明治が第二回戰をシカゴに挑んだ。此の試合の如きは一般の人々も明治自身も必ずシカゴを屠り得るものと思つてゐたに違ひない。湯淺が再起するだらうと思はれたが、何にか肩の調子よろしからずその事で、安田が起つた。安田は外人に對し湯淺以上の自信ありとの噂、假りに湯淺程の好投を望まれぬにしても、シカゴの打力は底の知れたるもの、明治が鮮に勝利を獲るならむと思はれた。シカゴは恰度左投手ガビンスの順に當り、前回の打撃不振に憤り頗る緊張してゐた。シカゴは案の定安田に阻まれ、明治は回の初頭に於てガビンスの側球よろしからざるに乘じてランナーを出したが本壘に殺到するチャンスまでは摑み得ず、投手ガビンスに牛耳られ了安打に十一回の延長を無爲たらしめた。此の試合は明治軍もガビンスに應されたら前回程遺憾はないにしても、明治としては案外に思はれたであらう。かくして明治シカゴの對戰は二十一イン二ングス無得點の試合で引分けられるることとなつた。二回共引分けられた試合は、明治慶應の間に昨秋繰返へされなから新記錄ではないが二回共得點なき試合は新記錄である。

不思議は單にこればかりではない。第一回戰に不覺を招いだ早稻田は第二回復讐の念已み雖く總日背を決して起ちなから無得點無勝負を繰返へした。シカゴの投手はハウエルであつて

其の他奇もなき投球は左打手を四人も擒へた早大必ず波瀾ある試合をなすであらうと思はれたか、得點の山かと見れば打者が續かず、或は敵の怪我の功名的プレーに阻まれるなど不運な進行を續けて引分けとなつた。こゝに於てシカゴは前後四回の引分戰をなし、しかも五回を通じて一點も相手に與へない、まことに球界稀有の事、奇現象と云はねばならぬ。米國一流のプロフエツショナルテームが日本の大學級のテームに對して此れを連續無得點に終らしめる事は勿論容易であらう。味方も敵に對して一點も得る事が出來ぬ程度のシカゴが四十四インニングス一點も與へぬ不思議さは只々奇異の感に打たれる外はない。或はシカゴ自身も奇しき試合結果に驚いてゐるであらう。最も彼等に近しくしてゐる舊選手の一人は、『シカゴは三分の一の試合に勝ち得れば上等であると思つてゐたらしい、然るに意外なる成績に一方ならぬ滿足を表してゐる』と語つた。事實シカゴとしては滿足すべき試合のみを迎へ見送つてゐる。早大の一回戰でも彼等に餘り幸運であつた。安打で得たスコアではあつたが、必ずしも力で勝つたのではない。早大に一個の安打が適時に出てゐたならばあの勝負は引返へつてゐたらうし、其後の試合の如く打力が擧らなかつたならばその第一回は失はれてゐたらう。慶應の一回戰、明治との二回の試合、早大との第二回戰、そのいづれも彼等に分のいゝ試合とてはなかつた。殊に湯淺に弄殺され終つた明治の一回戰藤本に阻止された早大二回戰は三壘すら蹈み得なかつたのであるから守勢一方に偏せる敗勢濃厚なる試合である。

シカゴは早慶明のあらゆる投手を名投球家たらしめた。竹内湯淺濱井安田藤本濱崎その何人かシカゴの打者に苦しめられたものがあらう。此れに依つて見ればシカゴは實に守備のチームであつて、攻擊力薄弱なるチームである事を斷定し得る。早大との殘りの試合に如何なる變化を示す可かは問題としても、前後二回に亘る試合を以て見るならばシカゴの打力及走壘は、早慶明よりも劣勢にある事は動かす事が出來ない。

その投手團は、右投手二人左投手一人より成り、球力に於て左投手ガビンスが優つてゐるが、右投手マツクリンドのコナシは確にガビンス以上にあるやうに思はれる。尙他の一人、ジエ・ハウエルは前二者よりも球力劣り何等特長も認められない。早大二回戰明大一回戰に辛らくもランを與へなかつたのは彼の幸運と云ふの外はないが、三人とも日本の打者に對しては奇妙に成功してゐる。最もガビンスの如きピツグテンの試合には限つて十二三の三振を擧げてゐるとコーチ、ノウグレン君が語つてゐるところを見れば、中西部大學チームの打者に對しても少なからず偉力を發揮してゐたやうに思はれる。ガビンスがマツクリンド、ハウエル兩者に秀ぐれた點は、球速と稍球の

變化に富めるヒッチングであるが、明大第一回戰に於けるものがマックルンドの眞の技量とすれば制球の妙と巧みに打者の弱點を衝く頭腦の冴えとはガビンスの上にある。ハウエルは聊か平凡たるを免かれまい。シカゴは此の三人投手の好防と内野の精妙なる守備と相俟つて早慶明を苦しめた。シカゴの誇りはその内野の守備にある一壘手カニングハム、二壘手アール・ハウエル、三壘手ブリツグノール、遊撃手マツコンネル總て圓熟せる守備を有し、殊にカニングハム、アール・ハウエルの二人は確に米國大學チーム中にありてもスタープレヤーであらう。連絡の點に於ても非點がなく、内野手としての頭腦にも先づ欠點がない。恐らく前三回の外征シカゴ軍中内野の守備に於て第一等であらう。但し外野は早慶明のそれに比して大なる遜色がある。

五回一點も與へなかつたシカゴは十月六日の對慶應戰に初めて二點を奪はれ、危地に追はれたが此の日は不幸にして、慶應投手濱崎濟井とも不出來で惜しい得點を奪還され、九回二個の四球、一失策が禍して三對二の接戰に慶應の敗となつた。慶應の爲めには痛憾すべき試合であつた。濟井の投球が一回戰の如くであつたら確に勝ち得たらうと思はれた。

シカゴに對する評言は尚可なり殘されてあるが早大との試合も剩されてゐるし後日に讓る事にしやう。

今秋の野球界は市俄古を迎へたばかりでなく、二十年振りに早慶試合が行はれる。此の試合はシカゴ戰などゝ別種な味があり、長い間待たされただけ好球家には特別な興味を覺えしめる。此れで日本の野球界は圓滿具足の狀態となり萬々歳となつたわけである。試合の豫想其他記事になるべきものは多々あらうが、豫想を發表するには時期を失してゐるし、さて試合の感想批評を述ぶるには時期尚早であるなら總て遠慮して置きたい、が、勝敗いづれにせよ、好試合となることは疑はなからう。

試合そのものゝ興味本位から云ふならば早明、慶明の兩試合は早慶戰以上であるかも知れない。現陣容は今秋を最として其の主力が失はれる、明治は明春から新陣容をなさねばならぬ。今秋に於て早慶を蹂躙せざれば時期を失するの嫌ひなしとせない。慶應は連年明治の爲めに屢敗れてゐる關係上、今秋の一戰に死力をそゝぐに相違ないし、早大は春の試合を完了してゐない、謂はゞ勝負を持越してゐる。此等を總合するならば、兩試合は如何にしても白熱せざるを得まい。

其他立法帝の三大學チームは早慶明を目標として寢刃を磨いてゐる。シカゴ戰に早慶明が苦戰し、更らに互に鎬を削つて餘裕をもたぬ間に、其の隙を覗つて奇利を占めんとしてゐる油斷はならぬ。

今秋の試合は質量共に好球家に滿足を與へずには置かぬ。試合終了後吾人は必ず多く語るべきものがあるに相違

ない。

明治から觀た市、早、慶

明大野球監督　岡田源三郎

多忙な球界

大正九年を思ひ出させる樣な多忙である。駿臺、稻門戰を皮切りに六大學リーグ戰、對シカゴ對櫻府邦人チイム戰大毎、協會の東上。明治神宮の俱樂部戰と前後六十回の試合が行はれる事になつてゐる。十一月中には終り相にも無い、これは學生として餘りに負擔が重過ぎる。

他の俱樂部戰は別としてリーグ戰だけは十月中に必ず終了する樣にし度い

この多忙を極むる球界の中心である市、早、慶を書いて責を塞ぐ。

市加古

早稻田と一勝一分。慶應と一勝一分。明治と二分。即ち二勝四分は市加古として、望外の收獲と言はねばなるまい。

六回の試合に四のドロンゲームは實に珍らしいレコードであると同時に各チイームの打擊不振を物語つてゐる、

市軍の打擊は特に貧弱なもので外角を過る直球及外角から出るカーブに對しては殆んど全く打ち得ぬと言い得る位のもので、その選球眼も有るとは言ひ得ぬ、

要するに打擊に對して未だ若い點が多い。

かく打擊方面の貧弱に比較して守備方面は先づ難が無い。チイームプレーは別してカバーに對しての眞面目さ。コーチの言はれる通り懸命にプレーする遣りは見てゐて實に氣持ちの良いチイームである。

勿論アメリカの大學チイームの選手と日本の大學選手の生立ちとは非常な差がある。

前者は殆んど白紙に近い者であり後者は大阪の全國中等學校大會に出場のため限度以上の猛練習を經てゐて殆んど精力を消耗し盡してると言い度い位で、中學球界の名選手で其將來を期待された者で上級の學校に進んでその名を消して仕舞ふ者は決して少くない。

或はその者が上級に近づくに從つて技倆が止り或は進步しなくなる。（勿論プロフエッショナルなチイームの無い事も一因ではあるが）

市軍は將來のチイームであり日本のチイームは現在のものである。市軍のプレーを見て此の點は一層考へさせられる。

慶應

多年選手難に惱んだ同軍も今秋は早慶戰復活てふ一大刺戟により、及び昨年來より準備し來つた、チイームの整頓と相待つて充分の活躍を期待する事が出來る。但し永井濱崎兩左投手の病

氣は對早戰の大損失である。兩投手の健鬪如何が勝敗を左右し、また一面早慶戰の興味の中心である。

若し兩投手にして早大の打擊を封ずる事が出來るならば勝は慶應であり、打たれゝば勝ちは早大に、答案は簡單であると思ふ。

思ひ切つたプレー、これが今秋慶應の方針であらう――

早大

宮崎主將の病氣は昨年より良いとは言はれぬことは早大ピツチングスタツフにとつてより以上の重荷であるが水原の一壘も落着きが出來根本は守備に打擊に一段と腕を上げ打擊の河合は老巧味を增し、手のつけられぬ打者となつてゐる。

對慶戰には二點取られゝば三點取るこれが早大今秋の方針であらう。

明大

二十年來の紛擾を一掃しての試合、この一大ショックにより一層緊張の度を增して練習に餘念の無い兩校を向ふに廻し『黄金時代の明治』『今秋も明大？』などの世評は決して有難いものでは無い。試合をやり惡くするのみである。

漁夫の利を占められる樣に思はれてゐるが決してそんな簡單なものでは無い。

今秋こそ一番警戒すべき時で、從つて今迄にない苦しいシーズンであらう。折も折早慶に强い梅田の負傷は片腕をもがれた樣なもので泣くに泣かれぬ痛手である。

『市俄古と私』

慶應野球監督　三　宅　大　輔

シカゴ大學は、今度で四度目の來朝である、第一回に來朝した市軍は、ページを正投手として、吾球界を全くかきまわして、堂々と全勝して歸國した、私は其時普通部の四年生、十八才で初めて慶應の選手となつて、初めて一壘を守らされて、そして初めて、此强敵に面したので、一番强く頭に殘つて居る。

第二回目に來た時は、私は大學部の本科一年で二壘手であつた、第一回の時に、吾々を見事にかたづけて去つたページは、此時にはもうシカゴ大學を卒業して居たが、シカゴのコーチとして又來朝した、そして或場合には、自ら投手としてプレートにも立つた、然し此時には第一回に來た時程スゴイとは思はなかつた。

第三回目に來た時は、私は大阪に居て、東京の球界から遠ざかつて居たので、少しも頭に殘つて居ない。それで今度が四度目である、然し私の頭に殘つているシカゴは、第一回と第二回と、それから今度との三度丈けであ

る。

そこで私は今度のシカゴを評するに先立つて、今迄『シカゴ』と云ふものが、私の頭にどう云ふ風に殘つて居たかを、書きたいと思ふ。

私は數年前まで、丁度ピツバーグと云ふと、ハンス、ワグナーを思ひ出すように、シカゴと聞けば直ぐフランク、チヤンスを思ひ出して居た。そしてピツバーグ市の印象が、太い煙突と、大規模の鐵工場であるように、シカゴ市を大工場と、スモーキーな空氣とを一所に考へずには居られなかつた、それは初めて米國へ遠征した時に、シカゴ市を一日自動車で見物した時の印象の爲めかも知れない、或は又、人の話や、雜誌で讀んだ事を、頭の一部へしきい込んでをいて、シカゴ市はホールド、アップの本場で、そして大阪を船着場にしたような町であると、自分でシカゴ市を勝手に作つて居たのかも知れない、其結果シカゴ、カツプスの全盛時代のマネジヤーであるフランク、チヤンスと云ふ人は、ウツカリすると相手の選手と、直ぐナグリ合ひ位い初めないような、猛選手に異いないと考へて居た。第一回にシカゴ大學が來た時に、私はページを見て益々其感を深くした、『此の野郎シカゴの代表的人物だ』と思つた、第一回戰の第一回目に佐々木、龜山、福田の三君が、枕を並べて三振する、第二回目に小山、神吉の兩君が三振する、とうとう私が三振する番が廻つて來た。私は其當時小兒で、而も初陣であつた爲めか、慶應の打者が一人々々人身御供に上げられていくような氣がした、私は今だによく覺へて居る、私は『己れはお前なんかの球で三振丈けはしないぞ、キツト、今己れが三振したら今日の仕合は、あと續けないで、お前の方の勝ちにしてやつてもいゝ』そう思ひながら私はバツター、ボツクスへ立つた。そして遊擊手へゴロを打つて、私は其時、ページと自分との勝負に勝つたような氣がして馬鹿にうれしかつた。

然し後で考へて見ると、要するに私は三振しなかつたに過ぎない、馬鹿馬鹿しいと思つた『よし今度はヒツトを打つてやるから……』私はそう思つてヒツトも打つ事が出來た、其又次ぎには『今度は己れのヒツトで勝つて見せるぞ』と思つたが、此の望みは遂に達しなかつた、私は其後のシカゴとの仕合に、何時でも、『もう一度ページを出して見ろ、今度こそは……』と思つていたが、いつもページが出て、いつも惜しい所で負けて了つた、第一回にシカゴ大學の來た時は、吾々はシカゴと戰つた云ふよりも、むしろページと一騎打ちをしたのだと私は今だに思つて居る。ページはそれ程恐ろしい投手だつた。彼等はページを投手板に立てゝ、安心して守つて、そして其余力を全部攻擊にそゝいで居た。打擊も恐る可きものがあつた。全盛時代の、管瀨君の球を、鋭く打つて居た、その上、或打者は、特に注意をしないと、全く防ぎきれないようなスゴ味があつた、

要するに彼等は、よく守り、よく攻める強いチームであつたが、私は當時でも、今でも、彼等は強いが、上手だとは思はなかつた、當時吾々が最も不利であつたのは、それまで日本に、左のいゝ投手が居なかつた爲め、ページのような左利の投手に對しては、非常に勝手が違つた事である、だから負け惜しみではないが、ページがもし右の投手であつたなら、吾々の頭に、あれ程强く印象づけられては居らなかつたらうと思ふ、先日今度來たシカゴの選手に『此頃ページ君はどうしてゐますか』と聞いたら、『インヂアナ洲の某大學のコーチをして居る』と云つて居た『達者ですか』と云つたら『達者ですとも、君はページ君を覺へていますか』と……『僕はベースボールを忘れない内は、ページ君を永久に忘れないよ、今度君がページ君に會つたら、日本へ行つたら三宅と云ふ男が、こう云つたと、よろしく云つてくれ玉へ』と私は話した、第二回目に來朝したシカゴ大學にも、吾々は全敗した、此時のシカゴは第一回に來た時よりも弱いように感じた、然し第一回目の時のチームと、同様なタイプのチームだつた。此時の敗因は、顔ぶれとしては相當によかつたが、實力は前の時の臨應程ではなかつたと私は思ふ、其上選手の全部がスランプに落ち入つて居た時で運が惡かつた。如何なるいゝ打者も、或時期に不思議に當らなくなる事がある、之れをスランプに落入ると云つて居る、いゝ打者でもある事だ、まして吾々がスランプになつたら、なかなか取り返しがつかない、一チーム全體がスランプに落入る事はめづらしい事だが、當時吾々は全員が當らなかつた、其くせ私など其時のページに對しては、前より目も肥へて居たし、又左投手も研究して居たから、よほど打ち易いと思はれたが、それで居て當らなかつた、其上右投手のジャーデンにも、見事にヒネラレてしまつた。此時のシカゴも投手が良くつて、そして打撃も强かつた、然し第一回の時同様『强いチームだが、上手だとは思へなかつた』何々となれば、相手のチームの、誰々の何所のやり方を習いたいと、思ふような人は居なかつた事を覺へて居る。

第三回目に來たシカゴは前述の通り少しも頭に殘つて居ない。

之れまでの間は私の頭にある『シカゴ』は、スゴイ所、スゴイ人物、スゴイ、チーム、としてのみである。其後、先年（一九一〇年）私がベースボールの遠征でなく、一人で渡米してから、『シカゴ』に對する考へが非常に變つて來た、

私は一九一〇年に渡米した時、大西洋沿岸に十數日滯在して、例の排日的氣分を十分味はつて後、ニューヨークへ行く途中、シカゴ市での乘りかへを利用して、兩三日シカゴに滯在するつもりであつた。所がパシフイツクコーストから東部へ行く人の、誰もが感じることであらうが、シカゴへ來て初め

て排日氣分から逃れて、自分の名が、ジャップからジャパニースになつて、何んとなく出獄したような氣持で、大手を振つて大道を歩けるうれしさに、先第一に私の頭にあつた『シカゴとはスゴイ町』と云ふ感じが大部薄らいで來た。丁度其當時、シカゴ、ホワイトソックスの仕合が毎日見られたので、私はつい十數日をシカゴで暮して了つた。其十數日間に、私の頭の中で、『スゴイ町』が『なつかしい町』に變つて了つた。私はシカゴへ着いた日から、早速ホワイト、ソックスの運動場へ仕合を見に行つた。先第一に、私はシカゴの選手が如何にもアカヌケのした形をしてゐるのに驚かされた。相手方のニューヨークの方が、よほどゴツ〱して居た、シカゴの選手中には、日本へ來た(ジャイアンツとホワイト、ソックスの世界旅行の時に)連中も居て、面識のあつた人も居たので、私は其人々とも久しぶりに話す機會を得て、そして其人々から當時主將であつた、(今はマネジャー)エデイー、コリンス氏に紹介され同氏と短時間であるが話して、同氏の氣持のよい人を引きつける態度に、すつかり感心させられた、『此人はたしかに人の上に立ち得る人だ』と思つた。それからシカゴとニューヨークの仕合を見て、私は更に驚いた、初對面で、處女の如くやさしい彼が、一度バツター、ボックスに立つと、脫兎の如き勢で働いた、『いゝ選手があるものだ、野球をやるものが理想の選手を作るなら、コリンスのやうな人を理想とすべきだ』と私は考へた、私の隣りにゐた米人が私に『君はエデー、コリンスと話して居たが知つてるのか』『いや今紹介されて初めて會つたばかりだ』『どうだいあの男は、君はあの男を好きかい』此の聞き方は米國人がよく云ふ聞き方だ、人が誰かに紹介されると、キツト後で、君はあの人をどう思ふ?』とか『君はあの人を好きになれるか?』とか聞きたがるらしい、私は直ぐ答へてやつた『己はエデー、コリンスを好きだの、きらいだのと云ふ所はもう通り越しちやつたよ、已に年頃の娘があつて、コリンスが二十年代の若者だつたら、己れは己れの娘を、あゝ云ふ男に嫁にやりたい位だ』と云つてやつた、其男は『面白い事を云ふ』と云つて、グランド、スタンドにひゞくやうな聲で笑つた。

こふして私はコリンスが好きになつたと同時に、ホワイト、ソックスが好きになり、引いてはシカゴ市場物も何んとなく好きになつて了つた、今度シカゴ大學が來朝すると聞いた時に、私は今迄のやうに、スゴイ選手が來るとは少しも考へ得られなかつた、スポーツマンらしい、上品な選手を豫想して居た、案の通り彼等は上品な選手だつた、尤も前に來た選手も、決して下品ではなかつたが、氣のせいか、前の選手に灰色のスゴミがあるから、今度の選手には白色のあかぬけした點があるように思ふ。

然し乍ら彼等にも又、シカゴ大學と

しての傳來の、投手の强味のあるチームだ、然し前程の攻擊の强味は無い、從つて、敵にも得點させない代りに自分の方も得點しない。守備が上手だと云ふ評が大分あるが、私は守備は驚く程いゝとは思はない、彼等は投手で戰ふチームだ。左投手と右投手のいゝのを一人づゝ持つて居て、彼等は勝たんが爲めと云ふよりも負けない爲めに仕合をしているように思はれる。運がよければ勝ち、然らずんば無勝負引分けである。從つて勝敗のアベレージはいいが、覇氣がない、いつもスコアーが接戰の割合に、仕合を見ていて面白味の少ないのはそれが爲めである。東京で彼等は、早大と二回、明大と二回、慶應と二回、戰つて二回勝つて、四回無勝負の仕合をしている。此成績丈けを見ても、彼等は攻めるよりも、守るチームである事を證明している、一言を以つて云へば、今度のシカゴ大學は『負けないが勝たないチーム』である、戰法としても、消極的の場合が多い、一例を上げればバントなども、あまりに用ひ過ぎる感がある、私は最も無遠慮に評をさせれば、今度のシカゴ大學は、先年來朝したどのシカゴ大學のチームよりも、勝味の少ないチームであらうと思ふ、

兎に角私は『シカゴ』にはずい分深い因緣があるように思ふ、私が選手になつて、大仕合の初陣がシカゴだつた、そして慶應を出て七年目の今日、偶然私が慶應のコーチとしての、大仕合の初陣が又シカゴである、而もどの場合でも、シカゴ大學との仕合に、私が關係していると負けて居る、シカゴ大學は私の苦手かも知れない。

十四年十月記

游歐雜記

歸來（十二）――藝術の社會的地位について

阿部次郎

・12

百姓は國の寶である――これはその一般的の意味に於いてはあらゆる時代に通ずる眞理である。併しこの言葉は、德川時代に於いては、ある特別の意味を持つてゐた。百姓は國の寶である、故に百姓は人格として尊重せねばならぬ――德川時代の重農主義はかういふやうな論理の發展に向ふ思想ではなかつた。又それは、百姓は國の寶である、故に凡ての人は百姓を模範として生活せねばならぬ――かういふやうなトルストイじみた歸結を伴ふ思想でもなかつた。百姓が國の寶たる所以は、支配階級の經濟的勢力が彼等の納める年貢の基礎の上に築かれてゐるからである。町人から一定の租税を取立てることを思ひつかなかつたほど、若くは思ひついてもそんなことをすることを恥辱とするほど、商を輕んじた此等の武家は、特に「年の物成」を非常に重大視すべき理由を持つてゐた。この目的のためには、百姓は勤勉でなければならなかつた、さうして極めて質素從順でなければならなかつた。百姓を此の如き狀態に繫いで置くこと、これが德川幕府の終始一貫した方針と云つていゝであらう。さうして百姓の無智がこの政策の遂行にとつて甚だ有利であつた。固より時勢の轉變につれて彼等の間にも贅澤の習慣が徐々として浸潤して來たとは云へ、それはそれ〴〵の時代の町人及び武家のそれに較べればまるで問題にもならぬ程度のもの

であつた。又町人の贅澤が武家に感染して、武家の財政の窮乏が次第に甚しくなるにつれて、百姓に對する苛税誅求が彼等の負擔力をあまりに超過するとき、百姓は結束して竹槍と鎌と席旗とを持出さざるを得なかつた。かくて木内宗吾等を先輩とする「義民」の幾群が徳川時代社會史に多少の波瀾を擧げてゐるとはいへ、それも亦地方的部分的現象たるに止つて、特殊の苛政がやめば特殊の暴動も亦終息した。それは階級的對抗の形勢を馴致するほどの潜熱を持つには至らなかつた。徳川幕府の對農政策が日本の經濟的文化的發展にとつて有利であつたかなかつたか、それはおのづから別問題であるが、兎に角「御治世安泰」のために農民を支配する政策として、それが成功に近いものであつたことは疑ひ得ないであらう。

尤もかういふのは武家が百姓を搾取の對象としてのみ見てゐたといふ意味ではない。この點に於ては、封建制度の哲學的倫理的基礎とも名くべき觀念が事態を和げる。各人には生れながらにして具れるそれ〴〵の分がある、その身分に應じて生活すること、萬民その分に甘んじて假にも下剋上の振舞なきこと――これが士農工商の四民に通ずる道徳である。このやうな社會に於いては、廣い意味に於ける「商賣冥利」の思想が社會的秩序を保つの楔として作用する。商人が金錢を重ずるは商賣冥利である、縱令それが愛兒の一生の幸福に關することであつても、そのために大金を抛つのは商賣冥利に盡きることである(例へば近松作「壽門松」の淨閑の如きは此の如き思想の一代表者である)。これと同樣に、勤勉に質素に、出來るだけ「水を呑んで」生活して、滯りなく年貢を納め國恩に報ひるのが即ち「百姓冥利」である。武家の搾取は此の如き道義的觀念の上に立つが故に、それは良心の多くの不安なしに、百姓に對する溫情や慈悲と兩立し得るものとして行はれた。實際彼等の「善政」が百姓のために考へること親切細密を極めてゐたことは、慶安二年二月の「諸國郷村江被抑出」お觸れによつても想見することが出來るであらう。その中の四五節を抄出すれば(全體については、齋藤隆三氏著「近世世相史」九三頁以下參照)――

一、少は商心も有之而身上持上ケ候樣に可仕候。其子細は年貢の爲めに雜穀を賣候事も、又は買候にも商心なく候へば

人にぬかるものに候事。
一、屋敷之前の庭を奇麗に致し、南日向を可受、是は稲麥をこき大豆をうち雜穀を拵候時、庭悪候得ば土砂交り候而、賣候事も直段安く事の外しつついに成候事。
一、春秋灸をいたし、煩候はぬ様に常に心掛べし。何程作に情を入度と存候而も、煩候得ば其年の作をはづし、身上つぶし申ものに候間、其心得專一なり。女房子供も同前の事。
一、たば粉のみ申間敷候。是は食にも不成、結句以來煩に成ものに候。其上隙もかけ、代物も入、火の用心も悪候。萬事に損成ものに候事。
一、……右之如くに物毎入念身持をかせぎ申べく候。身持好成米金雜穀をも持候とても無理に地頭代官よりも取事なく、天下泰平の御代なれば、脇よりおさへ取ものも無之、然ば子孫迄うとくに暮し、無間ききん之時も妻子下人等をも心安くはごくみ候。年貢さへすまし候得ば、百姓程心易きものは無之、よくよく此趣を心がけ、子々孫々迄申傳へ、能々身持をかせぎ可申もの也。

慶安二年は西暦千六百四十九年、ゲーテの生るゝに先つこと正に百年である。その後大正十四年に至るまで二百七十六年、吾々は現在に至つても少しく山の中にはゐれば、この慶安の御觸れの精神に從つて生活してゐる「理想的」百姓を見るに難くはないであらう。誠に「年貢さへすまし候得ば、百姓ほど心易きものは無之」候に違ひない。併しこのやうな心易き生活は新しき文化の創造に參加する力を持つことが出來ない。徳川時代の百姓階級は「御伊勢詣り」や「善光寺詣り」やその他の機會により、都會と町人との作つた文化に僅かに接觸して、これに追隨するほかに恐らく何の能もなかつた。彼等自身の藝術は、多少の俚謠や盆踊りや地方的な玩具の類を除けば、云ふに足るべきものがなかつたと云つていゝであらう。さうして此等の俚謠や盆踊りさへ足利時代や戰國時代のそれに比してどれほどの獨創があつたか、それは土俗の細心な研究によらなければ容易に斷定を下し難いであらう。

「工」も亦器械工業の發達せぬ徳川時代に於いては、多く云ふに足るほどの獨立した社會的勢力となることが出來なかつた。手細工の時代に於いては、「腕のいゝ」職人ほど贅澤品の製造に密接な關係を持ち易い。かくて彼等はその利害關係によつて、又同樣な都會生活者として、結局「商」賣人の中に攝取されて、「町人」といふ一つの階級を形成する。町人階級の勢力を形る中心の力は金錢である。故に吾々は町人の階級を換言して商賣人の階級と名けることを許されるであらう。それこそ徳川時代に於ける新興階級であつて、明治大正の時代に於ける資本主義の文化の下ならしをしたところのものである。

14

前に引用した「諸國郷村へ仰出さるゝ」お觸れが出たと同じ年に又町人に「町觸れ」の御達しがあつた。それは全體に於いて次の十一ヶ條から成つてゐる――

一、町人召仕絹布着し申間敷事
一、町人らしやの合羽着し申間敷事
一、町人振舞結構に仕間敷事
一、町人蒔繪之家具拵申間敷事
一、町人作事に金銀之箔付間敷事
一、三階仕間敷事
一、町人蒔繪之乘鞍糸鞦仕間敷事
一、乘掛蒲團、紬木綿毛氈之外無用之事
一、町人祝言結構に仕間敷事
一、町人長がたな大脇差さし申間敷事
一、町人かぶきたる體仕間敷事

これは簡單な不愛相な禁令であつて前者のやうな親切を極めたものではない。町觸れが郷村への觸れに比較してこのやうに違つた調子を持つてゐるのは、爲政者が町人に對して百姓に對するほどの愛を持つてゐなかつたためであるか、若くは町人があのやうな老婆親切を必要とするほど無智でなかつたためであるか、その理由は孰れであるにしても、兎に角この禁令は、町人がその生活上の實力に於いて如何に百姓を凌駕してゐたか、この實力の相違が官憲の兩者に對する取扱ひを如何に左右したか、その消息を推測させるは充分の手掛りを提供してゐると云

つてよからう。凡そ禁令の發布は、これに接觸する生活事實が既にその前に發生してゐることを豫想する。徳川時代の法令のやうに、絶對權を有する爲政者がその時々の必要に應じて隨時にこれを制定する場合に於いては特にさうである。故に吾々はこの町觸れを通して、當時の町人が既にその召使に絹布を纏はしめ、その家にあつては蒔繪の家具を用ゐ、金銀箔をその細工物に施し、三階の家に住み、その祝言や振舞を「結構に致し」得るだけの資力を有し、外出するに當りては、長刀大脇差を帶し、舶來羅紗の合羽を着し、蒔繪の乘鞍に乘り、絹布の乘掛蒲團を用ゐ、華奢風流を衒ふだけの都さびた趣味を持つてゐたことを想像することが出來る。さうして町人を百姓以下の者と見た官憲も、この生活事實に面しては彼等に百姓以上の自由な生活を許すより仕方がなかつた。郷村への御觸れに於いては「百姓は衣類之儀布木綿より外は帶衣裏にも仕間敷事」であつた。然るに町人にあつて「絹布着しまじき」者はたゞ彼等の召使に限られてゐる。又慶安以前の法令によつて百姓は乘物を用ひ荷鞍に毛氈かくることは、一生に一度の嫁入婿取に於ても禁じられてゐたのに、町人は蒔繪ならぬ乘鞍を置き、紬毛氈の類を乘掛蒲團に用ひることは許されてゐたのである。さうして百姓に命ぜられたかて飯を食ふべき掟や、「酒茶を買のみ申間敷候所妻子同前之事」といふやうな禁令は（郷村への御觸れには「大茶をのみ物まいり遊山すきする女房を離別すべし」とさへ書いてある）町觸れの中には何の痕跡をもとゞめてゐない。徳川幕府の初葉に於いてさへ町人の實力が既にこの程度に達してゐたことを思へば、昌平の續くに從つてその勢力が增進し行くべきほども豫め想見すべきである。

15

武人が武人として支配者の地位を保つためには、その時代は如何なる時代であることを必要とするか、それは或程度の社會的秩序を保つためにも不斷に武力の活動を必要とする時代、一般民衆の生活が緊張せる武力によりて僅かに保護せられ得る時代――約言すればそれは亂世でなければならぬ。泰平が續くに從つて武力の社會的地位は次第にその影を薄くする。而も猶武

士階級が依然としてその支配的勢力を保持するためには、彼等は武人とは異れる資格に於いて——その巧智と政治的才幹とに於いて、優勝の地位を占めて來なければならぬ。さうして戰亂の世に於いても到底無視するを得なかつた經濟上の實力は（早見藤太の白を借用すれば「凡ていくさといふものは、腹がへつてはならぬもの」である、）泰平の世に至つて益々その必要を加へる。この必要を自覺すると否とによつて新しき武人と古き武人とは區別される。徳川家康は、この意味に於いて、恐らくは最も新しい武人の典型であつた。彼が遂に最後の勝利を占め得たのも、その一半はこの點に於ける彼の明智に負うてゐるであらう。新しき武人徳川家康と古き武人細川忠興との金錢貸借の話は、夙に人々に喧炙するところであるが（「藩翰譜」細川氏の條下參照）、これは單に二人の個人に關する逸話たるに止らず、又新舊兩勢力の關係について代表的意義を持つてゐると云つていゝであらう。忠興は固より好爭の武人であるが、恐らく理財の才に缺けるところ多かつたのであらう、金錢の點に於いて窮地より更に窮地に深入した。彼は財用の乏しきが故に關白秀次より黄金二百枚を借用する。秀次の滅ぼされるに當つて、彼は急遽この金を返して秀次に連坐するの厄を脱れむと焦慮する。とはいへ彼には即坐にこれを辨ずべき準備がなかつた。併し彼には「新しき武人」松井佐渡がついてゐた。松井は家康の謀臣本多佐渡を通じて潜かに急厄を救はむことを家康に哀願する。家康は鎧の唐櫃を開かせて「人知れず用ゐむ」ために兼てから準備してあつた黄金をとり出して松井に與へる——これは結局彼の大利となつて回收せらるべき資本であつた。忠興は前田利家の姻戚である。後に豐臣の諸奉行が利家を擁して家康を除かうと謀つたとき、忠興は利家を切諫してこれを思ひとまらせた。二百枚の黄金は生涯の大難から家康を救ひ出したのである。恩義に感じた古き武人は、その「恩人」の手足として彼の遠大の計畫を助成する。新しき武人は彼の恩義に感じた多くの古き武人を踏臺として歩々にその深慮遠謀を實現する。新しき武人は遂に天下をその掌中に握るの業を成就する、古き武人はその「恩義に感き」報としてその家の安全を保證される——但し前者は征夷大將軍として、後者は彼の麾下に屬してその成を

仰ぐべき臣下として。藩翰譜の著者新井白石が、秀次の黄金を貸せる動機を説明して「且つ人の心を取らんがため、且は財を利せんがためなりけり」と云つてゐるのは、有意か無意かは知らず、隱約の間に照應の妙ありと云ふべきである。

16

併し如何なる明智多才の人と雖も、運命が置いた路筋は遂に避けることが出來ない。彼が過去からひつぱつて來た因果と、彼がその中で陶冶されて來た教育とが、彼の眼界を限定するからである。彼の眼界外にある豫期せられざるものが決定的な要素として彼の仕事に影響して來るからである。固より新しき武人家康によつて創始された徳川幕府の政治家達は、決して時勢の變遷について盲目な者ではなかつた。新政府のための捨石となり埋草となつた舊き武人等――大久保彦左衛門をその「講談的代表者」とする舊き武人等――の回顧的反動的武斷主義は、新時代の政治家が採る文治政策に對してたゞ一種の愛嬌であり清涼劑であるに過ぎなかつた。武勇を誇りとする古兵（ふるつはもの）の時代から秩序あり節度ある昇平の世を導き出さうとする政策は、徐々として而も着々として進行した。とは云へ彼等の多智と多才とも遂に避け得なかつた躓の石は、思ひがけずその足下に轉つてゐた。その躓の石とは彼等の經濟政策である。前にも云つたやうに、彼等は支配階級の經濟的基礎を專ら百姓の年貢のみに求めた。彼等は町人に對する正式の課税を輕視してその經濟的勢力を支配し調節し掣肘すべき根本政策に想ひ到らなかつた。彼等が町人の獻ずるに任せた「冥加金」や、常時若くは臨時の賦役徵務や（例へば「魚御用」の如きがこれである）、不時に突然的に町人に課する「御用金」やは、凡て町人と當路者との私的結托に導き、この私的關係は結局町人が裏から支配者を支配するといふ結果を產み出すことゝなつてしまつた。町人と武家との關係は、徳川家康と細川忠興との關係と比較すれば、固より霄壤の差別があるが、後者が前者によつて死命を制せられるに至るまでの趣は、兩者の間に一脈の相通ずるところがないとは云はれない。而も武家が町人に死命を制せられるに至るの徑路は忠興が家康に隷屬するまでの道行と比べて、更に深刻にして

必然である。忠興は自ら理財に注意することによつて家康の寵中に籠絡される機緣を作らずにすますことも出來たであらう。併し彼自身生産者にあらず企業者にあらず商賈人にもあらぬ武士階級は、如何なる明智と老猾との力を以てするも、到底町人に頼らずにはその勢力を保持することが出來なかつたと思はれる。これを避けるためには武士階級それ自身が組織せられたる企業團體とならなければならぬ。併しそれは彼等の有する人生觀倫理觀名譽觀にとつて餘りに甚しき矛盾であつた。「士族の商法」は武士階級の自己崩壊である。自己を崩壊するに非れば自己を保存し得ぬやうな地位に陷つて行くところに、封建的武士專制制度の Dialektik はあつたのである。

17

隱者太宰春臺は延享四年（西暦千七百四十七年）、八代將軍吉宗の隱居後二年にして死んだ。徳川家康が將軍の宣下を受けた慶長八年（西暦千六百〇三年）を去ること凡そ百五十年、徳川幕府は春臺の沒後猶百二十年の壽命を保つた。從つて彼は正に徳川時代の中葉に屬する人である。この時代に於ける武家と町人との經濟關係はどんな具合であつたか。彼の「經濟錄」に從へば、「今の世の諸侯は、大も小も、皆首をたれて町人に無心をいひ、江戸京都大阪其他處々の富商を憑で、其續け計にて世を渡る。邑入をば悉く其方に振向け置て、收納の時節には、子錢家より倉を封ずる類也。子錢家とは金錢を借す者を云ふ。邑入にて償ひても猶足らず、常に債を責られて、其罪を謝するに安き心もなく、子錢家を見ては、鬼神を畏るゝ如く、士を忘れて町人に俯伏し、或は重代の寶器を典當して時の急を免がれ、家人をば飢して子錢家をば珍膳にて饗し、或は子錢家とて故もなき商賈の輩に祿俸を與へて家臣の列に入れ、凡廉恥を忘れて不仁不義を行ふ人、比々として皆是也。諸侯すら然也、況や薄祿の士大夫をや」（本庄榮治郎氏の「日本社會史」より孫引する）である。固より慨世家の批評を直ちに現實相の叙述と見るには多くの戒心を要する。併し幾分の割引を以てそれを受取るも、武士階級の經濟的隸屬がこの頃既にどの程度に進んでゐたかを知るには足るであらう。

武士階級は何故にそのやうな經濟的窮乏に陷らなければならなかつたか、これを遺憾なく說明しやうとすれば細心な經濟史的研究を必要とすることは云ふまでもない。併し一事の疑ひ得ぬやうに見えることは、彼等が町人の奢侈に感染して、その財用の缺乏を加速度に早めたことである。その場合に於いては、上のなすところ下これに習ふのではない。下のなすところがその珍らしさと美くしさとによつて上に立つ者の生活を誘惑するのである。固より此のやうな豪奢の源流には桃山時代に於ける豐臣氏の生活樣式が大に影響してゐるであらう。併しそれが德川時代に入つて時の進むに從つて益々町人がこの潮流の Imitation となる。これは武家の立場から云へば「士風頽廢」であるが、町人の立場から見れば町人の勝利である。さうして海外交通の禁止と海外貿易の制限とによつてその事業圈の擴大を阻止せられ、諸侯の土地占有によつて海内の地方的投資をも妨害されてゐた當時の町人が、例へば紀文や碇屋のやうにその活力の捌け口を豪奢贅澤の方面に求めたのも當然のことゝ云はなければならぬ。幕府が若しこの傾向を制御してこれを出來るだけ健全な方面に導かうとするならば、その政治家は町人の經濟的活動を桎梏する制限をとり去つて、彼等の經濟的事業慾を經濟的事業慾として伸ばさしむべき無限の事業圈を提供すべきであつた。然るに彼等は不自然な奢侈禁止令によつてこの潮流を阻止し得ると信じた。併し自然の勢は法令よりも強きこと幾萬倍である。頻發する禁令の下をくゞつて奢侈の精神は燎原の火のやうに燃え擴がる。質素剛健なるべき武人はこの火の洗禮を受けて町人の後塵を拜するに忙しい。而も本來此の如き經濟的過剩と兩立せぬやうに組織せられた彼等の財用は到底この點に於いて彼等を町人の上に置くことが出來ない。彼等は町人の許に走つて、借財を以て一時を糊塗せむとする。さうしてこのやうな借財は更に町人に勢力を添ふるの薪とならざるを得なかつた。武人の唯一の財産たる百姓の年貢米は、商人の手に渡つて彼等の豪富を致すの方便に化する。大阪の藏屋敷をめぐる「掛屋」や江戶の藏前の「札差が富と共に社會的勢力を得て、遊里や劇場にその材幹を伸して濶步する。又幕府が金銀の改鑄によりてメフイストの奸計に乘せられた「皇帝」のやうに一時の財用を得

ようとすれば、竟に利益は銀金の商人達の袋に落ちて行く。かくて武人は、經濟的に云へば、鐵鎖を以て自動車のうしろに縛りつけられた犬のやうに町人にひきづられて行くのである。幕末に至つて武士階級の經濟的崩壞がどの程度に進んでゐたかは、私のやうな素人が充分に知り得るところではない。既に二三の學者が企てゝゐるやうに、各藩についてこの間の消息を明かにすることは、重要にして且つ興味ある研究であるであらう。併し兎に角、大勢がこの方面に進行しつゝあつたことゝ、この事情が維新に於ける武家制度の崩壞を社會的に準備してゐたことは――從つて明治の改革の結果が徳川幕府に代る島津幕府若くは毛利幕府とならずに四民平等の新政となつたことは――自分のやうな素人にも猶下し得るところの斷定である。

18

かくて町人は徳川時代の經濟的――從つて文化的中心勢力となつた。彼等はその過剩な活力を滿す對象として、その鬱屈を慰むる世界として、彼等自身の創造的藝術を要求する。徳川時代の平民藝術は、活力ある、教養の少い、牙籌の利を爭ひながら常に武士的精神に對する顧慮を失はざる、常に權力の抑壓を感じつゝ而も自ら恃むところある、その最もオーソドックスな哲學を心學に仰ぎつゝ而もその淺薄な Synkratismus（妥協主義）によつては統一せられ得ぬほどの種々なる Huswuchse（吹き出物）を持てる――この不思議な町人階級の所産として、一つの連續する流れを形成する。それは彼等自身の直接の衝動から生れ出た藝術の常として人見知りをせぬ藝術である。それは、前期に於いては豪爽な、或種の大きさを有する魂の表現として、後期に於いては繊細な洗煉せられた感受性の投影として、あらゆる弱點あるにも拘らず兎に角ぬきさしならぬ力を持つ藝術である。さうしてこの藝術が諸他の階級の興味を集める。他の階級はこれに對して「立かゝり屛風を倒す女子共」（「猿蓑」凡兆）である。これを輕蔑するやうな顏をする者も、見向きもせぬやうに取すます者も、結局この「屛風の中の色男」を覗かうとする慾望に囚へられずにはゐない。この意味に於いて、町人階級は再び徳川時代の勝利者であつた。

思ふに德川時代に於ける平民藝術の運命を最も色濃く代表するものは演劇である。時代思想の表向きから云へば、俳優はあらゆる平民藝術家中最も卑しいものであつた。彼等は「河原乞食」に過ぎなかつた。彼等に對する輕蔑は單に士流の間に於けるのみならず、同じ民衆藝術の仲間なる浮世繪畫家の或者も——春信と歌麿とに就いて似寄りの話が傳へられてゐる（浮世繪類考參照）——俳優畫を描くことを屑しとしなかつたと云はれてゐるぐらゐである。而も自ら高く標置せる「日本繪師」春信歌麿の兩者も遊女の繪を描くことは寧ろ得意としてゐたことを見れば、俳優の社會的地位の低さは想見するに足るであらう。

併しその實、遊女が自由なる社交の世界吉原の女王であつたと等しく、俳優は滿都の人氣を負ふ王者であつた。彼等は殆んど何者にも優る社會的勢力を持ちつゝ而も僅かに穢多非人たるを脫るゝ賤人として蔑視される。彼等は殆んど穢多非人に等しき者として輕蔑されながら、上は將軍の大奧から下は裏店の嬶に至るまであらゆる人間に、歡ばれ愛せられ、垣間見られ覗き込まれる。八代目團十郎が中村座の春芝居に助六を勤めたとき（嘉永三年）、一幕切に助六が入る天水桶の水が一德利金一分づゝにて注文多く、一桶の水足らぬほど賣れ、掛りの者はじめ思はぬ金儲をせし者多し、これは贔負の女連が白粉を溶き顏へ塗る爲に買求めしなりと」（「俳優百面相」）と云ふが如きは、固より市井の婦子に有がちなことゝは云へ、猶俳優の社會的輿望を想はしむるに足る材料である。階級の差別と社會的勢力との矛盾を、最も皮肉に突付けて見せてゐる者は實に彼等である。

併し前に引用して來たやうな性質の人氣は、同時に演劇が娛樂と好色とに深緣あることをも說明するものと云はなければならぬ。これは古今東西に類別の乏しからぬ事實とは云ひながら、傾城歌舞妓や若衆歌舞妓を濫觴とする德川演劇にあつて特にさうであつたことは、淺井了意の作と稱せられる「東海道名所記」や、三浦淨心の「そぞろ物語」等の記事によつても、略想見することが出來よう。色を賣り媚を呈することを主目的とする俳優と、美色に恍惚とするために戲場に出入する看客とに對して、德川幕府の政治家がとつた禁壓的態度は、決して一面の理由がないとは云はれない。この干涉は或程度までは劇場が

自ら招げる禍であつて、又一方から見れば演劇が野卑放縦の極に流れむとするのを牽制する効果をも持つてゐた。併しこの容喙は結局その目的とする効果を擧げることを得ずに、演劇をして運命が豫定したとも云ふべき河床を流れ行かしめるより仕方がなかつた。この意味に於いて、演劇が町人社會の埒を超えて、武人の間に——特に彼等の奥向に——浸潤した跡を一瞥することは、徳川藝術の暗黒面をもそのまゝにその勢力が擴張され行く趣を看取するための好個の手段である。

思ふに徳川時代の初葉に當つては、階級思想が未だ充分に確立してゐなかつたために、各階級が割合に氣樂に對抗したり交通したりする自由が殘つてゐる。それは幡随院長兵衛や唐犬權兵衛等の町奴が、水野十郎左や加賀爪甲斐等の旗本奴に楯付くことが出來る時代であつた。從つて俳優も亦往々貴人の前にその技を演ずるの「光榮」を持つことが出來た。慶長八年出雲本國は新上東門院の御前に於いてやゝこ踊を踊り、寛永十年大船安宅丸が伊豆の下田から江戸に入船したときには、猿若勘三郎がその舳に立つて木遣音頭を唄つたと云ふ。當時の大名旗本等が若衆を招いで酒席の間を周旋せしめることは寧ろ一種の流行、一種のかぶきであつた。併し男女の歌舞妓に溺れて戒を破る墮落僧、身をあやまる婦女、衆道の爭より刃傷に及ぶ武士等が續出するに至つて、爲政者の眼は遂に彼等に對して光らざるを得なかつた。承應元年「若衆歌舞伎御法度」の令出でてより、當局と演劇との關係に一縦一張があつても、要するに俳優は社會の表面に於いては河原者として日蔭を行かなければならぬ運命が定められた。併し武家の閨門には、その嚴しき禁制をかすめて、河原者の愛に身を焦し思を燒く婦女子の跡を絶たない。さうして平民のうちでも最も卑められたる芝居役者は、大膽にも身を樣々の姿にやつして武門の奥深く出入往復する。今も人口に膾炙してゐる幾つかの情話は、この間に生れて來るのである。

俳優と武家の女との關係は決してあの有名な江島生島の事件に始まるのではない。江島が三十三歳にして遠島を仰せ付けられたのは正徳四年（西暦千七百十四年）、八代吉宗の將軍宣下を受くる二年前であるが、これに先つこと六十二年、四代將軍家

綱の承應元年に、既に某侯の室が俳優と通じて、供に情死を圖つたことがあるといふことである（伊原青々園氏「日本演劇史」一九四）その後、五代家綱のときに奥女中増見が俳優と通じたといふ話があり、寶永三年に生島大吉が尾張の殿様の未亡人に愛せられて、長持の中に忍んで閨房に出入したといふ話もある。そうして大吉の兄新五郎と江島との間に起つた例の事件に於いて、江島が御用商人に芝居見物を强請せる大膽なやり方と、劇場に於ける傍若無人の振舞とによつて想像すれば（「同上」四四〇頁以下參照）、當時表向にならずにすんだ同樣の事件は他にいくらもあり得たのであらう。その後幕府の風紀取締が益々嚴酷を極めたことは云ふまでもないが、併し市中に聒しき戯場の噂は猶名家の女儀の心をときめかして、危き途を踏ましめることは絶えなかつた。文政二年、中村座と玉川座で三代目菊五郎と七代目團十郎とが競爭に「助六」を演じたとき、紀州の御姫様が態々兩座の前を通つて、木戸を押開かせ乘物の戸を細目にあけて暫く舞臺を見たといふだけの處で、御姫様は國元へ押込められ、御供頭は切腹、その他六人は永の押込被つけられた（伊原氏「近世日本演劇史」七三九頁以下）といふが如きは、可憐なる犧牲と云ふべきである。併しそのやうな峻嚴な法令も猶その裏道には存外なぬかりがあつて、大名の奥方姫君との忍び合ひが、樂屋に於ける公然の秘密であり、氣樂な惚言の種であつたことは、同じ梅壽菊五郎（この人は非常に美男子であつたらしい、彼は壯年の頃、樂屋の鏡臺に向ひながら、我知らず、己はどうしてかういゝ男だらうといつたのを、側にゐた者が可笑しいとも思はず、それを當然のことゝして許したといふ話が傳へられてゐる）に次のやうな逸話があるのでも想像し得るであらう——

若き時、或大名のお姫様に想はれ、腰元の手引にて寢所へ忍込みたりしが、姫様はにかみて固くなつてゐるゆゑ、それぢや歸して御暇致しませうと立上ると、あれ彼んな事を、と姫様のいひし聲、今も耳につき、其の美しき顔を眼のあたり見るやうなり、と老年に至るまで、時々のろけ賃を出しては人に語れりと。是れは默阿彌の咄なりき（俳優百面相）。

以上擧げた諸例は固より日本演劇史の名例となるやうな話で

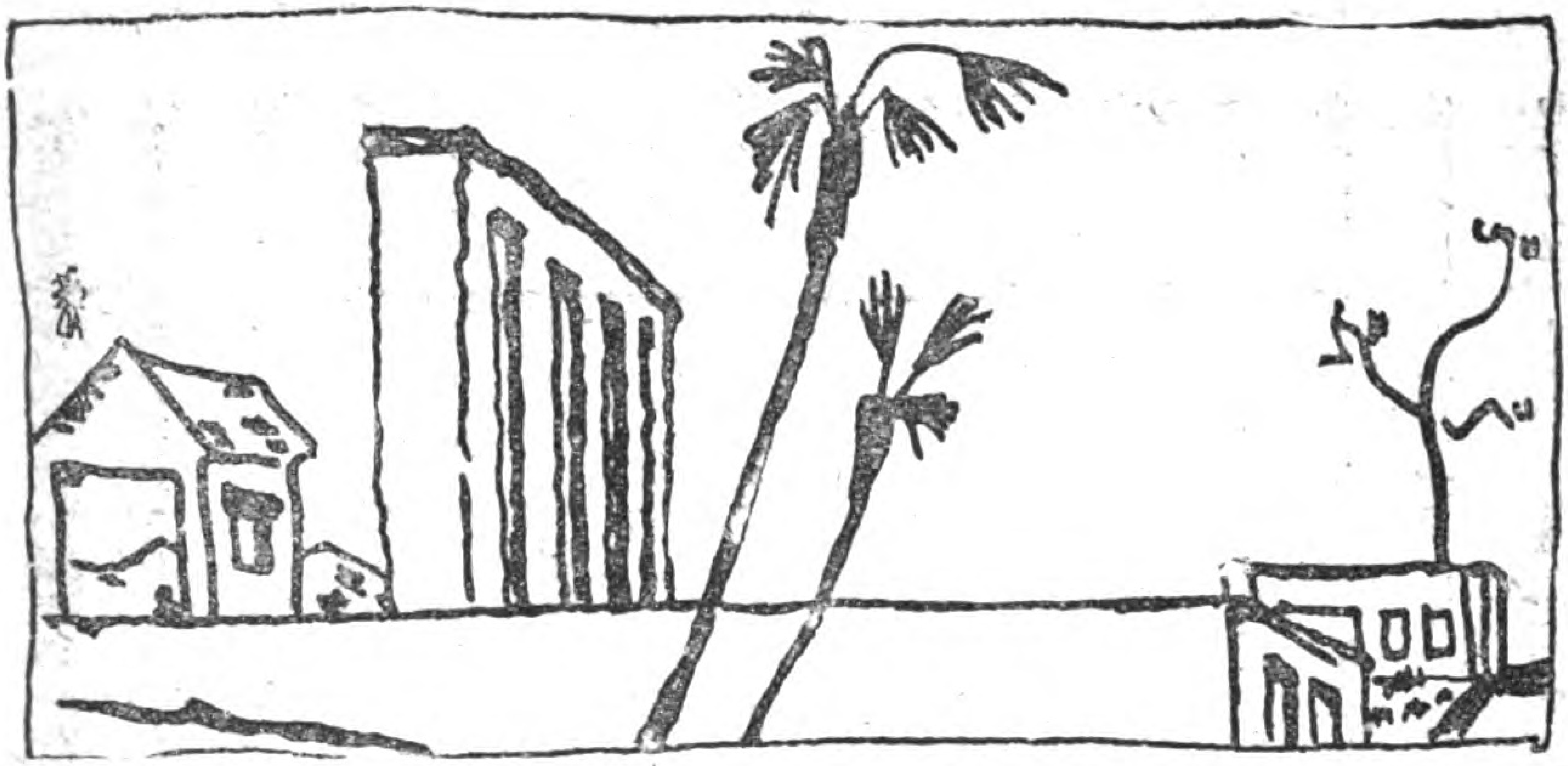
はない。三百年來の傳習となつてゐるこのやうな社會的地位から脱却して、演劇を人生の表に、さうして眞中に、すゑなほすことは、今日の俳優の必死の努力を要するところである。併し上來の事件を當時の社會相の代表と見るとき、それはおのづから別様の意義を以てあらはれて來る。替り日替り日の狂言は滿都の人心を躍らせ、芝居町の賑ひは若き男女を夢見心地のうちに誘惑する。床屋といはず風呂屋といはず街頭といはず、命の通ふ生々した顔の集るところには、必ず芝居と役者とのことが話題に上らずにはゐない。誠に俳優は町人社會のチャンピオンであつた。さうして此等のチャンピオンは又樂々と戯れながら當時の支配階級の心の中にも忍び込むことを解してゐた。不自然な女護ケ島に女盛りを過す奥女中や深窓の裡にたれ籠めてのみ暮す姫君は、彼等の一顰一笑のために總身の血を湧かせ、命をかけ身をかけて危き逢瀬怖ろしき歡樂の首尾をよくせむことを思ふ。德川時代の演劇は、町人の間から産れた藝術にして、而も又町人階級を超えて四民の心を鼓動せしむる藝術であつた。町人社會より勝利は——善きにつけ惡しきにつけて、盛り上る自分の力を表現せずにはゐられなかつた町人社會の勝利は——最も鮮かに德川時代の演劇の中に結晶する。無恥な、なげやりな、無邪氣な、時としては又殘忍な役者達の淫蕩も、亦支配階級に對する町人の勝利を標識する。

（此項未完）

商大教授 孫田秀春著	勞働法總論	○勞働法の基本觀念○勞働法の研究方法○勞働法制の發達○勞働法の理想○外六章	5版	菊上 三四〇	二・六〇	・二六
早大教授 大山郁夫著	現代日本の政治過程	(一)現代に於ける社會思想及び政治事實の進展(二)現代日本の政治過程(三)多元的國家觀の法理	版	四六上 三五四	二・五〇	・二二
法學博士 森莊三郎著	法制講話	○總論○親族法及び相續法○皇室法○憲法○全國の中學師範女學校の教科書、參考書としての最良書	4版	四六上 四三四	二・五〇	・二二
經濟學博士 本庄榮治郎著	近世農村問題史論	經濟史の權威たる著者が近世日本に於ける農村問題を史的に考察したる日本農政史の一方面である。	近刊	四六上	假未定	
京大教授 宮本英雄著	婚姻の基調	○婚姻法の將來○夫婦間の貞操○寡婦の再婚○離婚の防止(婚姻媒酌)家族制度と婚姻	5版	四六上 二〇八	一・五〇	・一八
京大講師 山口正太郎著	中世寺院法と經濟思想	○序論○利子禁止思想の變遷○中世寺院法と猶太人○中世寺院法と商業○中世寺院法と組合及び會社等	新刊	四六上 三三三	一・五〇	・一八
北一輝著	日本改造法案大綱	○緒言○國民の天皇○私有財產制度○土地處分三則○大資本の國家統一○勞働者の權利○外三章	4版	菊上 一六六	一・五〇	・一八
佛國藏相カイヨー著 龜井貫一郎譯	民衆の苦悶	○大戰の苦悶○世界的破綻○歐州再生の力○佛國一般經濟の混亂○佛國賠償問題と戰爭債務○外三章	4版	四六並 二四〇	一・三〇	・一六
ニコライ・レーニン著 茂森唯士譯	レーニニズム	○ロシヤ革命の國際的意義○ボリシエヰキーの成功の一根本條件○ボリシエヰズム發達の諸期○外五章	4版	四六並 二二四	一・二〇	・一六
ヂー・ジノヴイエフ著 富士辰馬譯	勞働政黨と勞働組合	(組合運動の原則的諸問題○ロシヤに於ける組合運動)勞働組合——現下最必要の一文獻	4版	四六並 一二四	・九〇	・一四
文學博士 朝永三十郎著	カントの平和論	○カントの平和論○カントと政治(思想問題と哲學的精神等——カント研究者に必要の一書	7版	四六上 二六八	一・五〇	・一八
阪 内務事務官 三宅 司法書記官 著	普通選擧法要綱	普通選擧法に對する尤も信賴すべき當局者の釋義。各府縣警察署にては皆本書を參考として購買した	10版	菊半截 一八四	・六〇	・一四

(3) 哲學及宗教

文學博士 松本亦太郎著	心理學講話	一般心理學を體得せんと欲する學徒のために解り易く書かれた我國で心理學の最良書	30版	四六上 五四六	四・二〇	・二四



剝がれゆくもの

諏訪三郎

1

谷澤景二のやうな不德漢を、黑田家へ出入りさしたのが、そもそもの謬りである。——と、かう世間の善良な人々は云ふであらう。

——尤も、主人である黑田は、景二を最初から嫌つてゐた。五十に近く、そして自信と誇りの高いこの官吏は、女房や娘のゐるところではいかにも質樸に振舞つてゐるが、彼れの前へ出ると傲慢で、理窟つぽくて、それに上長のものであると理由なしに輕蔑するやうな口吻を平氣で洩す青年を蟲が好かなかつた。だがこれは、黑田が餘程後になつてつけた景二嫌ひの理由である。誰でもさうだが、自分をいつも正しくするためには、恥しくない理窟と解釋とを常に準備してゐるものである。黑田の場合などでも、彼が景二を嫌ひ出した動機といふものは、前に述べたやうな誰の前でも公然と口に出來るやうなことではなかつた。豫備陸軍大尉である黑田が、鐵道省に奉職してからもう十三年にもなる。それだのにその俸給といふものは、學

校を出てまだ間もない景二のそれに較べて、幾らも差がなかつた。彼の女房や娘などは、官吏の俸給が一般に低いといふことを考慮に容れずに、どうかするとたゞその點だけで彼と景二の價値比較をしかねないのである。誇りの强いものにとつて、しかも己れの女房や子供に輕重を問はれることほど屈辱なものはなかつた。黑田が景二を嫌ひ出した主要な原因は、意外にもこんなところから發してゐた。黑田にしてみれば、景二のやうなまだ靑つぽい靑年と、どんな點でも比較されるといふことが既に屈辱なのである。ところが彼の女房や娘はその冒瀆を敢えてした上に、彼を蔑むやうな態度をさへとつた。さうだ！場合によつては――と彼は憤慨した。景二と立會演說をやつてもいゝ。決してひけを取るものでないといふ自信が彼にあつた。だが、甚だ忌々しいことには、この時代の流行的な思想に感染（かぶ）れてゐる靑年と議論を戰はすことは、まるで調子の違つたオルガンを彈いてゐるやうなものであつた。彈手の頭腦はしつかりしてゐる筈なのに、相手はいつも珍糞漢（ちんぷんかん）な音を、しかも當り前のことゝして發してゐるといふ風で、黑田はすぐに腹立しくなつてくるのである。それに黑田は、彼の女房がまだ娘であつた時分に、こちらから悉く惚れ込んだ弱味が五十歲のこの頃まで祟つて、勝氣な女房から、即ち鐵道省に勤めて貰つた月給を女房に渡すといふ彼の役目以外の家庭のことに、口を出すことを禁じられてゐた。いや、口だけは、いかにも一家の主人らしい威嚴を以ていろいろと容喙するのである。が、その容喙も、娘の部屋にあるオルガンのやうなもので、鳴りこそすれ、一家を支配することは遠く及ばないことなのであつた。そんな譯で、谷澤景二が突然、――まるで泥棒のやうに、といふ感じは黑田にだけは最初からあつた――彼の家庭へ出入りするやうになつて、女房と娘とが一緒になつて景二を偏愛してゐるのを見ると、甚だ心外でたまらなかつたのだが、男は、家庭のことなどにあまり口を出すべきでない、といふ風な理窟をこゝへもつけて、默認してゐたのである。

敏感な現代の青年に、この黒田の氣持ちがわからない筈はなかつた。そして、誰だつてさうだが、――異性の間柄でもない限り、上長も先輩もあるものか！――自分を嫌ひな人間を好く筈もなかつた。好くやうに見せたり、尊敬するやうに振舞ふのは、道學者先生よ、それはみんな方便に過ぎないのである。で、景二も、黒田家の主人をどぶ鼠の如く輕蔑し、嫌つた。（ちよつと斷つておかなければならぬが、この黒田家を、日本の習慣から云つて、上流社會の家庭のやうに黒田家と呼ぶのは、なにも世間のものがさう呼ぶのではなかつた。昔、士族であつたことゝ、多少の相續財産のあることを自負してゐる黒田の家族だけがさう呼んでゐることなのである。）

「うちの父さまも、あなたを好かないらしいが、あなたも、うちの父さまを嫌ひらしいのね。」

と、あるとき房子が、景二に云つたことがあつた。

「うん。――」と景二は、素直に云つた。「お互様のことでね。」

「それはかまひませんが、母アさまも云つてましたわ。うちへお出になつて、父さまに挨拶して下さらないの困りますつて。」

景二は、最初のうちは努めてゐたが、いつとなく、黒田のゐる茶の間へは顔を出さずに、二階にある房子の部屋へ素通りするやうになつてゐた。

「挨拶ぐらいどうでもいゝが、でも、嫌ひな人にお叩頭をするのは、なかなか面倒なことだね。」

「景二さんが、そんな風だから、父さまがだんだん拗れてくるのよ。」

「だから、お互様なんだ。」

「わたし、困るわ。」

「そのために、もう來ていけないつて云ふなら別だが……」

「そんな心配はいらないのよ。第一、うちの母アさまがそれア景二さん黨なんだから。ことによると母アさまは、景二さんに參つてるのかも知れないわ。」女學校の五年生だが、房子はもう戀愛の常習者であつた。彼女は、魅惑を籠めた媚を微笑ましながら云つた。「……さうなると、母子の戀爭ひね。ローマンチックだわ。」

戀愛にだけは純眞たる處女性をもつてゐる景二は、こんなわる巫山戯をする房子を厭がつてゐた。それに、戀から戀へと移り行く女といふものは、籠から放れた小鳥のやうなものである。一人の男は、彼女の翅をしばし憩める枝振りのい丶梢のやうなものであらう。樂しさうに囀る小鳥がなにを憚れて歌つてゐるものか、梢にはわかるものでない。房子の冗談は景二に不安を抱かせる場合が多かつた。だが嫉妬や疑惑は——房子はもうそれに飽き飽きしてゐたので、煤煙のやうに嫌つてゐた。で景二は、彼女の前でそれを口にすることを、我慢しなければならなかつた。

「そんなら僕は、父さまのゐないときだけ、遊びに來ればい丶ね。」

から景二がいふと房子は、不滿らしい瞳を不思議さうに瞠つて云つた。

「夜、父さまが家にゐないときなんて、滅多にないわ。日中は景二さんだつてお勤めでせうし。そんな、暢氣なことを云つてい丶の？考へてもごらんなさい。第一、あなたが我慢出來ると思つて？」

「さうなると僕は、社を早く引けてくるから大丈夫。」

ながい人生の歴史にとつて、戀愛ほど非事務的非能率的なものは、またとなかつたやうに、谷澤景二も、かうして勤

め先きを怠けるやうになつた。

3

黒川は、その職務上、毎年年度變りの前を控えて、十二月一杯を神戸から下ノ關の方へかけて、配給品の實地檢査に出張することになつてゐた。その留守中のことである。──抑制されてゐるものは、あらゆる機會に反逆を試みようとしてゐる、景二が、毎晩のやうに黒川家へ遊びに行つたことは勿論であつた。──ある晩、宵まで變りがなかつた房子が、夜中から急に四十度近い熱を出した。

家人といつては、彼女とその母親だけである。彼女は、夜明けの寒さに肩をまるめながら、側に附いてゐる母親に、思ひ切つて云つてみた。發熱の苦しみを熬えるやうなけえた聲でゞある。

「お母さま、景二さんを呼んで來てくださらない?」

「だつて房子は、まアだ外は暗いよ。」

母親がたつて、板戸を一枚くつてみると、極寒の黎明が銀鼠色に室内へさし込んで來た。

「お呼びして、どうするの?」

なにもかも、嚥み込んでゐるやうに母親は微笑した。

「醫者を、迎へに行つて貰ふと思つて。」

たゞ、それだけのことなら、なにも景二さんをわざわざ呼んでくることもない──母親はさう思つたので、ちよつと狡るさうに笑ふと、房子がそれを見咎めて、腹立しさうに言つた。

「厭な母さま。なぜ笑つてらつしやるの？ どなたでもいゝから、早く、醫者を呼んで來て頂戴よ。苦しくつて仕樣がないんだから。」

黒田の前では一歩も讓らない母親も、一人娘の房子にかゝつては、人一倍甘い母親に過ぎなかつた。

「母さまは、そんなことまで、景二さんにお願ひしていゝのかしら？ と思つたからさ。」

母親は、から申譯めいたことを云ふと、景二を呼びに家を出た。景二の父親は、黒田の世話で鐵道省に勤めてゐる老看守である。――こんな關係から景二も黒田家のものと知り合になり、房子の戀人となり、そして、苦學して大學を卒業し、新聞記者になつた感心な青年として黒田の家庭へ出入りすることになつたのである。――世話してゐる家の息子を向へに行くに、なんの氣兼ねがいるものでない、おまけに、戀人からのお迎ひではないか、と房子の母親は、文使ひの者のもつ恩惠的な氣持さへ抱いて、四五丁離れてゐる景二の家へ行つた。

老看守と、その家内とが、黒田の細君を慌てゝ迎へたことは無論である。こんなに早く奥樣がお出になることは例のないことである。旦那は出張中なのに、なにか、特別に私共の力を借りることが出來たのに違ひない。實直なこの田舍出の老夫婦は、狹いあがりかまちのところに窮屈に坐つて、來意を待つた。…………

まだ眠つてゐた景二が、仰山に急きたてられて起こされた。

「房子がね、あなたになにかお願ひしたいことがありますので、呼んで來て下さいつていふものですから。」

景二が外に出て、二人きりになると、房子の母親はかう、わざと曖昧に云つた。

「…………」

いかにも健康さうな、血氣盛りの景二は、羞しさで顔を紅めた。だが、悦しさで、胸は躍り出した。彼等の戀の平和

は、實は昨日で一時的にもせよ斷絶の形となつてゐたのである。それだのに、こんな朝早くから、しかも母親を使にして迎へによこす、どんな用事であるかはわからないとして、これまで二人だけの秘密であつたことが、彼女の母親から暗默ながらに認められたやうで、そのことだけでも景二にとつて悅びであつた。……

――その前の日のことである。景二は、新聞社に未知の女の訪問をうけた。そんなことは珍らしいことなので、或は房子かしらと思つて逢つてみると、意外にも房子の學校友達であつた。訪問者はそのことを景二に告げると、臆面もなく話しはじめた。

「……あなたに、忠告に參りましたのです。あなたは、なにもお知りにならないで房子さんに戀していらつしやるやうですが、あの方には、あなたの他に、いゝひとがあるのです。」

現在の房子に、彼以外の戀人はない筈であつた。それに、初對面の女の短刀直入は鮮かすぎて、景二をどぎまぎさしてしまつた。

「それで……。」

と景二は、やうやく應えた。

「房子さんが、處女でないつてことも御承知でないでせうね。」

かう鋭く切り込む訪問者は、まつたく驚くべき少女であつた。引き締つて元氣に滿ちたその顏、微かに笑ひを湛えてゐるその黑水晶のやうな瞳、その口元――は、彼に好意をもつてゐるやうにとればとれるし、またあべこべに憎惡を隱じてゐるやうでもある。羞恥を紛らす微笑のやうでもあれば、また、多くの諷罵と誹謗とを肚んでゐる冷笑とも取れないことはなかつた。いづれにしても、房子が處女でないといふ言葉は、景二の心をすつかり攪亂さしてしまつた。

「それで、どうしたとおつしやるのですか？」

と彼は、強いて平靜を裝ふて云つた

「あなたは……」飽くまで落ちついてゐるその女は、こゝで微笑の振幅を大きくした。「……あなたは、西洋の小說で、最初の戀人だつた男の名前だけは覺えてゐるが、第二の戀人からのは、あまり數多くて忘れてしまつたといふ話を讀んだことがございます？」

「そんなこと、僕は知りません。」

景二は心の攪亂に腹を立てゝ慍つてしまつた。

「……房子さんは恰度、そのやうな女なのですわ。」と女は、景二の返事などを待たずに、少し急き込んで云ひ出した。

「それだけならばかまひませんが、房子さんのおもちやにされて、眞面目な前途のある方が、どの位失望してゐるのか知れないのですもの。慶應の方なんか、養子先きから勘當されて、おまけにいま茅ヶ崎の病院にゐるのです。帝大の醫科の方は、學校をよしてお國へ歸りましたし、外國語學校の方は、房子さんに乾度復讐してやるつて機會を狙つてゐますわ。その他に…………」

女は、なほ二人ばかりの失戀靑年の話をした。「みんな房子のために踩み躪られた人達なのです。」

「それ位のことは、僕も知つてます。」

景二は、自分の愛人をかばふ心から、自分たちの戀愛を貶したくない心からかう云つた。事實彼は、それらのことはおほよそ知つてゐた。——少し好意ある交際をしますと、男の方はすぐ私を戀人にしてしまつたのですわ。私も馬鹿でしたから、ついうかうかと魅惑の多い花園に遊んだまでのことなのです。これまでのはみんな僞りの戀でした。私の本

當に愛する人は、あなたの他にはないのです。……といふ手紙を房子から貰つたことがある。

「知つてらつしやりながら、……」と女は、また微笑を大きくした。それきり默つてしまつたが、「失禮いたしましたわ。」いきなりかういふと、悠々と歸つてしまつた。景二に、彼女の名を聞かせる餘裕を與へぬほどの落着きである。

「……色の淺ぐろい、眼のくるつとした、インテリヂエントな顔の女でせう？ その人ならたしか荻原さんよ。小山の前の戀人なんです。小山を自分で厭がつて私に背負せた癖に、いまさらあの人から邪魔されることないわ。」

その夜景二が、房子の部屋で二人きりのとき、晝間の訪問者の話をすると、房子はかう口惜しさうに云つた。そして、「どうせ、失戀者同志の意地わるよ。」かう大膽らしく見せかけて景二に媚びた。

「房子さんが、處女でないつてことも知つてらつしやるのですか？ つてその女は云つたよ。」

景二は惱つてゐた。房子に我慢が出來なくつて、初めて惱つたのである。父親が世話になつてゐる家のお孃さんもなにもあつたものでなかつた。

「あら……」房子も顔を紅めて驚いた容子であつたが、「あなたは、なんて返事なすつたの？」

と不滿さうに云つた。

「承知してゐますつて云つた。」

「わたしを、さう思つてますの？」

「わかるもんでない。」

と景二は語氣を荒げた。

「信じて下さらないのね。そんなら仕方がないわ。」

それきり二人は、ものゝ二時間ほども默つてゐて、たうとう喧嘩のまゝで別れてしまつた。「實に、不愉快だ！」と景二が別れるときかう云つても、房子はなんとも云はなかつた。

「とにかく、あしたの朝、もう一度來る。」景二がかう云つても房子は默つてゐた。いつものやうに玄關先までなど、無論送つて出なかつた。恐ろしい妖女だ！景二は、一晩房子を憎み罵つた。夜明けになつてやうやく眠りについたほどであつた。だが、それほどまでに憎み罵るといふことは、その實房子が戀しくてたまらぬためからだといふことは、前後の見境ひも分らぬ景二にも、そのことだけはよく分つてゐた。だから、つひ喧嘩はしてみたものゝ、このまゝ永久に、いや、そんな遠い先きさきのことはまだどうにかなるとして、あくる日の一日だつて、房子と逢はずにゐることは、景二にはどうしたつて堪えられさうもないことであつた。

それが、その翌る朝、しかもこんなに早く、かうして房子から迎へが來たのである。「房子がなにか、お願ひしたいことがありますので……」と彼女の母親は云つたのだ。さうだ、お願ひつて、他にある筈はない、房子も、ゆうべのことを氣に病んで、眠られずにしまつたのだ。そして、一刻も早く、仲直りをしたがつてゐるのだ──と景二は、さうとつた。

4

熱の高い女は、ことにそれが若く、美しい女は、珍味な菓の如く食慾をそゝるものである。柔かく、あたゝかいほてりをもつてゐる香りのいゝそのどの部分に嚙りついても、とろりと腔内に溶けこんで、味慾をこの上なく滿足させるであらう。からだの奥底に潜んでゐる女らしさが、熱に蒸されて、恥らひもなく無理強いに咲かされた牡丹のやうに可憐

な匂ひを放つてもゐる。

房子は、二階の自分の部屋に、仰向けに寢てゐた。階下に、彼女の寢る部屋がないのではなかつたが、彼女はもうずつと以前から、兩親の寢室からなるべく遠のいた室を自分の寢室にしてゐた。戀人のある娘には、自分ひとりの寢室が是非必要でもあつたし、「わたし、父さまの側に寢るのは嫌ひだわ。父さまの臭ひがするのですもの。」かういふ曖昧な理窟もつけてゐた。「豚みたいな人たちと一緒に寢るなんて、堪らない。」彼女は、寢室の親達を、豚のやうに輕蔑してゐたのでもある。

醫者を迎へに行つて歸つて來た景二が入つて行くと、房子は、悅しさで眼を一杯の涙にして、無言のまゝ景二を見た。景二に隨いて來た彼女の母親は、房子が泣いてるのに氣づくと、「まア、まア、そんなに甘えて。」と心で微笑しながら、

「肯さんがね、すぐお出で下さるさうだよ。」

と醫者のことを云つた。

房子は、横を向いてしまつた。涙が、瞼から溢れて來たからである。

「景二さんに、お禮を云はないの？　房子。」かう云つても、房子が默つてゐるので、「仕様のない、我儘な娘ね。」母親は、かう云つて、階下へ降りて行つてしまつた。昨夜、歸りがけの景二が、いつになく不機嫌であつたことは、二人の擧動を常にほゝゑましく看視してゐる茶の間の母親にも、氣づかれたことである。「なにか、あつたのだ。」母親は、かういふときには、二人だけにして、そほつとして置けば、すぐまたもとに復へるものだ、と自分の若い頃の經驗から、さう思つたからである。

房子は、母親がゐなくなると、――まるで母親のかけた罠にかゝつたやうに、顏を景二の方へ向けて、じーつと、怨めしさうにみあげた。

「どうして、立つてらつしやるの？」

悲しさうな聲を出して、房子は云つた。

「うん。」

氣拙さが、まアだ溶けきらないのである。景二は、房子の枕許で、盛んに湯氣をたてゝゐる火鉢の側に坐つた。

「風邪なの？」

しかし房子は、それには答へずに、夜具の中から、手頸から先が、熟れた果實のやうに紅らんでゐる眞白な腕を出すと、

「景二さん、手。」

さう云つて、熱のために潤んでゐる瞳に、限りない愛情を籠めて、微笑んだ。……

景二は、房子の掌からくる高い熱を感じた。

「ひどい熱だね。」

「知らない。」

房子は、また恨めしさうな顏をしてみせたが、「胸が、そら、ひどい動悸なのよ。ほら。」さう云つて、握り合つてゐるまゝの手を、××××××××××。しかし景二の掌は、彼女の心臟の上×××××××××。××××××××××××××××、××××××、××××××××××××××、××××××××××

×××××。×××××××××、××××××、×××××、××××××××××××。×××××××
××××。××××××××××、××××××××××××××、××××××。

「信じて、下さつて？」

階段をあがつてくる、跫音がして來た。警蹕のやうに、いつになく氣取つて高い。

「景二さんが、寒いと思ひまして。」

さう云つて房子の母親が、置炬燵をもつて來たのである。

醫者が見えた時でも、彼女の母親は、房子を景二にまかせきりであつた。景二は、診察する醫者のために、房子の蒲團を剝いで、胸をはだけさせてやつた。房子は、診察を受けながらも、絶えず景二の瞳を見入つてゐた。耻しさうに、擽つたいやうに、「ほら、見まして？」さう云つてゐるやうな、うつとりとした微笑の電波を送りながら。生硬つた乳房は、眼のあたりにみると、春を迎へた梢の芽のやうに、若々しい血汐を淡紅色にうすめて、羞しく色づいてゐた。草苺に似てゐるのだが、あんな野生なものではないのだ。

景二はその日、勤めを休んで、一日中、夜遲くまで、彼女の側に添うてゐた。

「わざと、病氣になつたのだわ。あんまり口惜しかつたから。口惜しい、口惜しいつて思つてゐたら、嚇つと熱が出て來たのよ。」

二人が打ちとけると、房子は、「からだだつて、自分の思ふやうになるのだ。」と、誇らしげに云つた。

「菅さんていふ醫者、ね。厭な奴だな。」

「どうして。あの人親切な方よ。」

「その親切らしいとこが、僕は嫌ひだな。いやに、口髭などを刈り込んでさ。刈り込んだ口髭なんてものは、どこか、人をごまかしてるやうでね。ことに、女を診察する醫者には、もつとも禁物な奴だ。勝手なことを考へてながら、あの口髭で、謹嚴らしくごまかしてゐるのだからな。」

「やきもち燒き。」

5

房子の病氣は、貧乏人の金儲けの如く、思はしくなかつた。感冒だとばかり云つてゐた醫者は、熱が疾うに退いても、呼吸と脈搏とが狂つてゐる容態に、頭を大學教授の如くにかしげた。

醫者は、最初の中、靜養が第一であるといふ病人への注意を、多く景二に向つてしたものであつたが、しまひには、房子の母親にだけ、仔細らしく耳打ちした。

「醫者がね、靜養しなければいけない、つて云つてましたよ。」

母親は、房子から景二へと瞳を移しながら云つた。それで景二も、かう云つてみなければならなかつた。

「僕が、そばにゐるといけませんね。お喋りばかりして。」

「お喋りしてるから、まアだいゝんだわ。」

と、元氣だけは衰へない房子が、すぐ取消した。

これだもの、とても、私などが注意したつて駄目だ。——と母親は、思ひ切つてしまつた。

「そんなことは、ありませんよ。房子は、景二さんの云ふことでないと、きゝませんもの。」

「それよりね、母アさま。」と房子は、疲れをみせてゐる眼元を、紅くして云つた。「ゆうべ、相談しましたのね。」
「なアに？」
母親は、わざと氣づかない振りをしてゐた。
「景二さん、ねえ、母アさまが、もう五ツ晩も私に附ききりで、可哀相なほど睡眠不足なのよ。だから、今晩だけ、あなた母アさまに代つて下さらない？」
「おうちで、叱られませんこと？」
世話してゐる家の息子だもの、なんで叱られる筈がない、母親はかう信じてゐるのだが、それよりも、房子の側に景二を寢かせることは、逆に氣がすゝまなかつたのである。といつて、病んでゐる一人娘の我儘は、無理だからつて、通さしてもやりたかつた。
「うちへ、ちよつと、斷つて參りませう。」
素晴しいことが、始つた！景二も、とり逃してはならないと、恥しさを殺して、躍氣になつた。彼は、朝議の一變しない中にと、胸を躍しながら家へ歸つた。
他人の前では謙讓な景二の父も、家庭に在つては、忠君愛國論者で、自分で子供を產みながら、禁慾主義者の如く謹嚴であつた。景二は、ちよつと云ひ出し惜かつたが、相手が他ならぬ黒川家のことだからと、狡猾にもやゝ多寡をくゝつて、その夜一夜を。房子の附添人になることを云ひ出した。
「お孃さんの？」
その顏が猿のやうに見えたほど父親は、驚異な話に慌てたが、「奥さまが、お前に頼む。つておつしやるのか？」と、

恐縮さうに念を押した。

「そんなら、いゝとも。他の家なら駄目だが、黒田さんのことだから、いゝとも。いゝのくらゑねえ。」

と、父親は田舎訛りで、光栄らしく云つた。

浦島太郎が、亀に乗り、浦島太郎が亀に乗り、浦島太郎が亀に乗り、行くや、千尋の海の底……景二は、子供のやうに舞踊りしながら、浦島太郎の唱歌を繰返しながら、房子の部屋に戻つて來た。

6

景二は、二十七にもなつてゐたが、まだ、子供であつた。彼は、房子の側で一夜を、彼のために拵えてくれた置炬燵××、××××××××、××××××××、×××××××××、××××、××××××××××××××××××××。××××××××××××××××、×××××××××××――さうだ、前に草苺に喩えたが、この方がどれくらい適切だか知れない――の痛感に、始終心は魅せられ、憬れてゐたのだが、つひにそれに觸れてみる果断もなく、夜を明かした。瞳と瞳を、じーと見詰め會つたまゝ、思ひ出したやうに、愛情を籠めて笑ひ合つたり、噴火してくる衝動に、思はず握つてゐる手に力を入れて、眼を瞑つたりしながらである。

房子は、やうやく、窶れを見せて來てゐた。手首の瘤もなくなつてしまつたし、白く奇麗だつた歯並みが、水々しく透き通るやうになつて、變んに大きく目立つて來てゐた。

「どう、よく、眠むれて。」

翌る朝、母親が二階へあがつて來たときには、房子は、細つたとはいへ、まだ窶れを見せない二の腕までも出して房

房々とした髪をうるささうに解いで、束ねてゐた。

「えゝよく眠れたわ。景二さんの方が、母アさまよりも忠實よ。」

房子は、かう云つたきり、母親を無視してしまつて、「驚くでせう、こんなに澤山あるのよ。」などと云ひながら、いろいろな形の髪針(ピン)をあるだけ拔いて、景二に見せた。

7

薔薇の香りを、もつともよく知るためには、眞盛りの一輪を手折つて、まさに凋んとするとき嗅ぐのがもつともいゝのである、といふやうなことを景二はいつか聞いたことがあるが、病に罹れた若い娘といふものは、恰も凋まんとする薔薇のやうに、ひどく香りの高いものであつた。景二は、野良犬のやうに、その香りから、離れることが出來なくなつてしまつた。勤めに出かけるやうな様子をして、家は出るが、その足で房子のところへ行くと、そのまゝ夜遲くまで附いてゐた。だが、徹夜して彼女の側についてゐるやうなことはなくなつた。外聞を恐れ出した房子の母親が、それだけは、どうか遠慮して欲しい、といふ歎願を、それとなく素振りで、房子と景二へ訴えてゐたからである。

8

その晩、房子の母親は、丸ノ内の劇場へひとりで出懸けて行つた。出張先の黒田から、三四日中に歸つてくるといふ便りがあつたので、急に、思ひたつたのである。黒田は、女たちの芝居見物を、ひどく嫌つてゐた。芝居から歸つて來ても、役者の噂ばかりして、側にゐる黒田の存在さへ無視するからである。

「景二さん、母アさまと一緒に行つてらつしやい。ローマンチックで、素的だわ。」

房子は、同じ言葉で景二を揶揄つたことを思ひ出して、悪戯者らしく笑つてゐた。

「それでは、房子ひとりを置いて行くの？」

母親も、眞面目に聞いてはゐなかつた。

「えゝ。だつて、景二さんが、母アさまと一緒に行きたいのですつて。」

「嘘ですよ。嘘です。」

景二だけが、眞劔に取消した。

母親が出かけて行くと、彼等二人には、なにか、途徹もない罪悪を仕出かしたやうな衝動が、鼠の眼のやうにチョロチョロと動いて來た。二人は、もう手を握りあふだけではどうしても滿足が出來なかつた。×××、×××××××××××××××××、×××××××××、××××××。

房子は、キネマの女優のやうな巧みな接吻をしやうとして、薔薇の花瓣のやうに×を開いたのである。が無經驗な、野蠻な野良犬のために、美しい花瓣は、無殘に嚙みくだかれてしまつた。――景二は、夢中のうちでも、宮廷員のやうに經驗の積んだ禮儀を心得てゐる房子に、苦々しい嫉妬と不滿を感じた。

一時間近い時刻は、そんなことのために費された。……

「……母アさまがね、ゆうべ、景二さんが歸つてから、それア、ひどいことを云ふのよ。」

と房子は、それを景二に聞かしてやるのを樂しみにしてゐたことを、話し出した。

「……わたしの病氣が、いつまでもはつきりしないでせう。それで母アさまはね、房子は、赤ちやんが出來たのでな

いの？　つておつしやるのよ。ひどい侮辱でせう。わたし、憤つてやつたわ。母アさまは、自分たちがさうであつたものだから、私までさうだと思ふの？　つて。――面白いことを教へてあげませうか。ね、わたしわね、母さまたちが、まだ結婚しない前にお胎にあつた子供なのですつて。驚くでせう。母アさまは、わたしがそのことを知らないと思つてゐたのでせうね。だから、可哀想に、すつかりどぎまぎしてしまつて、なにね、もしやと思つたものだからつて、眞紅な顔をして、申譯してゐたわ。」

「でも、母アさんが云つた通りかも、知れないよ。」

景二の心は、變んに萎縮して、歪んで來てゐた。

「まア！」房子は、不服さうに仰山に云つたが、「覺えがあつて？」と、限りない媚で景二の瞳を捉えると、クスクスと笑つた。

「僕にはないが。」

「そんなら、そんな筈が、ないぢやないの？」

「でも、……僕は、知らないが。」

大抵の女は、戀愛の天才家だといふが、房子などはまさしく、その中でのチヤンピオンらしかつた。それまで嫣然と興じてゐた彼女は、ぷうつと憤つたかと思ふと、暫らくじつとおし默つてゐたが、悲しさうに涙を浮べて來た。……

「ごめん、なんだか、妬けて來たからだよ。」

と景二は、房子の機嫌をとらうとした。

「いつまでもあなたは、私を責めなさるの？」

涙聲で房子は、怨めしさうに甘えた。

「責めなんかしない。たゞ、妬けてたまらないんだ。」

「やきもち燒き！」

驟雨はもう、通りすぎた。「ほら、ごらんなさい。こんなに胸が波打つてるぢやないの？」景二の手は、房子の動悸の高い心臓の上に、載せられた。

「そんなことを云ひながら、私たちをかうして二人きりでおくのは、もうなにもかも許されてるやうなものね。それだのにわたしたちは、かうして純潔なのだわ。」

「あまり、純潔でもないが。」

と景二は、苦笑した。

「さうね。」と房子も笑つた。「臆病者なのだわ。」

殆ど同時に、二人の腕は、相手の頸筋を締めつけるやうに捲いて行つた。かういふときの房子は、病人とも思はれないほど力があつた。窶れてゐるのにあまり力を入れ過ぎるからであらう、電流が通じて來るやうに、小刻みなチクチクした疼ひが、景二の首元に感じられた。

「勇氣を出して、ひとつお願ひしてみようか。」

――景二が、房子の耳元でさゝやいてゐた。

「なアにを？」

「母さんにね、一緒にさして下さいつて。」

「……でも、そんなこと、もうどうでもよかない？　私たちさへしつかりしてゐれば。」

「それは、さうだが。」

——二人の間に結婚の話が出たのは、これで何回目かである。提出者は、いつも景二であつたが、その都度房子は、「そんな野暮つたい話」とでもいふ風に、折角の提案に身をいれなかつた。

「それになんだわ、憖ひ親などの許しを得たり、厄介になるよりは、私たちだけで、自由にやつて行つた方が、面白かない。妨碍するものがあつたら、戰つて進むわ。そこへ行くとわたし、親だつてなんだつてかまわない積りよ。」

　かういふのは、いつもの房子の口癖であつた。

「景二さんは、小說などを讀んでる癖に、案外律義者で、古るくさいのね、そこが賴母しいんだけど。」

「小說的にはふるくさいかも知れないが、」と、景二は、戀愛の初心者なるが故に、房子の前だけではいやに遠慮して、萬事に控え目にしてゐる自分を齒痒く思ひながら、云つた。

「……しかし、いざとなると、なんでもやるよ。僕にもこれで、新しい思想があるんだ。だが、戀愛にはどうも不馴れなので、それをどう實際化していゝか、實は間誤ついてゐるんだ。」

「その中に、わかるのね。」

と、房子は、悦しさうに燥いだ。

「その中に、うん、屹度その中にね。」

景二は、無雜作に、だが確信あるやうに繰返した。

「さう賴母しいわ。いつさう賴母しいわ。」

房子の腕が、爬蟲類のやうに動くと、××××××、×××××、×××××××××××××。××××××、×××、××××××××××、×××××。×××××××××××、晨二には氣になつたが。

9

突然に廊下の障子が、實に突然に癇癪を起して開いた。そしてそこには、氣難しい顏をした黒田が、一つ目小僧の怪化物のやうに立つてゐた。二人は、まつたく打ち据ゑられてしまつた。――旅行先から、豫め報せておいた日より早く歸つて、留守中の家庭の虛を衝く。黒田は、出張中、檢査官として行く先き先きで增長させた摘發癖から、これまでもときどき、こんな謀略を用ゐたことがあつた。だが、留守居のものは、つひぞ彼の謀略に陷つたことがなかつたので、注意せずにゐたのである。――

二人にとつては、ひどい失態であつた。だが、黒田が歸つて來ようとは、思ひも及ばぬことであつたし、母親が芝居から中途で歸つてくることも、全然豫想してゐなかつたし、よし母親が中途で歸つて來るやうなことがあつても、粋な母アさまのことだもの、無警告で戀の密室に闖入するやうな無作法は、斷じてしないであらう――と二人には、無意識のうちにさう決めてしまつて、すつかり油斷してゐたのである。

――黒田にしてみれば、それこそ氣紛れな一つ目小僧にでもなつた積りで、心持と足跫とを忍ばせて、久らく振りで歸つて來たのである。これまでのやうに、摘發癖が滿足されないとして、意地張りの女房を、あつと驚かすだけでも、謀略の甲斐はあつた。彼が、玄關に入つて行つても、女房は迎へてくれなかつた。彼の歸りを氣着かずにゐるのだら

う――さう思ふと黒田は、いつさう一つ目小僧の積りで、意地わるい微笑さへ洩らした。ところが、さういふ彼に、見馴れない男下駄が目に止つた。――恐らく景二で、あの青つぽい奴のであらう、と黒田は、ひどく不機嫌になつた。そこで彼は、もう一つ目の小僧のやうな怪化物ではなくなつて、檢査官として、荒々しく茶の間へと這入つて行つた。女男の姿がそこにも見えない代りに、彼女の普段着が、色褪せた肉色の襦袢の内側をのぞかせて、彼の謀略を嘲つてゐるかのやうに、脱ぎ捨てられてあつた。黒田、自分の術策が意外の効果を收めたことに、腹立しい滿足を覺えた。そこで彼は、變んに歪められた氣持ちで、二階の房子の部屋へ、忍びあがつたのである。……………不義者の氣配がする！證據は十分である！どこかで凱歌を叫んだ！黒田は深い思慮もなく、腹立ちまぎれに障子を開けた。そして彼は、惘然とした。或る瞬間、彼自身で自分の娘を侵したやうな、なんともいへない厭な、不義感に傷けられた。………

三人の中で、房子だけが、――それもあやうくではあるが――口をきけた。彼女は、「父さま、房子は、病氣でこんなに窶れたのよ。」といふやうな哀憐を求める瞳で、顔を眞紅にしながら、

「お歸へんなさい。」

と云つた。彼女の父親は、なんとも返事をしなかつた。憤激が、いまにも爆發しさうな、それでゐて、いまにも泣き出しさうな父さまの顔をして佇つてゐるだけである。

黒田を、どぶ鼠の如く輕蔑してゐる景二にも、その場を切り拔ける、何んらの方法もなかつた。留守中の出來事を彼に愬えたならば、當然過ぎる當然な理由はつくのである。だが、そんな細々しいことを、泣言の如く彼に愬えるのは、景二には出來さうもなかつた。さうなると、密會に別な理由などつくものでない。密會したかつたから、したまでのことである。それに恥しさが、景二をすつかり悄氣させてしまつた。房子の枕許から離れた景二は、坐つたまゝ、身體ひも

せずに、俯向いてゐた。

「母アさまはね父さま、お芝居へ行きましたのよ。」

しばらく經つと、また房子がかう云つた。だが、それきり言葉はまた絶えてしまつた。家内の氣配は重苦しく、その場を窒息させてしまつた。……

ものゝ小半時も經つてからである。

「とに角景二君は、歸つて貰はふ。」

と黒田が、威壓するやうに、澁々云つた。

「歸ることなんか、ないわ。」

弱々しい聲だが、はつきりと房子が反對した。

「お前などは、默つてるがいゝ。」黒田は、やうやくさいぜんからの感情の疏け口を見出しやうに勃然と云ひ出した。「さア、僕の家から歸つてくれたまへ。理窟好きの君のことだから、なにか文句があるのかも知れないが、僕は、そんなものを聽く必要がない。いゝ機會だから云つておくが、今後、僕の家へ來ることも、斷じて止して貰はふ。僕の家では君などに少しも用はないんだから。」

「父さま、失禮ですわ。」

「餘計な、口出しするな。」

「父さまにご用がなくても、母アさまにありますわ。」

「なに、母アさまだつて。母アさまになんの用事がある！」

「あるかないか、お聴きになつて？」
「默つてろ！　母さまが、なんだ！」
「母アさまだつて、うちの人ですわ。」
「房子！」黒田は、癇癪を爆發した。「お前や母アさまになんの權利がある！　なんでもいゝ、景二君、君は早く歸りたまへ！」
「權利の問題なんか、母さまの前でおつしやつたら、いゝでせう。」房子には、母親の前ではいつも遣りこめられてゐる父が、こんな口を利くのが、をかしくもあつた。「……景二さんは、母アさまが歸るまで、いらつしやるといゝわ。」
無氣力者の如く俯向いてゐた景二は、黒田の暴言と、案外な房子の支持とによつて、自分の言葉を、やうやく見出した。
「いや、僕は歸る！」
「歸りたまへ！」
「歸るとも、失敬な！」
景二は立上つた。罨炬燵と黒田と障子との三點で屈折してゐる通路を彼は、まつすぐに歩いて、黒田の家を出た。
芝居からおそく歸つて來た細君は、いつのまにか戻つて來てゐる黒田が、彼女の顔を見るといきなり怒り出したのを、着換えするついでに聴いてゐた。そして彼女は、黒田がおこつてゐることがいちいちもつともなので、腹を立てゝしま

つた。
「あなたも、しばらく家をおあけになつてゐて、歸りなさる匆々、怒つてらつしやらなくともいゝぢやありませんか。」
と彼女は、良人をたしなめるやうに云つた。
「なに？そんならお前は、僕が勝手に家を明けたとでも思つてるのか？」
「誰も、そんなこと申しませんよ。」と彼女は、ちよつと言葉を切つたが、黑田がなにか云ひ出しさうなので、喋り出した。「……あなたも、さういちいち外で働きなさることを、恩に被せなくとも、いゝぢやありませんか。それに房子だつて、病氣で寢てますのに、その枕許でがみがみ怒りなすつたつてたゞ氣を揉ませるだけでせう。そんな話は、いくらでも靜かに出來ます。」
「なにも、俺だつて好んで怒りたくはないさ。」ちよつとしたきつかけから、すつかり防禦的な立場に置換えられた黑田は、自分の立場が不利であればあるだけ、却つて勝手な理窟を設けて負けてゐぬ女房を、心から憐れつたく思つた。これは、黑田が結婚しない前から彼女に抱いてゐる不滿である。また、今後の黑田の一生を不幸にさせる生活の斑點でもあつた。彼は、變んに味氣なくなつて、愚痴つぽく調子をさげた。「……大事な仕事をやうやく果して、久し振りで家に歸つて來たのだからな。俺だつて好んで怒りたくはないさ。だが、あんまり、不仕鱈ではないか。」黑田はそれでも、女房が芝居へ行つたことだけは、繰返へすことを控えた。「女なんてものは、いくら利巧だつて、家の中にばかりゐるから、世間の人を見る眼がない。そこへ行くと俺などは、今度の出張中だけでも、何百人といふいちいち異つた人を見て來てゐるのだ。だから、この人間はどういふ奴だか――つて位のことは、一見するとすぐ分る。分らないなら、こんな仕事が出來るものか。そこへ行くと、谷澤の景二なんて奴は、あれはなんだ。聽ッ齧な學問を少しばかりしたのをいゝ

氣になつて、此頃の碌でもない思想にかぶれて、社會がどうしたの、家族制度がどうだのと、さういふ奴に限つて、滿足な奴はない。」

「景二さんが、そんな難しい議論なんか、云はないでせう？」

黑田の細君は、事實、景二からそんな理窟を聞いたことがなかつた。たぶん黑田が、いゝ加減なことを云ふのだと思つた。――黑田は、まアだ景二を信用してゐるらしい女房の口振りで、いつさうむかむかして來た。

「勿論、お前や房子の前などでは、云はなかつたらうさ。そこがあの男の狡いとこなんだ。お前たちは、あの男が猫をかぶつてるのを知らないんだ。」黑田は、二階で目擊した忌はしい光景を思ひ浮べながら、物語にある怪化猫に自分の娘が、骨までもしやぶられてるやうな悲痛な、そして嫉しさを覺えて來た。「……だが、俺と二人きりだと、きまつてそんな屁理窟を俺に吹きかけて、俺を遣り込めようとしてゐた奴だ。あの男は、新聞記者などをしてるが、性質のよくない社會主義者なのだ。お前は、俺があの男を嫌ひなところから、いゝ加減な出鱈目をでも云つてると思つてるらしいが、いまに見ろ、あの男は屹度警察に擧げられるから。尤も、あんな男が、どうなつたつて、少しも痛痒は感じないさ。だが、房子のところへ近づけるのは、絕對によくないよ。今晩だつて……（二人は、犬の眞似をしてゐたぢやないか、と黑田は云はふとしたが、彼等にも經驗のあることを、さう口汚なく罵ることも出來なかつた）……二人だけにして、あんな風に置くといふことがないぢやないか。房子にも近く養子を探さなければならないのだが、まさかお前は、景二などを當にしてるのぢやあるまいね。」

「誰も、そんなことを申しませんよ。」

[illegible]前のことさ。」と黑田は、女房が彼の言葉にやうやく眞面目になつて來たらしいので、勢ひづいて來た。「谷澤のや

うな看守の伜がなにゝなる。それに家柄もさうだが、本人が第一だ。」……それから黑田は、云い難さうに云つた。
「……せめて、法學士位でなければ。」
二十年近くも官吏生活をして來た黑田には、學校を出て三四年もすると、彼の地位を跳び越えて、彼の頭の上でふんぞり返つてゐる若い法學士が、青年の中で一番有望に見えるらしかつた。
「法學士もいゝわね。」
と細君は、ますます從順になつて來た。
「うん。それもわるくはないが。」
「景二さんだつて、大學は出たのでせう？」
――まだ景二のことを考へてるのか！　黑田の靜まりかけた心は、苛立つて來た。
「あの男のは、大學だつて、私立のそれも特科といふ奴で、正則に大學を出てゐるのではないよ。軍隊で云へば、恰度一年志願のやうなものだ。」――その實黑田の豫備陸軍大尉も、北清事變當時の一年志願兵であるのだが――。「あんなとこに出たつて、口一つ利けるものぢやない。」
「でも、いゝお給料をとつてゐるぢやないの？」
「當てになるもんか！」
と黑田は力を入れて云つた。「なんでもいゝ。房子が學校を出たら、早速養子を探すことにしやう。その爲めにも、景二などを絕對に出入さしちやいけない。谷澤にも僕から云つて置くから。」
「景二さんなどはどうでもいゝとして、そんなに手取り早く、こつちで望んでるやうな者が、みつかるかしら？」

負けぬ氣の女房が、いつになく、こんな弱音を吐くかと思ふと。黒田には輕蔑されて來た。

「黒田家ほどの財産があつて、みつかるかみつからないか。まア俺にまかして見て居るがいゝ。」

景二よりは法學士の方が、どうやら數等傑いらしい。——この傑いといふことは、取りも直さず、經濟的價値が大であるといふ意味らしかつた。——それに、娘の養子を探すのは、男親の役目でなければならない。黒田の細君は、かう都合のいゝ理窟が、すらすらと湧いて來たので、それきり默つてしまつた。

11

朝議は一變した。形勢は、景二にとつては、總てが不利であつた。——その翌朝彼は、黒田がもう勤め先へ出かけた時分を見計つて、黒田の玄關へ立つた。玄關の格子には、珍らしく中から栓が挿されてあつた。早くも彼は、いつもと異つた冷たい氣配を感じた。だが彼は、普段のやうなつもりで聲をかけた。

「戸が締つてゐるのですが、おあけ下さい。」

奧の方から出て來た房子の母親は、下駄をはいて土間まで下りて來たが、締りを開けやうともせずに、小さな聲で憚るやうに云つた。

「うちが、居りますのよ。」

「さうですか。」

景二は、間牒からの密告でも聞いているやうに、微笑しながらうなづいた。だが、間牒は彼の微笑に應じないばかり

か、その凝集してゐる表情には、叛反が明らかに蠢動してゐた。彼は、唯一人の味方が敵に寝返りを打つたことを、はつきりと知らされた。

ウフン、ウフン――といふわざとらしい咳拂ひが、茶の間の方から流れて來た。房子の母親は云ひ難くさうに、だがさういふ表情の中には、こんなに云ひ澁るのはあなたを氣の毒と思ふからなのよ、それにつけ上つて口應えでもするなら、もつときつぱりと拒絶してやる――といふやうな威味をかくさずに、賺めるやうに云ひ出した。

「……うちでね、それアひどく怒つてますのよ。それに、わたしもうつかりしてましたが、考へましたの。娘のゐる家に若い男の方に出入りしていたゞくのは、近所の手前もありましてね。……わるくとつていたゞいては、困るのですよ。」

房子の母親は、かう云つたきり口を噤んでしまつたが、景二がむつとして、何か文句をでも云ひたがつてゐさうなので、瞳を外方へそらすと、

「今日も、いゝお天氣ですわね。なんて寒いでせう」

と、お世辭を云つた。

天氣が晴れ渡らうと、寒さが續かうと、景二にとつてはどうでもよかつた。それでも彼は、黒田の玄關先に立つてゐた。このまゝにして去つたならば、それきり絶望が迫つて來てゐたし、それに、ひつ込みがつかないやうな、變んにぎこちない空氣に彼は、窒息しさうで身動きも出來なかつたからでもある。

「だん〳〵、寒くなりさうですね。これからは。」

默つてばかりゐるわけにも行かないので景二は、腹立しさうに云つた。

「どんなにしてゐますと、他人目に立ちますから、お氣をわるくしないでね。」

賺すやうに房子の母親が、立ち去ることを促したてた。絶望は否應なしにおしつけられた。それでも引つ込みだけは、いゝ機會であつた。彼は、人形芝居の木偶のやうにすごすごとそこから去らなければならなかつた。

景二はその夜から、――女に逢ふことを堰かれた大抵の男がやるやうに――黒田の家の周圍を、まるで動物園の虎のやうに荒々しくぐるぐると廻り歩いてゐた。景二の場合は、かつて房子が、二階の部屋にかうして病んで寢てゐると、その跫音で、景二が遠方から歩いてくるのがよく分ると云つたことがあるので、檻の外へ抛り出された彼が、檻の中の彼女を如何に戀ひ慕つて、荒れ狂つてゐるか、といふことをせめて房子へ知らしたかつたからでもあつた。もつとも、そんな目的がなくとも、房子に合ふことの出來なくなつた彼が、彼女の臥てゐる家の周圍でも歩かないで、なに一つ他に採る策があらう。

宵の中には、虎の如く荒々しく廻り歩いた彼も、夜も更けて、人通りがなくなる頃には、だんだん速力が鈍つて來て、熊のやうにのそのそとうろつくやうになつてきた。その代り、それまで嵐のやうに荒れてゐた頭が透明になつて、鋭敏に活動し出すのである。彼は、霜が小雪のやうに結晶する夜氣の中で、房子と逢ふには、それから房子を完全に得るためには、どうすればよいかを考へた。だが、どう考へてみても、尋常のことでは、全然見込みがなかつた。そこで彼は、たうとう――黒田から彼の家を追れて極度に憤慨した晩に思ひ立つて、それ以來常に胸深く蓄藏してゐた非常手段である――最後の策をとるより他はないと覺悟をきめた。それを實行する方法としては彼は、先づ内から戸締りのしてある家屋に、どうしたならば家人に氣遣れずに忍び込まれるかを考へなければならなかつた。さういふときの彼に、活動俳優のやる自雷也の忍術の場面が思ひ浮べられて來た。彼は荒唐無稽な空想に思索が散つて行くのを振り拂ふために、頭

を強く横に振つた。日常のことには殆ど能力を失つてゐるやうな彼にも、この畫策にだけは驚くべき思索がめぐらされた。──それこそ、勝手知つたる邸の容子、である──と景二は、自信を以て瞳を瞠つた。内から錠を下ろしたり、閂を掛けたりする家屋に侵入することが出來ないことになつてゐるのは、從來の習慣に過ぎないのである。それを無視したものは、いくらも例があつた。泥棒がそれであつた。強盜になるとそれを無視した上に無視された者を兇器で威嚇した。この強盜と同じ性質のものに軍國國家があつた。法律を楯にとる執達吏があつた。このやうなテロリズムを更らに他の方面にその例を求めるならば、到底數え切れるものでない。なんだかんだと云つたところでいまの世の中は、要するに威嚇主義全盛の時代である。

──景二は更らに、もつと實際的な方法について考へてみた。いよいよ實行することになつても、先づその時機を選ばなければならなかつた。それには房子の病氣がもつと快方に向つてくれなければいけなかつた。夜分、彼女の側に家人が附いてゐるやうなことがあつては、目的が達せられなかつた。黑田が歸宅以來、房子の病床が階下に移されないとも限らないのである。で彼は、それを確める爲めに──もうだいぶよくなつてゐるのだから、いま一週間も經つたなら──房子の罹つてゐる醫者へ電話をかけてみることにした。「私は、黑田の親戚のものですが、」かう云つてから、「黑田の家でよくお目にかかりましたものです。病人が色々お世話樣になりまして。……」と、先方の出樣ではかうも云はう。「實は、私も忙しくてその後訪ねないのですか、病人は如何でせうか。もう床より離れてゐるでせうか。」それから醫者の返事次第で、「二階の上り降りなどにも不自由しなくなりましたでせうか。」と尋ねればいゝのである。さうすれば、房子の容態さへ突きとめることが出來るわけであつた。こゝでちよつと懸念されたことは、ことによると醫者が、彼から電話のかゝつたことを黑田の家へ行つて話すかも知れないといふことであつた。だが、それはたいした問題にはならな

かつた。房子の耳に入ることは、彼女に逢ひたいためにいかに苦しんでゐるかを報らせることになるのだから、これは寧ろ望ましいことである。黒田夫婦は——あの人でなしのづけあがりもの丶馬鹿な奴等は、と景二は罵つた——彼が苦しまぎれに口から泡沫を出したのだとせゝら笑つて、この上世間態のわるいことを仕出かしてくれなければい丶がと惧れながら、腹を立てる位が關の山であらう。忍び込んでからの彼は、少しも躊躇は要しなかつた。そのことは、もう幾日か丶つて十分なる用心と計畫とをつくしてゐた。都合がい丶ことには、二階へ行く階段は、黒田夫婦の寢室とは二間も隔つてゐた　彼はその階段を、音のせぬやうに靜かに彼女の部屋へあがつて行けばい丶のである。こ丶で注意を要することは、急激に彼女を驚かして、突嗟に聲を立てられるやうなことがあつては困ることであつた。で彼は、彼女の部屋に入る前に、先づ、音のせぬやうに障子へ——唾をぬらして——穴をあけて、部屋の容子を窺つてみようかしらと考へた　さうすれば、萬ケ一彼女の他に誰かが寢てゐるやうなことがあつても、それを豫知することが出來るのである。だが然し、その場合、彼女が眼を覺してゐるやうなことがあつて、障子を舐る闖入者に氣づいたらどうであらう。それこれ彼女は、適切り救ひを求めて叫ぶに違ひない　で、この試みは拙劣であつた　それに闘士なるものは、戰場に臨んだが最後、間髪を容れざる電光的な活動が敵を制するものである。そこで彼は、深夜の侵入者が彼であることを、なによりも先きに房子へ知らせる必要から、二階へ上るや否や、迅速にしかも靜粛に彼女の部室へ闖入しようと考へ直した。そして、これまで彼女や、彼女の母親へ遠慮して、温順に、戀の奴隷者の如く振舞つてゐた欺瞞的な假面を脱ぎ捨て丶、儼然たる態度を以て房子の心臓へ迫つて行かう。だが、愛し合ふものにそんな堅ッ面は無用な業である。彼女は、彼の姿を見出したならば、花吹雪のやうに取亂しながら悦び迎へてくれるに違ひない。さうなれば、もう計畫も用心も必要はないのである。たゞ二人は、××××××××い丶のである。骨と骨とが觸れあふやうに燃くである。房子

は、いつものやうに取り消して×××××××××。「……×××××××、」と景二は、こゝまで考へを續けてくると、きまつて恍惚的な錯亂れ眩暈を催して來た。「……××、××××××××。××××××××、×××××××××××××××××。」かう思ふと彼は、すぐにも房子の側へ驅けよりたい衝動に驅られた。たまらなかつた。その一面には、いかにも經驗者らしい手際のいゝ彼女に、悩ましい嫉妬感が湧いて來た。さういふとき景二は、房子のために荒れ狂つてゐる自分を淺猿しく思ふことがあつた。半年近い成長期の大切な時間を、房子のために徒らに費されて、怠け切つてゐる自分が腑甲斐なく蔑れて來た。要するに景二は、戀愛至上主義者ではないのである。だが、さういふ自己哀憫や自責の鞭も、結局は、愛戀の悶えを煽りたてゐるに過ぎなかつた。彼はもう幾晩となく房子の家の近邊をさまよひながら、彼女の室へ忍び込む方策と、それを果したときの恍惚に幻想を疲らせた。

……よし、この計畫が、實行の半ばに於て黒田夫婦に露見されようと、そのときは、腕力を以て彼等を打ち据ゑてまでも、房子に接近して行かうと彼は思つた。優越的な、その實内容の空虚なつけ上つた觀念を以て、人間の魂をまでも翻弄し、蹂躙し得ると思つてゐる階級への挑戰でもある——と景二は、いつの間にか、戀人の部屋に忍び込むことを、階級的な正義感にまで高めてゐた。

12

懐しい景二さま、私の戀しいあなた。

あのことがあつてからの房は、物狂ほしいばかりにわなないて過して參りましたの。ことにこの頃の房子は、可哀想に、懐しいあなたの幻しを抱いて泣き伏してゐますの。初めのうちこそ往來から聞えてくる物音のなかから、おみあ

しの運びをそれとなく知ることが出來ましたものを、今日此頃の房は、風の音にさへあなたの氣配が感じられて、胸の休まるときとてもございませんの。房の心は、あなた戀しさに嵐のやうに荒れ狂つて居りますわ。檻に入れられたと同樣な房は悲しうございます。

しかしね景二さん、こんなことを申上げますとあなたから薄情な女とお叱りを受けるかも知れませんが、そして房にはそれがなによりも苦しいのでございますが、いろいろなことを考へてみましたの。親の心に叛くのは厭ひはいたしませんわ。あなたの胸になにもかもおまかせすることは、房がこの世でのたゞ一つの望みなのですわ。しかしね、わたしたちきりになつたとき、房が今度のやうにながわずらひでもしましたら、その上あなたから履きふるされた下駄のやうに捨てられるやうなことでもあつたら――いゝえ、決してあなたをお疑りするのではないの。さういふ運命が房には必然なことのやうに思はれてなりませんのよ。そのときわたしはどうなりますのでせう。お蔑み下さい。房は矢張り弱い女なのよ。たゞわけもなく臆病になつて參りますの。そして意氣地なく親のいふ通りにならうといふ氣になつて參りますの。おかくしいたしませんわ。親は私に結婚をすゝめて居ります。このやうに病み疲れた私にですわ。

房はいま、小羊のやうに迷つて居りますの。とてもいまの房の氣持ちを誤解のないやうに申上げることは、心亂れてゐる房には難かしうございます。

それでね景二さん、いつぞやあなたを新聞社へお訪ねしました私の友達の方ね。矢張り私があのとき想像しました通り狄原さんていふ方なの、この人も氣まぐれな方ですわ、一時はあのやうに私たちの仲を妨害しながら、いまでは私の心苦しい立場に同情して心配してくれてますの。昨日も見舞に來てくれましたのであなたへの僞らない房の氣持ち

などを詳しく話しました。景二さん、済みませんが近い中に一度狹原さんにお逢ひ下さいませんでせうか。あなたから先方へそのことをお知せ下さいますと、たぶん狹原さんは學校の歸り道に、あなたを新聞社の方へお訪ねして下さることになつて居りますの。あの方の住所は、市外下澁谷七七六です。狹原さんのお名前は茂子とおつしやるの。お家は評判な矢釜し屋なのですから、房子の名前にてお手紙をお出し下さいませ。

房の病氣はその後かへつてわるくなりましたやうです。でも、わたしのからだなんか、もうどうでもよろしくなりましたの。なにもかもあなたに捧げてしまつた房ですもの。あなたとお別れして他になに一つ望みがございませう。ではこれでごめん遊ばせ。お短氣など起して下さつては困ることよ。房はあなたの御幸福を陰ながら祈つて居ります。

悲しい房より

拜啓突然お赦し下さいませ。別封、房子さんよりのお手紙、一緒にお送りいたします故、その方をごらん下さいました上でお讀み下さい。

房子さんよりの文中に、私があなたをお訪ねいたしますやうなことが書かれてある筈ですが、そして私も一時はさういふ心になりましたものゝ、よくよく考へてみますれば、事件の性質から見まして、第三者があまり容喙すべきことでもなく、それゆゑたとひお目にかゝりましたとて、特に私からあなた樣へ申上げたきことは、たゞの一語につきることですから、失禮ながら手紙を以てお許しを願ひます。

それと申しますのは、あなたが純眞なお心から、本當に房子さんを愛し、あの方の幸福を心から望んでお出になりますならば、房子さんの自由意志を十分にお認め下さいまして、房子さんの希望通りにこの事件を御解決下さらなけ

ればなりませんといふことです。

それについて思ひ出しましたが、有島武郎氏の著書に、愛は限りなく奪ふといふのがございます。あの言葉の意味では、あなたなども房子さんからは（詳しい告白を私は房子さんからおきゝしてゐます）愛の名に於て奪ひ得るものはすべて奪ひとられたと申上げても過言でないと存じます。それだのに、この上なほ房子さんから、あの方の自由をまで奪ひとらうとなさるならば、それはあまりに憎むべき貪慾であると申上げなければなりません。私たち女性は、貪慾な男子の犧牲となることを最も卑しみます。そのためには、私たち女性は飽くまで鬪ふ意志をもつて居ります。その邊の事情を篤とお考へ下さいますやうお勧めいたします。

房子さんの味方である

H子より

景二の畫策は、日毎に熟して行つた。いよいよ明晩にもその實行にとりかゝらうといふところまで進んでゐた。そこへ、このやうな手紙であつた。……

彼はその晩も、おそくまで熊の眞似をして疲れ切つたからだを、屍骸のやうに自分の家に引きずり込んだ。無人數でしかも日中は母一人なところから、幾年か前の裝ひをそのまゝに褪せさせて來た彼の家の空氣といふものは、黄塵に堆もれた無風帶の如く、無刺戟であり無氣力であつた。景二は、ふだんから陰鬱な自分の家が嫌ひであつた。それが房子を知つてからは、いつさう激しくなつてゐた。机の前などへは、いつ坐つたか覺えがない位なのである。その机の上に、珍らしく三本の手紙がのせられてあつた。……水色の角封のは房子からのである。ピンクの小形な日本封の

は、H子といふ匿名の女からのであつた。もう一つは書留で、彼の勤め先の新聞社の名が印刷されてあつた。そしてこの分だけには、「父開封す」と書いた附箋が貼られて、封筒の上部が鋏で切り取られてあつた。彼の父が開封して閲たのである。

景二は異様な心の緊張から、先づ房子の手紙を讀まうとして封を切つた。だが、これまでの生活と苦闘してきた彼は、戀人からの手紙を見る前に、勤め先からの手紙を慌しく讀んでみた。不吉な豫感が沸々として來たからである。そしてその豫感は事實として彼の眼に寫つて來た。その手紙といふのは、彼が怠けてばかりゐるので、業務上の澁滯から已むを得ず代りの者を入社さしたから、今後出社に及ばないといふ通知であつた。だが彼は、その通告にそれほど驚きもしなかつた。當然來なければならぬものが、やうやくに來たのだと、落膽したくらいである。それほど彼は己れの怠惰を自責してゐた。それでありながら、どうすることも出來なかつた怠惰であつた。たゞ當面のことゝして、父に開封されたことは、彼をひどくまごつかせた。兄の死後は、ことに、彼の出世をひどく樂みにしてゐる父であつたから、その父に面目なかつた。

房子の手紙は、彼を眞暗な洞穴へ拋り込んでしまつた。あの懐しい彼女が、こんなに急に憎くなる筈がない、だが彼は、己れをこんな絶望のどんぞこへ敲き落した奴を、このやうに憤り憎んでゐるのだ——といふやうな矛盾した氣持から激昂し、彼女の手紙を憎んだ。彼は房子の手紙を、彼女が、これまでの戀人と別れるときにとつたと同様な彼女の常套手段としか理解できなかつた。さう思ふと矢張り彼女が憎かつた。賣女！　淫婦！　極度な憤激は言葉を成さなかつた。彼はこんなことを續けざまに罵つた。だが、さういふ昂奮の裏には、彼女戀しさが犇々と迫つて來てゐた。彼女を失つた自分を考へると、世の中が、なんといふ空虚に見えることであらう——恐ろしい絶望しかなかつた。匿名の女の

手紙は、そのときの彼の昂奮に油を注いだ。

——匿名の手紙の文字から、いつぞや彼を新聞社へ訪ねた女の顔が浮んで來た。あのときの複雜な微笑が明かな嘲罵となつて笑ひ出した。景二は嚇つと憤つた。さういふ彼にふと、この頃の女學生のすべてが結束して、智識の詭辯を操りながら、青年といふ青年を片端から翻弄してゐるのではないかしら？——といふやうなことが頭を掠め去つた。よし！ それならこつちにも覺悟はある！ 景二は、三本の手紙を滅茶苦滅に破くと立ちあがつた。そして、いま閉めたばかりの襖を開けて、戸外へ出ようとすると、隣室から父親の險しい聲がして來た。

「景二！」

彼は、悖然として立ち止つた。

「何處へ行くんだ。」

彼が返事に困つてゐると、父親はいかにも腹立しさうに云つた。「……俺が、なにも知らないと思つてるのかお前は？野良犬のやうにみつともねえ。親の顔へ泥を塗つてるのがお前には分らないのか。俺やおつかさんまでが、近所へ顔向けが出來ないでゐるのだぞ！」

ひと通りの事情はよく知つてゐる父親にしてみれば、景二が氣の毒でならなかつた。だからこそ老看守は、役所からの歸りに黑田家へ呼びつけられ、景二の不始末を罵られ、今後のことについて口煩さく注意されたときも、黑田家の無慈悲な仕打ちに涙を出さぬばかりに憤忿こそすれ、毎晩おそくまで出歩く景二には、見て見ぬ振りをしてゐた。その父親が、景二の解雇されたのを知つて、少なからず狼狽したのである。老看守の環境と經驗から歸納された人生觀には、一定のところに永勤する年功の彼方にのみ、光明が瞬いてゐた。この景二の場合は、その肝腎な足場が根こそぎに崩壞

されたわけなのである。四年前に死んだ長男のことが父親に、思ひ出されて來た。父親は、まるはだかにされた老木のやうに寂しかつた。皺で埋められてゐる眼には、涙さへ浮んで來た。そして、わけの分らぬ腹立しさに氣を揉んで來た。さういふ父親の心に、水色と桃色との女文字の封筒が、いかにもなまめかしくうつたのである。父親には、その手紙を讀むときの景二の氣持ちが晴々しく想像されて來た。「大事な勤めを亂られながら、女の手紙に夢中になつてるとは、なんて馬鹿な奴なのだらう」老看守は、ひどく不機嫌になつてゐたのである。

景二は、父親の叱罵を理解しながら、それに悄服するわけに行かなかつた。颱風は、正邪の見境ひもなく、矢面に立つものはすべてを蹴散らして驅るものである。景二は、時機を辨へぬ叱罵を不當なものとして反撥した。父親の複雜な悲しみは、その表現を誤つたのである。景二は、荒々しく戸外へ出てしまつた。檻を突き破つた鬪牛のやうに猛然と、房子の家をめがけて猝然（まつしぐら）に進んだ。

13

—その夜景二は、たうとう家に歸らなかつた。

黑田家の前に立つた彼は、復讐を叫んで、房子を蹂躙しようとしてゐる自分に氣がつくと、氣が挫けてしまつた。房子と匿名の女との手紙によつて、彼の畫策の目的に狂ひが出來て來たのである。たゞ蹂躙と云つても、彼女のなにを蹂躙しようとしてゐるのか、蹂躙とはたとへば、棚内の花園を奔馬の如くふみしだくことであらう。ところが彼女の花園は、すでに彼のために花瓣を摘みとられてゐた。それなら。彼女の美しい肉體を足蹴にでもすることか？　それもいゝに違ひない。だがそれは、景二のやうに社會の暴力の下に生存して來たものゝ體驗から云つても、徒勞なことであつた。

相手から輕蔑され、冷笑され、より强い反感を抱かれるためにはそれもいゝかも知れない。が、人間の魂は、暴力では蹂躙出來なかつた。

景二には、彼女の離叛を憎む半面に、彼女の手紙が果してどの程度まで彼女の本心であるか、それを彼女から確めたい氣持ちも起らないわけではなかつた。だがそれは、彼女への未練に過ぎないと彼は思ひ止つた。その間にどんな複雜な心理の推移があらうと、事實としては確めるまでもなく、もう彼女の心は、彼から去らうとしてゐるに違ひなかつた。戀愛の當習者としての彼女には、愛することも自由なれば、また捨て去ることも自由なのであらう。景二には彼女が憎くてたまらなかつた。だが、それをどうしようとする策は盡きてゐた。と云つて彼は、そのまゝ父の家へは歸りたくなかつた。まつたく父の口吻通りである（！）女狂ひをして、勤め先きまで棒にふつた氣違ひじみた顏を、兩親に見られることは心苦しかつた。で彼は、電車もなくなつた冬の夜街を、友人の家まで歩いて行つて、そこに轉げこんだ。その友人といふのは、景二が苦學してゐた當時からの親しい知己で、いまは、社會運動の左傾派の一員である。彼はその友人の家から職のみつかるまで家に歸らないが、心配は無用のことである。といふ簡單な手紙を父親へ送つた。

14

戀を失つたものは生活ほど、無氣力であり、絕望的であり、憂鬱なものは、またとないであらう。戀が人生の熱病であるならば、失戀は、高熱に犯されたものゝよく經驗する、足腰のたゝなくなる俗にいふ「腰がぬけた」心身喪失症である。友人の家に轉げこんだ景二のその日その日は、ことさら叙するまでもなく、あらゆる失戀者の經驗する憂鬱でしかもうつろな病症に力なく惱み悶えたことである。

——景二は昨日も、動物園へ出かけて行つた。檻の中に住み馴らされた動物といふものは、どことなく烏羽繪のやうにユーモラスなところがあつた。動物自身はそれを感じないで、却つて檻の外なる人間を睥睨し、嘲笑してゐるやうなところに、ユーモアは彼女等のみのものでなくなつてしまふ。勿體ぶつて、をかしく取り濟してゐる獅子や豹や虎や、それらがいつさう誇張化し戯畫化されてゐる猩々が雲助のやうに威張りくさつてゐる顏を見てゐると、失戀者の鉛のやうな重苦しい景二の氣持が、少しづつ小皺をつくつて動いてくるのである。——

15

だが、この戀愛事件の落着を決定的なものにさしたものは、豹の顏でも猩々の顏でも無論なかつた。それといふのは、房子が、いつのまにか姙娠してゐることであつた。

このことでは、黒田夫婦を、氣の毒なほど失望さした。現代の社會では、極めて溫厚篤實なる黒田に、墮胎の大罪を企てさしたくらいであつた。だが、黒田がそれを實行しなかつたことは無論である。それなら他に、なん等かの善後策を講じたかといふに、講じるのは講じても、肝腎の房子が少しもそれに耳を藉さなかつた。たとへば、房子をどこかの産院へ預けて、生れた子供は産婆の手で誰かに貰つてもらふ——さういふ下心から、兎に角彼女をどこかへ預けようとして彼女に相談しても、彼女は、ふだんの快活さに似ず、すぐしくしく泣き出して口を利かなかつた。そして彼女は、さういふ兩親の狼狽と苦悶とをよそに、早くも自分の着物の中から赤の多い布地をほどいては、胎内で成長しつゝある赤ちやんのために、可愛いゝ着物を縫つて、毎日を暮してゐた。房子は、おそらくはまだ形さへなさないらいし胎兒の幻影を描いては、熱病のやうな愛情をそれに役げ與へてゐた。

「赤ちゃん、可愛いゝ赤ちゃん、ばアー。」

房子はある日、この頃ではもう遠い思ひ出のやうに薄らいで來てゐた景二が、急に懐しく戀しくなつてきて、つひふらふらと——さうだ、その邊へお遣ひにでも行くやうな輕い氣持ちから、家を飛び出してしまつた。彼女は、景二がいまどこにゐるか、親たちの話でそれを知つてゐた。

「わたし、來たのよ。」

恰度景二が家にゐたので、彼女は、玄關に出て來た景二に、かうぶつつけに云つた。景二に逢つたらなんて云はうか、彼女はそれを路々考へたのであつたが、考へは少しも纒らなかつた。たゞ、彼が急に戀しくなつたから、そして、やがて生れてくる可愛いゝ赤チャンとの三人の生活を造りたかつたから、彼の許に來たまでのことである。なにも特別な口實がいるものでないと彼女は思つてゐた。

景二は、彼女が姙娠したことを、父からの手紙で知つてゐた。そのために、新たな悩みさへ殖えてゐたときである。

彼は、突然に訪ねて來た房子の心を、彼女の初めの一言で知ることが出來た。彼は、悦しさで一杯であつた。だが彼は、それを怺えて、いかにも冷淡に云つた。

「なにしに——。」

しかし景二は、いつまでも我慢が出來なかつた。それに、かういふ態度を採る自分を卑屈だとも思つた。で彼は、房子の言葉を待たずに、「ちよつと待つて……」かう云つて家の者に斷りに引込むと、すぐまた出て來て、彼女を、二階のふたりきりの部屋へ伴れて行つた。

「わたしもう、うちへ歸らないのよ。いゝでせう。」

三十分もすると二人は、もう以前の戀人同志に返つてゐた。

「……あなたが怒るでせうと、承知の上で書いたのよ。」

と房子は、にこにこしながら、手紙のことを話してゐた。

「どうして、あんな風に書いたんだい？」

景二はもう彼女を、黑田のお孃さんとして取扱つてはゐなかつた。凡ての隔てのとれたふたりだけの世界であつた。

「だつて、あのときはあんな風に、書いてみたかつたの。でも、もう大丈夫よ。大事な赤チヤンのお父さまなんですもの。」房子はそれでも、赤チヤンの話をするときだけは、恥しさうに顏を紅らめた。そして、彼女もひと並みの家出人らしく、小脇に抱えて來た風呂敷包みを解くと、「ほら、こんなに澤山出來たのよ。可愛いゝでせう。」こんなことを云ひながら、彼女の縫つた赤チヤンの着物を出してみせた。包みの中は、赤チヤンの着物だけであつた。

「父さまたちも可哀想よ。父さまなんか、人間も長生きすると、碌なことがない——なんて、まアだ五十にもならない癖に、年老りぶつた愚痴を滾してゐるの。母アさまと來たら、それア意氣地なくなつて、毎日涙ばかり流してゐるの。わたし、くさくさしちまつたわ。」

「僕の親爺なども、さうらしいね。」景二にも、變んに寂しい氣持ちが沁み込んで來た。だが彼は、しいて強がりを云つた。「……わからずやの親なんてものは、みんな可哀想な破目になるんだね。」

「さうなんだわ。なにもわたしたちの親ばかりでないのね。

「當り前のことだ。」

「うちの母アさまなんかは、ことに自業自得よ。」

「景二君が誘拐したのだ。警察へ訴へようと思ふが、その前に一應、君へも話しておからうと思つて。……」

黒田は、老看守を自宅へ呼びつけて、實はこんなことを云はふとしたのではなかつた。――それまでには、房子を呼び戻さうとして、あらゆる策を講じたのであるが、我儘者で、我の强い房子は、こちらが强く出れば出るほど抗つてくるし、こちらが弱く出れば出るほど彼女は冷靜になつて來て、どうしても家に歸らうとしなかつた。で黒田は、馬鹿々々しく情ないことだ、とは思つたものゝ、かへつて親の方から折れて出る氣持にさへなつて來た。房子を全然失ふよりは、その方がまた忍ぶべきことであると思つたからである。無論、景二に對する嫌惡感が少しでも減退したのでもなかつた。だが、もうそんなことにいつまでも拘つてゐることは、事情が許さなくなつたのである。あはよくば、初胎といふものは、よく流産するものである……と、賴むべからざる僥倖に望を繫いだこともあつたが、それは窮したものゝ空しい氣休めに過ぎないことは、房子の健康が日々にすぐれて來て、母胎の上にも、極めて順調な時が加へられて行くことである。それに、健康とはあべこべに、彼女等の經濟上の窮乏が、黒田夫婦には、――房子が可哀相で、傍觀してゐられなくなつたのである。だがそれにしても、當人たちが、二人とも相續人であることや、景二の性行が從前の如くであることは、甚だ困ることなのである。この點で黒田は、――尤も自家に有利にではあるが――地位とか身分とかをぬきにして、景二の父親と懇談したい氣持にまで妥協して來た。それだのに、變んにぢゝむさく貧しい無智な老看守を眼のあたりに見ると、つひ子供たちの不始末にたいする腹立しさが昂じて來て、景二への憤怒が、老看守にまでも及んで來るのである。だが、社會上の地位は黒田が上であらうと、子供に對する情愛に變りもなかつたし、世の中のこと

や、人の氣持などを知ることには、老看守の方が一段と鋭かつた。老看守は、見え透いた黒田の口吻に輕い侮りさへ感じながら、投げやりな口のきゝ方をした。

「はい。――」とそれでも腰を低めて云ふのである。「私には異存などございません。どうぞ旦那のお氣が濟みますやうに。」

「よし、乾度牢へ敲きこんで見せる。ついでに僕は、君の保證人もよすことにするがね。」

黒田がかう、がみがみ怒鳴るやうに云つても、

「はい。どうぞ、はい。」

と老看守は、うなづくだけであつた。こんな筈ではなかつた――さう黒田が氣づく頃には、いつも手後れであつた。

「景二さんのお父さん、うちがあまり心配してゐますのでね、つひ心が昂ぶりましたのですから、お氣をわるくしないで下さいましよ。」黒田の細君が、かう老看守の機嫌をとりながら、「……あなたみたいに、そんな亂暴なことばかりおつしやつちや、話はいつまでたつたつて分りはしませんよ。」などゝ黒田を頭からきめつけて、その場だけはどうにか取繕ふことは出來はしたが、肝腎の相談は、いつまでも埒があかなかつた。

月日だけが、どんどん經つて行つた。景二と房子との上には、不自由ながらに、希望に滿ちた麗かな春の日が照り、明るい夏が來てゐた。

房子の產月が、迫つて來た。

黒田夫婦は、もうこれ以上、我が娘を傍觀することに、我慢が出來なくなつて來た。面目とか好き嫌ひとかを云つて居られなくなつた。「……二人の生活をしばらく見た上で、場合によつて一緒にさしてやつてもいゝ。」かういふ條件をつ

けて、彼等のために一軒の家を借りて、その質、一緒にさせてしまつた。

「マザー・フッドの勝利よ。」

いろんな家具類と一緒に、黒田の家から運ばれた籐椅子に重いからだを憩めながら、房子は笑つて云つた。

「そんなことはない。ブルヂュアヂーの敗北だ。そしてお前は、マザー・フッドに敗北したのだ。」

この頃は、失職したのをいゝ機會として、ソシアリストの同志として働いてゐる景二が、新生活の幸福を謳歌するやうに反對した。

「どうだつていゝわ。」とすつかり景二に從順になつて來てゐた房子は云つた。「わたしはもう、あなたと赤チャンとの召使で幸福なの。」

黒田は、あれほど憎み嫌つた景二のために、就職口の心配さへしてやらなければ、ならぬやうになつた。景二のやうな男には、どんな恩惠を施しても、しかもその恩惠に浴しながら——實に横着な奴である——相手に自分に氣に喰はぬ者であると、微塵も感謝しようとしないことを、黒田は知つてゐた。さういふ男の世話までしなくてならぬとは、黒田には忌忌しかつた。だが、房子のことを思ふと、それといふのも、彼等の生活費をまでさうさう負擔することが業腹なので、そのためにも景二を職に就かせる必要があつた。

「景二のやうな小人を遊ばしておくと、碌なことを仕出かさないから。……」

女房の前では、黒田はこんな尤もらしい理窟をつけてゐた。さういふ彼は、景二が社會主義者の同志として働いてゐることを、まだ知らなかつた。

17

「およしなさいよ。父さまの世話などになると、一生恩に着せられてうるさいことよ。」

「世話にならいまでもなつてるぢやアないか。」景二がかういふと、

「父さまの方で、勝手に家をもたせたのですもの、その費用を出すのは當り前だわ。」

景二が、黒田の斡旋で、鐵道省の御用會社へ――云ふまでもなく黒田の地位を利用してである――勤めることになつたとき、第一に反對したのは房子である。彼女もいつのまにか、さういふ詭辯を詭辯として氣がつかないほど、ソシアリズムの意識に同化しつゝあつた。彼の同志も、やうやく第一線に立つた景二が、再び勤め人になることを喜ばなかつた。「巷より再び安全地帶へ。」あるものはかういふ意味に非難さへした。然し景二は、共同作業といふものは、強ち密集するを要しないし、ある意味で散在することは、運動の實際化でもある――といふ考から、再びサラリー・マンの生活へ入つて行つた。そしてこのことは、誰よりも黒田夫婦を――一時的にもせよ――安心させた。但し黒田には、さうした安心と同時に、景二のやうな取得(とりえ)のない青年が、またまた彼と大差のない收入を取り得るやうになつたことが、變んに忌々しく、彼自身のやうな謹直な人間の堪えざる努力を無視する世の中が、馬鹿々々しく味氣なくさへ思はれて來た。

18

房子の腹部が、爆發性の氣球のやうに膨脹して、金魚の鱗のやうに光つて來た。陣痛が彼女を、なまめかしく悶えさ

した。

女の子であつたが、力強い第一聲が、九月の黎明にひろがつて行つた。

母子ともに、いたつて健康であつた。

分娩前後の費用だといつて、特別に房子から金の無心が黒田家にあつた。景二が就職したとはいへ、まだ一度も月給を取つてゐないのである。だから、月々のそれまで通りの仕送りだけで不足なことは無理もないが、それにしても、千圓といふ額は多過ぎる。「考へてもみるがいゝ。俺の半年以上の勤勞に匹敵するぢやないか。」と黒田は心で怒鳴りながら、無心の仲介者である細君に云つた。「そんな金が、なにゝいるのだ。あんな奴等に金をもたして置けば、どうせくだらなく使つてしまふのにきまつてゐる。そんな金はない。」

だが、この黒田の拒絶は、前にも云つた通り、オルガンの笛のやうに、一家の中で鳴り響くだけのことで、それくらいのことで默つてゐる房子でもなかつたし、それにこの頃では初孫の出生に幸福を感じてゐる彼の細君も承知しなかつた。で結局黒田は、

「その代りなんだぞ、今後は、どんなことがあつても斷じて補助しないのだぞ。そのことをよく、房子に、いや、あの景二の奴によく云はなければ駄目なのだ。それを承知したら渡してやれ。」

――といふ言葉を、何遍か繰返した上で、この頃は月々減つて行く相續財産の預金帳から、一千圓の小切手を書いた。

ところが、月末になると、今後斷じて補助を受けないことになつてゐる房子から、毎月の仕送りの催促があつた。景二の給料は、それまで二人が友人の家に厄介になつてゐた當時の借金があるので、當分暮らし方には廻らないのだ、と

房子の方から辯解を一緒にして來た。——仕送りの金額といふのは、自分の家に住んでゐる黑田家の一ケ月の經費よりは多く、黑田の一ケ月の給料に近かつた。——

黑田がひどく怒つて、それを拒絕したことは無論のことであつた。だが、黑田にとつて忌々しく悲しいことには、このときも結局には、彼の拒絕は、オルガンの笛の役目にしか過ぎなかつた。

「……それならなにか、三ケ月經てばその借金が返へせるといふのか。間違はないのか。いつたいお前がいけない。あんな奴等のいふことを、いちいち眞に受けるつてことがない。俺は、房子や景二の言葉は信じてゐない。欺されるのを承知で出してやらう。その代り、今後こそは、斷じてこれきりだぞ。」

——かう娓く念をおして黑田は、三ケ月だけの仕送りを、約束させられてしまつた。

然して實に、その三ケ月が經つた翌月の月末のことである。家主を始め、懸賣りの商人が續々と、黑田家へ押しよせた。

「△△の谷澤さんのでございますが、こちら樣からいたゞくやうにおつしやいますので。」

そして驚くことには、どの商人でも茲四五ケ月といふもの、全然支拂つてゐなかつた。ひどいのになると、懸賣りが嵩んで證文を入れてあるのさへあつた。そして、黑田夫婦をこの上もなく憤慨させ、恐怖させたことは、どの證文もその保證人には、黑田の名前が記入され、捺印されてゐることである。

「景二は、なんていふのだ。」

房子のところへ、樣子を調べに行つて歸つて來た細君と、黑田は話してゐた。

「經濟のことは、全部房子にまかしてあるので、よく知らないが、そんなことはない筈です、なんて、洒蛙洒蛙としてゐ

ましたわ。知らない筈がないぢやありませんか。」
この事件が起きて以來、黒田の細君の方が、黒田よりも感情的にひどく景二を惡氣にしてゐた。
「さうだとも、房子ひとりで、二千も三千もの金を、どうして遣ふわけがない。景二の奴が、親爺の方へでも注ぎ込んでゐるのだ。」
「わたしなど、それは最初から氣づいてゐましたが、そればかりでないらしい。なんだか此頃は、いつ行つてみても、景二がゐてもゐなくても、頭の毛を長くのばしたごろつきみたいな男が、三四人は屹度ごろごろしてゐるのだが、なんでもあんなものにも、たゞで御飯を食べさしてゐるらしいのよ。どういふ關係で、なにをしてゐる人だちか、房子にそれをきいても、――この頃はあの娘までがすつかり景二に抱き込まれてゐると見えて、――わたしたちのだわなんとかなんて、云つてたが。」
「そのだわなんとかつて、なんのことだ。」
と黒田は、新たな疑惑と不安で怒り出した。
「房子にきいてみましたら、なんでも仲間といふことだつて云つてゐましたよ。」
「仲間、それは仲間に違ひあるまいがさ、なんの仲間なんだ。」
「そんなこと、わたしにおつしやつたつて、知りやしませんよ。」
黒田の言葉が激してくると、自分が怒られてゐるかのやうに、細君はきまつて反抗して來た。
その翌る晩である。景二と房子とが黒田家へ呼びつけられた。だが景二は、行く必要がないと云つて行かなかつた。
その代りに黒田の細君が云ふごろつき共が四人まで房子に随いて、黒田家へ出かけて行つた。ごろつき共が一緒に随い

て來たことには、特別な目的もなかつた。たゞ面白半分の野次馬に過ぎなかつた。景二も、遂にそれだけは止めたのである。だが、房子は、「面白いからいらつしやいよ。」さう云つてすゝめた。ごろつき共も、「いさとなれば、官金浪費の張本人はお手前様だア、つて名告つて出よう」などゝ云ひながら、たうとう隨いて來たのである。事實、黒田家から仕送られた大部分の金も、景二の給料の過半も、全然收入のない彼等——社會主義者の同志のために費やされてゐたのである。ごろつき共は、家の外に、房子だけが中に入つて行つた。

房子は、家出以來、黒田の家の閾を跨ぐのは、これが初めてであつた。だが、母親は無論のこと、父親にもたびたび逢つてゐた。黒田はいつか景二がやつたやうに、役所を早目に引けては、景二が勤めから歸らない前に、房子の家を訪ねたことがあつた。それにしても黒田には、初めて家へ歸つて來た房子の——兵兒帶で赤ン坊を無雜作にくゝりつけてゐる姿を見たとき、變んに涙ぐましい感傷に襲はれて來て、すぐには口がきけなかつた。こんなに親子がたまに一緒になつたのに、愛撫の言葉が一切封じられてゐることが、黒田夫婦を寂しくさした。

「父さま、なにか御用がございますのですつて？」

親たちの氣持を知つた房子は、すぐぢれつたくなつて、挨拶一つしないでぶつつけにかう云ひ出した。

「まア、そこへ坐れ。」

鞭打れたやうに黒田が、やうやく詰問的な氣持になつて來た。房子は、赤チヤンを背中から下ろすと、膝を崩して坐つて、赤チヤンに乳房を啣へさした。娘のときから發育のいゝ乳房であつたが、——と黒田は、房子の胸元からはみ出てゐるはちきれさうな乳房をみたとき、いつぞや二階の彼女の部屋で房子の猥らなさまをみたときを思ひ出して、堪らなく厭な氣持にさせられた。

「景二はどうしたのだ？」

「こないわ。來なくてもいゝつてわたしが止めたの、それに來つこないわ」

「どうして？」

房子の空々しい言葉で、黒田の憤りは、無殘にも挑發させて來た。

「あのひとがこなくとも、わたしで用が足りるからでせう。」

房子は、これでもかなりな遠慮をしてゐるのである。

黒田は、彼女たちの經濟上の不始末を、それでも懇談的に詰りはじめた。「……景二が、親爺のところへでも持ち込んでゐるのぢやないか。景二に飛び出されてから、谷澤だけの收入では喰つて行けないだらうからな。」黒田がかう云つたとき、それまでいゝ加減に聽いてゐた房子が、いかにも父親を悩殺するやうに、笑ひながら云つた。

「父さまは、よその家の暮らしのことまで心配してらつしやるの？心配していたゞく方ではさぞ難有いでせうが、あまり餘計なことを心配なさらない方がよくつてよ。」

「なんです、房子？」と母親が、房子をたしなめるやうに口を挾んだ。「父さまに、そんな御挨拶つてありますか。」

房子には、いつも父さまをやり込めてゐる母親から、こんなことを云はれると、をかしくて堪らなかつた。彼女は、口に出すまいと思ひながら、つひ笑ひながら喋つてしまつた。「母アさまの、御教育がよかつたからなのだわ。」

房子のこの一言は、憤怒も、嘲笑も、すつかり白けさせられてしまつた、それでも、教育とは人間を善良に導くことゝのみ心得てゐる母親だけが、教育の意味に反對でもするやうに、云ひ出した。

「母アさまは、お前を、そんな風に教育なんかしませんよ。」

「なんでもよい。」

と黒田が、呻くやうに云ひ出した。「……房子、お前たちのこれまでの借金は、みんな拂つてやらう。その代り、その代りだぞ。」と黒田は聲をふるはした。「……お前たちの素行が修まらない間は、親子の關係を斷つたことにしよう。今後、俺の名でも騙つて證文でも書くと、景二とお前とを警察に訴へるから、いゝか。」

「いゝわ。」

と房子が、いつもの句調で云つた。

このときも黒田は、老看守との場合のやうに、また警察を早くもち出してしまつた。房子にも彼は、こんな云ひ方をする筈でなかつた。警察をもち出して威嚇してまでも、實は親子の關係を、以前のやうな親密さに取りかへしたかつたのである。

「それなら、みんな拂つて下さるのね。」

父親の悲しい錯誤などに頓着せずに、房子がこう駄目をおした。

「その代り、親子の緣を切るのだぞ。」

無駄といふよりは、ますます不利な結果に陥入ることを承知しながら、黒田はかう云はずにゐられなかつた。

「仕方がないわ。父さまがそれを望んでいらつしやるのなら。」

「なにも好んでのぞんではゐないさ。」

——言葉尻りを捉えて、自分に勝手な理窟を並べてくるところが、まるで母親そつくりだ、黒田は、自分が呪はれてるやうな果敢ない氣持ちになつて、口がきけなかつた。

房子は風呂敷包みから赤チヤンのおしめを出すて、取替へてやつた。母親が默つたまゝ、それを手傳つてゐた。彼女は　赤チヤンをまた背中にくゝりつけた。

「わたし　歸るわ。」

房子は、それでも幾らか寂しくでもなつたのか、しんみりと呟くやうに母親に云つた。

「父さまがおつしやる通りでいゝの、房子？」

母親が、房子の氣持ちを飜へさせようとして、とりなすやうに云つた。

「わるくたつて仕方がないわ。父さまがさうおつしやるのですもの。」

母親の氣遣ひが、房子をやくざなセンチメントから救つてくれたのである。歸り仕度と云つて他になかつた。彼女は、來たときと同じに、挨拶一つしないで黑田の家を出た。母親は、どうせ房子が、その不始末に困つて駄々を捏ねてゐるのだ、と簡單にとつて、いづれ近い中に黑田をなだめて、そのことをどうにかしてやれば、その上で房子をなだめて父親に詫びさせようといふ腹から　强いて房子を止めようとはしなかつた。黑川は、直aな顔をして、俯向いてゐた。

19

「黑田家萬歲！」

「黑田家萬歲！」

「無產黨萬歲！」

往來から叫び聲が、嘲笑にまぢつてどつと室內へ流れこんだとき、黑川は、はねとばされた人形のやうにぴよこんと

立ち上ると、急に狂つたやうに戸外へ飛び出さうとした。喊聲から、黑田ほどの衝擊をうけなかつた細君が、黑田を叱り飛ばすやうにして、茶の間のもとの席へつれ戻した。

季節からいふと、恰度房子が去年家を飛び出した頃の二月である。黑田夫婦にとつては、寒く暗く長い冬の夜であつた。勤めから歸つて來た黑田は、大抵炬燵の中で、睡くなる時間を待つてゐた。ところがその晩に限つて、珍らしく房子が歸つて來るといふので、長火鉢の側に坐つてゐたのである。

「あなたみたいに、すぐあんな厭味をおつしやるから、房子がいつさう拗くれてくるのよ。」

細君は、かう黑田を責めはじめたが、いつになく悲しい氣持ちになつて來て、この上黑田を叱りたくなかつた。側にゐるものなら、誰にでも縋りつきたいやうな淋しさであつた。「炬燵が、あつたまつてゐますわ。」彼女は、めづらしく優しい言葉を良人にかけた。

黑田は、强大な城塞かなにかゞ突然爆破されたやうな、そしてその音響に自分の耳が聾になつたやうな、のぼせ上つた氣持ちでぼんやりと坐つてゐた。

「まるで、强盜にでも逢つたやうだ！」と彼は、しらず知らずの中に咳いてゐた。「……憎い奴等だ！　しかし、この先きがどうなるのだらう。困つた。困つた……」

彼は、自分のからだが、いや黑田家が、いやどつちも一緒にだ！　俎上にのせられた豚のやうに、鋭いメスで日毎に剝がれて行くやうな、抗し難い脅威を身邊に感じて來た。

——完——



長篇「この三つのもの」

佐藤春夫

第四章（つづき）

いつも北村がお八重を輕侮し嫌惡してゐる程度と、お雪に對する溺れ方とから推して、北村がお八重と別れない事が、寧ろ不徹底なもののやうに兼ねてから思へたのである。お八重に對する彼の不快があまり激しく北村から述べられた時、赤木は、北村の言葉のなかに誇張があるに違ひないと信じてそれを指摘したことがあつたが、北村は常に強く打消した。さういふことがあまりに度々でまたその度ごとに北村は最も眞面目な顏つきするので、後には赤木も北村のその感情を決して疑つてはゐなかつた。北村のこの不徹底な態度は、人情だの道德だの良心だのそんなくだらない荷物は路ばたへ投げ捨ててしまつて、彼の高山へ登行するためには、別に一種ボードレリアン・スピリットに似た藝術至上の信念のもとに、自我の使徒であり、肉感の享樂者であることを自ら主張する北村としては正しく大きな矛盾ではあつたが、いつも身構への方が勝つてゐる——つまり僞惡家らしい北村は、やはり世間などを

氣にするやうなところもあつて、お八重が何も氣づかないうちはそつとして置かうといふ一時逃れな氣待で、彼自身でもつひあまり突きつめて見ないでゐるうちに、いつかその問題にも慣れてしまつたのであらう。誰しも、自分に都合の悪い時にはなかなか慣れにくいのに、便利なことだとなると直ぐに麻痺してしまふものだ。最初のうちは氣になつてもゐたお八重の苦しみを、北村はもう見慣れてしまつて、彼自身の苦しみとしては感じなくなつてしまつたのであらう。しかし、今度は場合が場合だから、北村も何とか斷然と處決しなければならないだらうが、結局はお八重と別れてしまふだらう。さつきの言葉のはし〳〵にもそれが見えるし、今までも決行こそはし得なかつたけれども、北村は口くせのやうにそれを希望してゐたのだから。さうして北村が決行し得ない理由として彼のいふには、お八重に何の落度もないことであつた。何か落度でもしでかしてくれればいいのに、とさへ言つたこともあつた。

そんなことを思ひつづけたあとで赤木は、お八重に對する彼自身の愛情の程度と種類とを自分に問ふてみた。それは自然にかういふ問題で表はれた――假りに、お八重と自分とが、ふたりとも自由な境遇、といふのはふたりとも獨身であるとしてみて、自分がお八重に求婚するとする。お八重がそれを拒むやうな場合に自分はどの程度で苦しむだらうか。

これに對する赤木の自答は淡いもので、割合にパッショネートではなかつた。――仕方がないと思ふだらう。さうしてお八重が積極的な嫌惡を示さない以上は、改めて輕く友情を結ばれ得るだらう。――すると、戀に似た感情ではあるが、やつぱり戀ではないか知ら。今まで俺は戀をすると、もつとめちやくちやな男だつた。今、俺はお八重を相手にしてめちやくちやを仕出かすとは思はない。第一、お八重に對しては俺は遠慮がありすぎる。要するに俺にはお八重の立場がひどく氣の毒なのだな。とてもお八重ひとりでは思案がつくまい。その覺えがすでに自分にありすぎる。だからこ

の問題に就て、お八重の味方になりたいといふ氣持なのだ。もしお八重がこの事で惱まされてゐなかつたとしたら俺は別だんにお八重を心には留めなかつたであらう。——しかし、去年の夏ごろ、俺はお八重に自分の身の上を打明けお八重にも彼女の境界を知らせて、互に不幸を語り合ひたいといふ希望が殆んど衝動的になることがあつた。さうしてその結果は戀になりさうだとも思つた。それを恐れてゐたればこそ、なるべく遠くからお八重を眺めてゐたつけが、あの頃にくらべれば、今日の方が自分の心中にお八重の幻像はうすれてゐるかも知れない。さうだ、もし今日の二時間ほどがなかつたとしたならば……

思ひ耽つてゐる赤木の枕に近い階段を、その時、人の上つて來る足音がした。別に忍んでもゐないがごく靜かであつた。赤木は耳をそば立てて、お八重だと思つた。とても直接では話せないと言つたお八重が、思ひあまつた結果、起きて北村に話しに來たと思つた。

障子が靜かに明いたが、赤木は氣のつかない風をしてゐる方がいいと思つたので、今までのとほり顏を布團のなかに埋めたままでゐた。眠入つてゐる人のやうに見えた。

「もし〳〵」

這入つて來た者は、お八重ではなかつた。さうして赤木の枕もとで呼ぶのであつた。

赤木は顏を出した。そこに座つてゐたのはお婆さんであつた。お八重の養母であつた。その人は赤木が動いたのを見ると、直ぐに囁きつゞけた、

「お八重が、ちよつとあなたにお話したい事があるから、恐れ入りますが下りて來て下さいませんかと申すのですが」

赤木は、お婆さんが暗がりで北村と自分とをとり違へてゐるのだと思つたから言つた。

「は？　僕にですか」
「え、あなた様にですよ」
「さうですか」言ひながら赤木は直ぐに起きた。
「どういふ事でございますか、夜中にほんとうにお氣の毒でございます」
「いえ、何。まだ眠ついてはゐなかつたのです」
お婆さんのあとについて赤木は階段を下りた。廊下つづきに、末雄の明るい部屋のとなりの障子をお婆さんは開けた。赤木は這入つて見ると、すぐ足もとにお八重が、彼女の枕もとに座つてうつぶせに伏してゐた。赤木の這入つて來たのを知つて顔を上げた時、赤木はお八重の顔が廊下からのうす明りに異常なものに見えた。假面化してゐたのだ。
「どうしたのです」
「ここです、ここです」お八重は赤木の顔をぢつと見上げながら、彼女の胸の上をたたいて見せた。言ひつづけた「苦しいのです。ここのところです。どうかして下さい。どうかして下さい」
お八重はそのまま泣き倒れてしまつた。
赤木は呆然として、そこにしやがんだまま、どうしていいかわからなかつた。ふと、恐ろしい空想が閃めいた。もしや毒藥でも飲んだのぢやあるまいか。まさか
氣がついて赤木は直ぐに、再び二階へ上つた。北村を起した。呼んでも北村は返事をしなかつた。搖ぶつた。北村は
「う」
と、呻るやうに返事をして、うす暗がりのなかにも見えるその顔は、ねむたさの爲めに瞼のあたりが一面にしかめら

れて不思議な醜さであつた。

「何だ、その顔は。おい、起きないか。――お八重が苦しがつてゐて、困るんだ。ね」

北村はやつと、ぱつちり目を開けて、赤木の言葉の意味を確めるやうな様子だつた。赤木がもう一度同じことを言ふと、北村はただ答へた。譫言らしい調子で、

「カルモチンをやり給へ。カルモチンを。ヒステリーだよ。よくあるんだ。何でもない」

「ともかくも、君も下りて來給へ」

北村はしかし、手を大きく動かして拒むやうな身ぶりをしたまま、寢返りを打つて、また眠入つてしまふらしかつた。途方にくれた赤木は、しかし、默つて二階へ上つて來たことを思ふと、直ぐまた再びお八重の部屋へ下りて行つた。

「北村を起しに行つたが眠つてしまつてゐて起きないのです」

障子のところに突立つてゐたお婆さんにさう言つたが、その人は何も返事しなかつた。お八重は、しかし、もう靜かになつてゐた。赤木が這入つて來るのを見て、彼女は座り直した。それから

「お婆さん、電氣をつけて下さいな」

と言つた。落着いたしかし艶のない聲音であつた。赤木は言つた。

「カルモチンを飲んだらどうです」

「え。でも駄目です。もうさつきから七つものんだのです」

電燈がともつた。母親のすぐ傍にユリ子の小さな寢顔が、何も知らずに靜かな寢息を立ててゐた、一種きよとんと

した樣子で、あたりを見まはしたお八重は、思ひ出したやうに涙をふいた。それから硬ばつた聲で言つた。

「お二階へ行きませうよ。――ここではお話も出來なかつたから。」

彼女はさきに立つて廊下へ出た。

お八重の寢間着は袷の筒袖で、黑い襟がかかつてゐて、彼女はその上に半巾の帶をきりきりと卷きつけてゐた。寢間着姿といふやうな言葉の持つしどけないところは少しもなかつた。――成程、これがお八重のたしなみで、北村が彼女を喜ばない點なのだな。赤木はふと、そんなことを觀た。さつき北村が話してゐた或る溫泉宿での辰子のことが自づと思ひ浮べられた。

二階の座敷の次の間、北村の書齋へお八重は坐つた。赤木は一たんそこへ坐つてから、一度自分たちの寢間へ來た。そこで脫ぎ捨ててあつたどてらを羽織りながら、北村を小聲で呼んだ。頭からすつぽり布團をかぶつてゐた北村は、ぐつと頸を延して赤木を見た。さつき赤木に起されてから彼は、眠つてゐなかつたのだ。その北村の耳もとで赤木は言つた。

「お八重が僕に話したい事があると言つて次の間へ來てゐるんだよ」

「……」北村は默つてうなづいた。

お八重は書齋で赤木の出て來るのを待ちかまへてゐた。赤木が坐ると直ぐに言つた。

「お雪の事を北村に話して下さいましたか」

「話しかけてはゐるのです。でもまだ北村は何とも返事をしませんよ」

「早く何とか言つて貰つて下さい。私は苦しいのです。眠れないのです。考へて居るとここのところが苦しくなつて、

（彼女はさつきのやうにまた胸を押へた。また涙を拭いた）もうとても我慢が出來なくなるのです。一時も早く聞いて下さい。今直ぐにも。何もかも私は早くわかつて、早くきまつて、仕舞つて欲しいのです。ね、我儘をいいますけれど、今直ぐに」

お八重は一句ごとに涙を流した。それが彼女の行儀よくしてゐる膝頭の上へぽたぽた落ちるのを、お八重は見ながら別に拭はうともしなかつた。

赤木は再び立つて次の間の、北村の枕もとへ行つた。お八重の言葉を傳へようとすると、北村は襖間ごしに皆聞いてゐたらしく、赤木の足音がとまると直ぐに、何か言つた。しかし、それは布團の中で言つたので、赤木には聞きとれなかつた。

「え？　どうしたつて？」

「…………」北村は同じ事を同じやうに布團のなかで言ふ。やはり赤木に聞えなかつたので、最後に北村はたうとう布團の襟から顔を出した。それでもまだよく外へ洩れなかつた、北村はもう一度聲まで出して言ひ直した。ごく低い聲だつた。

「あした。あした。明日話しするよ」

「でも、あんなにいふのだが」

「何とでも、言つて待たしておいてくれ給へ」それだけ言つて、北村はまた布團をすつぽり頭の上まで引かぶつてしまつた。

「北村は明日よく相談をすると言つてゐますよ。ね。明日まで待つて下さい。明日までなら待てるでせう。眠れないや

うならここで起きてゐらつしやい。僕も一緒にゐて上げますよ。話をしませう。」

お八重は何とも返事をしなかつた。

「待てませんか。どうしても」

それにも返事をしなかつた。

「ね、待てるでせう。明日までなら」

赤木はまるで小供をあやすやうに、言ふより外に手がなかつた。すると最後に、お八重は默つて大きく一つうなづいた。恰も子供が仕方なしに納得した時の動作と同じだつた。

「眠れなくて、起きてゐるなら、わたしも一緒に起きてゐて上げてもいい。もうぢきに夜があけますかね――一時間半もすれば。でもどうにかして眠れるやうなら、少し眠つた方がいいのですがね」

「わたしの事ならかまはないで置いて下さい。だんだん氣が鎭まつて來ましたわ。かまはないで、お眠みになつてください」

お八重はやつと返事をした。さうしてその聲も様子も、もう殆んど平常のとほりであつた。唯、さういふ姿でしよんぼりと坐つてゐるのが寒げであつた。永いこと不眠症にかかつてゐた赤木は、別段に睡たくもなかつたし、お八重とかうして坐つてゐることは決して退屈ではなかつた。退屈ではないだけに、しかし、理由もなく妙にうしろめたいやうな感じがあつた。さうしていづれは眠れないにしても、ともかくも次の間で北村のわきにある自分の臥牀のなかへ入つてゐようと思つた。

「それぢや、わたしは寢ます。ト、あつたら、呼んでくれればいつでも起きますよ。――それにしても、さうして起き

でゐては、明方は寒いから風を引くが……もしそこで起きてゐるやうなら、どうです、これでも掛けてゐたら」

赤木は立つて自分の着てゐたどてらを脱いだ。それをお八重に着せてやりたいやうな氣がしながら、しかし脱ぎすてたまゝに無雜作にそこへ置いた。

「いゝえ〳〵。いいんです」お八重はさう言つて立つてゐる赤木を見上げたが「わたしも下へ行つて眠つてみようと思ひます。眠れさうですわ」

「さう、それがいい。それがいい。あんまり思ひつめてゐると反つていい思案がなくなる。一つよく休んで、そして明日また相談しませう」

赤木はさう言つて次の間へ來てしまつた。障子を開けてお八重が出て行く足おとが廊下に聞かれた。

北村がむつくりと顏を布團から出して、枕についた赤木の方を見て言つた。

「どうした？」

「下へおりて行つたよ」

彼等はそれだけ一言言ひ合つた。赤木はお八重をひとりで夜のなかに置き放しにして置くのを、傷ましいように思つた。

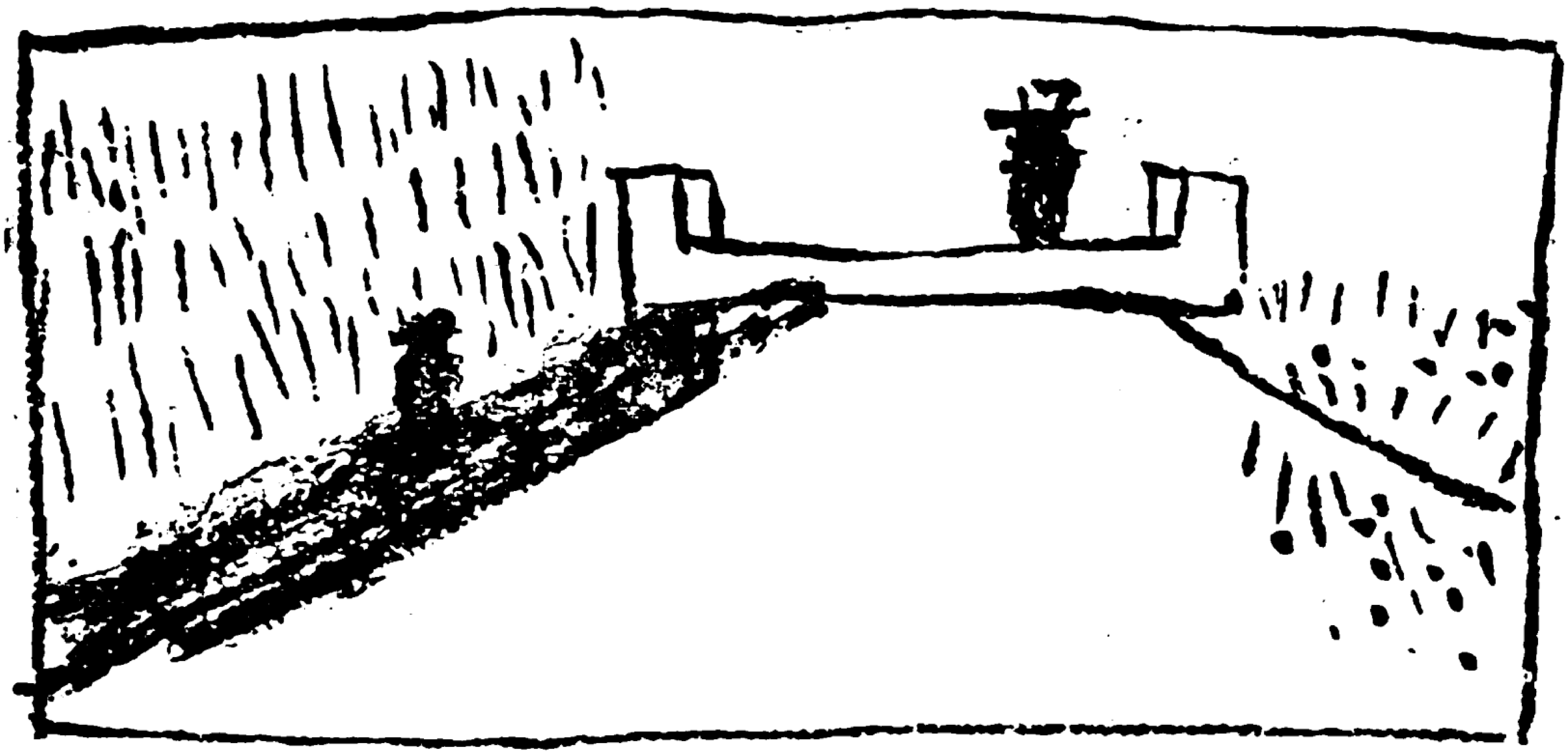
「おい！」半時間以上もたつてから北村は思ひ出したやうに赤木に聲をかけた「君、お八重に、僕がお寺に對してさういふ感情だけは持つてゐるが關係はないのだと、さう言つてくれるのはいやかね」

「僕が言ふのかい」赤木は北村と同じやうに小聲で答へた「君自身が直接、お八重にさういふといふのなら、そりや僕は何とも言へないが、この際になつて僕が言ふのは……」

「いやか」北村は赤木の言葉を引きとつた

「あゝさうだらうな、君としては」

彼はどういふ事を考へながら、いつ寢入つたのか、それからは誰も言葉をかける者はなかつた。



馬の糞

谷崎潤一郎

本名を云ふのは差支へがあるから、假りにAと名づけて置く。

私はAと中學時代から友達であつた。Aはイコヂな、變に意地の惡い男であつたが、その一面には頭腦明晢な、非常な秀才でもあつた。私は彼の意地惡さには實に閉口したものだが、試驗の時に數學や語學を敎へて貰ひ、カンニングをするのに都合がいいので懇意にしてゐた。Aは篤志家の補助を仰いで勉學してゐる苦學生だつたから、金など貸してやつたこともあつた。そしてそれから、ずつと大學を卒業するまで附き合つてゐた。

そのうちにAは醫學士になり、私は法學士になつた。Aは大學病院へ通ひ、なほ獨身で研究をつづけたが、私は直きに××銀行の行員になり、妻を貰つた。

その、私が結婚した當時のことである。或る日往來で出會ふと、Aは遠くから、人を輕蔑するやうな眼つきで寄つて來ながら、

「おい君、君の細君はどうもあんまり美人ぢやないね。」

と、嘲んでホキ出すやうに云つた。意地惡としても理由がないし、いきなりそんな云ひ方をされたので、私はむつとした。

「美人でなくてもいいぢやないか、君の細君ぢやないんだから。」

「けれども、君は美人だと思つたから細君にしたんだらう？」

「美人とは思つてゐないけれども、何も人前へ出せないやうな女でもあるまい、十人並だとは思つてゐるんだ。」

「それがいけない！ あの細君を十人並と思つてゐるのが、僕にはどうも不愉快極まる。」

　Aは全く不愉快な顏をした、それが私には勿論一層不愉快であつた。

「そんなことは餘計なお世話だ、君に愉快を與へるために、僕は結婚したんぢやないんだ。君には利害關係のないことだから、默つて居給へ。」

「利害關係のないことだけに腹立たしいね。一種の義憤、――審美的公憤を感じるね。なぜかと云つて、君と僕とは同時代の靑年だらう、さうして而も同じ學校の教養を受けた友人だらう、その友人が『女性』に對して全く僕と異つた感覺を持つてゐるのは、不愉快ぢやないか。」

「はは、感覺は違つてゐないかも知れんさ、僕だつてそりやア美人を見れば綺麗だと思ふさ、しかし僕は美人の細君を持たうと云ふ氣はないんだから、あの程度で我慢してゐるんだ。君は美人を持つたらいいさ。」

　私は彼のイコヂな性質を知つてゐるから、好い加減にあしらふ積りで苦笑ひした。

「いや、感覺が同じであるとは云へんね。」

と、Aはしつッこく搦んで來た。

「ちやア、感覺の違ふ人間は友達に持てないと云ふのかい？」

「感覺の相違にも程度があるさ、たとへば僕は一流のホテルのビフテキでなければ喰はないと云ふ、君は時と場合に依つては、一品料理のビフテキでも喰べると云ふ。そのくらゐな相違なら差支へないが、もしも一人の友達が、ビフテキの代りに馬の糞を喰ふとしたらどうだ。自分には關係がないからと云つて、それを默つて見てゐられるかね。」

「さうすると君は、僕の女房を馬の糞だと云ふのか。」

私は立ち止まつて、ステツキを逆に持ち直した。

「馬の糞と云つたのは醜惡と云ふ意味ぢやないがね、——」

Aはチラと私の手もとに眼をくれながら、蒼白な顏に薄笑ひを浮かべた。

「——しかし醜惡ではなくつても、感じの惡い顏と云ふものがあるもんだよ。それが男の場合には『感じの惡い奴だなア』と、さう思ふだけでまア往來の石ころを見るやうなもんだが、女の場合だとさうは行かんね、感じの惡さが積極的に迫つて來るね、いくら他人の女房でも鼻持ちのならない氣がするね。つまり僕は、君にさう云ふ嗅覺のないのが忌き忌ましいんだ。……」

私は一言も答へずに、ステツキで彼の横ツ面をピシリ喰はした。

「馬鹿ツ」

「馬鹿でもいいよ、君の方がよつぽど馬鹿に見えるよ。……」

Aはさう云つてまだニヤニヤしてゐたが、私はフイと横丁へ曲つてしまつた。

意地惡と云つても程度がある。それにAは私の妻に何の恩怨があるのでもなく、前から知つてゐた譯でもない。披露

の晩と、その後二三度新家庭の様子を見に來て、會つたことがあるだけである。私はAがどう云ふ氣持ちであんなイヤガラセを云つたものだか、何とも不思議でならなかつた。强ひて解すれば、新婚の喜びを邪魔してやることが面白いのかも知れないが、いくらツムジ曲りの彼でも、それにしてはアクド過ぎる。あんな非常識なことは背てなかつた。あまり勉强しすぎたので頭が變になつたのちやないか？………私はそんな風に思つた。その日のことを考へ出す度に不愉快ではあつたが、私はAを一種の變人、氣違ひと見做すより外はなかつた。で、もうそのことは問題にせず、無論妻にも云はずに置いた。

すると、半月ばかり後だつたらうか、或る日曜の朝、「御免」と云ふ聲が玄關でするので、出て行つて見ると、Aが格子先に立ちながら例のニタニタ笑ひをしてゐる。

「やあ、先日は失禮、ちよいとそこまで來たもんだからね。……」

Aはさう云つて、まるで何事もなかつたやうに平氣で挨拶するのである。

私は薄氣味が惡かつたけれど、妻の手前、追ひ返す譯にも行かないので座敷へ通した。妻はちよつとお茶を運んで來ただけで、直ぐ引つ込んだが、その時Aは尋常な態度で、あたりまへに會釋をした。それから、最早や此の間のことはケロリと忘れてしまつたやうに、機嫌よく世間話を始めた。さうなつて來ると可愛げもあり、少しもイヤな男ではないから、私もだんだん安心して氣持ちを直した。午になつても歸らないので、妻が手料理を拵へて出した。

「やあ、此れは飛んだ御馳走になるね。」

Aはさう云つて箸を取つた。

「いいえ、ほんの有り合はせで、なんにもございませんのですが、……」

妻は給仕をするために自然Ａの眞向うに据わつた。Ａは矢張り機嫌がよく、別にさつきと變つたところはないやうであつたが、暫くするうち、私は妙なことに氣づいた。と云ふのは、Ａは決して私の妻の顏を見ない。飯のお代りする時にも横を向いて茶碗を出す。そればかりでなく、妻に話しかけられても返辭をしない。妻が何かしらおあいそを云ふと、きつとそのとたんに、それが聞えなかつたやうな様子をして、私に向つてしやべり始める。偶然さうなるやうに見せて明かに故意にしてゐるのである。

「さう云へば君、君ンとこでは誰が御飯を炊くんだね。」

やがてＡは、突然そんなことを尋ねた。

「飯は大概家内が炊くんだ。まだ新世帶で、女中と云つても少女が一人ゐるきりだからね。」

「ふーん、さうかい、……ところで此の、飯を巧く炊くと云ふことは女の大事な勤めなんだか、此れが滿足に出來ない女は、嫁に行く資格はないやうなもんだね。」

妻はツとしてＡを見上げた、が、Ａは依然として私の方を向いたまま、世間話の續きの如くその言葉を云ふのであつた。

「飯のことなんかまアどうでもいいぢやないか。僕の所は釜が新しいもんだから、近頃特に不出來なんだよ。」

「いや、君ン所の飯がまづいと云つたんぢやないがね。」

「だけれど何だか、さう云はれるやうな氣がするから、そんな詰まらない話は止さうよ。」

「さうかね、そんなに詰まらない話かね。尤も君は食ひ物に就いちや無感覺の方だつたからな、ビフテキの代りに馬の糞でもいいんだから。……あははははは。」

Aは「馬の糞」と云ふ時に、その馬の糞を實際口へ入れたやうなまづまづしい顔つきをして、始めてギロリと妻の方へ横眼を使つた。斷つて置くが彼は一滴も酒を飮まない男であつた。だから醉餘の冗談ではなく、却つてさう云ふ時に限つて、青い顔を一層青くし、唇や手の先をブルブル顫はせ、「意地惡を仕遂げる」と云ふことに渾身の氣力を注いでゐる、と、云つたやうにしか見えなかつた。

「まあ、何と云ふヒネクレた人なんでせう、わたしあの方は氣味が惡いわ。」

妻はAが歸つた後でさう云つてゐたが、自分が特に嫌はれてゐるのだとは知らないらしかつた。私は又、それほど妻の顔の感じが不愉快であるなら、何故わざわざその不愉快を味はひに來たのか、さう云ふAの奇妙な心理がいよいよ分らなくなるのであつた。そしてそれきり、Aとは絶交の形になつた。

以上の話はもう七八年前のことで、その後Aは獨逸へ二三年留學をし、歸朝してから間もなく醫學博士になつた。彼の專門は婦人科であつた。

「Aさんも昔は隨分意地の惡い方だつたけれど、今ではあんな立派な病院をお建てになつたし、偉くなつたもんですわね。私も一度、折があつたら診て頂かうかしら。」

妻は折々さう云つてゐた。

で、今年の夏、妻が病氣で鎌倉へ行つてゐた時、Aの別莊も鎌倉にあつて、折よくAが來てゐると云ふので、別莊でも診察してくれるかどうか、都合を聞きがてら私は久し振りにAを訪ねた。二階の客間へ通されてから、程なく出て來

たAの風采は、すつかり見違へるくらゐ堂々としてゐた。

「やア、………まアおかけ、………」

と鷹揚に云つて、彼はどつかと安樂椅子に腰を落し、鼻眼鏡の奥からヂロヂロと私を眺めた。

Aは私が學校時代の思ひ出話をする間「はあ、はあ」と云つて聞いてゐたが、やがて妻の病氣のことを云ひかけると、

「あ、さうさう、彼處にゐるのが僕の家内だよ。」

さう云つて、二階の緣の向うに見える庭を指した。

「ほら、あの松の木の間に、白い洋服を着て遊動圓木に乘つてゐるのが見えるだらう、あれがさうだよ。」

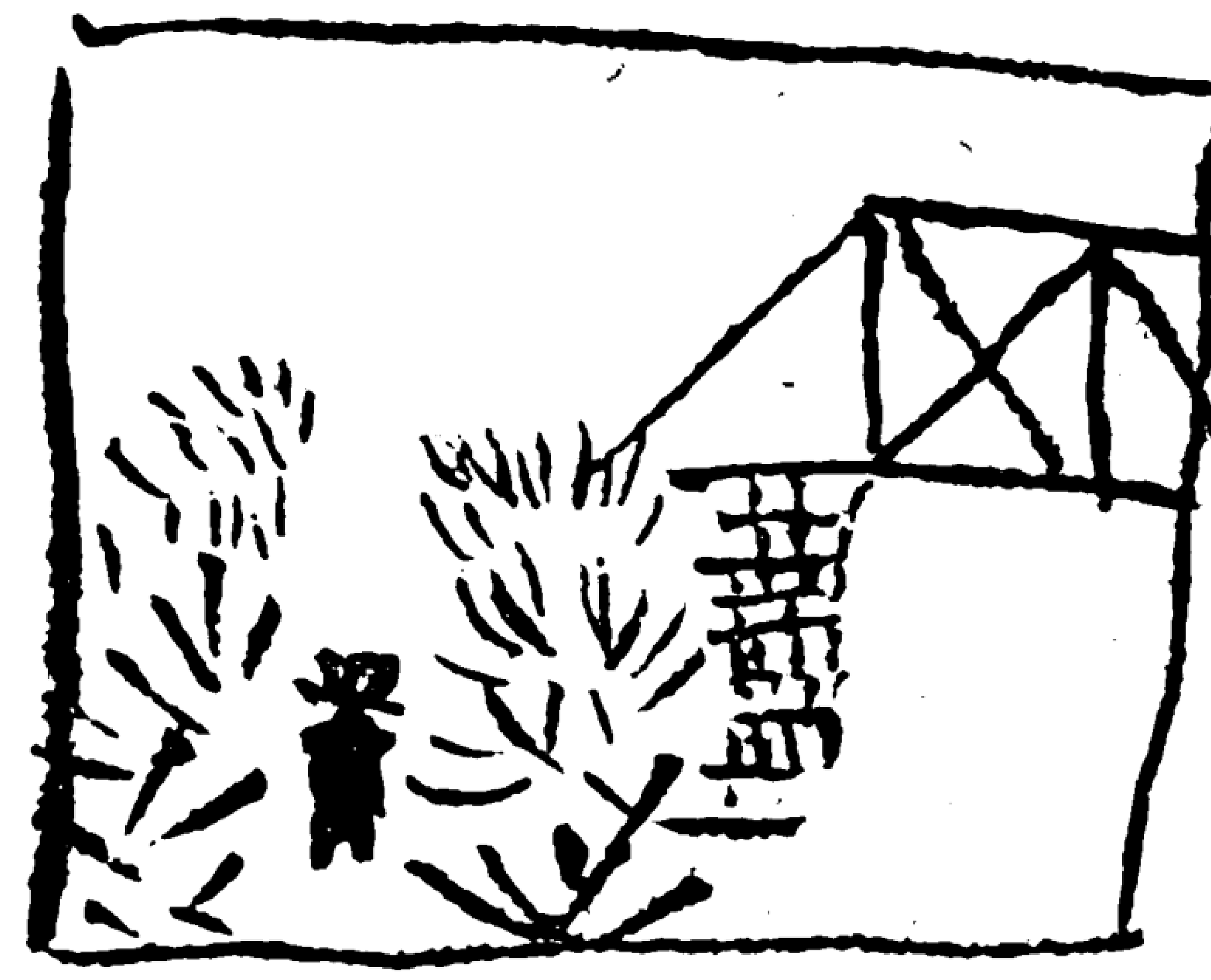
「ああ、あれが奥さん………」

私は椅子から伸び上つて、下で遊んでゐるA夫人の姿を見た。彼とは十五六も歳が違ふ、まるで女學校の生徒のやうな若い美しい夫人であつた。

「どうだね、馬の養とは違やしないかね、アハハハハ。」

Aは出し拔けにさう云つて笑つた。

（大正十四年十月稿）



ヌーヴエレット

八十吉

齋藤茂吉

僕は維也納（ウインナ）の教室を引上げ、笈を負うて二たび目差すバヴアリアの首府民顯（ミユンヘン）に行つた。そこで何や彼や未だ苦勞の多かつたときに、故郷の山形縣金瓶（かなかめ）村で僕の父が歿した。眞夏の暑い日ざかりに畑の雜草を取つてゐて、それから發熱してつひに歿した。それは大正十二年七月すゑで、日本の關東に大地震のおこる約一ケ月ばかり前のことである。

僕は父の歿したことを知つてひどく寂しくおもつた。そして晝のうちも床のうへに仰向に寢たりすると、僕の少年のころの父の想出が一種の哀調を帶びて幾つも意識のうへに浮上つてくるのを常とした。或る時はそれを書きとどめておきたいなどと思つたこともあつて、こゝに記入する「八十吉」の話も父に關するその想出の一つである。かういふ想出の一つ一つは、例へば念珠の珠の一つ一つのやうにはならぬものであらうか。

八十吉は僕の父の『お師匠様』の孫で、僕よりも一つ年上の童であつたが、八十吉が僕のところに遊びに來ると父はひどく八十吉を大切にしたものである。讀書きがよく出來て、遊びでは根木を能く打つた。その八十吉は明治廿五年舊暦六月二十六日の午すぎに、村の西方をながれてゐる川の深淵で溺死した。

そのときのことを僕はいまだに想浮べることが出來る。その日は村人の謂ふ『酢川落ち』の日で、水嵩が大分ふえてゐた。川上の方から瀬をなしてながれて來る水が一たび岩石と粘土からなる地層に衝當つてそこに一つの淵をなしてゐたのを『葦谷地』と村人が稱へて、それは幾代も幾代も前からの呼名になつてゐた。目をつぶつておもふと、日本の東北の山村であつても、徳川の世を超え、豐臣、織田、足利から遠く鎌倉の世までも溯ることが出來るであらう。『葦谷地』といふから、そのあたり一面に蘆荻の類が繁つてゐて、そこをいろいろの獸類が恣に子を連れたりなんかして歩いてゐる有樣をも想像することが出來た。明治廿五年ごろには山川の鋭い水の爲めにその葦原が侵蝕されて、もとの面影がなくなつてゐたのであらうが、それでもその片隅の方には高い葦が未だに繁つてゐて、そこに葦切がかしましく啼いてゐるこゑが今僕の心に蘇つて來ることも出來た。その廣々とした淵はいつも黝ずんだ青い水を湛へて幾何深いか分らぬやうな面持をして居つた。瞳を定めてよく見るとその奥の方にはゆつくりまはる渦があつて、そのうへを不斷の白い水沫が流れてゐる。その渦の奥の奥が龍宮まで届いて居るといつて童どもの話し合ふのは、彼等の親たちからさう聞かされてゐるためであつて、それであるから縱ひ大人であつてもそこから餘程川下の橋を渡るときに、信心ふかい者はいつもこの淵に向つて掌を合せたものである。その淵も瀬に移るところは淺くなつてその底は透き徹るやうな砂であるから、水遊する童幼は白い小石などを投げ入れて水中で目を明いてそれの拾競をしたりするのであつた。

舊暦の六月廿六日は『酢川落ち』の日であつたけれども、もう午過ぎであるから多くの人は散じてしまつて、恰も祭

觸のあとの樣な靜かさが川の一帶を領して居た。弱くて小さい魚は死骸となつて川の底に沈み、なかには浮いて流れてゐるのもある。割合に身が大きくて命を取留めた魚は川下に下れる限り下つたのもあり、あるものは眞水の出づるところにかたまつて喘いてゐるのである。さういふ午過ぎに十四ぐらゐを頭に十又は九つ八つぐらゐまでの童が淵の岡の割合淺いところに水遊をして居た。水遊と云つてもふだんの日の水遊とは違つて、一方には底に潜つて行つて死んだ小魚を拾ふのもその樂の一つなのである。間が好くば弱つて喘いてゐる大きな魚をもつかまへることが出來たりするので、童らは何時までも陸に上らうとはしない。泳げるものは最も氣味の惡い深いところまで泳いで行つて渦のところを二まはり三まはりぐらゐ廻つて來るのが自慢の一番と謂つてよかつた。僕はその時泳ぎが出來ないので空しく淺いところに潜鏡などをして遊んでゐただらう。すると淵の向う岸に八十吉がたつたひとり淺瀬のところで何かしてゐるのが見えた。向う岸と云ふと僕らの居るところからは平らな光つてゐる水面を中に置いて可なりの距りがある。八十吉は唯一人で小魚でも見つけて居るのかも知れんと思つてから五分間位も經つた頃であらうか。向う岸から少し淵に入つた邊のやうな水面に人の兩方の手が五寸ぐらゐひよいと出たのが見えた。童らの驚く間もなく、人の兩方の手が二たび水面から五寸ばかり出た。ほんの刹那である。そのとき十四になる童がいきなり水に飛込んで泳ぎ出した。稍しばらく泳いでゐたが人の兩手が水面から出たあたりに行着くと頭の方を下にして水中ふかく潜つて行つた。その童の兩の足の活潑な運動も見えなくなつていよいよ水中ふかく潜つて行つたとを觀念すると、こんどはみんな息を屏めて、小さい心臟の鼓動をせはしくしてそこの水面を見詰めてゐた。水面は全く水の動揺を收めてこの事件を毫しも暗指してゐる樣な氣配がない。やや、暫くすると童はつひに空しく水面に浮上つて來て、しきりに左の手掌で顏を撫でた。その時である、はじめて事の穩々しくないといふ一種の不安が僕らの心を壓して來てそこに居たたまらないやうな氣がした。童は二たび身を逆

まにして水中に潜つて行つた。けれども暫くのち童がまた手を空しうして水面に浮上つたとき、水面にあつて、人を呼べこゑを立てた。それから僕らはひた走りに走つて田畑に働いてゐる大人を呼びに行つた。

村の人々が數十人集つて、かはるがはる淵の中に飛込んだのは、人の兩手が見えてから三十分ぐらゐも經つてゐたであらうか。大人が息こんで水中に潜るのであるが、八十吉はなかなか見つからない。入りかはり立かはり水中にもぐつて、また三十分間ぐらゐも經つた頃であつたらうか。一人の若者がとうとう八十吉を肩にかついで水面に浮上つて來た。若者は何か鋭く叫んで、その肩には生白い人の體がぶらさがつて、首の方がだらりとして左の腕などは目にからびた葱の白いところを見るやうな、さういふ光景が電光のごとくに僕に見えた。

『お關の婿だ。あれあ』

『お關の婿あ八十吉を見つけた』

かういふこゑが聞こえた。お關は村の村はづれに小さい店を開いてそこで揚物(あげもの)だの蒟蒻(こんにやく)煮などを賣つてゐた。八十吉を引上げたお關の婿といふのはそこへ他村から入婿に來た若者のことであつた。この若者は其の數年後隣村の火事に消防に行つて身を挺んじて働いたとき倉の鉢卷が落ちてつひに死んだ。八十吉が水の中からやうやく上つてから暫くは、人間の重苦しい鋭い一種の叫びごゑがそのあたり一帶にきこえて居たが、間もなく元の靜寂に歸つた。

藏王山(ざわうさん)の麓に湧出でる硫黄泉の湯尻が一つの大きい瀧瀬をなして流れてゐる。それが西に向つて里へ里へと流れ下つて、金瓶村の東境(ひがしざかひ)に出るとそこから急に折れて北へ向つて流れる。此の川の川原の石はいつも白い樣な色合を帶びてゐて水苦一つ生へない。淸く澄んだ流であるが味が酸いので魚も住ます、蟲のたぐひも卵一つ生むことをしない。又この水を田に引くと稻作(いなさく)に害があるので、百姓にとつて此の川は一つの毒川だと謂つてよい。これを酢川と何時の頃からか

名づけて來た。それから、金瓶村の西方を流れる川は米澤境の分水嶺から出てくるもので、山形の平野に出てから遂に最上川に入るのであるが、これは淡水であつて多くの魚類を住まはせてゐる。然るに昔、雨降の後に洪水が出た時、村の東境まで西へ向つて流れて來た酢川が北へ折れる處で北へ折れずにそこを突破したから、村の西方を北へ流れてゐる淡水の川に酢川の水が混つてしまつたのである。いはば西洋文字のHの様な格好になつたのである。すると其の川に住んでゐる魚族が一度にむらがり死ぬといふ現象が起つた。さういふ害のある水が淡水の川に混つては困るから、村では破れたところに堤防を築いてその混入を防いだのである。然るにいつの頃からであらうか。時代はずつとずつと溯るであらう。深夜人無きに乘じてその堤防を破つて故意に酸い水を淡水の川に灌いだものがあつた。その酸い水が混じると、魚の族は眞黑になるほど群がつて川下へ川下へとくだる。それを梁で取れるだけ取つて、曉にならぬうちに家に歸つて知らんふりしてゐるのである。これを『酢川落ち』と唱へる。曉に先立つて草刈に行く農夫の一人二人がそれを見つけて、村役場へ屆ける。村役場では人足を出して堤防の修理をする。然るに一方では村の老若男女童男童女が我先にと川へ出かけて行つて、弱り切つてゐる魚を捕まへるのである。つまり餘得にありつくのである。この『酢川落ち』はさうたびたびは無い。また村人も一種の樂しみとおもふので、役場がそれを大目に見て、罪人を發見しようと努めるやうなことはない。『酢川おとし』の行爲は法に觸れるべきものであるが、『酢川おち』の現象は村民にとつては無くてならぬ。謂はば一つの年中行事の如き觀を呈するに至つた。それがずつとずつと古い代から續いて來たのである。泳を知らない、常には川遊などをしない八十吉が、この『酢川おち』の日に、たゞのひとりで川に遊びに來てゐたのである。

　八十吉は終に蘇らなかつたとを下男が來て話して呉れた。八十吉のこの事があつた時父は他村に用足しに行つて、日暮時に入つてやうやく歸つて來た。父の顏を見るや否や、いきなり僕は父の側に行つて、八十吉の溺れる有様、それから

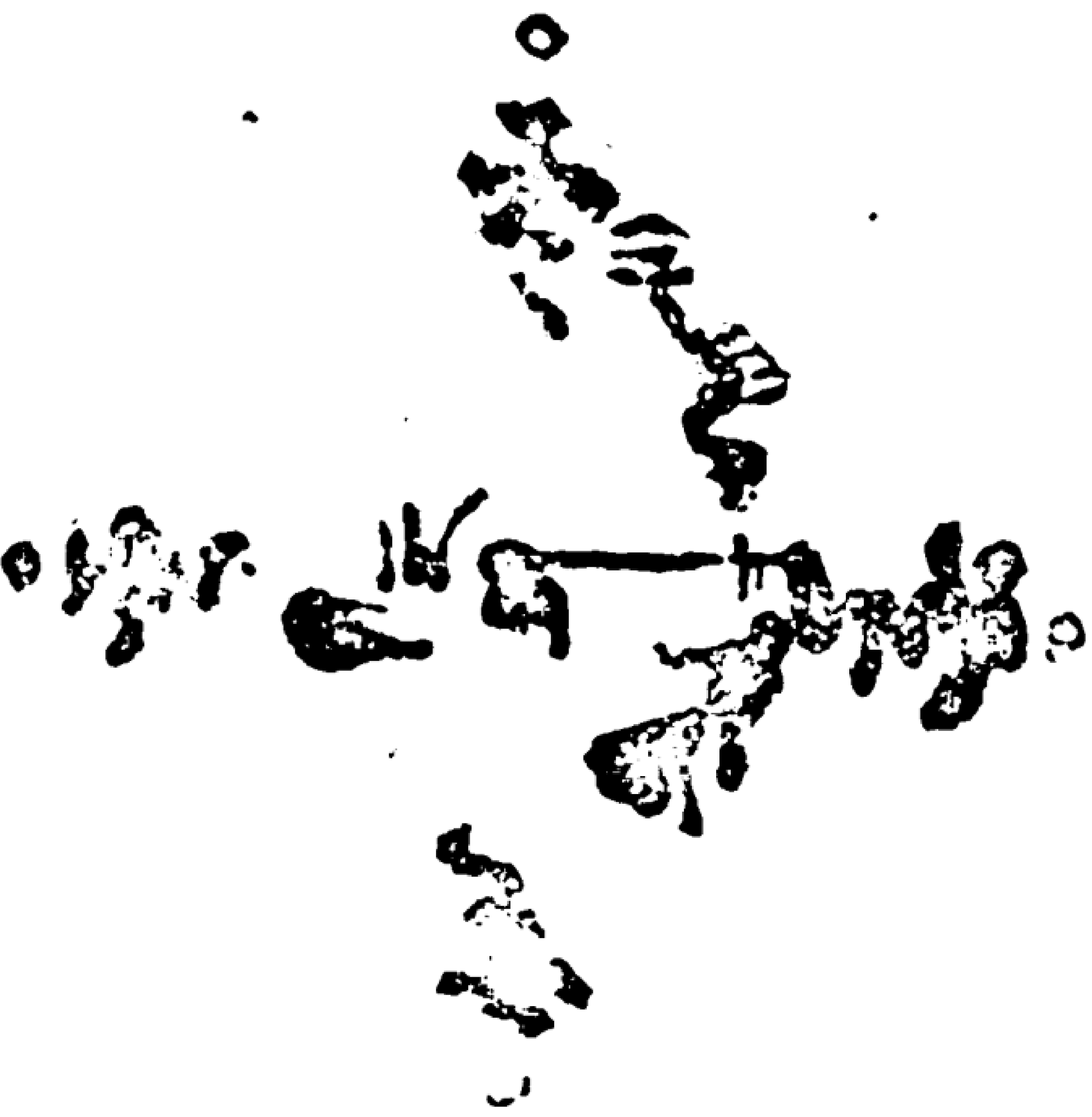
八十吉を水から揚げてから、薪火をどんどん焚いて、身の皮のあぶれる程八十吉を温めたこと、八十吉の肛門から煙管を入れて煙草のけむりを骨折つて吹き込んだこと、さういふことを息をはづませながら話をした。

『八十吉の尻の穴さ煙管が五本も六本もずぼすぼ這入つたどつす。ほして、煙草の煙が口からもうもう出るまで吹いたどつす。』

かういふ僕の話を聞いてゐた父は、どうしたのか一ことも云はずにいきなり僕をにらめつけた。さうして僕は豫期しない父の此の行爲に驚愕するいとまもなく、父はあたふたと着物を着換へて出て行つてしまつた。僕の祖母も僕の母もみんな八十吉の家につめ切つてゐた時である。

僕は父の歿した時、民顯の假寓にあつてこのことを想出して、その時の父の顔容を出來るだけおもひ浮べて見ようと努めたことがあつた。歸國以來僕は心に創痍を得て、いまだ父の墓参をも果さずにゐる。家兄の書信に據ると八十吉は十二で死んでゐるから僕の十一のときであつた。八十吉は金瓶村寶泉寺に葬られてあつて、圓阿香彩童子といふ戒名をもつてゐる。

(大正十四年九月記)



『まいとん』

池谷信三郎

漠然と沖から寄せて來る土用波のうねりが、一直線にくつきりと蹲んだかと思ふと、そのまゝどつと碎けて、それが左右からさつとぶつかると、一丈餘りの飛沫を曇つた秋の空にぶち上げた。默つて腕を組んで沖を見てゐたAの耳もとへ妻の聲で、

——九月の海岸つてほんとに淋しいもんね。

取壞された更衣所の莚簀の殘りが、雨の雫をふくんでぐしやりと堆つてゐた。兩人は大方默つて、濡れた砂地を踏んで行つた。

日よけを取つた軒邊に吊された風鈴の音が妙にBの心をいらだたせた。

——おーい。風鈴をかたづけておくれ。秋風に吹かれた鈴の音なんて、とても我慢出來たもんぢやない。

紙に包んだ風鈴をボールの箱に藏ひ乍ら、B子は何故かしんみりとした氣持に落ちて行つた。何か知ら賴りない、空虛な心持であつた。夫の言葉が皮肉のやうにもとれてゐた。

九月の聲を聞くと、見識つた顏が皆んな都を指して歸つて行つて了つた。漠然とした寂寞感が、二組の夫婦をお互ひに親しいものにした。それに麻雀が殊にもその間に鎹を打つた。此支那の遊戯は四人の人が要るのであつた。一人缺けても興味が失せた。かうやつて二組の夫婦は一日置きにお互ひの家に集つては、夜晩く迄麻雀に耽つた。此遊戯には色々と面倒な手續があつた。先づ最初に骰子を振つて座席を定めるのである。此事を『まいとん』と云つた。四人は口々に『まいとん』と呼んで熱心に骰子の轉りに目を追つた。何故ならばそれはかうやつて定められる可き組合せの中、皆ん

た自分の配偶者に非る異性と、各々向ひ合せに坐る事を、暗々に願つてゐたからであつた。不幸にしてさうでなかつた場合、四人の興味は三分の一にも減つて了ふ。

Aは駒を攪き混ぜ乍ら、時々觸れるB夫人の鮎の刺身のやうな白い指先を見てゐた。いきなりあの手を握り占めて、そして、………―おい、もう並べやう。

格子の窓の下の叢に、ぢつと鳴き澄してゐる蟋蟀の音色に耳を傾け乍らそれとなく自分の顔を凝視めてゐるB夫人のうつとりとした眼差しを、片手に雜誌をぱらめくり乍らやはり蟋蟀の鳴音にぼんやり聞入つてゐたAは、ふとその時意識した。妻はお茶を入れに台所へ行つてゐた。Bは寢そべり煙草の燐寸を差出した手の先で探してゐた。Aは思ひ切つて微笑んだ。そして、それがB夫人に反撥して、幽かなぬすみ笑ひがその眞珠のやうな齒並を、薄い赤色のレースに蔽られた電燈のほの明りの下に、キラリと光らした時、そこの角の天井から、すうつと、―何と艶消した事だ！―それこそおはぎのやうな大蜘蛛がするすると下りて來た。B夫人はいきなり悲鳴を上げて夫の足に獅嚙みついた。Aは立上るとそのまゝ手にしてゐた雜誌でぽんと横毆りに打拂つた。蜘蛛は大きなカーブを空間に描いて都合よく格子の合ひから夜の暗ら闇にけし飛んだ。

―お見事、お見事！

Bは煙草の煙をぷつと吐いた。B夫人は平たにぺたりと坐つて蒼い顔にそれでも苦笑を浮べてゐた。Aは、丁度お茶の道具を持つて入つて來た妻と顔を見合せた。ちよつと湛えた沈默がそこでどつと四つの笑ひにくづれて行つた。

――何んて云つてらつしやつたの？

――静岡の高等學校へ招ばれて、ちよつと文學の講演に行つて來るつて、さう云つてやつたのさ。君は？

――あたくし？　女學校の時のお友達の方でお産があるつてそう云つたのよ。

――お目出度い言譯だな。

――早く隧道を越えちまふと良いわね。あたし何んだか怖いんですもの。

――大丈夫ですよ。

――だつて、若しか知つた方に、……

――大丈夫ですつたら。

――さう？

（結婚なんて國際神樣の振つた『まいとん』なんだわ。初めつからかう云ふ骰子が出れば良かつたんだわ。）

AとB夫人。――汽車は揺れて行く。

兩人(ふたり)の横眼の中を夜の銀座が流れて行つた。酒の壜、額椽、靴、花柳はろみ、鋏、…と云つた工合に、特にもAは意識斉放の悪癖を凝らせなければならなかつた。明るいヘッドライトがさつと眼を撲つた。濡れた舗道が蛇の鱗のやうに青白く燦いた。軌道(レール)の切目と車輪が喧嘩をした。カフェ・ライオンの音樂が、丁度出て來た酔漢の頭を越してAの耳を打つた。が、忽これは此のめまぐるしい街道の先驅藝術に壓倒されて了つた。――Aは菊屋で買つた静岡名産のわさび

漬を大事さうに小脇に抱えてゐた。

　富士屋のローマンステーブルに兩人は向ひ合つて坐つてゐた。不安に伴ふ快樂が彼等の足を此の混合ふ家に向けさせた。果して兩人の頭には此二つの感情が交々に交錯した。Aは、珈琲を攪き廻し乍ら、銀の小匙を輕く動してゐるB夫人の例のふんわりとした白い指先を凝視めてゐた。そして彼は森ケ崎のあの宿屋の間取りを考へてゐた。その時。——彼はふとB夫人の眼がクリ〳〵と丸くなつたのに氣が着いた。ぢつと自分の斜めうしろを凝視めて凝結して了つた。Aはびくりとして振向いた。—B—である！　そしてその背後に、これは又自分の妻が立つてゐるではないか？

　Rrrr……ギクリとした緊張がちよつとゆるむと、仕方なくBは『やあ』と云つた。そして自分の妻の脇の空席に、そしてA夫人はAの隣りへ、そのまゝ默つて腰を下した。

——おい、珈琲二つ。

　四つの嫉妬、忿懣が四つの自責の念と相殺した。奇妙な感情のもつれが、立上る珈琲の煙と共に、大理石の卓子の上でこんぐらかつた。

（誰が骰を振つた『まいとん』か、此の皮肉な座席の定め方は？）

　そして四人の舌の上に、たゞ皮肉な諷刺の味丈がほんのりと殘されて行つた頃、Aは獨り言のやうに呟いた。

——まだ終列車に間に合ふだらう。

　後の三人は答への代りに立上つた。

——早く歸つて又麻雀でも圍まうか。

街路へ出た時、B子は夫の手にぶら下つてゐるコダックを見た。彼女はいきなりそれをひつたくるやうに取ると、二三歩先へ駈けて行つてくるりと振向きなりにパチつと二人をうつした。

——おい、馬鹿。こんな夜うつるもんか。

——さう？

——當り前さ。

——でもいいのよ。

これで良かつた、とB子は思つた。あの薄いフヰルムの膜の上に、ちつと自分の夫を凝視めて微笑んでゐるであらう所のA夫人の微笑が、かうして永久にあの不可思議な科學の魔法から消え去るのだ！

——お忘れもの

そこに白い服を着た小僧が立つてゐた。Aはあはてゝ其紙包を受取つた。彼は何か知らんかつとした赤い顔を建直した。其茶色の紙の中に包まれた靜岡名産のわさび漬！そしてその紐に印刷された、Ginza Kikuya の文字！

横須賀行の終列車の二等室に四人は並んで腰を掛けた。丁度降り出した雨の雫が暗い夜を背景として、キラリ〳〵と窓硝子に線を引いた。その末にたまつた水滴にぼやけた沿線の町の灯火。…………何故かB子の眼のうちは急に熱くなつて來た。まあ良かつたわ、と云つた氣持と共に、わく〳〵とした胸の底からこみ上げて來る涙の雫が、自分乍ら可笑しいと思ふ程、ぽたり〳〵と黒絹の手袋の上に落ちて行つた。彼女はそれを隱すやうに、暗い窓に顔をそ向けた。

そしてそこの硝子にうつつた夫の顔を見た。夫の顔がわけて優しく微笑んでゐる。

——蜘蛛が又する〱と下りて來たら、いきなり夫の足に獅噛みつくあの心持をあたしはいつ迄も勞つてやらなければいけないのだわ、と云つた氣がひし〱とB子を打つた。

Aは頻りと時計を見た。十二時前に、兎に角今日のうちに、家迄着かなければ、何か知ら取りかへしのつかない事が起るのだ、そんな氣持が云ひ合せたやうに二人の男の心の中で釀酵してゐた。

車窓の外を暗い濕つた夜が流れて行つた。

一九二五・一〇・二



椿

網野菊

娘の百ケ日の朝、お梅はいつものやうに暗いうちから起きて、女中が眼をさます前に御飯をたき味噌汁をつくつた。佛壇に燈明をあげてゐると、やつと女中が起きた。暫くすると小さい孫の花子が眼をさましたので、お梅は花子をおぶつて外へ出た。近所の鳥屋の前へ行つて一としきり遊んで歸つて來ると、女中は御飯を食べ終へて髮を結つてゐる所であつた。

花子に牛乳をあたゝめて飲ませる。ついでに自分の食事をすませる。大きい方の孫の小夜子が起きる。花子と小夜子の着物を着かへさせる。婿の着物をそろへる。それからやう〳〵自分の着がへにとりかゝると、小夜子が何とかかんとか云つて來る。やれ、ハンケチがないとか、紙がないとか。その度にお梅は家中をぐる〳〵駈廻つて孫の用を達した、さうかうしてゐるうちに、ほかの者達の支度はスッカリ出來上つて、お梅ばかりがあとに殘つた。婿の安三は暫くお梅の支度を待つて居たが、待ち切れなくなつて先きに出かけて行つてしまつた。

お梅は裏返しになつて居て中々ひつくり返らない洗ひ立ての足袋をやう〳〵の思ひで穿き終へると、羽織の衿もろくろくかへさずにアタフタと家を出た。一心に停留場の方に眼をつけながら走つて行つたが、眼のわるいお梅には、はじめ、婿や孫の姿が見えなかつた。それで、「先きに行つてしまはれたのか」と思ひながら尚一生懸命に駈けて行つてみると、婿達は停留場の電柱のかげに一とかたまりになつて立つてゐて、お梅が行きつくかつかないうちに、丁度其處に來合せた電車に乘つてしまつた。お梅はあはてゝ後から乘りこんだ。

思ひきり込んで居る上に遠慮會釋もなくガタ〳〵ゆれる電車であつた。お梅は何處か腰かける所はないかとあちこち眼を配つてみたけれども、生憎少しの隙もなかつた。

「みんな平氣な顏をして坐つて居るんだからね、これが學生さんだと直ぐ立つてくれるんだよ。」

お梅は大きな聲で、隣の吊革にさがつてゐる女中に云ひかけたが、若い女中は、

「そうですか?」と云つて顏をあからめた。

「私はかまはないけれど、安さんが大變だからねえ。子供を抱いて立つて居てはたまらないからねえ。」

再びお梅はさう云つたが、女中はよそを向いてゐて答へなかつた。

お梅は小さい孫を抱いてゐる安三だけでもせめて腰かけさせたいとあせつたが、誰も立つてくれる人はなかつた。

「いゝんです。大丈夫です。」

安三は少し神経質に云ひながらお梅のあせるのをとゞめた。そして、かへつて、いやな顔を見せた。それでお梅は席をさがすことはやめたが、それでも、新しい停留場に來る度に四邊を見廻すことを忘れなかつた。

吊革にさがつたまゝでA町まで來ると、其處で一行は電車を降りた。そして、とある横町へ折れて、靜な郎町を通つて行つた。

晩春の暖かい、まだ朝の影の淸々とした、人通りの少ない細い道を行く間、お梅は手頃な小石を拾ひ〳〵、花子を抱いた婿の後からついて行つた。花子はお梅から石ころを受取るとすぐに、眞面目な顔をして「パーン〳〵」と云ひ〳〵遠く道ばたに投げすてた。その度にお梅は、「オー、恐い〳〵」と云ひながら身を小さくかゞめては、すばやく次の小石を拾つた。けれども、癇の強い花子は、お梅の石の取りやうが少しでも遲いと直ぐぢれてむづかるので、お梅は汗を流し〳〵、足早の婿のあとから一生懸命チヨコ〳〵とついて行つた。

寺にはまだ親戚の者は一人も來て居なかつた。一同は座敷に通つて待つた。座敷から廊下越しに庭が見渡された。人氣のない廣い庭の片隅に赤い椿の花が今を盛りと咲いてゐた。大きい孫の小夜子がそれを見つけて「取つてくれ」といふので、お梅は庭へ降りて二三輪ちぎつて來ると、小さい方の孫も手を出した。それでまた庭へ戻つて一二輪折つて歸つて來ると、小夜子がばゞかりへ行きたいと云ふ。小夜子についてはばゞかりへ行つたり、花子の機嫌をとつたりしてゐると、やがて人がそろつて、本堂にうつつた。

天井の高い、晝間でも薄暗い本堂にはいると、お梅は眼をしば〳〵させて、向うの片隅を見やつた。

「オヤ、花はどうしたんでせう。一つも見えませんよ。」

百ケ日までは必ず本堂に飾つておかれる筈の葬式の時の花輪や花籠が一つも見えないので、お梅はビツクリして隣の席の親戚の女に云つた。女は、

「さうでございますねえ」と云つてお梅の指す方を向いたが、直ぐまた其隣の人の方に向いてしまつた。多分、矢張り花輪のことを話し合ふのだらうと思つて、お梅は默つて二人の話に耳をすませてゐたが、二人はまるきり別の話をしてゐたので、あきらめて、自分一人の回想にふけつた。

ボーン〳〵と納所の坊さんが鐘をならすと間もなく、緋の衣に拂子を持つた住職が三人の伴僧を從へて白足袋の足を輕く靜々と運ばせて本堂にはいつて來た。そして住職は天蓋の下に、他の三人は其左右後に席を占めて、間のびした調子でお經をとなへはじめた。高すぎるほどの調子でボツ〳〵と言葉をきり〳〵云ふ一人の伴僧の聲と、低い太い聲でとなへる他の伴僧との間に極めて低い和尚の聲が殆んど少しの絶えまもない位にひゞくのをきいてゐると、さすがに落着いた氣持になつて、一同はだまつてお經に耳をすましてゐた。大きい孫の小夜子だけが時折くすくす聲をたてゝ笑つて、まはりにゐる大人達の顏を仰いでは自分と一緒に笑はせようとしてゐたが、いくら笑つても大人達が畏まつてゐて自分をかまつてくれないのを知ると笑ひやめて、多少つまらなさうに、併しそれでもおとなしくチヤンと坐つてお坊さんの口もとをかはるがはる見まもつてゐた。小さい方の孫は先刻から女中の背にねむつてゐた。そのひつそりした中に坐つて靜にお經の聲をきいてゐると、お梅の心の中には、若くて死んで行つた娘の姿がありありとよみがへつて來た。別に、どういふ時どういふことゝいふ風に具體的には思ひ出されなかつたが、たゞ全體に娘のことが頭に浮んで來て、お梅は常でしばしばまぶたをぬぐつた。ふつと祖母のすゝり泣きに驚かされた孫の小夜子は珍しいものでもみつけたやうに大きな眼を

して祖母を見たが、お梅はそれには一向氣がつかず一人で涙をぬぐひつゞけてゐた。

夢におびえたのか、それとも木魚の音に眼をさましたのか、花子が急に泣き出した。女中が急いで廊下へ出て行くと、泣いてゐたお梅もあはてゝ立上つて廊下へ行つた。そして自分のコートのかくしから、用意に入れて來てあつた輕焼のおせんを一枚取出して孫に渡し、其處には居もせぬ犬を呼んでみたりしてヤツと孫の機嫌を直すと、再び本堂の席に戻つた。

お經が終つて住職達が退座すると、先刻鐘を鳴らした坊さんが燒香台を佛壇の前に持出して、施主達の方へ向つて會釋した。婿、孫達の燒香の間「まあ、おいたはしい」とか「花子ちやんの姿を見ると――」とか云ふ言葉が型の如く婦人達の間に取交されたが、それがすむと今度は燒香順のゆづり合ひがはじまつた。

「まあ、あんたから。」

「いゝえ、まあ、お母さんから。」と一押問答のあげく、お梅は立つて行つて燒香をすませたが、それがすむと其儘其足で晴々した顔をして、佛壇の極くそばまで行き、金色に光つてゐる本尊を眺めたり、金襴の掛物の裏を返して寄附主の名前をしらべた。

一同の燒香がすんだ時分に再び最前の納所さんが出て來て、

「住職は一寸差支へがあつて挨拶に出られないから。」とことはつた。そしてお梅達が持參したお菓子を幾つかの鉢に入れて差出した。住職が挨拶に出ないといふことは、お梅ばかりでなく安三其他の者に對しても何となく不滿の感じを與へた。客ばかりでお茶を飲みお菓子を食べることは變にてれた氣持を一同に起させた。それでも、お梅は熱心にお茶やお菓子の世話をした。客に一巡すゝめ終ると、廊下から女中を呼んで來てお菓子をとつてやり、孫には歸りの電車の中

で食べる分まで取り分けてやり、自分も取つたが、それでもお菓子はまだ澤山殘つてゐた。

「どうせ、あなた、手前どもから持つてまゐつたのでございますから。」

お梅は更にさう云つて客の間をすゝめまはり、女中にも、もつと取るようにと云つた。

やがて墓地へ行くことになつた。みんな立上つてコートを着たり外套をはをつたりしてゐる間に、お梅は孫達のお菓子を手早く紙包みにして袂にしまふと、孫達を再び便所へ連れて行き、それから玄關に出て來ると、みんなはもう下駄をはいて立つてゐた。大急ぎでお梅も下駄をつつかけると、小夜子が赤い椿をもう一つと云ふ。お梅は一人庭へまはつて行つて、赤い椿の花を二本折つた。傍に白い椿があつたのを見つけると、それも二本だけ折つて玄關に戻つた。が、其處にはもう誰の姿も見えなかつた。お梅は兩手に椿の枝をにぎつたまゝ、あはてゝ墓地の方へ駈け出して行つた。



芭蕉の葉

A MOONSHINE AFFAIR

稲垣足穂

薪を採る者

「鹿は何かにおどろいて走つてきたのを、私が斧で撃ちころしたのです。人に見られたらいけないと思つて芭蕉の葉でかくしたのですが、よろこびのあまりその場所をわすれてしまつたのです。で、夢を見たのだと思ひ、路々そのことを歌つて歸りました。ところが、こんどはそのかくしたところをほんとうに夢に見たのです。水のやうな月があたつてゐるところへ黒い影があらはれ、私の鹿をもつてかへりました。その家をさがすと見つかつたのですが、人の鹿をぬすみながら知らないと申すのです」

村の男

「私は歌をきいて鹿を取つてきたので、山の男はたゞその夢がほんとうにあたつたといふだけなのです。夢のなかのことでほんとうの鹿を取られてはなりません」

村の男の妻

「ゆうべはいゝお月夜でしたから、うちの人は、山の男のことを夢に見たのです。うちの人の夢こそほんとうなのです。どうしてそんなをかしな歌をうたつてとほつた人なんかゞゐませう」

役人

「ともかく、こゝに鹿があるから二人でわけたがいゝだらうと申してゐるのですが……」

もつとえらい役人

「このさばきもやはり、夢に人の鹿を分けようとしてゐるのではないでせうか?」

大臣

「どれが夢でどれが夢でないかはわしにもわからぬ。それをきめるのは黄帝と孔子の他にはない。黄帝と孔子が今日ゐないから、それは何人にもわかるまい。そこいゝやうに取りはからふがよからう」

非論理的性格の悲哀

萩原朔太郎

白でないものは黒である。もし白でも黒でもないものは、中間の灰色でなければならない。これが論理の原則であり、我々の推理の方式は、いつでもこの前提の上に組みたてられる。

しかしながら多くの事實は、いつも人間の推理を裏切つてゐる。具體的なるすべての事實は、決して論理的であり得ない。特に我々の人格ほど、非論理的なものはないであらう。人格の實相は、實に矛盾そのものである。たとへばドス

トイエフスキの著るしい特色は、變質者に特有なる非倫的・惡魔主義的の性向である。然るに彼の一面は、耶蘇のやうに高潔で、處女のやうに純眞なる人道的な特質を有してゐる。故にこの一の人格は、惡でなく善でなく、白でもなく黑でもない。しからば善惡の中間たる、あいまいな灰色人物であるだらうか？否、ドストイエフスキイの人格は、神と惡魔の著るしい對立から成立してゐる。そこには北極と南極とがある。そして兩極の調和たるべき、溫帶地方といふものが全くない。即ち彼の人格は、白にして同時に黑、黑にして同時に白である。神と惡魔とは、いつも一の氣質の中に、或るふしぎな樣式で入り混みながら生棲してゐる。兩者は決して調和をせず、また妥協をもしてゐない。彼は白でなく黑でなく、また灰色の人物でもない。

同樣なる非論理的の素質が、トルストイやニイチエや、その他の多くの藝術的天才に就いて觀察される。實に藝術家の本質的性格は、論理的矛盾の標本である。しかして偉大なる作家の性格ほど、より著るしい矛盾の對照を示してゐる。――げにあらゆる藝術的なものは、非論理的である。――やや平凡な作家と雖も、藝術家的氣質を有する限りには、多少の非論理性をもたないものはないであらう。ただ反省的の偏質をもたない限り、人は自ら自己の矛盾に氣がつかない。しかしてそれに氣のつくとき、人は決して幸福でありえない。何となれば吾人の意志が、人格の合理的完成を欲して止まないから。トルストイの晩年に於ける悲壯な生活など、その著しい例であらう。

ここに或る一人の人間が、いかに性格の矛盾にみたされ、且つ不斷にその反省で苦しんでゐるかといふことを、私の讀者に告げることも、あながち無意味ではないと思ふ。況んやその男は、多少文藝の才能を有してゐて、同情すべき人柄の男であるから。かりに私は、その人の名をSと名づけておく。もし讀者の中に、多少彼と共通する性格の人を發見

し得ば、Sはいかに自ら慰められるであらう。

Sの生れたのは、田舎の或る小さな町であつた。彼の物質的環境は、比較的に平和で幸福であつたけれども、宿命的に生れついた偏質性が、早くから彼を不幸な人生に導いた。彼の長い生涯を苦しめてゐる、著るしい性格悲劇の發端は、實にその小學校の生活に始まつてゐる。小學校時代の思ひ出！ それは多くの人にとつて、無上に樂しい甘美な追懷であるだらうが、獨りSにとつては反對であり、耐えがたき憎惡に價するほど、暗く苦々しいものであつた。何故ならばSの生涯を誤らした、不吉な厭人的情操や病欝的精神や、その他のもろ〳〵の惡しき苗は、その學校生活の小社會的環境によつて、ひとへに育ぐくまれたものであるから。

しかし私は、ここでSの傳記を書かうと思ひ立つたのでない。實を言へば、環境が彼を惡くしたのでなく、彼の性格そのものが始からこの種の社會的環境と調節できなかつたのであつたらう。Sの性格は、既にその頃から調和できない矛盾であつた。或る教師は、Sに就いて次のやうな批評を下した。「極めて善良で、內氣で、正直で從順な模範的學生。」然るに別の教師は、常に反對な意見をもつてゐた。彼はSに對し、憎惡な感情をもつて言つた。「横着で、生意氣で、高慢で、反抗好きの不良兒童。」と。そして兩方の觀察とも、Sには適切に當つてゐた。

Sの學校の子供等は、その氣質や性癖の著るしい對象によつて、二派のはつきりした黨派に別れてゐた。學業の成蹟から言ふならば、一方は「優等組」で、一方は「劣等組」であつた。性癖から言へば、一方は「溫良組」で、一方は「不良組」であつた。またこの同じ對象を、氣質上から觀察すると、前者は「貴族派」と言ふべきで、後者は「平民派」と言ふべきだつた。即ち優等組・溫良組に屬する生徒等は、人品的に氣位が高く、趣味が上品で、一般に高踏風の氣風をも

つてゐた。これに對して劣等組・不良組の一派に屬する子供等は、人品が野卑で、さつくらばんで、率直ではあるが粗しげだつた。

貴族組と平民組と、この二つの黨派に屬する生徒等は、互に敵視してにらみ合つてた。彼等の關係は、表面全く沒交渉のやうであつたが、內心では夫々對手の子供等を輕蔑し、氣質的に肌の合はない憎惡の感情をかくしてゐた。Sの學校の子供等は判然とこの兩派に別れてゐて、互に口を利き合ふこともしなかつた。然るに獨りSだけは、その兩黨のいづれにも屬しなかつた。ただ內氣の彼は、他から誘惑されるままに、或は貴族組の子供と遊び、或は平民組の子供と遊んだ。しかしSが貴族組の子供に混つて遊ぶとき、彼はたちまち孤獨を感じて、皆から仲間はづれになつてしまつた。何となればSの性癖には、どこかその連中と調和できない、もつとざつくばらんで野卑な氣持ちがあつたから。彼が何か發言するとき、いつもその仲間の子供たちが顏をしかめた。つまりSの性癖にまで、何かの貴族組らしからぬ、肌の合はないものがあつたのである。

しかしながらSが、平民組の子供等と遊ぶときは、それよりも尙一層不幸であつた。或る種の惡戯をしたり、教師に反抗したり、思ひ切つた率直の氣分を露出したりすることで、時に仲間らしい共鳴を感じてゐながら、氣質のどこかの隅に於て、全く肌の合はないものを感じてゐた。それ故平民組の子供等と一所に居る時、Sはいつも貴族組の子供の氣品をしたつてゐた。そして貴族組と遊んでゐるとき、平民組の子供の野性的な氣風にこがれてゐた。かくしてSは、あらゆる生徒中での仲間はづれであり、どんな氣質の子供とも親しめなかつた。彼の不幸は、單に孤獨であつたばかりでなく、氣質の毛色變りのために、理由なく憎まれて、迫害されたことである。即ち貴族組の子供は、彼等一流の傲慢な態度によつて、皮肉らしくSを嘲笑し敬遠した。そして平民組の子供等は、鳥が旅鴉をいぢめるやうに、腕力によつて

亂暴になぐりつけた。實際Sは立場が無かつた。學校の社會そのものが、彼には呪ふべき最惡であり、その殺風景なる建物は、彼を苦しめる牢獄の如く思はれた。

宿命的悲劇とも言ふべき、Sのこの非論理的性格は、彼が成長するにしたがつて、益々著るしく多角的になつてきた。氣質のあらゆる方面、趣味の至る所の傾向に、互に矛盾し反對する二つのものが、全然不調和に對立してゐることをSは明らかに自覺してきた。元來Sの體質は、膽汁質に屬してゐるため、氣質的に憂鬱の傾向をもつてゐるのに、その趣味は反對に陽快のものに向つてゐた。音樂でも、美術でも、演劇でも　すべてSの好きなものは、陽氣で、賑やかで、明るい氣分と色彩に充ち、多分の健康性をもつたものに限られた。暗く陰氣なものは、じめじめた暗鬱の氣分のものは、本能的に厭ひであつて、見向くことさへもイヤであつた。この氣質と趣味との、實に著しき矛盾から、彼の個性的情操には、一種ふしぎなる色を生じた。たとへば彼の時々作る敍情詩は、思想的には憂鬱の內景をもちながら、言語の感覺や氣分の上では、むしろ陽快に近く明るい感じのものであつた。

Sの性格は、一方に全く哲人的のものであつた。彼は冥想を愛して、俗界の感覺的生活を賤しむ如き、超俗的高邁の氣風を持つてる人物である。しかも同時に、Sは純粹の俗物であり、感覺の快樂を追つて精神を顧みない、一の現實的人間主義者の如く思はれる。この前の性向が、彼に哲人の見得をあたへ、この後の性向が、彼に近代的藝術家の見得をあたへた。しかも彼の本質は、その何れでもないのである。そして勿論、また兩者の中間的調和でもない。たゞ彼のいたづらに書く藝術が、ふしぎにその非論理な情操を表出してゐる。即ち「心靈的な內容」と「感覺的な氣分」とが、一の作品の中に並立してゐた。

Sの趣味性の本體には、美の洗錬を悦ぶところの、高踏的、唯美派的の氣位がある。しかるにSの性的氣質は、率直な野生を愛し、典雅を排して直情の流露を悦ぶ所の、眞の自由主義者なのである。この高踏的精神と野性的氣質。唯美主義と自由主義との、全く互に容れない矛盾が、いかにして一の人格中に同居してゐるだらうか？それはやはり彼の藝術によつて語られてる。その藝術品は、或る高踏派的な情操をもちながら、形式は極めて野生的、民衆的のものであり、最も平易にして大膽なる自由主義の表現に訴へてある。

かくの如く、要するにSの性格は、徹底徹尾矛盾にみちてる。二の反對する兩極が、いつも彼の中に對立して、非論理的なる情操を形象してゐる。このふしぎなる情操は、その非論的なるにもかかはらず——否、非論理的なる故に——彼の藝術品の特殊 個性を構成してゐる。しかしながら統一は、ただ藝術品に於てのみ。生活上に於けるSの人生は、實に支離滅裂たるものである。彼のあらゆる性格悲劇が、いつもその點から出發してゐる。その性格悲劇は、彼の人性を破産しやうと試みてゐる。彼の運命は、いつも弟子に裏切られ、愛人に怨恨され、世人に誤解され、しかして友人からは少しも理解されないのである。

讀者よ！この非論理性格の所有者、Sの何人たるかは、既に諸君の推察したであらう如く、正に私自身である。今や私は、一個の貧しき文人として生活してゐる。しかも詩壇における私の地位、社會における私の地位は、かつて昔、小學校に於て經驗したる如く、全くそれと同樣であり、人生の初學に始めて知つた環境は、ずつと今日に至るまで、さらに少しも變つてゐない。私をして、常に永遠の敵と孤獨の中に生かしめよ！私をして白でなく、黒でなく、またその中間

色にも屬しない。一の斷然たる個性として生かしめよ！

直角

片岡鐵兵

×

撃つた。山鳥が羽を擴げて、枯れた茂みの中に黑い線を引いた。煙の彼方に、銃聲の反響が立つた。

「よし、よし。」

彼は銃をかゝへたまゝ、犬の首を抱きしめた。犬の首たまが、芝くさい。ハク〳〵と息をはづませる動物の口のほとりに、獵人の感動が渦卷くやうに思はれた。

山の中はしづかである。獲物の網袋の重みも、肥つた鳥の腹の彈力を思はせて、肩に柔らかく媚びて來る。

彼は、突然、荒々しく銃を引き寄せた。

これほど獲物はあるのに、それでも落ち着けない。彼奴が居るからだ！　彼奴の存在がこの靜かな山の中までも、影法師のやうに隨いて來て俺をいら〳〵させるのだ。

殺してやれ。

彼は銃を空に構えた。

樵、楓、蔦、櫟、それらの梢、木葉のすきまから、蒼空の無數の班點が、銃口のさきにちらついた。彼奴の嘲笑ふ眼である。

彼は撃つた。犬はキヨトンとして、手答へのない彈丸の行方を凝視した。

×

彼奴を殺したく思ふ瞬間ほど、彼を狂暴にするものはない。

彼は彼奴を憎んだ。彼奴の存在が、いつも自分に毒氣を吹き掛ける影のやうに感じられた。此世に彼奴の存在がある限り、努れ、虐まれるのだ。

彼と彼奴は親友なのに——

二人は同じ村で育つた。同じ中學を出た。同じやうに、親のあとを繼いで地主になつた。彼奴が町から美しい嫁を迎へると、それに負けない、いや、それより一層い丶女房を探すために、彼はどれだけ焦つたか知れなかつた。

彼奴が小作料を二割引いたゝめに、彼は二割五歩と出るの餘儀なきに至つた。

小作米の上り高だつて、自分一家の分だけの計算では氣が濟まない、すぐ彼奴の上り高が氣になるのだ。彼が縣會議員の候補に出ると、彼も直ぐ名乘りを上げる。お互ひに親友めかして地盤を讓り合つたのは好いが、そのために定員二名の中へ二人とも割込めないで落選してしまつたではないか。

彼が犠の鑑札を受けると、彼奴もすぐ鐵砲を買つたのだ。

考へると悲しく、腹立たしい。彼奴の影は斯うしたしづかな山奥にまで付纒つて來る。花札だつて幼稚な賭に、彼奴はいつも役で勝つ奴だ。今日も一日狩り暮して、里に歸つた時、もし彼奴が猪でも打止めたと云ふやうな噂をきゝはしまいかと、彼は我と我が耳が恐怖に乾からびて居るのを感じるではないか。

殺してやらうか、惡魔め。

その時、思ひ掛けなく、彼の立つて居るすぐ足もとの溪底で、地もひゞくやうな銃聲が鳴つた。

彼は飛び上つた。犬がチョツと耳を立てた。彼は本能的に、その銃聲が、『彼奴』のものである事を知つた。

「おのれ！」

身體中をふるはせながら彼は灌木をわけて谷底の方へ下りて行つた。

×

黒いハンチングが、眞赤な蔦の葉の間をたゞよふと見るまに、彼奴のギョロリとした眼が、こちらを鋭く見据えた。溪底である。

彼は手をあげた。彼奴も手をあげて相圖を返した。灌木が波のやうにゆれて、紅葉の波がしらが兩方から近寄つて行つた。

「いよう、お手柄々々！」

彼奴は滿面を笑はせながら、彼の獲物袋を覗いて叫んだ。

彼も彼奴の獲物を素早く眺めた。とても比べ物にならないほど澤山だ、と思ふまにカツとなつてしまつた。

「何だ、君の方が多いちやないか。」

「そら、腕の相違さ。」

「ハヽヽ。今に見て居るが好いや。時に煙草を忘れたが……」

彼奴は默つて、獵服のポケットからシガレツトケースを取出した。

心を落ち付けるために、彼は煙草の煙を胸のふかくに吸ひ込んだ。そして云つた。

「それはさうと、君に折入つて話があるんだがね。」

×

溪は大きい。まん中どころに、ちよつとした平地のやうな物があつた。そこは、木も茂らず、少し濕氣ては居たが、休息するのに程よい草地であつた。二人は、ひどく昂奮した顏付きを、お互ひに薄い笑顏でかくしながら、その方へ步いて行つた。

「だから、僕は君を無二の親友だと思ふことに變りはないんだ。だが、それにも拘らず……」と彼が半ば吃りながら云つた。

「それにも拘らず」と彼奴は彼の言葉を受けて、たちどころに云つた。「僕が憎いと云ふのだらう。それは、君の感情でもあり、僕の感情でもある。お互ひに、お互ひの癪にさはり通しで、僕たちは永年生きて來たんだね」

「さうだ。お互ひに、どちらかゞ死なゝければ、自分の安心立命は得られないんだ。」

彼奴は、急に冷靜な顔付きになつて、

「安心立命？　然し、僕は自分の安心立命のために、君を殺さうとは思はないよ。」

さう聞くと、彼は先手を打たれたなと感じた。ひどく、胸のあたりをドシンと突かれたやうな氣持ちだつた。だが、先刻からの、冗談らしい笑顔は崩さないで彼は思ひ切つて云つた。一層冗談らしい調子で、

「僕は、君を殺したくさへ思ふよ。」

すると、彼奴はキヨトンとした顔で、

「殺せるかね？　決鬪を申し込む勇氣が君にあるか知ら？　鐵砲は僕の方が上は手だし……」

「申し込んだら、どうする？」

二人はどちらも其の瞬間に蒼白め、額に筋さへ泛べた。お互ひに血走つた眼と引吊つた顔をそむけて、溪の平地の方へ無意識に足を運んだ。

「決鬪をやるかね。」

しかし彼奴は落ちついた、しづかな言葉で呟いた。それに答へて彼は叩くやうに叫んだ。

「僕は、申し込みたいね。」

「よし、確かに、承知だ」彼が答へた。

なに冗談だ、いや、彼奴を殺さずにおくものか！　冗談か知ら！　灌木の枝が夢のやうに血走つた眼のまはりに湧き立つた。

平地に出た。二人は、お互ひに眼だけを笑はせて其所に寄り傍ふやうに突立つた。

×

「ぢやア、ぼつ〳〵決鬪に取掛るかね。」と彼奴は相手の眼をじッと覗き込んで云つた。

彼も、相手の眼の、底の底を汲み取る鋭さをおのれの瞳孔に集中させて云つた。

「卑怯の振舞ある可らず候」

「心得申して候」

「いざ。」

「いざ。」

いや、この調子なら冗談ですむぞ。そこで彼は勇敢に宣言した。

「二人の間の地面に鳥の影がさしたら、それが引金を曳く合圖だぞ！」

「ようし！」

×

二人は間隔十間をおいて相對して立つた。互ひの胸を狙ひながら、銃を構えた。

二人の間の地面には、秋の日ざしが明るく漲つて居た。もしその輝きの中に、鳥の影がさしたら、どうしようと云ふのだらう。引金を曳くか？　彼奴を殺すか、彼奴に殺されるか？　これは冗談だ、空を飛ぶ鳥の影が、草の上に動いて

渡らうなど丶も考へられない。よし、そのやうな、彩色畫めいた情景が此の谷間に起らうとも、その前に、彼奴は降参するだらうと彼は考へた。冗談だ。引金に指をかけて、お互の胸を狙ひながら、冗談だ、冗談だ、と心が罵るやうに叫んで居た。

×

五分間はそのま丶に過ぎた。

しづかな溪間には、谷川の音さへ響かなかつた。二匹の犬は、少しはなれた楓の樹のねもとに繋がれ、恐しい瞬間が來るとも知らずに、眼をしばだ丶きながら、主人たちの不思議な姿勢を眺めて居た。

二人の、相手の胸に狙ひを付けた銃口が微かに震へ始めた。

彼は、彼奴が冗談だと叫んで、ニコ〳〵笑ひ出すのを待つた。

が、突然、彼は戰慄した。彼奴だつて、矢張り、彼の方から「冗談だ」と叫んで、手を握りに來るのを待つて居るのだと感じたからであつた。

その瞬間、恐しい耳鳴りが世界を縮めさせた。彼の心の底に明らかに殺意が起つたからだ。

殺すのは今だ、あの憎惡すべき敵を殺すのは今だ。鳥の影よ、土の上を渡れ。彼は危く叫びさうになつた。

ふと、遠い回想の世界から、幼い思ひ出から生れて來たやうな物音を、彼は頭の上の空に聽いた。

鳥の羽音に違ひない。一心に相手の銃口を睨んで居た彼は、敵の彼奴も亦その羽音を聽付けて、眼をそつと地面に投げるのを見た。

彼奴は、鳥の影を地面に待つて居るのだらうか？ 影がさしたら、「冗談！」と叫ぶために？ それとも引金を曳くために？

彼も思はず地面に眼を伏せた。いつたん他所にそれたらしい鳥の羽音は、又、要諦な槍のやうに此方へ迫つて來る氣配である。

「殺してやれ！」

美しい鳥の影。殺せ！ 同時に、敵を狙つて居た彼の銃口が、俄に空へ垂直に向つた。

殺す。それよりも殺されよ。この間一髪の間に、何物かゞ彼に命令したのをハッキリ感じて――ほんとに殺すよりも、殺された方が好いのだ。彼の銃は空たかくに向つて轟然と鳴つた。が、鳴つた時、彼は敵の彼奴がびつくりして鳥の影を見たのを知つた。あれほど強情の彼奴なのに、彼奴は地面を見詰めたまゝ、相手の銃聲にびつくりして、思はず引金を引いてしまつたのを、こちらの彼は朗らかな氣持ちで知つた。だから、彼奴にも殺意はなかつたのだな――二人の殆ど同時に撃つた彈は、互ひに直角をなす線の上を飛んで行つた。一つは空へ垂直に、一つは地面と平行に。

――だから敵の彼奴にも、殺意はなかつたのだな――彼は朗らかにそれを感じ乍ら、倒れた。

直角をなす彈丸線の交るところに、彼の心臓があつたからである。（完）

編輯だより

□紅葉は二月の花より美はしいが、すべてが陰氣である。霜氣身にしみて人間が消極的に悲傷に傾く。

□遊ぶことにも躊躇は無用。猛志敢行には明日を待つな、疾風迅雷の如く人生は逝く、われもまた疾風迅雷の如く邁往すべきだ。三十四十は束の間、兒女の愛に絆されて今日明日と無爲に過すうちに人生の終局は瞬たく門前に迫つてくる。

□人生より短かき政黨の命は左顧右盻するうちに消えてなくなる。この半年間に無常なる往生を遂ぐる大政黨はないか。

□この十年間絶えて「豪快」といふ味ひを味ひしことがない。

□この議會の解散は當然である。普選法實施と共に解散を斷行するのが立憲の本義だ。政府このごろの本黨への色目は醜い。本黨の色目は更に醜い。

□ことしの秋は「美術の秋」といふより「運動の秋」の聲が高かつた。しかし美術の方はとにかく、野球の入場料が二圓三圓では此の競技もプロレタリアには不要とでも云はうか

□戀愛を對象としない大規模の創作も近ごろほしくなつた。

□文壇の黨派根性はこのごろひどく醜く感ぜらるる。

□社會科學の「形式社會學研究」は案外の好評を受けて同人大喜びである。今後も時たまにはそれ以上のドッシリした智識の寶庫を供給する考があるそうな。

□雜誌「自然科學」は十二月中に發刊する。初號なぞは學界でも隨分問題を持つ堂々たる論文が多いやうだ。

□松本亦太郎博士著「智能心理學」は十一月早々發刊する。本庄榮治郎博士の「農村問題史論」は日本社會史の姉妹篇で日本農政史といつても差支なし。井川氏の「支那游記」はいよいよ出來。堀江歸一氏「國際經濟と國民經濟」も此程增訂版出來し、ブハリンの「唯物史觀」も近刊さるる。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	八拾錢	貳錢
半ヶ年	五圓六拾錢	增大號共郵稅不用
壹ヶ年	拾壹圓廿錢	增大號共郵稅不用

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金沸込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵税實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事

▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

大正拾四年十月二十日印刷納本

大正拾四年十一月一日發行

（價八十錢）

東京市芝區愛宕下町一ノ一 編輯兼發行人 印刷人 平田貫一郎

東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二 印刷所 秀英舍

發行所 東京芝區愛宕下一ノ一 改造社 振替東京八四〇二 電話高輪四九九三

女工哀史と細井君

悲慘な女工生活

藤森成吉

「女工哀史」が、とうとう出た。私は、自分の本が出たと同じ位、いな、ある意味では、ヨリ以上のよろこびを感じる。

細井君を相知るやうになつたのも、この草稿に依つてだつた。一番初め、君が計畫の何十枚かの目錄を持つて訪ねて來、その一日も早い實行を勸めてから、もう三四年の歳月が經つ。

その間のことを思へば、著者と共に感慨に堪へないものがある。

去年四月、初めて成つた全部の稿を受けた時、私は病餘雀躍して讀み通した。期待は外れてゐなかつた。君の爲に、又日本の――勞働運動、社會運動其他凡ての爲に、私は心許りの祝酒を擧げた――。

全冊十九章、四百何十頁とは云へ、さゝやかな一冊の本に相違ない。が、ある意味では、これは日本の劃時代的の書物だ。又さうなることを、私は切に欲する者だ。

紡績工場のあらゆる問題に觸れた點において、然もそれがいはゆる研究家に依つて成されず、一介の（自序に云ふ如く、尋常科の課程さへろくろく踏まず、十五年間紡績工場にくらした）勞働者の手によつて成された點において、恐らくは未だ外國にも比類を見ない著作だらう。たとひ類似の物が外國にあるにしても、この著書の價値は毫も減じない。その中には、全く日本でなければ見られないさまざまな事實の記錄がある。

たとへば第三章「女工募集の表裏」の如き、第五章「勞働條件」、就中徹夜業の如き、第十二章「通勤工」中の指定下宿のべう寫の如き、よんでゐて、少しでも心ある讀者なら痛歎を禁じ得ないだらう。又いはゆる日本の文明についてうぬぼれてゐる人達は、恐るべき野蠻の公然たる横行にあきれるにちがひない。もしそれ、第十一章「病人、死者の慘虐」の中の、コレラに罹つた女工達に端から毒藥を飮ませて殺す條なぞに至つては、たれか人道の爲に拳を握らない者があらうぞ。

著者の筆は、如何なる場合にも感歎すべく周到で、また正確だ。多くの統計や調査を併用したあたり、此著書に十分な科學的價値を與へるが、その上、不思議に素ぼくな讀み物的な筆路を持つてゐる。例へば第十五章「娯樂の問題」、第十六章「女工の心理」等の多彩な記述は、ある點確に小説より面白い。然もその面白さのうちに、讀者は深く悲慘な女工達の印銘を與へられずにはゐないだらう。

「勞働者の住居及び食物」「工場設備及び作業狀態」等の平淡な章でさへ、まるきり紡績工場を知らない讀者に取つ

ては、一つの驚異に相違ない。わずかばかりでも、例の勞働でその方面の工場に働いたことのある私などには、また別種の興味をひき起される。

たゞ專門の研究家や、社會運動者や勞働運動者のみに讀まるべきではない。――もちろんそれらの人達には缺くべからざる著述だが――あらゆる階級、あらゆる種類の人々に、私は此本を推薦する。殊に婦人達は、是非とも一讀しなければならない義務がある。もし日本の婦人で、一方にかう云つた百何十萬の同性の存在することを知らなかつたら、彼女は斷じて時代の先頭に立つことを許されない。寧ろ、何にも增しての恥だ。(以下略)(東朝所載)

女工哀史を讀む

暗風生

細井和喜藏氏の近著『女工哀史』を通讀した。何よりも第一に感得された事は著者自身が長年工場の一職工として勤務してゐた丈あつて、女工のあらゆる生活が遺憾なく書き盡されてゐる觀があるといふことである。女工と云つても、本書に記述されてあるのは、その中で大きな數を占めてゐる紡績女工と織布女工との二種であるが、背景をなす工場の種々な組織や、女工募集の裏表を初めとして工場に於ける女工の待遇、彼の女等の作業狀態、女工の心理、生理並に病理的諸現象、紡績工の思想等が何處迄も實例に依據して詳述されてあるから、女工がどんなものか、どんな生活をしてゐるかが一望の下に覗ふことが出來る。

著者が前述の如く一職工だつた爲か玆に述べられてゐる事柄は總て生き生きと血が通つてゐる。如何に女工といふものが悲慘な生活をしてゐるかといふことがあり〳〵と讀者の眼の前に浮んで來て、讀者を痛心させずには置かない。それ程これは迫眞性を持つてゐる。さういふ點から見ると、著者は本書を書くことによつて一つの人間記錄を社會に寄與したものと云へる。

この書の中で一番心の引かれる部分は最後の女工の心理、生理並に病理的諸現象であるが、それは初めの工場に於ける外的の諸事實に比して大分簡單である。それは主として詳細な調査の手段を缺いてゐたからだらうと思ふが、兎に角惜しい感を免れまい。他日機會を得てそれを增補してもらひたいと思ふ。

それから著者自身の立場が純眞プロレタリヤであるといふとが、片方では著者をして女工の生活を親切に、遺憾なく隅から隅まで詳しく觀察せしめてゐるが、また一面著者をして女工に同情せしめ過ぎて、工場生活の眞相を正鵠に描かせてゐないのではあるまいかと讀者に思はる節が少からずあるのが不滿である。そこにも少し冷靜なリアリストの態度がほしかつた。今後の著者の所産に對してそれ丈の忠言を是非共著者に提供したいと思ふ。

女工哀史を讀みて

近代キャピタリズムが築き上げた處の大工場が資本家に取つて唯一の寶の山であるといふことは、言ひかへれば被搾取階級にとつては、血はおろか骨までもしやぶられる唯一の恐ろしい地獄である

人類のため尊い生產物を作り出だす工場も、資本家の見る目と、勞働者の見る目とでは、永遠の平行線にも似たこれだけの距離が横たはつてゐるのである。

精巧なる機械の發達は、それに逆比例して、人類を愈々征服し、機械を人間が逆轉したといふことは既に資本主義發生當初の夢で、今日では立派に機械が人間を支配してゐる。それは恰も征服民族が奴隸を支配するやうに！僕は細井和喜藏氏の近著『女工哀史』一卷を抱いてそこに現代社會の巧緻なる縮圖を見た。

あの調革が轟雷の如く響き、油の臭と塵埃を含んだ霧のやうな空氣を吸なから、默々として働いてゐる多くの女工の姿こそは、夜明け前の現代に住みながらも、尚且つ黎明の來るを知らず、諦めと自棄の深淵に吾と吾身を突き落してゐる。無智な無產大衆の姿そのものではなからうか。ひところ勞働組合ではやつた。

ねぼけまなこで
朝の五時から辨當箱下げて
工場がよひのいぢらしさ
娘ざかりをごみの中
晩にや死んだよになつてねる

といふ工場民謠は正しくこの著の大意を摑んでゐる。

女工哀史！この言葉だけ聞いてはあまりにポエチカルに響かう、だが一旦本書を繙いて見ると、立派な社會科學の著書である。

乳母日傘とはいかぬまでも、蚊にも喰はせぬほど大事に育てた娘が一旦工場といふ牢獄にぶちこまれたら最後、青春の血は吸られ張りきつた若い筋肉も見る〳〵すりへらされてゆく。その痛ましい姿をブルヂョアは何と見るか、インテリゲンチャは、たゞうたてやなとばかり眼をつぶらうとするであらうか。

『女工哀史』この一卷こそは資本主義爛熟期に入れる現代社會の好個の縮圖である。

著者が學者でもなく、勞資協調論者でもなく、女工と共に骨を削つた純粹の勞働者であることが先づ何より吾々の胸を打たずにはゐない何故なれば現代社會の正確な觀方を敎へてくれるものは、勞働者より外にあり得ないから。

（孤羊生）

農學博士 小野武夫著

農村研究講話

（四六判上製）

定價壹圓五拾錢
郵送料十七錢

最新刊

農村問題の實際的研究の權威たる小野博士が、研究の根本精神より其の實際的方法に亘りて、詳論せられた新著である。農村問題が盛んに論議せらるゝ半面に、世上幾多の所論が較もすれば實際を離れ、机上の空論となるの虞多き今日、本書の出づるは正に時を得たものです、敢えて農村研究者の机上に勸めます。

【内容目次】一、基礎的研究の必要及び其綱要。二、農村問題とは何ぞや。三、村落の研究。四、農家經濟の研究。五、小作問題の研究。六、農村問題の參考書。附錄、諸調査様式。

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二番 改造社



・秋たけなは・

……秋の御支度寒さの御用意は三越……

秋闌に、菊こ紅葉の美しく映える頃となりました。秋の御支度、寒さの御用意は如何で御座いますか。三越ではそれらの流行品、實用品を取り揃へました何卒御用命の程、願ひ上げます

十一月の三越

催し	期間
◆格安反物賣出し	一日より十五日まで
◆淡交會第二回展覽會	[illegible]
◆江馬長閑氏新作漆器展覽會	[illegible]
◆洋畫家餘技額皿展覽會	[illegible]
◆廣幅織物陳列會	[illegible]
◆家具新製品陳列會	[illegible]
◆運動器具及寫眞展覽會	[illegible]
◆春衣裳陳列會	[illegible]
◆新製半襟陳列	[illegible]
◆岡田秦群氏繪畫展覽會	[illegible]
◆談醫會第七回展覽會	[illegible]

東京市

三越呉服店

駿河町

PRICE: EIGHTY SEN A COPY, TWELVE YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA. TOKIO.

大正八年三月廿一日第三種郵便物認可
大正十四年十一月一日發行（每月一回一日發行）

大正十四年十月廿日印刷納本

第七卷 第十一號 十一月號 定價金八拾錢



株式會社秀英舎印刷